

第6章 平原地区

第1節 調査概要 (第1図)

平原地区は、野間地区の西側に、水田のある谷を挟んで広がる東西100mの台地である。標高は野間地区と変わらない。現状の水田区画ごとに東からA～G区とした(第3章第5図参照)。A区からD区までは比較的平坦で、B区付近を最高所とする(第1図)。A区の大平・B区西平・C区の大部分・D区東半はすでに1910年代の水田開発によって削平されていて、まったく遺構を残していなかった。

残された部分を調査した結果、A区で掘立柱建物跡4棟、土坑1基、溝1条を検出し、B区で土坑1基、D区で土坑1基を発見した。さらにE・F区では土坑3基と溝6条を検出した。そのうち縄文時代の土坑3基がまとめてE区から発見されたほかは、奈良時代と近世以降の遺構であった。

奈良時代 平原地区で最も高いA・B区に集中して掘立柱建物跡4棟と大型の廃棄土坑2基が近接して発見されたほかは、D区で建物群以前と思われる炭が堆積し壁面が焼けた土坑を検出したのみである。小規模な建物群が短期間この場所つまり最高所に存在していたものと考えられ、その立地は注目される。出土遺物は須恵器・土師器の生活用土器のほかには北部九州からの搬入品である焼塩用製塩土器が出土した。また須恵器の時期からみて平原地区に建物群が出現するのは、8世紀中葉ごろと考えられる。つまりこの地区に宅地が広がるのは上野第1遺跡の奈良時代集落の存続期間の後半の段階にあたる。

近世・近代 A区で1910年代の水田化時に完全に埋没した畠地の境界溝を1条発見したほかは、B～D区からは近世の畠地境界溝を発見されなかった。これはおそらく存在しなかったのではなく、耕地整理による地形改変が著しいために、その多くが削平消失したものと推定される。一方台地の肩にあたるE・F区では削平が一部に限られていたため、重複する畠地境界溝が6条検出された。しかも台地の平坦面上ではなく、谷の斜面に下降する場所であるために畠地境界溝の末端部分の状況を観察することができた。

第2節 平原A・B区

2-1 A・B区の概要 (第2図→図版68・69上・中)

奈良時代の一単位の宅地と推定される遺構群と、近世の畠地境界溝が1条発見された。

奈良時代の遺構は、梁間2間桁行3間で床面積26㎡の51号掘立柱建物跡を中心に、4棟の掘立柱建物跡と201・203号土坑を検出した。51建物と201土坑は近接し、かつ廃棄物の投棄の方向が51建物側であることから、住居とゴミ捨て穴の関係であろう。203土坑も建物群に付属する廃棄土坑と考えられる。52建物と53建物は重複しているので同一地点で建て替えられたものであるが、直接の切合関係はなく前後は不明である。この地区も掘立柱建物のみから構成される一単位の宅地と思われるが、建物の軸方向は東原・野間地区の建物群とは異なっていて、南北や東西方向に建物の向きを揃える観念はうかがえない。しかし4棟の建物の方向は真北から東に20度前後振った方向で、おおよそ一定しており、ひとつの建物群として意識されていたものと推定される。

表面採集の遺物 (第3図) 現水田除去時および水田化以前の畠地耕作土中から出土したものと

台地上

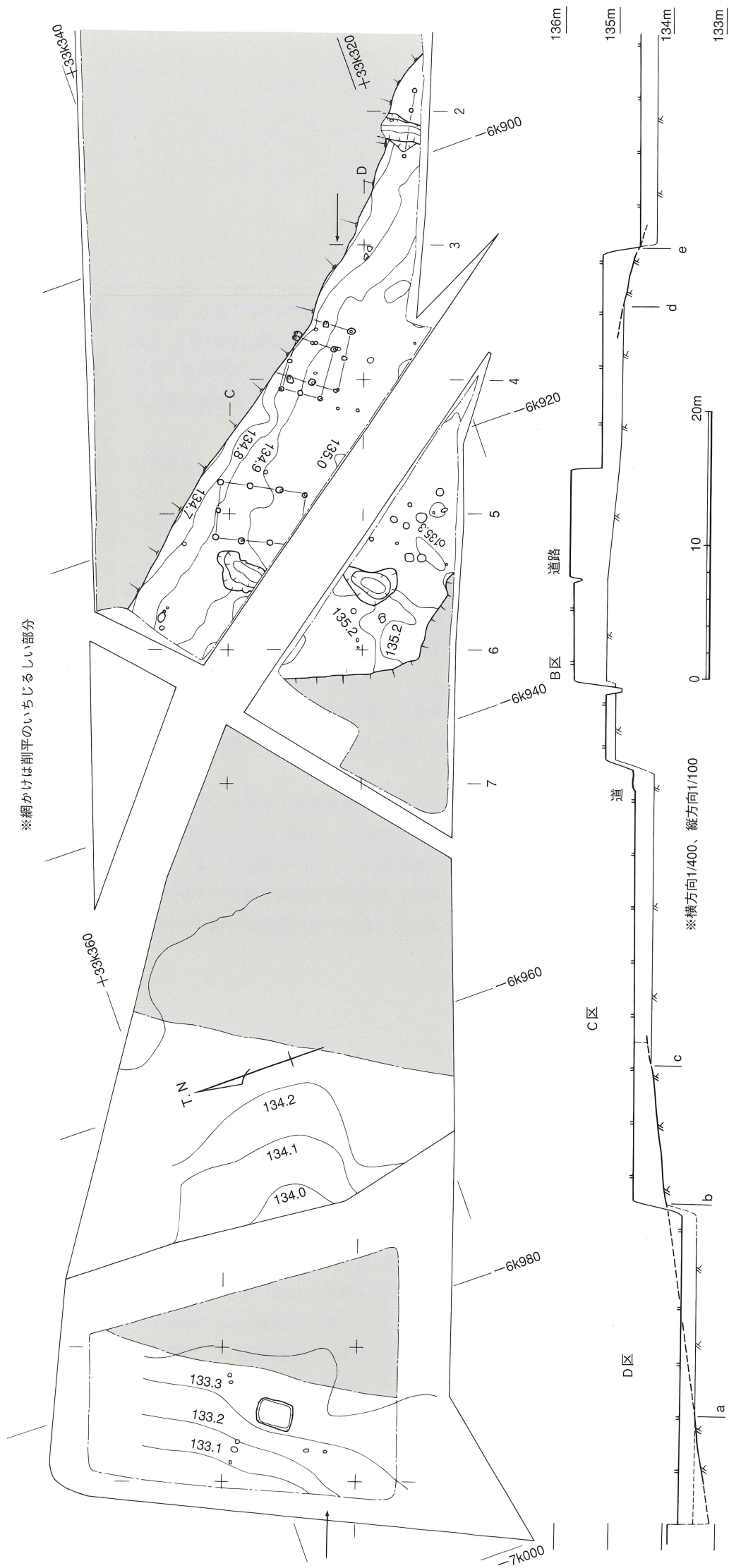
水田下による削平

残された遺構

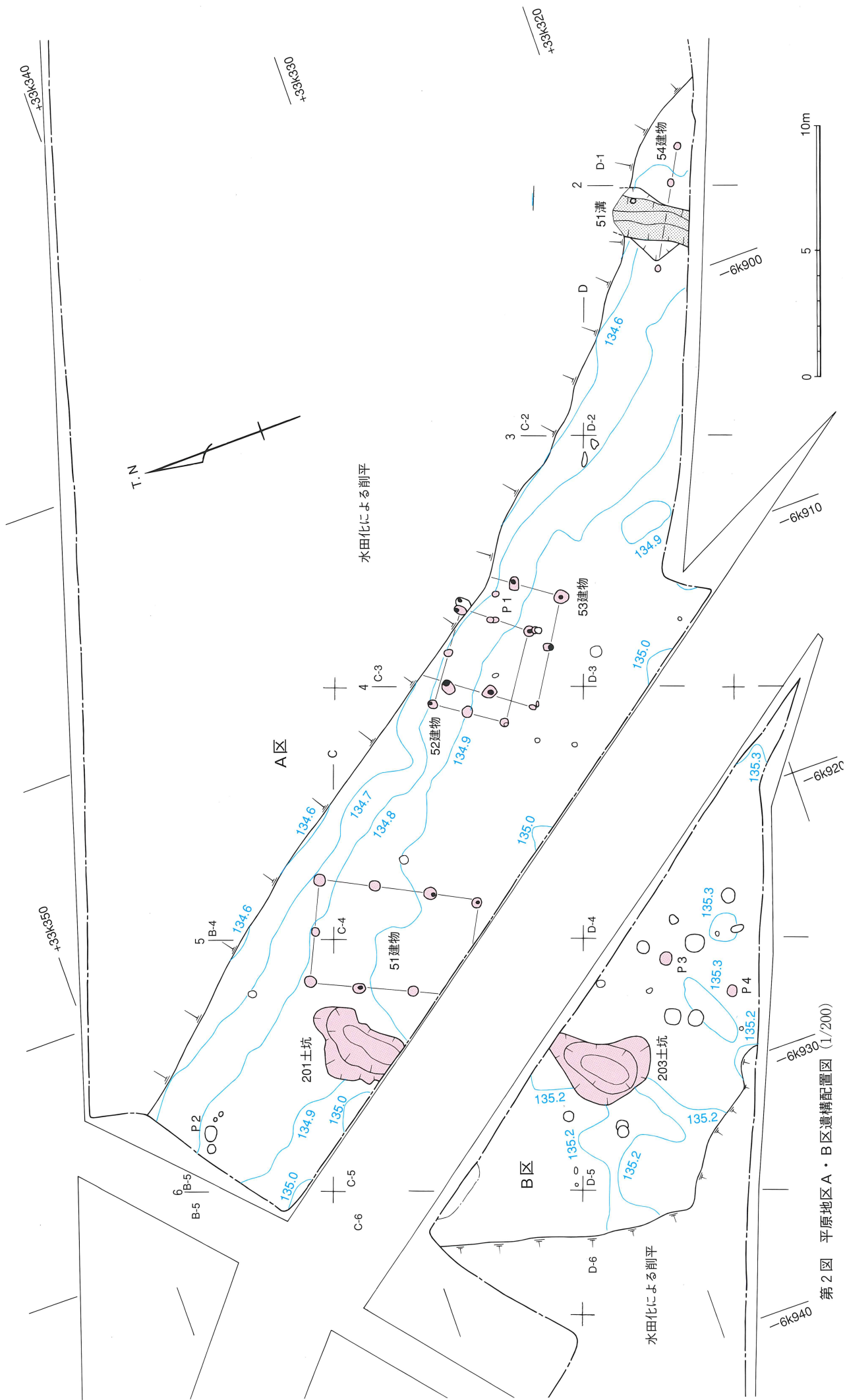
奈良時代の小建物群

畠地の区画

掘立柱建物と土坑

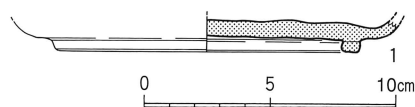


第1図 平原地区A・B・C・D地区の調査区 (1/400)



第2図 平原地区A・B区遺構配置図 (1/200)

採集遺物 して、黒曜石小片・須恵器甕壺坏などの破片と土師器の細片などがある。そのうち図示できるのは1点のみである。1は須恵器の大型坏身の底部片で、胎土に石英粒子を多く含む日田郡域外からの搬入品である。



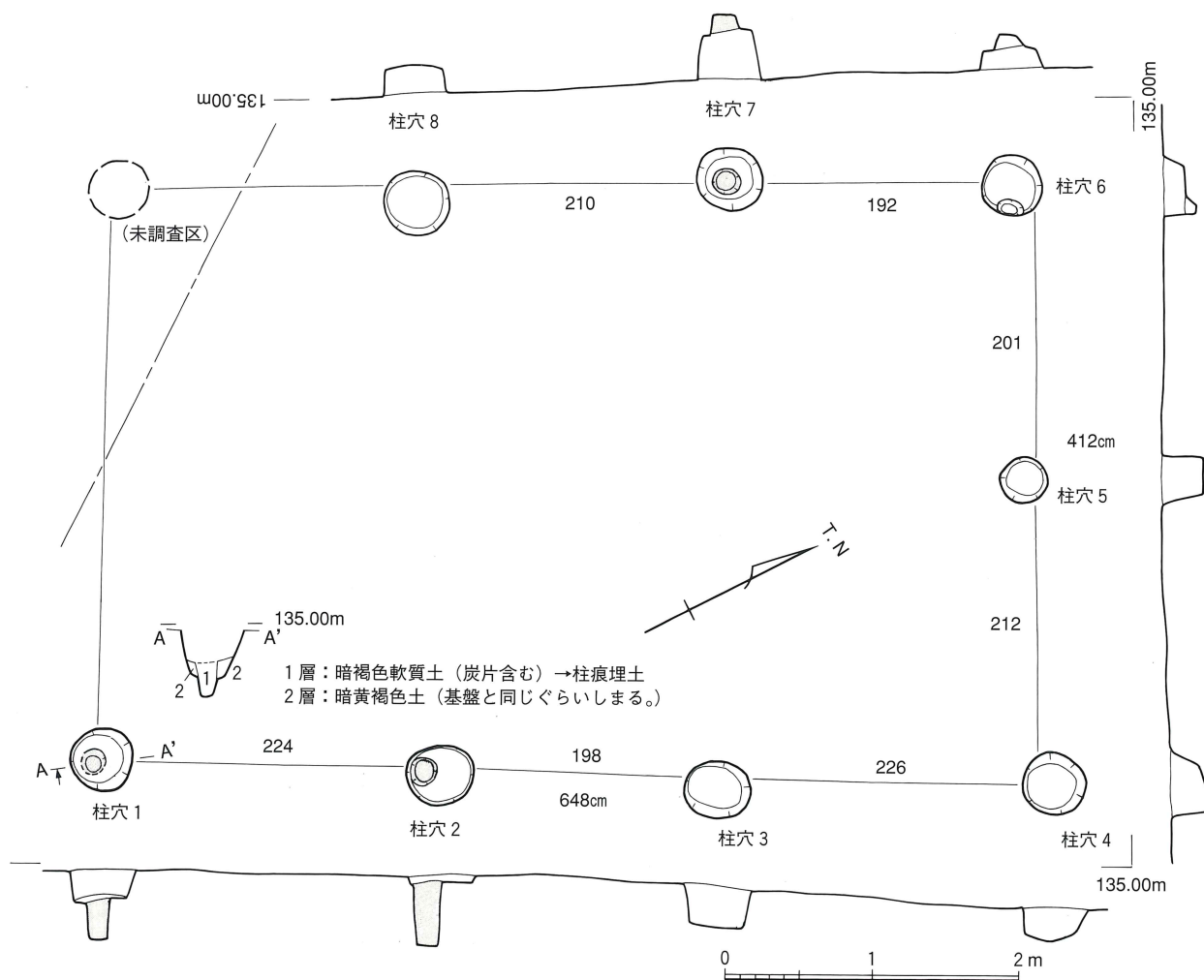
第3図 平原地区A区 表面採集遺物 (1/3)

2-2 奈良時代の遺構と遺物 (第2図)

① 掘立柱建物跡

51号掘立柱建物跡 (第4図→図版69下)

2 × 3 間 南西隅を削平されていた梁間2間桁行3間の南北棟の掘立柱建物跡である。東柱のない側柱建物で、南北長軸の方位角は26度である。柱間寸法は中心距離で南北長約648cm、東西長約412cmである。床面積は約25.3m²で、側柱建物としては中型に分類される。柱間距離の1単位が216×206cmのほぼ正方形となるI類である。検出された8本の柱穴はすべて円形であり、北の梁間の柱穴5がやや小さいほかは柱穴の大きさ深さともによく揃っているA類掘立柱建物である。その掘形は径40cmほどで、柱穴5のみが径30cmほどである。柱穴1・2・7から径15~20cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱を固めた掘形埋土はよく締まっていた。柱穴1の埋土中から精製胎土Aの土師器坏の小片が出土したほかに出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定した。



第4図 平原地区A区 51号掘立柱建物跡 (1/50)

52号掘立柱建物跡 (第5図、写真1→図版70上)

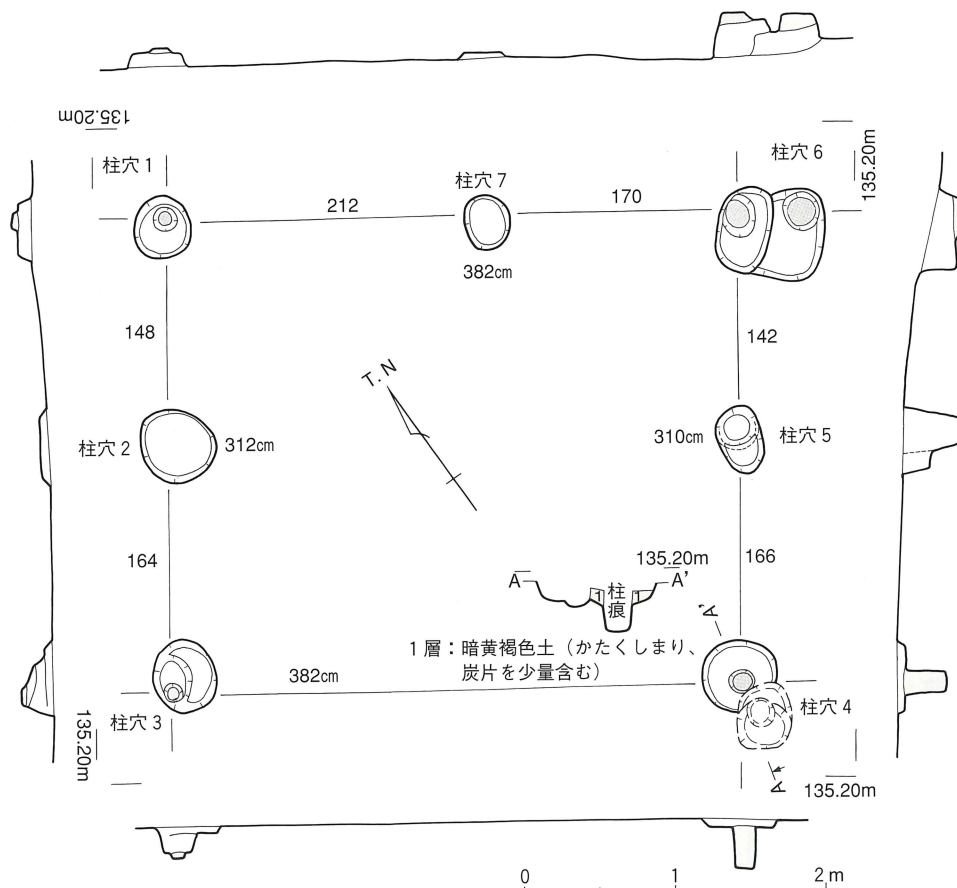
梁間2間桁行2間と推定される掘立柱建物跡である。53建物と重複しているが直接の切合関係はない。東柱のない側柱建物で、東西長軸の方位角は114度である。柱間寸法は心心距離で東西長約382cm、南北長約310~312cmである。床面積は約11.9m²で、側柱建物としては小型に分類される。柱間距離の1単位が191×156cmのタテナガ長方形となるⅡa類である。検出された7本の柱穴はすべて円形であり、4本の隅の柱穴がより深くかつ大きく掘削されているB類掘立柱建物である。その掘形は隅柱が径40~50cmほどで、ほかは径30cmほどである。四隅の柱穴4本から径10~20cmほどの円形柱の痕跡を検出したが、小さく不揃いである。柱穴埋土内からの出土遺物はまったくなく、埋土の色調と土質から奈良時代の遺構の可能性が高いと考えた。

2 × 2 間
側柱建物

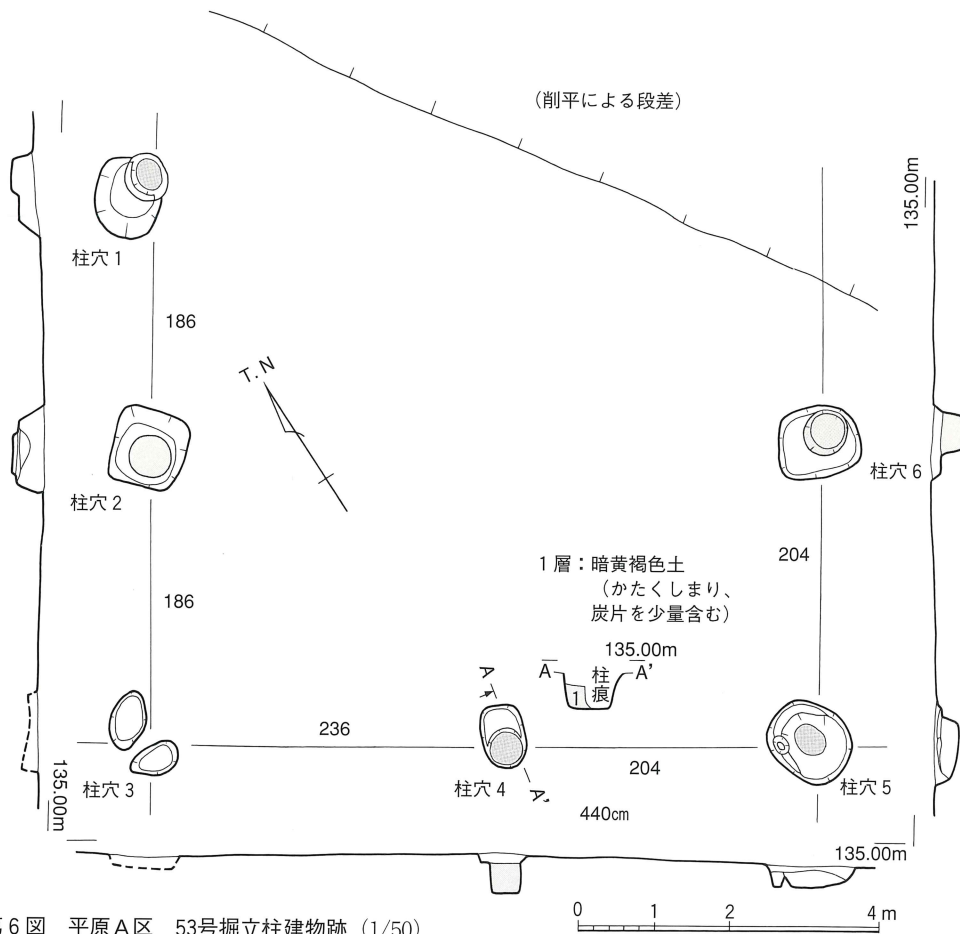
柱 穴



写真1 52・53号掘立柱建物跡 (北から)



第5図 平原A区 52号掘立柱建物跡 (1/50)



第6図 平原A区 53号掘立柱建物跡 (1/50)

53号掘立柱建物跡 (第6図、写真1→図版70上)

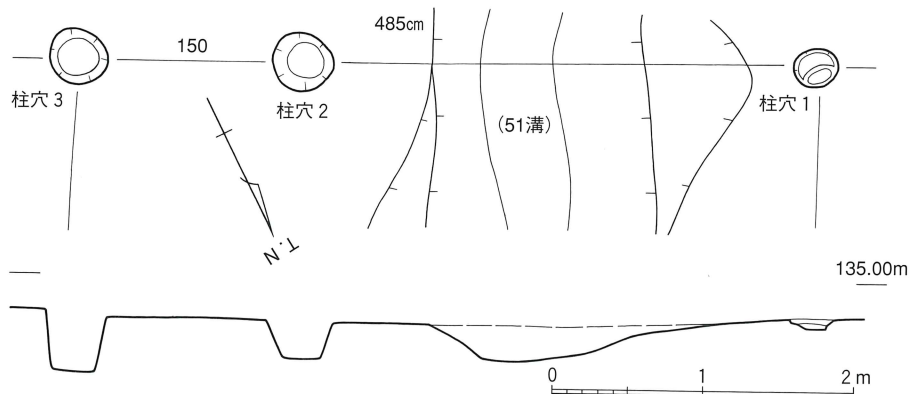
2 × 2+ 間
側柱建物
大型建物
柱 穴

北半が削平された梁間2間桁行2間以上の南北棟と推定される掘立柱建物跡である。52建物と重複しているが直接の切合関係はない。東柱のない側柱建物で、南北長軸の方位角は33度である。柱間寸法は心心距離で南北長約372cm以上、東西長約440cmである。床面積は約13㎡以上で、寸法とも考えあわせると大型の側柱建物になる可能性が高い。柱間距離の1単位が186×220cmのヨコナガ長方形となるⅡb類である。検出された6本の柱穴のうち柱穴2・4・6は方形である。南の梁間の柱穴4がやや小さく、柱穴3が明確に検出できなかったほかは、柱穴の大きさ深さともによく揃っているA類掘立柱建物である。その掘形は方形柱穴で一辺約50cm、円形柱穴は径50~60cmほどで、柱穴3のみが30×40cmほどである。柱穴3を除く柱穴から径20~30cmほどの円形柱の痕跡を検出した。柱穴2・3・5の埋土中から通常胎土の土師器の細片が出土したほか遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定した。

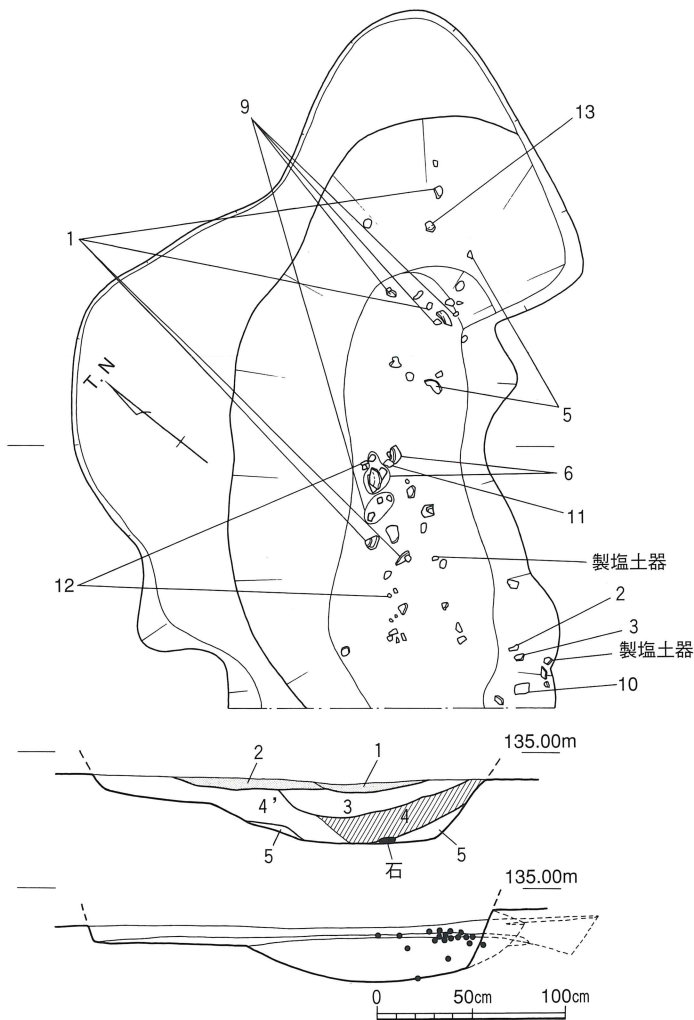
54号掘立柱建物跡 (第7図)

1+ × 3 間

北側の大半が削平された梁間1間以上桁行3間の東西棟と推

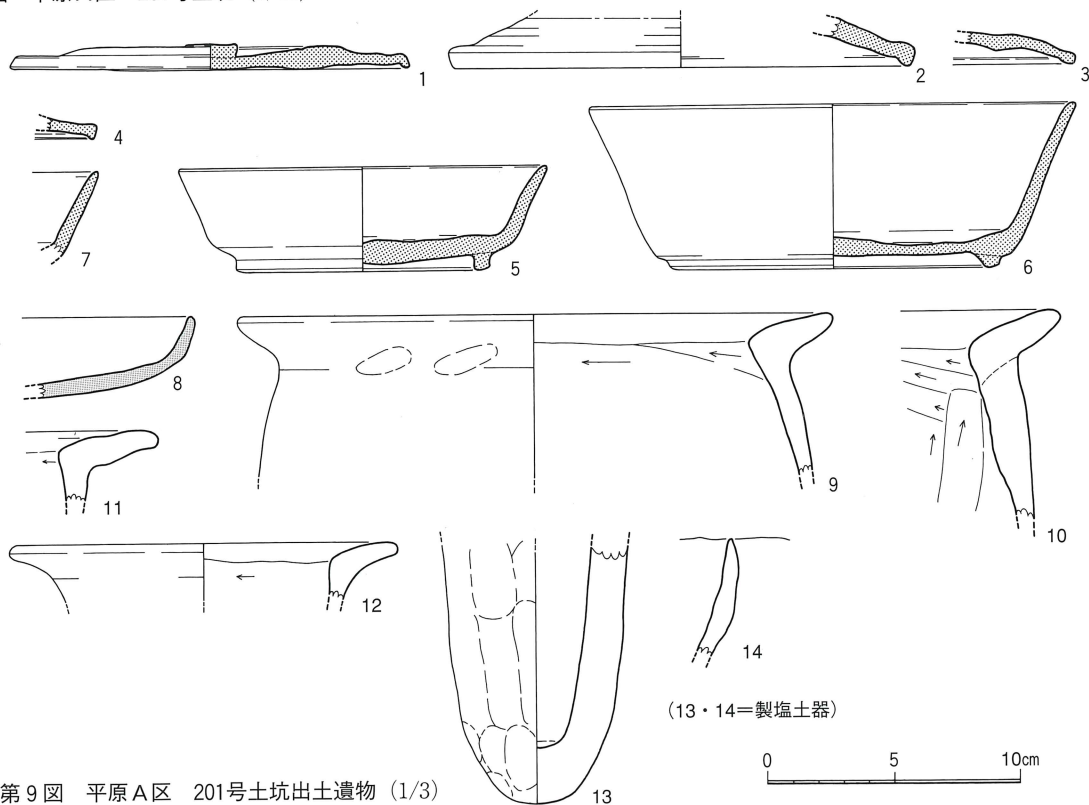


第7図 平原A区 54号掘立柱建物跡 (1/50)



- 1 層：黒色土
- 2 層：黒褐色軟質土
- 3 層：黄褐色土
- 4 層：暗灰褐色土
- 4' 層：暗灰褐色土
- 5 層：暗黄褐色軟質土

第8図 平原A区 201号土坑 (1/40)



第9図 平原A区 201号土坑出土遺物 (1/3)

定される掘立柱建物跡である。近世の51溝により柱穴が一本失われたと考えられるが、柱穴の規模からみて東柱のない側柱建物であると推定される。東西軸の方位角は109度で、柱間寸法は心心距離で東西長約485cmである。寸法からみて小型の側柱建物に分類される。検出された3本の柱穴はすべて円形である。柱穴の大きさと深さが揃いのC類掘立柱建物である。その掘形は径30~40cmほどで、柱の痕跡は検出できなかった。柱穴2などの埋土中から精製胎土Aの土師器坏の小片や、須恵器甕の胴部小片が出土したほかに出土遺物はなく、埋土の土質と色調から奈良時代の遺構と認定した。

側柱建物

② 土坑

201号土坑 (第8・9図→図版70中上・87)

平原A地区で発見された南端が 大型土坑

未調査の不定形の大型土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすE1類土坑である。51建物の西側に隣接する。その規模は検出面を基準に測って最大長370cm以上、幅210~280cmで、深さは最も深いところで検出面から約30cmである。上半は1910年代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。

一括廃棄

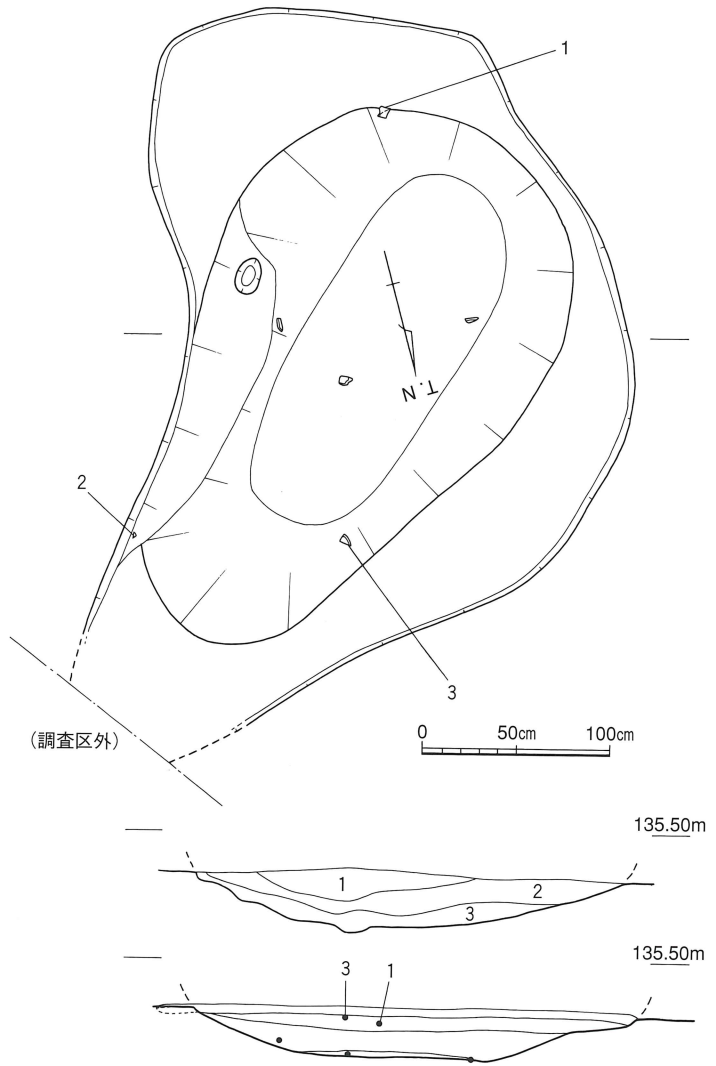
埋土は五層に別れ、4・4'層に焼土炭片と土器片を多量に含む一括遺物廃棄が認められる。とくに炭と焼土の多い4層は、東側から流れこみ、多量の土器片とともに51建物方向から投げ捨てられたような出土状態で検出された。土坑自体の掘形には整えられた形跡がないので、生活用の掘立柱建物跡つまり住居に付属する廃棄物処理土坑として掘られたものと推定される。

廃棄土坑

柱建物跡つまり住居に付属する廃棄物処理土坑として掘られたものと推定される。

廃棄遺物

出土遺物は残留した縄文土器底部片のほかに、須恵器の坏・甕・土師器の坏・甕の小片、円礫、小鉄片や焼土ブロックが出土した。図示できるのは以下のとおり。1~7は須恵器で、1はつまみつき坏蓋、2~4は坏蓋の口縁部片。5~7は高台付きの坏身。1・5・6は完形に近く復元できた。8~14は土師器で、8は精製胎土Aの坏身口縁部片である。9~11は通常胎土の甕で、12は小型の鉢。13は砲弾形の六連式焼塩用製塩土器の下半。14は逆錐形の焼塩用製塩土器の破片。前者の六連式は2ないし3個体分の破片が出土している。以上の土器のうち須恵器すべてと8の精製胎土の土師器、13・14の製塩土器は、日田郡域外からの搬入品である。



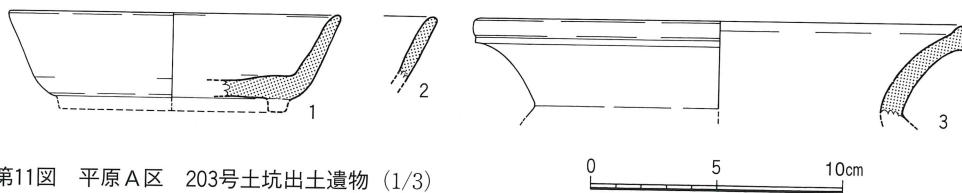
1層：黄褐色粘質土（遺物は少ない）
 2層：暗黄褐色軟質土 } 土器片は、この層中から出土
 3層：暗褐色軟質土

第10図 平原A区 203号土坑 (1/40)

大型土坑

203号土坑（第10・11図→図版70中下）

平原B区で発見された長円形の大型土坑で、底面は平坦でなく断面半円形の皿状をなすB1類土坑



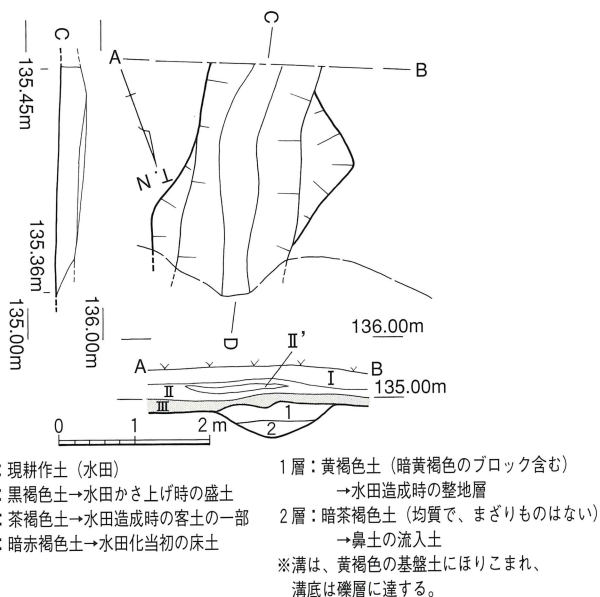
第11図 平原A区 203号土坑出土遺物 (1/3)

である。上下に2段に見えるが上段はあいまいである。下段の規模は検出面を基準に測って最大長310cm、幅190cmである。深さは最も深いところで検出面から約25cmである。上半は1910年代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。埋土は三層に別れ、どの層も比較的きれいな黄褐色土だが、遺物は少なく自然埋没の状態である。廃棄土坑に転用されないまま自然埋没した可能性が高く、土取り用に掘られた可能性もある。

自然埋没

内部からは安山岩の小石片のほかに須恵器杯・甕、通常胎土の土師器甕・精製胎土Aの土師器の小片が20点ほど出土したが、図示できるのは少ない。1～3はいずれも須恵器で、1と2が高台付きの坏身、3は甕の口縁部である。いずれも搬入品である。

出土遺物



第12図 平原A区 51号溝 (1/100)

2-3 近世以降の遺構と遺物 (第2図)

① 溝

51号溝 (第12図→図版70下)

奈良時代の遺構である54建物を切って南北に延びる畠地境界溝である。3.1m分を検出した。北方向の延長は1910年代の水田造成で削平されている。残存部の幅は約150cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約30cmほどである。底面の絶対高は南から北にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土は上下二層からなり、下層（2層）は畠の耕作土で、上層（1層）は近代の水田化時に埋め戻した整地土である。埋土の土質から近世以後の遺構と認めた。

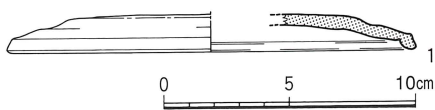
畠地境界溝

1910年代に埋没

2-4 ピット (第2・13図)

A区ではピットは少なく、B区の203号土坑東側でまとまって検出されているが、遺構を構成しない。しかし奈良時代の遺物のみを出土したピットがあり、203号土坑東側に何らかの奈良時代の施設があった可能性は高い。A区ピット1から土師器の小片、ピット2からは近世陶器碗片が出土し、B区ではピット3から土師器坏片、ピット4からは1の須恵器坏蓋片が出土した。

奈良時代のピット



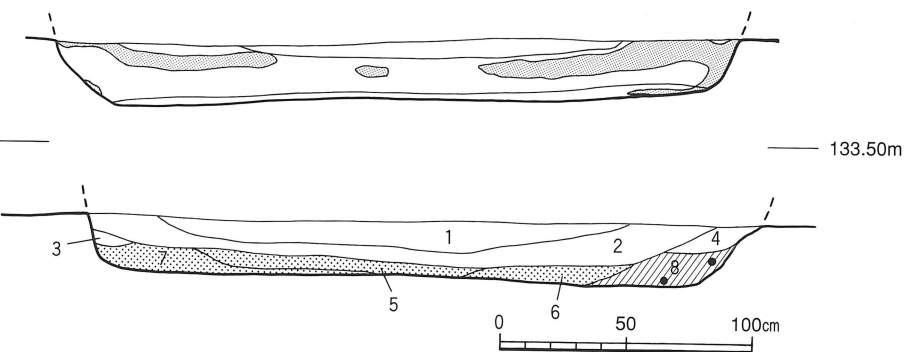
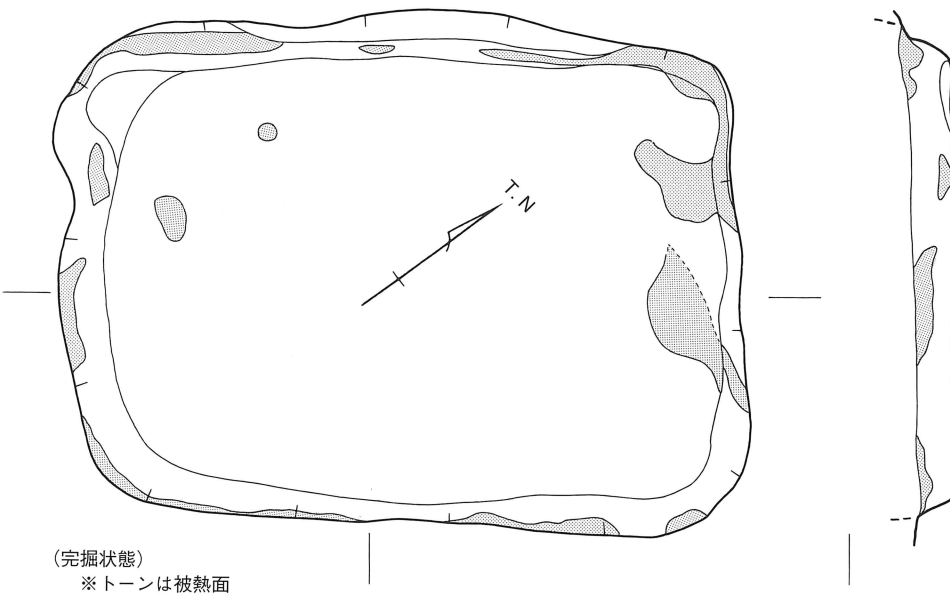
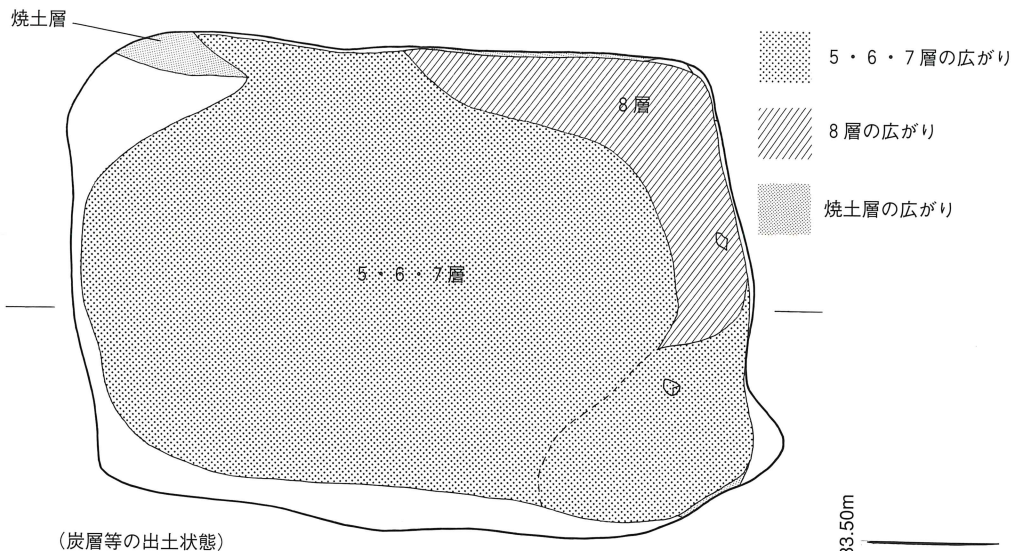
第13図 平原B区 ピット出土遺物 (1/3)

第3節 平原C・D区

3-1 概要 (第1図→図版68・71上)

第1図下の地形断面図からわかるように、平原C・D区は最高所のA区から次第に低くなる緩斜面に位置する。1910年代の耕地整理による削平が著しく、わずかに盛り土のおこなわれた水田面の西側のみが旧地形を保存していた。表土除去時の出土遺物もきわめて少なく、時期不明の土師器細片を10点ほど採集したにすぎない。遺構はD区で204号土坑を1基検出したのみであった。

水田化による削平



- 1層：暗褐色土（焼土片・炭片と少量の黄色土ブロックを含む）
- 2層：暗黄褐色土（焼土・炭片を含む）→一連の土層中最も明るい→間層
- 3層：暗褐色土（焼土・炭片を含む）
- 4層：暗褐色土（炭と焼土小ブロックを多量に含む）
- 5層：暗褐色土（〃と〃を〃）
- 6層：暗褐色土（〃と〃を〃）
- 7層：黒褐色土（炭・焼土ブロックを多量に含む）
- 8層：黒灰色土（炭・焼土ブロックを多量に含み、特炭片は多く、1つ1つが大きい。）

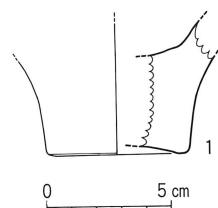
第14図 平原D区 204号土坑 (1/30)

204号土坑 (第14・15図→図版71中)

平原D区において単独で発見された隅丸長方形の大型土坑で、底面は平坦になるC2類土坑である。規模は検出面を基準に測って東西長270cm、南北幅200cm、深さは最も深いところで検出面から20~25cmである。削平状況からみてさらに深かったものと考えられる。長軸の方位角は35度である。四周の側面とそれに連続する底面の一部が焼けて赤変しさらに硬化している。しかし底面全体に被熱のあとが広がるわけではない。そのかわり

底面には炭化した木片や焼土のブロックが非常に多く(4~8層)、かつ敷かれたように堆積しており、おそらくそれは炉床の構造の一部であろう。その上には炭片や焼土片を多量に含むやわらかい土が充満していたが、何ら遺物をともなわなかった。何らかの炉として構築され、その使用後すみやかに埋没あるいは埋め戻されたものと推定される。

円礫1点と残留した弥生時代前期の甕底部片(第15図1)と焼土と炭片以外の遺物はまったく出土しなかった。野間L区の40号土坑とよく似ているので、奈良時代の可能性があるが、所属時期を推定するそれ以上の手がかりはなかった



第15図 平原D区
204号土坑
出土遺物(1/3)

方形土坑

壁の被熱
炭の堆積

時期不明

第4節 平原E・F・G区

4-1 概要 (第16・17図→図版71下・72上・74下)

この地区は上野台地の最西端にあたり、斜面にかけてを全面調査した。調査の第1の目的は、上野第1遺跡の奈良時代集落の西端を確認することにあつた。しかしE~F区では奈良時代の遺構はまったく検出されず、水田化による削平を考慮してもこの地区には遺構は存在しなかったものと考えられる。したがって平原地区の奈良時代建物群はB区ないしC区で終わっていると考えられる。そのかわり近世・近代の畠地境界溝を確認し、この台地の土地利用の在り方を示す遺構を検出した。

台地の肩

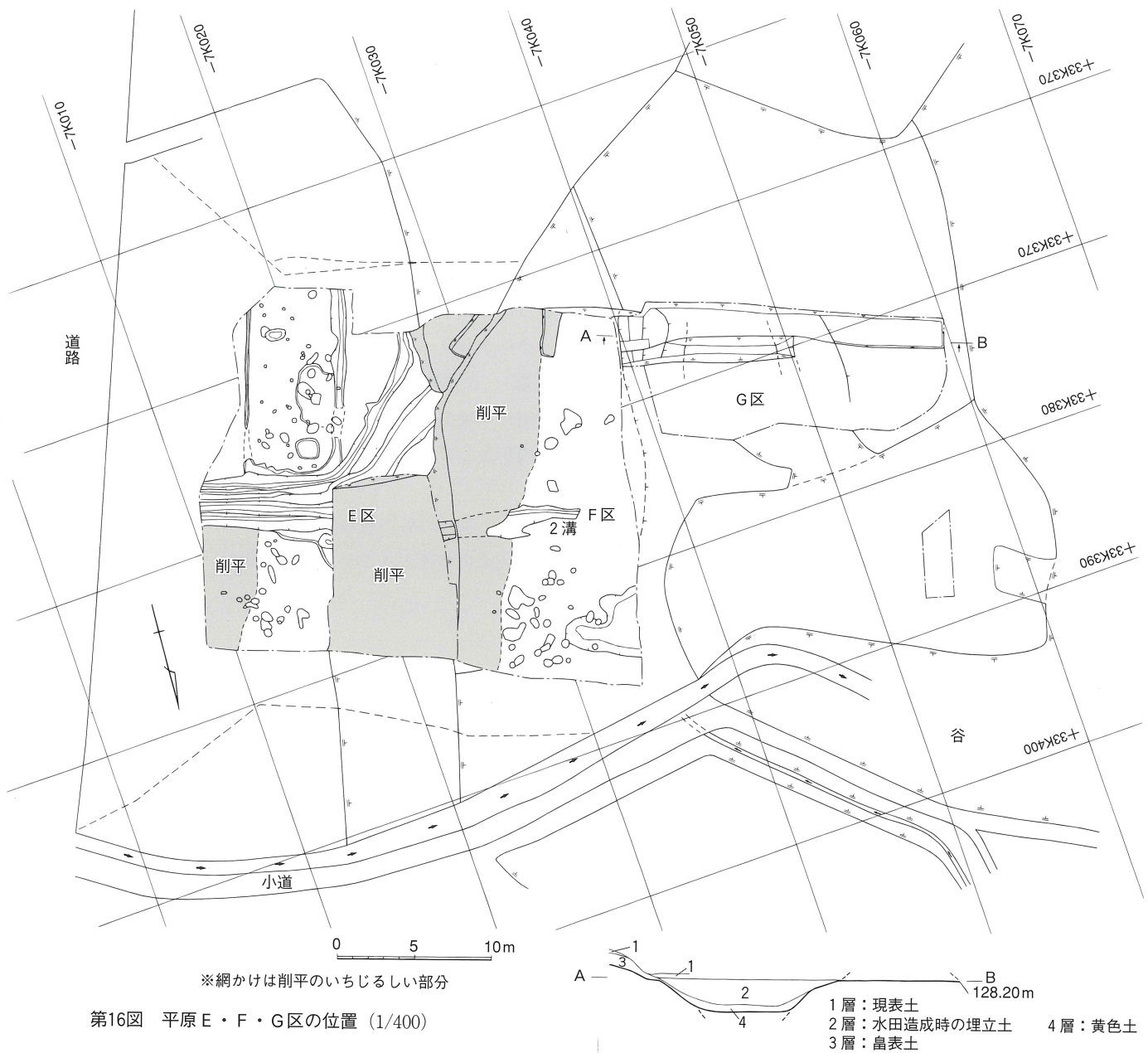
縄文時代 E区では3基の浅い不整形の土坑が発見され、縄文時代後晩期の土器片が若干出土した。

土坑

近世・近代 E・F区は台地が平坦な地形から斜面へと変換する場所にあたる。E区・F区のそれぞれ東半分は1910年代の水田化による削平で溝の下部を除いて、遺構は消失しているが、逆に西半分は埋め立てられているため遺構の保存状態は良好であった。

耕作土の充満した断面U字形の溝を5条検出した。溝はそれぞれ切りあっており、畠地の境界を拡張しながら作り直されていく状況が観察される。まず1・3・6号溝は同時期の掘削で、L字型の1・3溝に6溝を付設して長方形の区画を作り出し、北側に並行して斜面に直交する2号溝が作られている。この状態が最初の形態である(第1期)。次に1・3・6号溝が廃絶して4号溝が掘り直されており、長方形区画が不整形の区画に変化している(第2期)。次に5号溝が4号溝の外周を廻るように掘られ、この時点で4号溝は埋没し5号溝に交替する。この拡大の際には2号溝はすでに埋没しており、5号溝は2号溝の上に重なるように作られている(第3期)。このようにまず第1期の畠地境界溝の設定時には、台地の地形を考慮しながらもかなり人為的に方形を意識して区画がなされているが、第2期ないし第3期になるにしたがって、耕作の状況等に応じて畠地の区画が不整形に変化する様子が認められる。第1期の時期は明確にすることはできないが、近世陶磁器の量が18世紀後半から増加し、19世紀のものが最も多い状況からみて第1期の畠地境界溝の設定時期はその頃であろうかと推定される。なお第3期の終わりつまり5号溝の廃絶時期は、溝が水田

溝の変遷



第16図 平原E・F・G区の位置 (1/400)

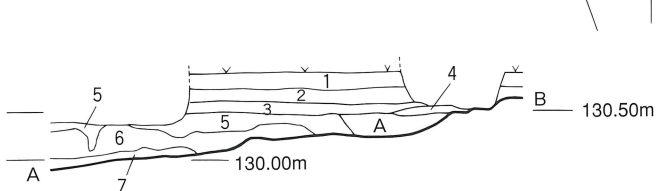
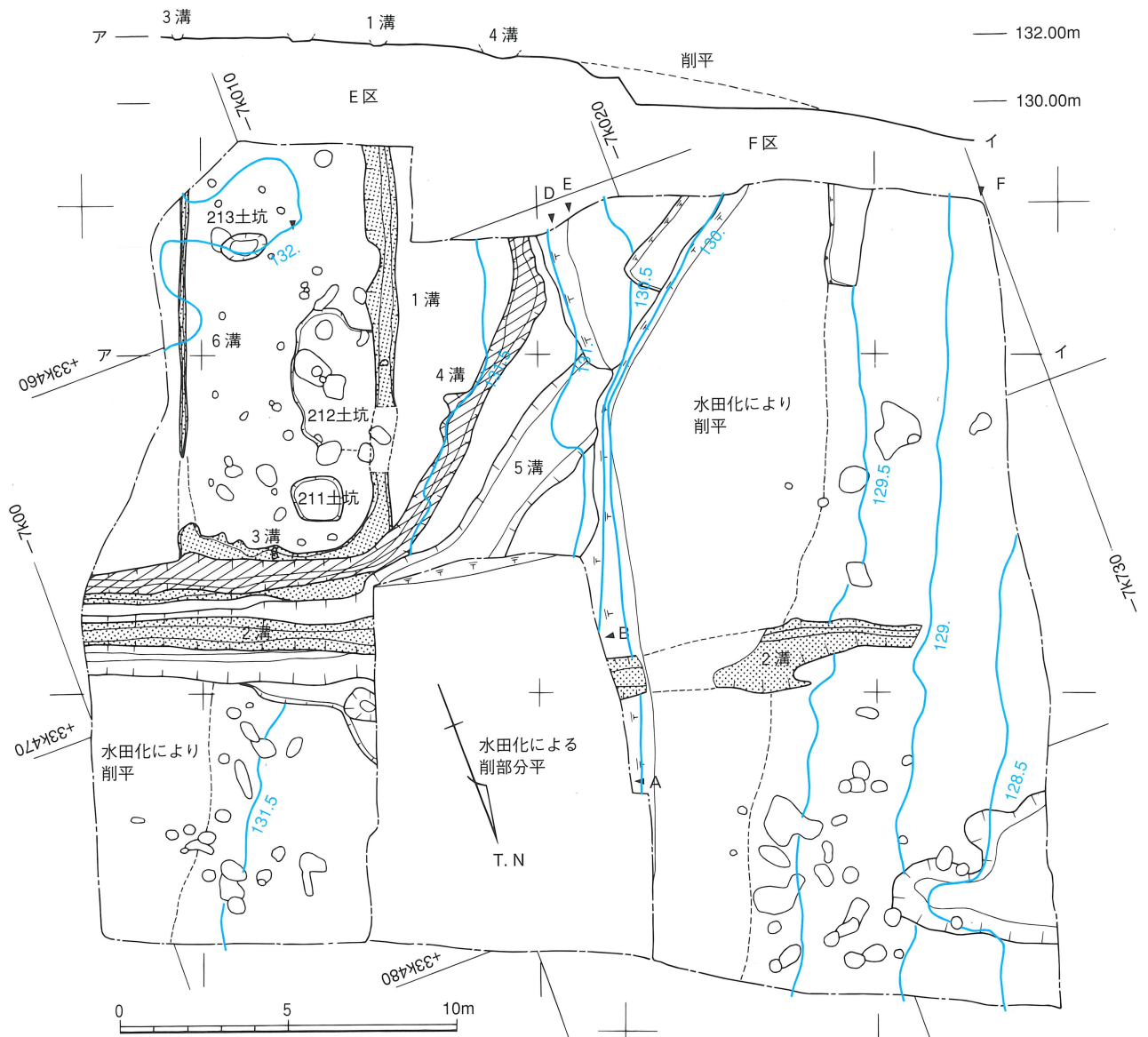
造成時の造成土によって一気に埋没している状態から1910年代であると押さえられる。

なおG区は現状では水田になっていたが、トレンチ調査の結果、耕地整理時に埋め立てたものであり、その底は谷になっていたので本調査はおこなわなかった。

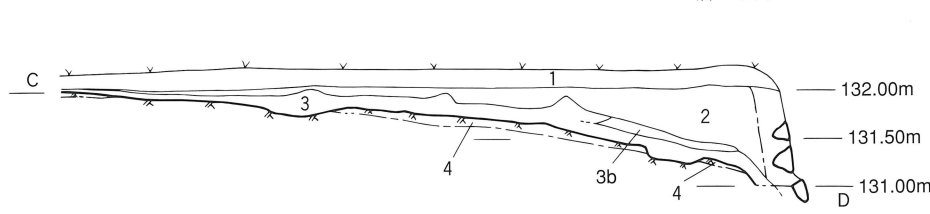
採集遺物 表面採集と試掘時の遺物 (第18～20図→図版88) 表面採集されたものは数点の縄文土器と土師器の細片を除くとすべて近世の陶磁器である。1～7は肥前産の染付で、1はいわゆるくらわんか碗、4は端反碗、5は小型の湯呑み碗である。18世紀後半から19世紀末までのものである。8は陶器土瓶である。

試掘トレンチ 試掘時のトレンチ出土遺物も、小国産黒曜石の小片を除くと近世の陶磁器である。1は17世紀後半の福岡産の陶器皿である。2～6は肥前産で、2は18世紀の青磁碗、3は染付皿、4は18世紀後半の染付碗、5は18世紀後半から19世紀中ごろの白磁紅皿、6は1820～60年代の染付小型湯呑碗である。7は明治年間の染付碗で、8は明治年間以降の瀬戸美濃系と思われる染付小杯である。9は明治20年代以降の銅版転写の染付皿である。10は色絵碗、11は磁器碗、12は磁器瓶か。13は肥前産染付皿、14と15は磁器。16は白磁小杯、17と18は鉄釉の陶器である。19は18世紀後半以降の鉄釉の肥前唐津産陶器播鉢である。

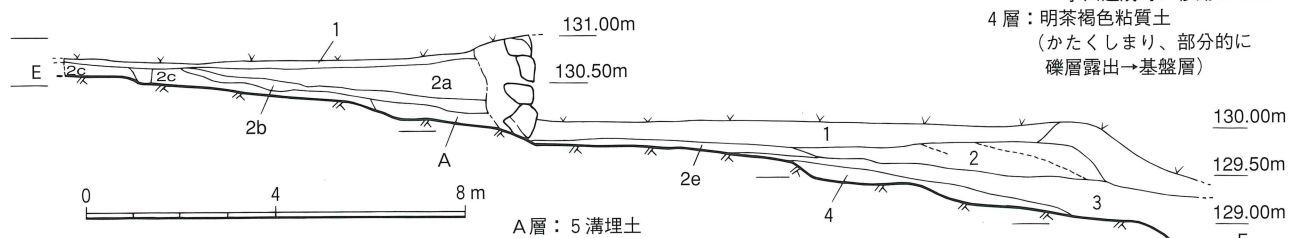
G区の遺物 G区は表土から近世の陶磁器が出土した。1～6はいずれも肥前産陶磁器で、1は18世紀後半代



- 1層：現水田耕作土
- 2層：現水田床土
- 3層：暗褐色土（黄色土ブロックを含む）
- 4層：混砂礫黄褐色土（基盤層を削った土）
- 5層：暗褐色土→水田化以前の畝土
- 6層：暗黄褐色土（基盤の礫を多量に含む）
- 7層：黄褐色砂礫土→基盤層の一部
- A層：暗褐色土→2溝の埋土



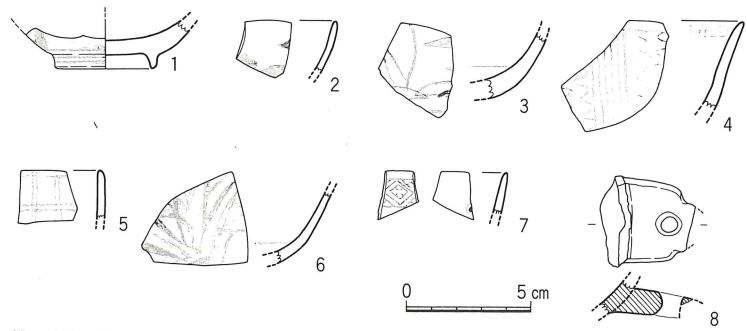
- 1層：現水田耕作土
- 2層：水田化時の盛土（基盤の土を中心）
- 3層：淡黒褐色軟質土（近世・近代遺物を多く含む）→水田造成以前の畝地耕作土
- 3b層：暗黄褐色土（黄色土ブロック多い）→水田造成時に移動した土
- 4層：明茶褐色粘質土（かたくしまり、部分的に礫層露出→基盤層）



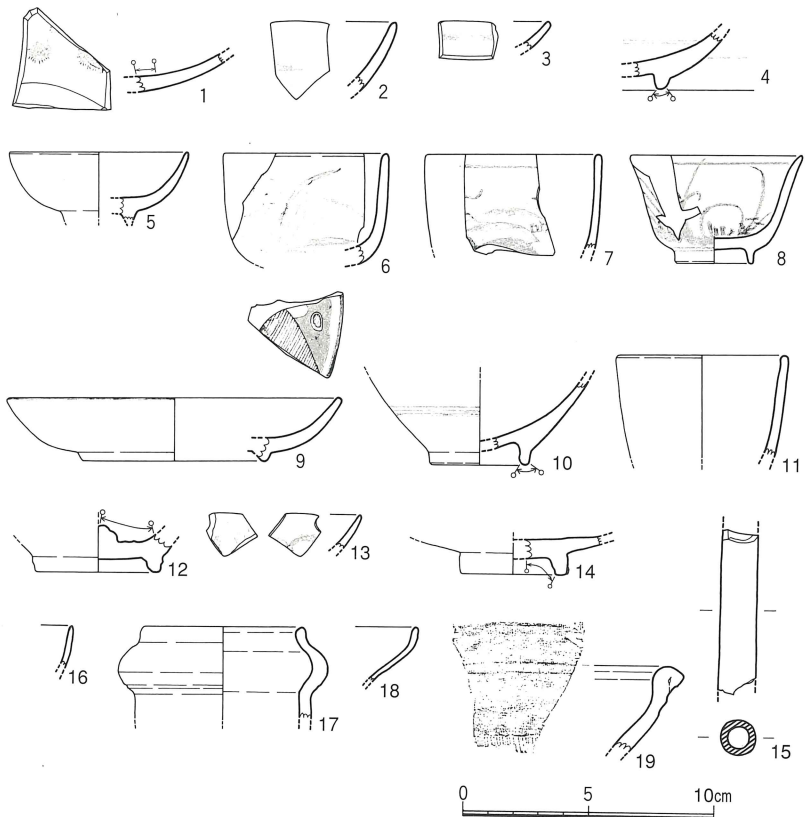
- A層：5溝埋土
- 2a~2e層：水田化時の埋土
- 3・4層：水田造成以前の畝地耕作土

第17図 平原E・F区 遺構配置と層序 (1/200, 1/80)

の染付碗である。2は18世紀後半から19世紀中ごろの白磁紅皿である。3は幕末ごろの染付端反碗、4と5は幕末以降の染付湯呑碗である。6は幕末以降の陶器碗である。以上のうち3～6は志田焼の可能性が高い。7と8は瀬戸美濃産と推定される磁器で、9は肥前産磁器壺、10は陶器碗である。



第18図 平原 E・F区 表土出土遺物 (1/3)

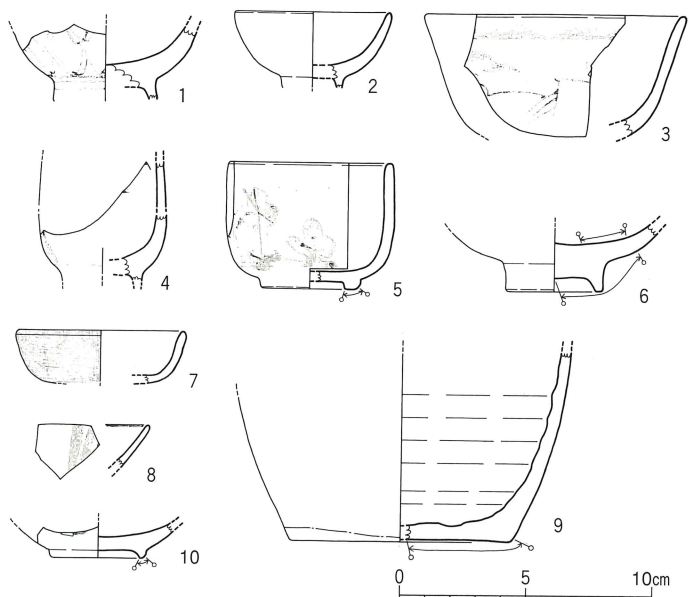


第19図 平原 E・F区 試掘トレンチ出土遺物 (1/3)

4-2 縄文時代の遺構と遺物 (第17図、写真2)

耕地整理時の削平が比較的少なかったE区の平坦面で、浅く不明瞭な形態の土坑が3基検出され、その周囲は浅いピットや凹みが多かった。いずれも埋土が基盤層とよくなじみ、正確に掘り上げるのは不可能であった。内部に縄文土器の細片のみが含まれていたことから縄文時代の遺構と認定した。縄文土器の細片と213号土坑の打製石斧片から、おそらく縄文時代後期ないし晩期に、上野台地の縁片に居を定めた集団がいたことを示していると考えられる。

縄文後晩期



第20図 平原 G区 出土遺物 (1/3)

① 土坑

211号土坑 (第21図→図版72左中)

やや不整な長円形の土坑である。底面は平坦になりB 1類土坑に分類される。規模は検出面を基準に測って最大長172cm、幅133cmで、深さは最も深いところで8cmである。上半は現代の水田造成時にかなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。最初の検出作業の際にはわからなかったほど、埋土は地山に馴染んでいた。内部からは安山岩の剥片が1点出土したのみであるが、埋土の土質が212号土坑と酷似していたので縄文時代の遺構と推定した。

不整長円形

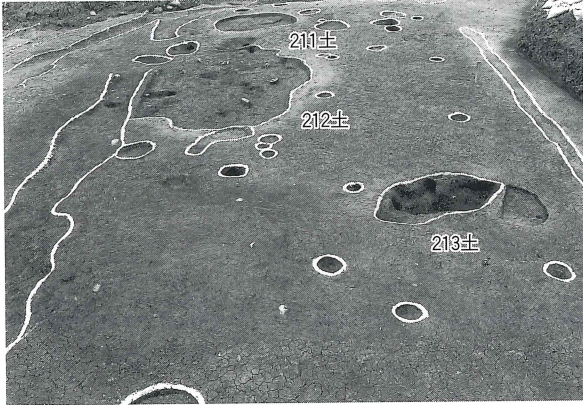
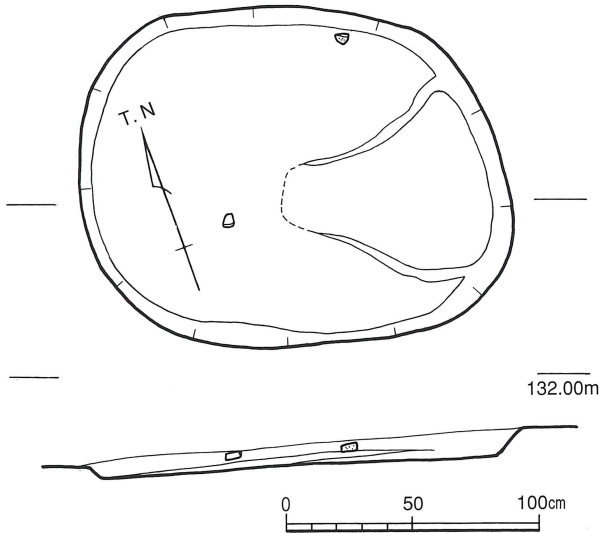


写真2 縄文時代土坑群の配置 (南から)



第21図 平原E区 211号土坑 (1/30)

時かなり削平されていて、本来はさらに深かったものと考えられる。最初の検出作業の際にはわからなかったほど埋土は地山に馴染んでいたが、底面の一部に被熱した部分があり、埋土中にも被熱した小礫や炭・焼土片を含み、何らかの炉として機能したと推定される。内部の1層中からは打製石斧の小破片が1点出土し、それよりも新しい遺物はまったく出土しなかったことと、埋土の土質が212号土坑と酷似していたので縄文時代の遺構と推定した。

出土遺物

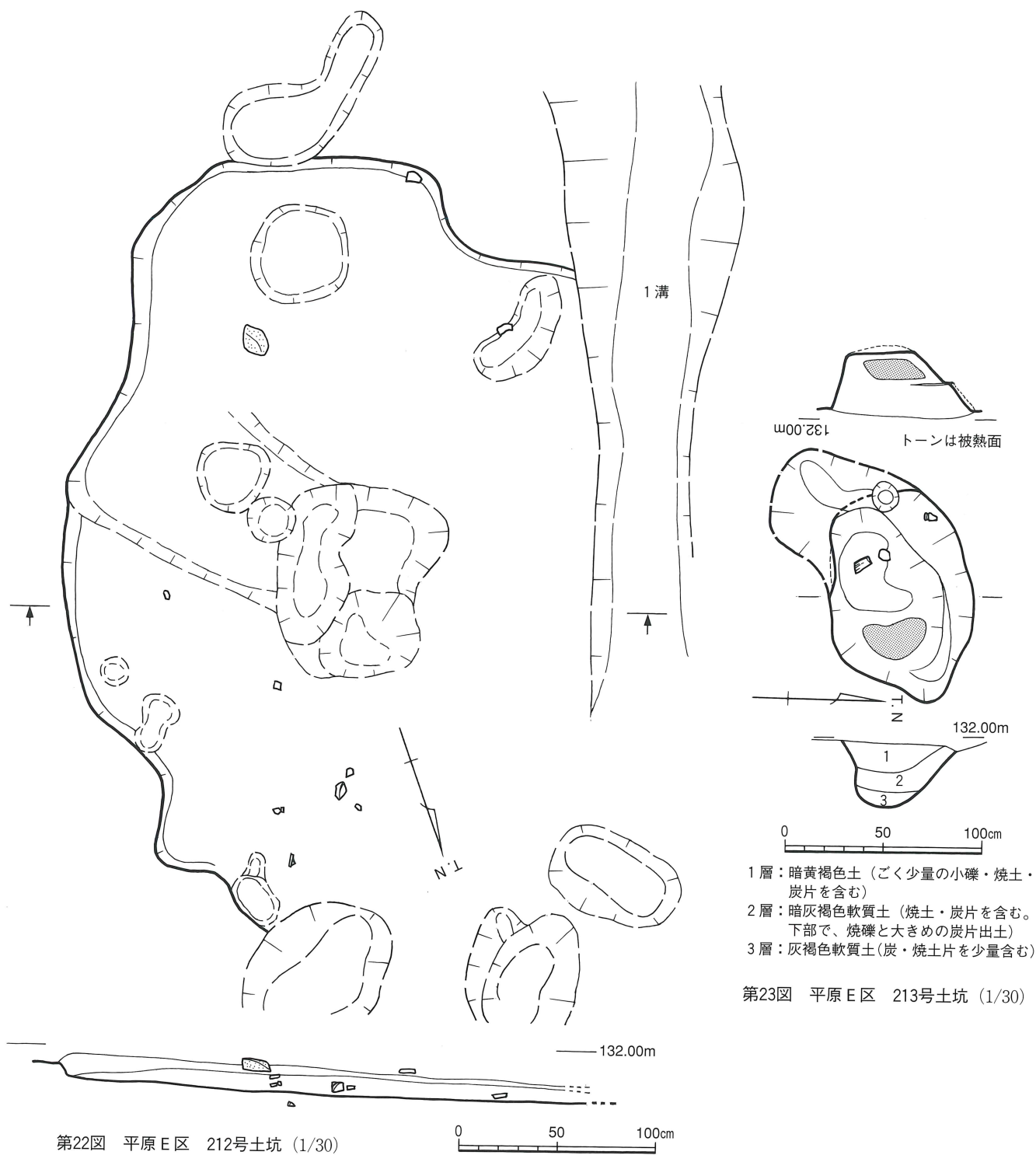
不定小型

被熱痕

畠地境界溝

4-3 近世以降の遺構と遺物 (第17図)

すでにふれたように、検出された近世遺構は畠地境界溝のみである。周辺に散在した不定形なピットはいずれも樹木の根や浅いもので、人工的な柱穴や構造物の存在を匂わせるものは発見できなかった。この部分は近世に畠地として開発され、少なくとも2度畠地の境界が移動し、その後1910年代に水田化されている。



第22図 平原E区 212号土坑 (1/30)

第23図 平原E区 213号土坑 (1/30)

① 溝

1・3・6号溝 (第24図→図版73上)

- 1 溝 1 溝は南北に延びる畠地境界溝である。13m分を検出した。北方向の延長は屈折して3溝となる。残存部の幅は約50~100cmで、断面は浅いU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約20cmほどである。底面の絶対高が南から北にいくほど低くなる点は、6溝と同じである。
- 3 溝 3 溝は東西に延びる畠地境界溝である。4溝にほとんど破壊されていたが、9m分を検出した。西方向の延長は屈折して1溝となる。残存部の幅は約150cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約10cmほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。

6 溝は南北に延びる畝地境界溝である。8 m分を検出した。北方向の延長は3 溝と直交して接続する。残存部の幅は約20~30cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約10 cmほどである。底面の絶対高が南から北にいくほど低くなる点は、1 溝と同じである。

6 溝

埋土は濃淡はあるもののいずれも暗褐色のやわらかい土の単一層である。近代の水田造成でかなり削平されている。埋土中からは近世以後の瓦の小片が出土している。この3つの溝に囲まれた長方形の区画が、ひとつの畝地の単位である。

長方形区画

2号溝 (第25・26図→図版73上・74上・88)

斜面を真っすぐ降りていくように東西に延びる畝地境界溝である。5 溝にほとんど破壊されているが、底部の25m分を検出した。西方向の延長は谷の急傾斜地に向かって消滅している。残存部の幅は約100~200cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約60cmほどである。底面の絶対高は東から西にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土中から近世の陶磁器の破片が出土した。1は18世紀後半の肥前産染付皿で、底部は蛇の目凹形高台、見込みに松竹梅紋がある。

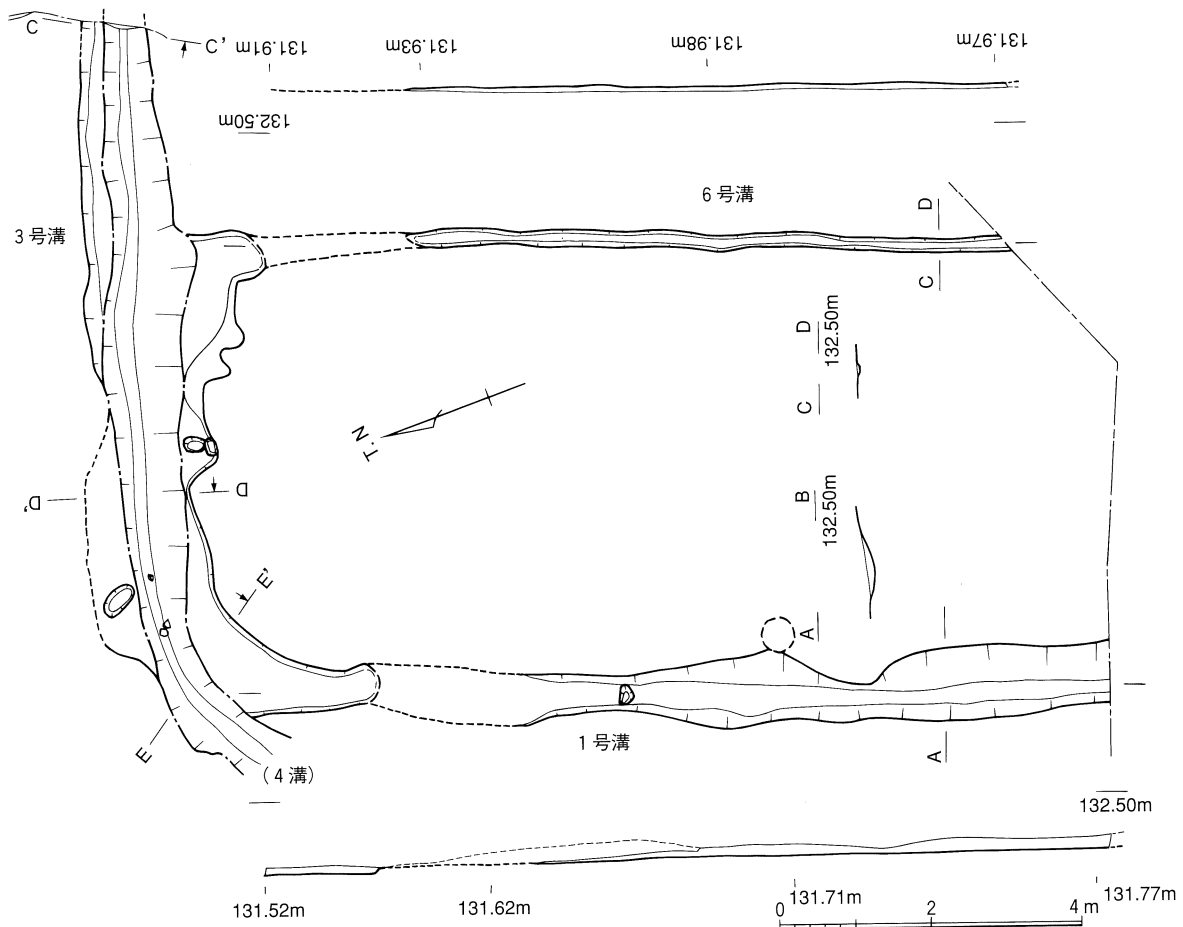
畝地境界溝

肥前染付

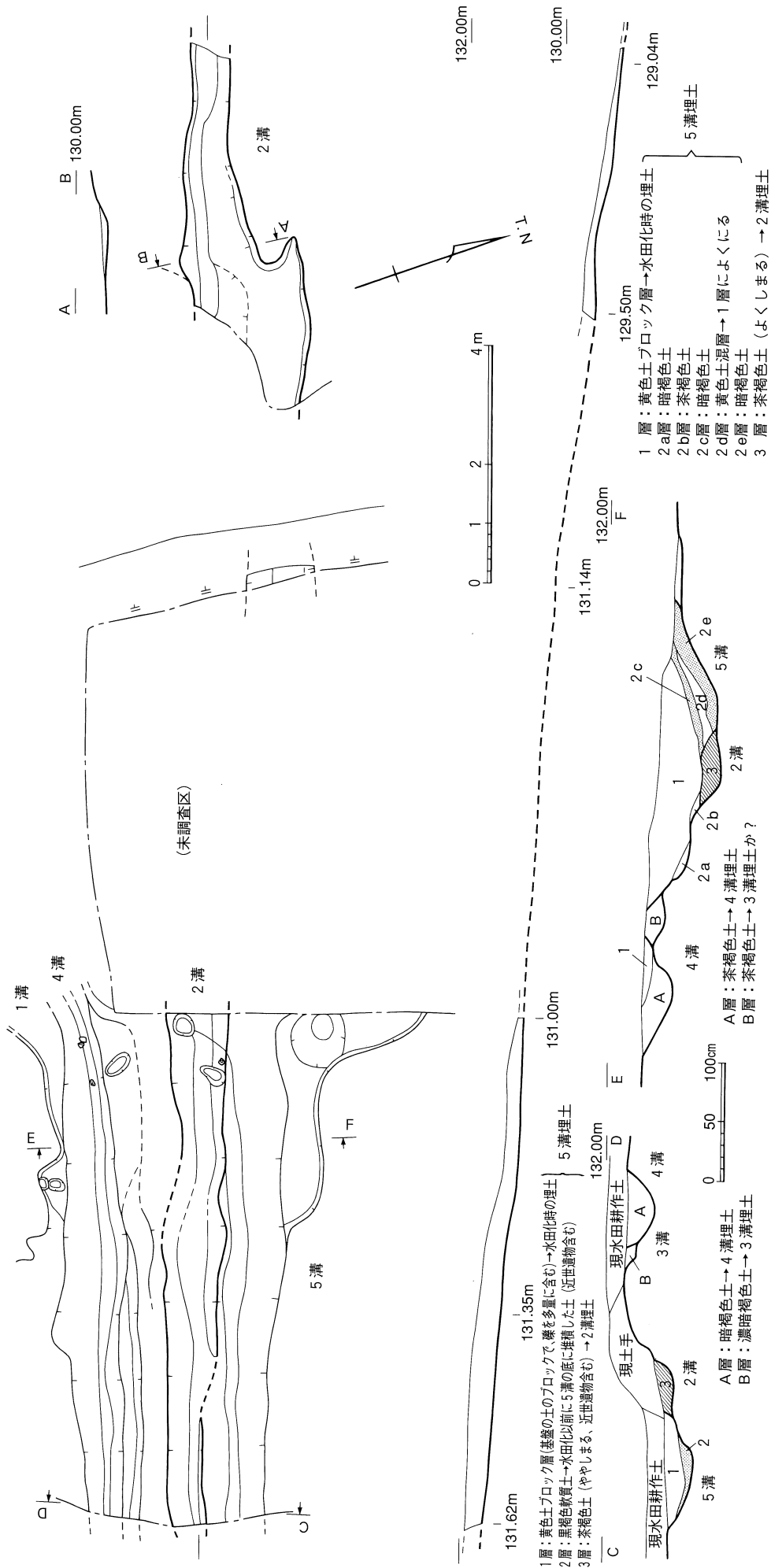
4号溝 (第27・28図→図版73・74上)

3 溝を切って途中までは重複し、その後南に屈折する畝地境界溝である。5 溝に一部を破壊されている。約21m分を検出した。残存部の幅は約70~120cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約50cmほどである。底面の絶対高は東から西さらに南にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土は暗褐色の単一層で、埋土中から残留した縄文土器細片・黒曜石片や1の中世土師質土器坏のほか、近世の陶磁器の破片が出土した。

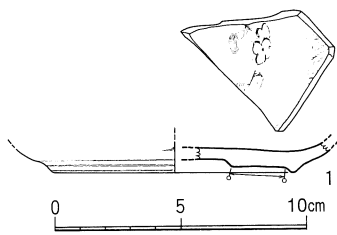
畝地境界溝



第24図 平原E区 1・3・6号溝と区画 (1/100)



第25図 平原E区 2号溝 (1/100, 1/50)



第26図 平原E区
2号溝出土遺物 (1/3)

5号溝 (第29・30図→図版73中・下・74上・88)

2・4溝を切って途中までは重複し、その後南に屈折する畠地境界溝である。約19m分を検出した。残存部の幅は約150~250cmで、断面はU字形をなし、深さは最も深いところで検出面から約50cmほどである。底面の絶対高は東から西さらに南にいくほど低くなり、地形の傾斜と一致する。埋土は上下二層からなり、下層(2層)は畠の耕作土で、上層(1層)は近代の水田化時に埋め戻した整地土である。埋土から

畠地境界溝

1910年代に埋土

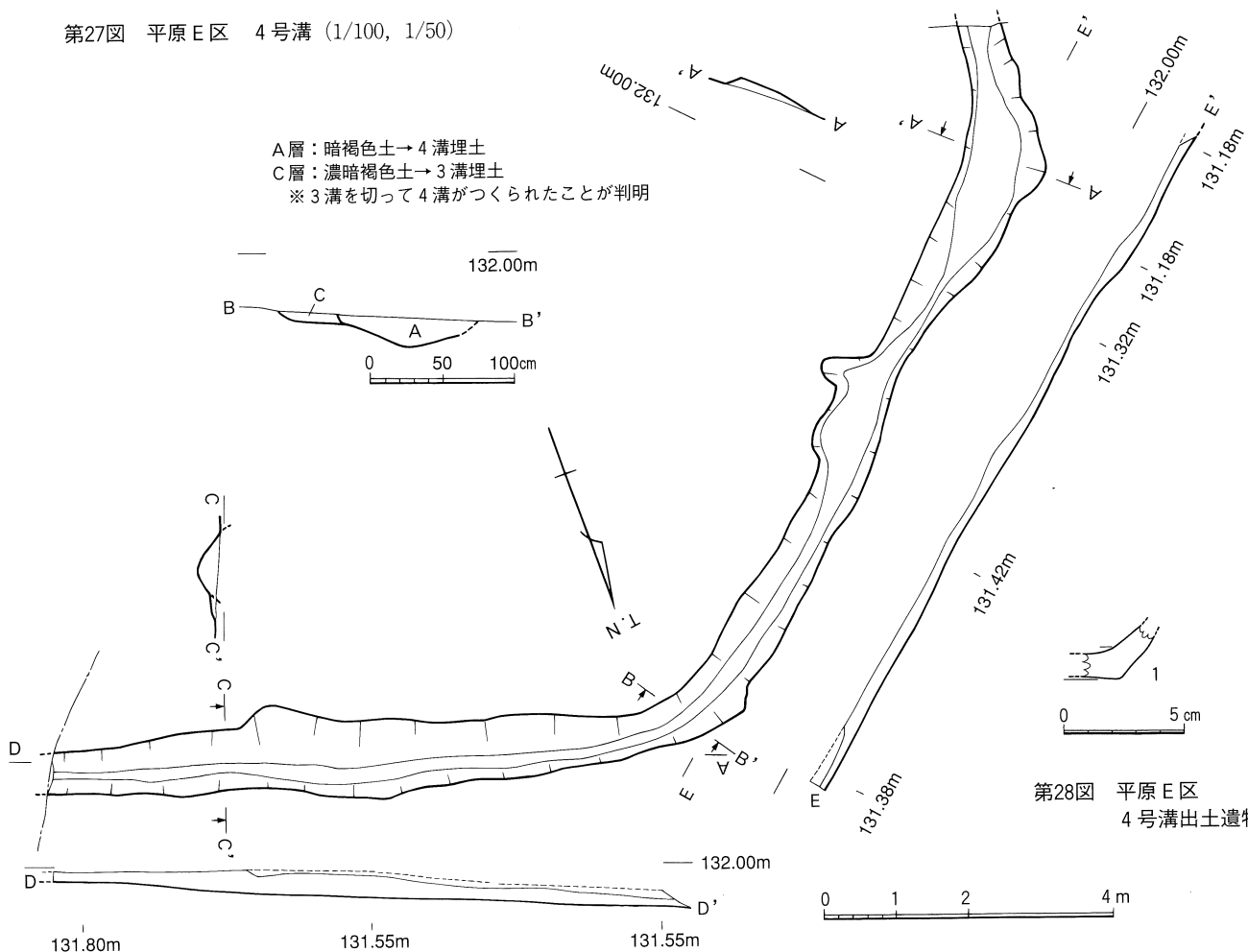
みて、1910年代まで機能していたことになる。埋土中から残留した黒曜石片のほかに、小鉄片や近世の陶磁器の破片が出土した。1は幕末から明治前半の肥前産白磁紅皿で、形打ち成形によるタコ唐草紋がある。2と3は福岡産とみられる鉄釉の陶器皿である。

4-4 小結—近世畠地区画の変遷—

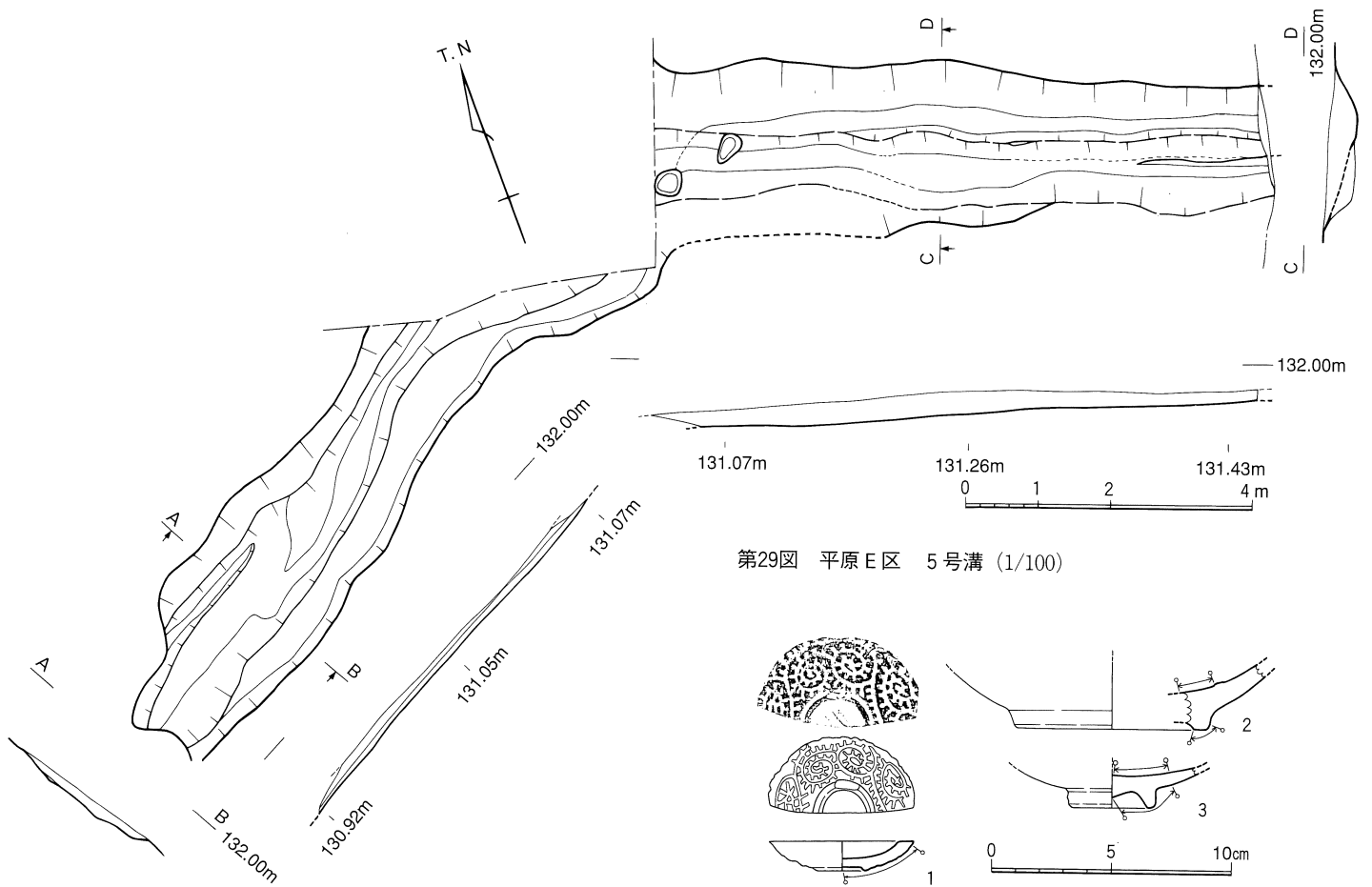
すでに概要の項で近世溝の変遷についてまとめておいたが、畠地区画の変遷の観点から再度まとめると、まず2溝によって南北の大区画に平坦面と斜面全体が分割され、南側の大区画内の平坦部に1・3・6溝に囲まれた長方形の小区画耕地が作られ、斜面部の耕地と分割される。その際3溝と2溝の間の空間は南大区画内の道に相当し、平坦面から斜面部の小区画耕地に向かうことにな

畠地区画の変遷

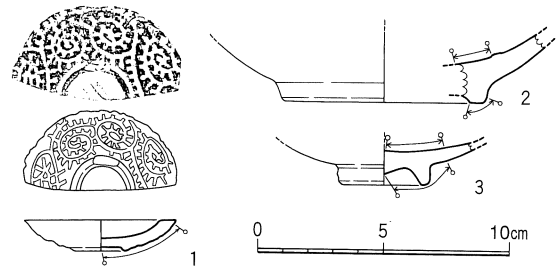
第27図 平原E区 4号溝 (1/100, 1/50)



第28図 平原E区
4号溝出土遺物 (1/3)



第29図 平原E区 5号溝 (1/100)



第30図 平原E区 5号溝出土遺物 (1/3)

第 1 期 る。この状態が第1期の畠地形態で、18世紀後半には遅くとも成立していたと推定される。次の第
第 2 期 2期は絶対年代不明であるが、2溝による南北大区画は維持されたまま、南大区画内の畠地が変化
 する。まず1・3・6溝による長方形の小区画耕地がなくなり、3溝の位置を踏襲しながら平坦部
 の畠地が斜面部に拡大するように4溝が掘られる。南大区画内は平坦部と斜面部の畠地に東西に二
第 3 期 分されたことになるが、2溝と4溝の間は第1期同様道として残されている。次の第3期の改変の
 年代は不明だが、出土遺物から幕末前後と思われる、その際大きく改変されている。2溝と4溝が埋
 没し、平坦部の2溝を掘り直しながら南に大きく屈折する5溝が掘られている。南北の大区画の形
 態が大きく変化し、南大区画内の小区画がなくなっている。5溝は幅が2m前後と広く、溝自体が
 道の役割を果たしていたと推定され、第2期の南大区画の斜面部の畠地が、北大区画の畠地に合筆
 されたものと考えられる。そこではおそらく畠地の売買がおこなわれたものと推定される。そして
1910年代の水田化 最後に1910年代の耕地整理でこの場所は4枚の水田に整理されている。その際平坦部の5溝の南側
 肩が水田の境界となっていることから、5溝そのものは北大区画の所有者の土地とみなされていた
 ことが推定される。

第7章 米田地区と上野第2遺跡A・B地区

第1節 調査概要 (第1図)

上野第1遺跡の西につづく、上野第1遺跡米田地区と上野第2遺跡A・B地区は、小さな谷と尾根とが交互に連続する地点である。上野第1遺跡との関連遺構の有無と、現在の水田がいつまでさかのぼるかを検討することを目的に調査を実施した。

米田地区は日田市大字上野字米田にあたり、上野第1遺跡の一部として調査したが、地形的には上野第1遺跡と上野第2遺跡をへだてる谷の底にあたる。谷を南にさかのぼると、八手状に広がる広い谷がひらけ、その谷の先端の二カ所に湧水点がある。調査区の中央を流れる水路は、その谷の水が流れ下るものである。水路の東西は現在水田として利用されている。

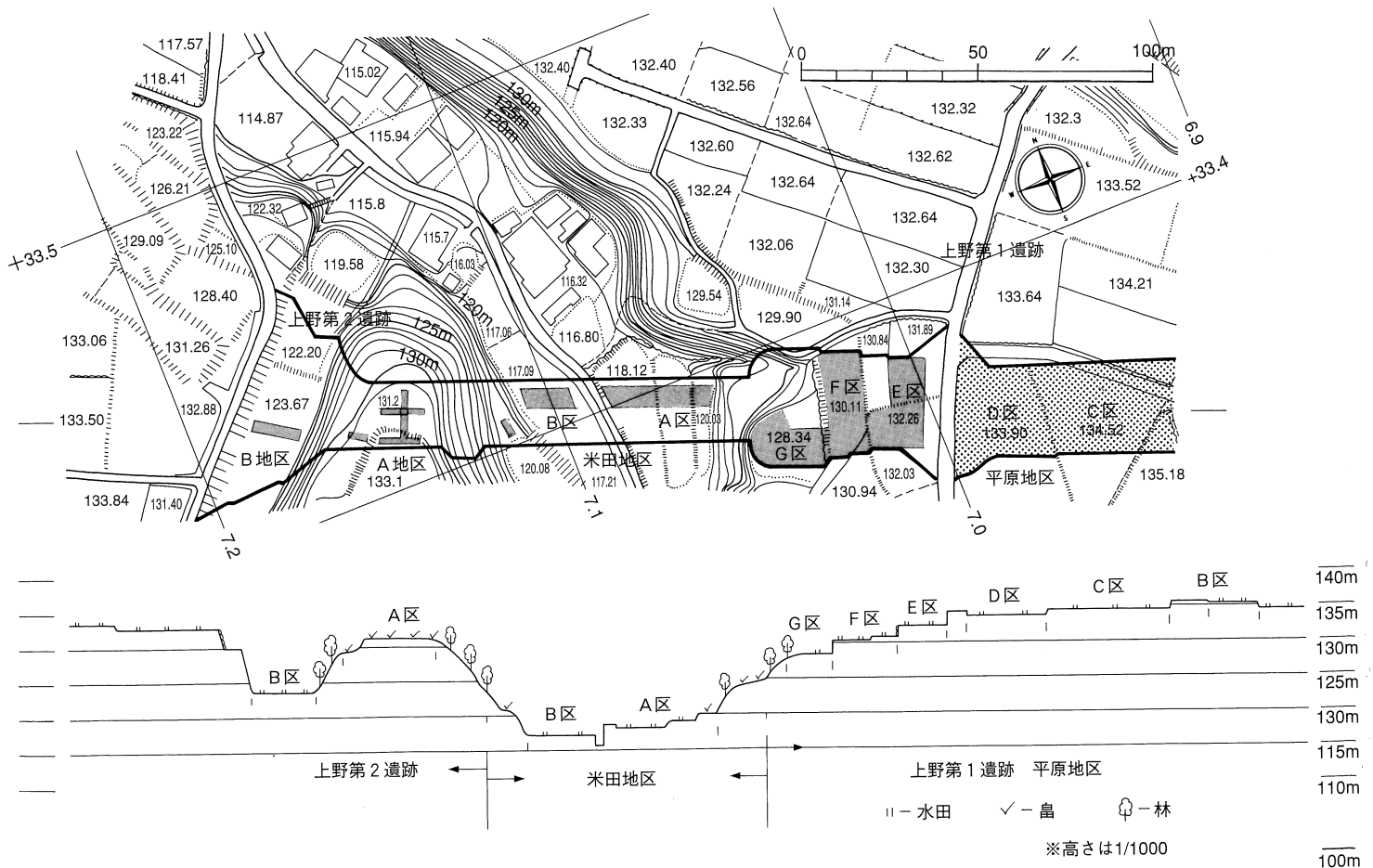
上野第2遺跡のうち、尾根の先端をA地区、小さな谷をB地区とした。A地区にはかつて建物が存在していたとの話があり、近世の居住遺跡を念頭において調査をおこなった。

調査の結果、上野第1遺跡米田地区と上野第2遺跡双方の谷水田は、いずれも1910～20年代の水田化によって開発されたもので、それ以前は一部畠地として利用されていたことが判明した。また上野第2遺跡A地区の尾根上の平坦面も、水田化による削平であることが判明した。

水田の時期

米田地区

尾根と谷



第1図 上野第1遺跡 米田地区と上野第2遺跡の調査区 (1/2,000)

第2節 米田地区 (第2図)

谷底地形 この地区は上野第1遺跡と上野第2遺跡の立地する台地を分かち谷底の地形である。現状は谷の中央に小川が走りその両側に水田が開かれている。野間地区で湧水を利用した奈良時代水田が検出されているので、この地区での水田がいつ開発されたものかを検討するため、水田遺構の有無を調べる調査をおこなった。その結果現在の水田は1910年代の台地上の水田化時に引いた水路からの落ち水を利用して作られたもので、それ以前の谷の地形は小川に向かって落ちる緩斜面をなし、畠地あるいは山林として利用されていたと推定された。なお現水田の下層には水田遺構または明確な遺構を残す畠地等は発見できなかったため、本調査はおこなわず以下のような確認調査に止めた。

現水田の時期

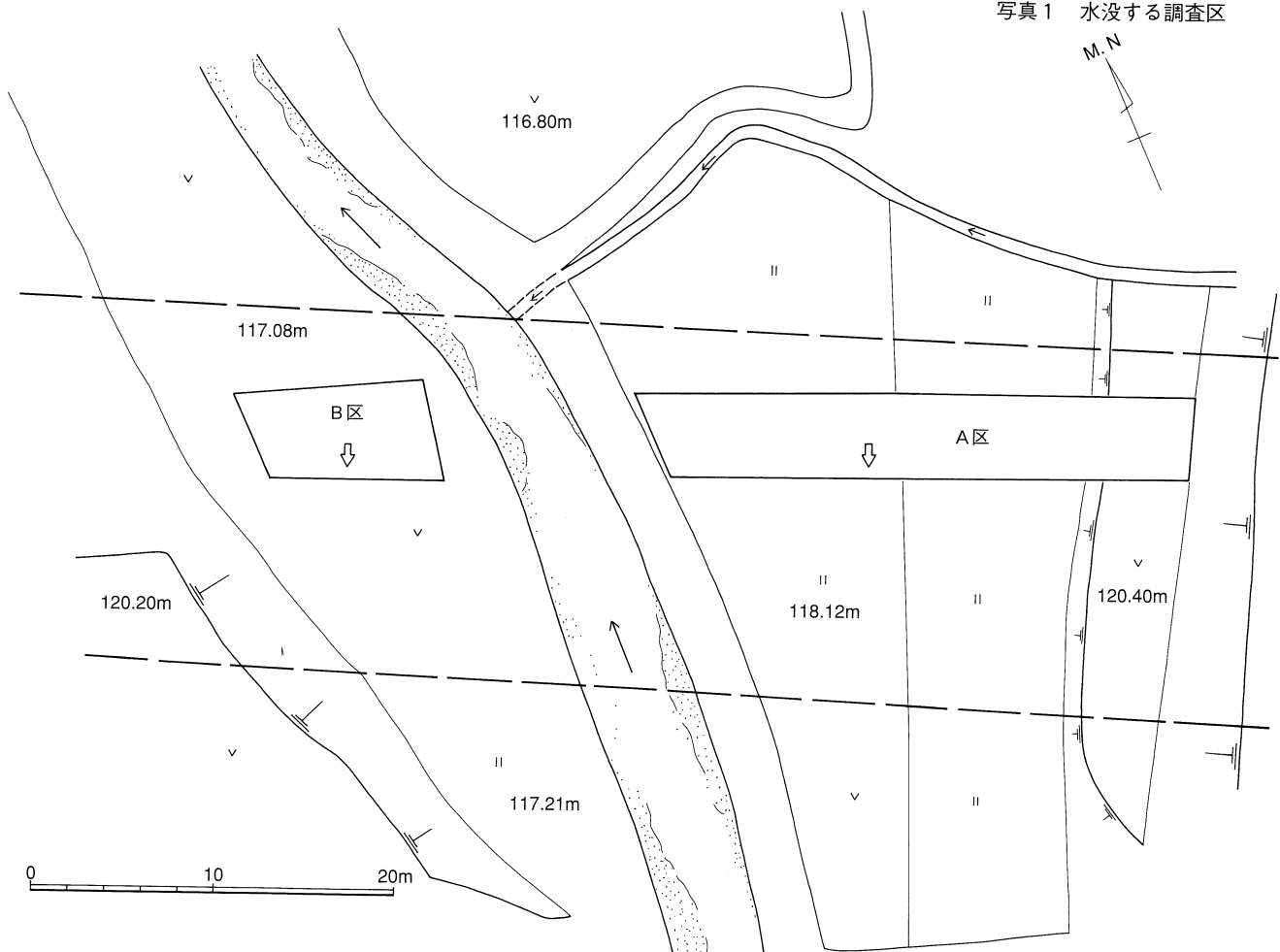
2-1 米田A区 (第2～4図、写真1→図版75・88)

米田A区は水路西側に設けた幅5m、長さ20m弱のトレンチで、谷底の水田の形成過程を見極めるために谷を横断する東西方向に設定した。同時に水田面より一段高い帯状の畠地にまで、トレンチを延ばし、畠地と水田の関係をみることにした(第2図)。

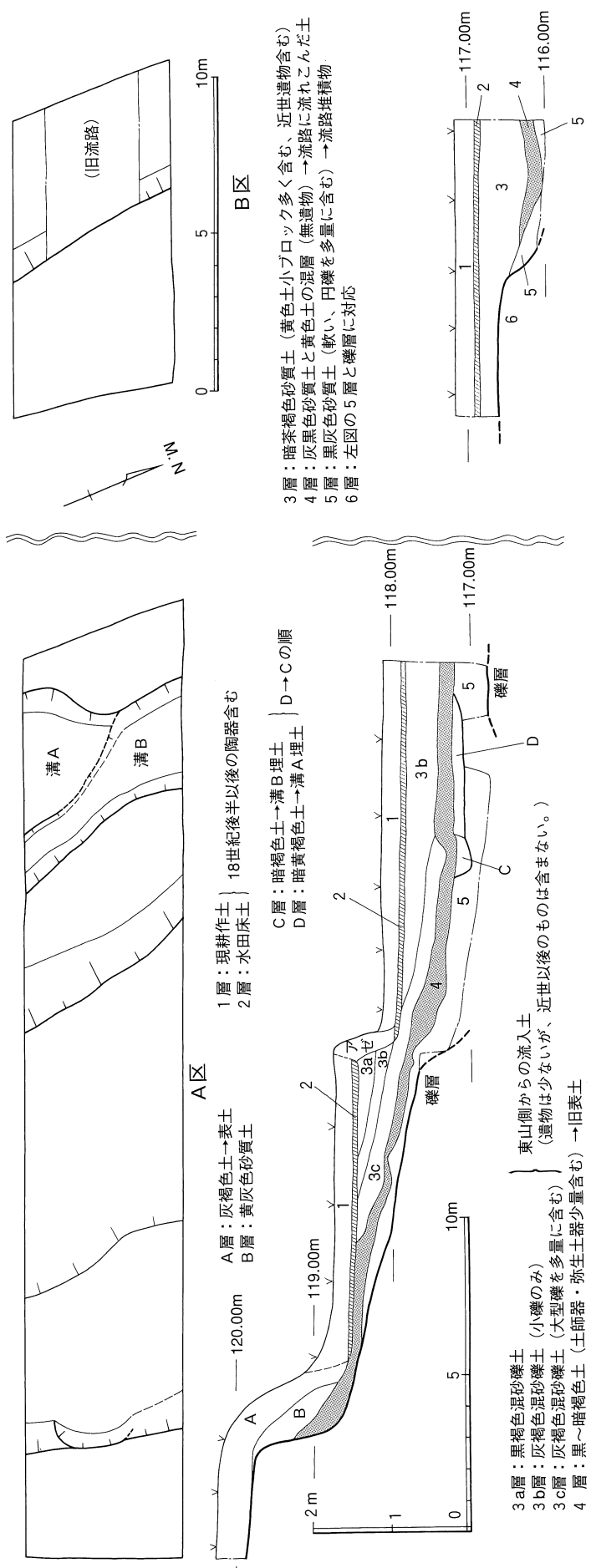


写真1 水没する調査区

層序 現在の水田と畠地の耕作土を取り除いたの



第2図 米田地区 調査区配置図 (1/400)



ち、さらに掘り下げ、基盤層(5層)を露出したのち、念のため基盤礫層まで掘り下げた。現水田の耕作土と床土である1・2層中から第4図に示したような18世紀後半以後の染付磁器あるいは陶器の破片が出土した。その下の3層は大量の礫を含む流入土で、谷東側の台地斜面や谷の南側奥から流されて堆積したものと考えられる。しかし遺物は黒曜石の小片が2点含まれていたのみで、土壌自体は自然堆積層と考えてよい。その下の基盤層上には、淡い黒褐色の4層が覆っており、数点のハケメ痕の残る弥生土器あるいは土師器の小片が見つかった。おそらく3層の堆積が始まる以前の弥生・古墳時代までは、谷底は自然状態で、何ら人為的な開発を受けず、腐植土が堆積する状態であったと推定される。その後上流の開発などで3層がいつしか堆積し、谷が埋没しつつあった近世、遅くとも18世紀後半ごろに谷の緩斜面を3段に造成し最上段は畝に、水の引ける2段是水田開発されたものと考えられる。したがって当初可能性を考えた中世あるいは、それ以前の水田は存在しなかったと考えられる。なお4層の下からは溝が二条検出されたが、いずれも自然流路の跡と考えられる。

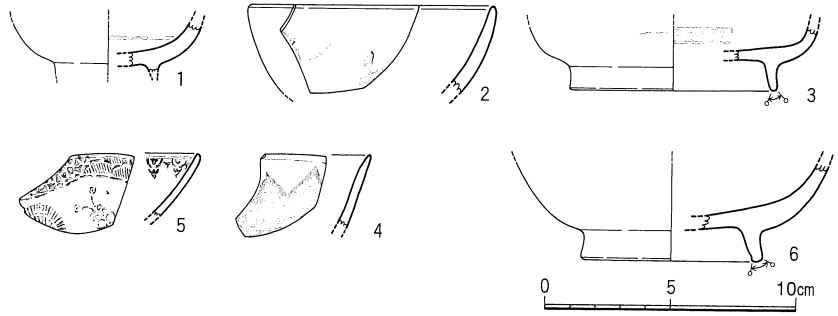
谷の埋没

耕地化

3層に残留した黒曜石片

出土遺物

が数点出土した以外は、すべて1・2層出土の近世陶磁器であった。1～5はいずれも肥前産で、1～3は18世紀後半の染付磁器碗。4は幕末から明治初期の染付端反碗。5は明治初年～10年代の型紙摺りの染付碗。6は福岡産とみられる鉄釉陶器碗。



第4図 米田A区 出土遺物 (1/3)

2-2 米田B区 (第2・3図)

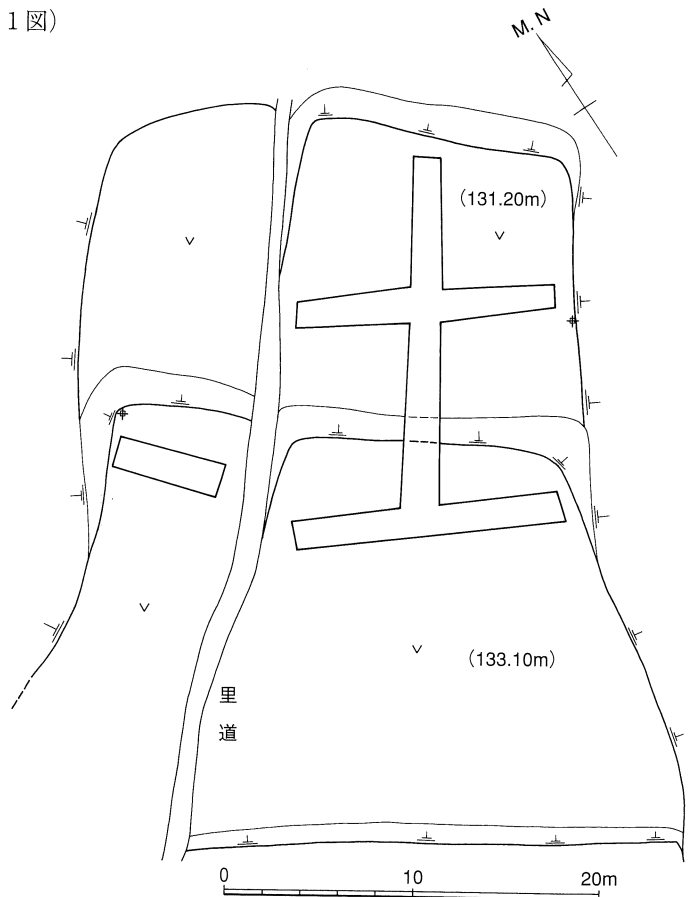
米田B区は現水路の西側の水田中に、A区トレンチの延長線上に設けた調査区である。現水田は水路東側の水田より一段と低く、その下からA区3層に対応する流入土が堆積し、その下にすぐ自然礫層が露出した。さらにその礫層を掘り込んで幅5mを超すと推定される旧流路を検出した。しかし3層中より近世陶器の細片が出土したのみで、それから下の流路堆積土中はまったく無遺物であった。現水田が最も低い位置に作られている点からみると、現水路が現状に固定する以前の旧水路であろう。

旧流路

第3節 上野第2遺跡 (第1図)

A・B地区

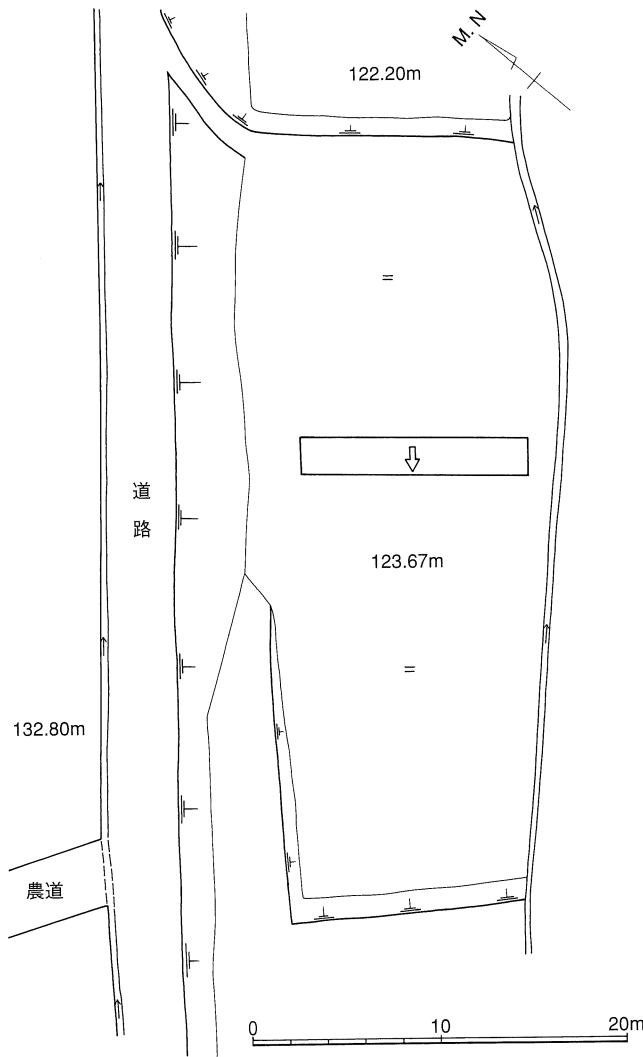
A地区は上野第2遺跡の所在する向原台地の東端にあたる尾根の上、B地区は台地上に入る谷の部分で、いずれも現状は水田になっていた。この現水田は1920年代に畠地から水田に耕地整理されたものである(註1)。この地区以西では従来弥生時代の遺物が採集されており、そのことを念頭において試掘調査をおこなった。その結果A地区ではすでに1920年代の水田造成時に削平されており遺構はまったく検出されなかった。B地区の谷部水田は上流に湧水もなく現在の水田はきわめて新しいもので、それ以前は水田としては使用されていないことが判明した。



第5図 上野第2遺跡A地区 試掘坑配置図 (1/400)

C地区

なおB地区以西の上野第2遺



第6図 上野第2遺跡B地区 調査区の位置 (1/400)

跡C地区では、2000年度に本調査がおこなわれた。その結果弥生時代の小児甕棺墓群とともに、奈良時代の掘立柱建物跡が数棟発見され、上野第1遺跡と同時期の集落遺跡が、隣接する台地上にも存在したことが判明した(註2)。

《註および参考文献》

註1 『日田市史』602頁第36表によれば、1925(大正14)年設立の上野向原耕地整理組合(組合長安心院義造、組合員29名)によって、1925年に工事着手、1932(昭和7)年完了で、水田面積は約13町4反であった。

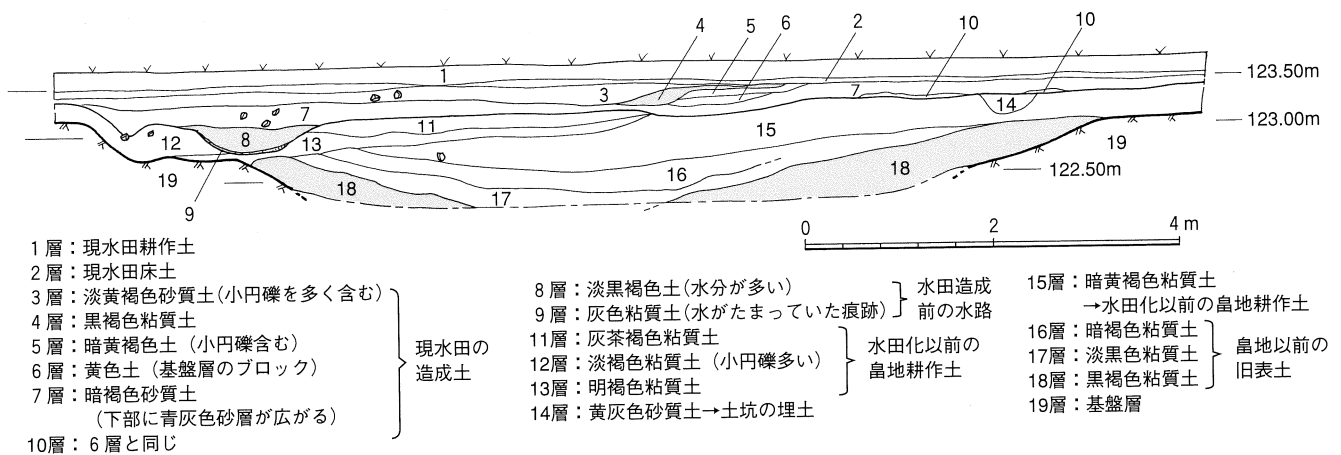
註2 大分県教育委員会調査。調査担当松本康弘氏教示。

3-1 A地区 (第5図→図版76上・88)

現状では畝になっていたが、以前は水田として利用されていた尾根の先端部である。水田開発の時期あるいはそれ以前の土地利用の痕跡を明らかにするため、上下2段の現地形に直交または横断するトレンチを設定して掘り下げた。

尾根の先端

しかしすべての場所で、耕作土を除去するとすぐに基盤層となり、まったく何らの遺構遺物も存在しなかった。現水田の開発は1920年代の耕地整理によるものであるから、その際尾根上をかなり削平したものと考えてよい。以上の調査から遺跡は残されていないと判断して、本調査はおこなわなかった。



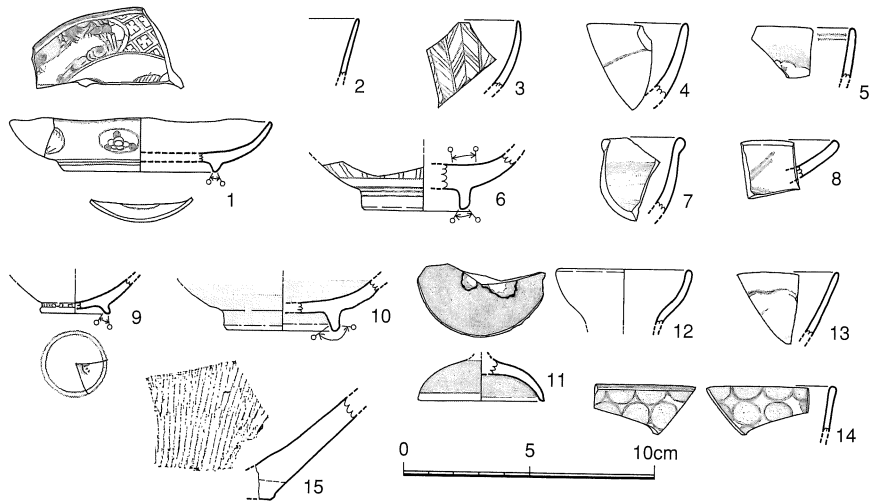
第7図 上野第2遺跡B地区 調査区南壁断面層序 (1/80)

3-2 B地区

(第1・6～8図
→図版76中・下)

谷地形

尾根のA地区の西に南方向に遡っていく谷であるが、両側の斜面は崖といってもよいほど急である(第1図)。その谷の水田面の中央部に、谷を横断する位置に、1本のト



第8図 上野第2遺跡B地区 出土遺物 (1/3)

水田下の畠地

レンチをいれた(第6図)。水田は現水田1枚のみで、その下には水田造成のために埋めた整地層(3～10層)があり、それを取り除くと、浅い谷状の1920年代の耕地整理直前の地形があらわれた。浅い谷の底には幅1mほどの水路がある。さらにその水路が流れた地山そのものが、長期間利用されたと考えられる畠の耕作土壌であった(11～15層)。第8図に示す出土遺物はすべてこの畠地耕作土中から出土した。遺物の時期は17世紀から19世紀の近世から明治時代のものである。その下は畠地利用以前の谷底に堆積した自然堆積層で、遺物をまったく含まないが黒色化していた。

出土遺物

畠地耕作土から出土した1～8の遺物はいずれも肥前産で、1は17世紀後半の染付皿。2は1690年代から18世紀前半代の白磁小杯。3～8は18世紀後半代の染付碗と皿。9は19世紀前半～中ごろの瀬戸美濃系染付小杯。10は明治前半代のクロム青磁の碗。11は関西系とみられる全面鉄釉の磁器蓋。12は肥前産とみられる磁器瓶。13は瀬戸美濃系とみられる染付小杯。14は染付。15は陶器播鉢である。

以上の調査結果から、上野第2遺跡B地区の谷地の開発は、近世の畠地化に始まると考えてよく、それ以前は自然状態における樹木の利用などが考えられるものの、地形に手を加えるような開発はまったくおこなわれていなかったと推定される。そして1920年代に水田造成をおこなって今日に至っているのである。この所見から人工的な遺構は希薄であると判断して、本調査はおこなわなかった。

第4節 小結

20世紀の水田

開発の新しさ

第7章としてまとめた上野第1遺跡米田地区と上野第2遺跡A・B地区は、奈良時代の集落遺跡が広がる上野第1遺跡東原・野間・平原地区の西側にあたり、現状では谷と尾根の連続であるがいずれも水田として利用されていた。現水田が1910～20年代の耕地整理による開発によって造成されたことはすでに明らかであったが、上野第1遺跡野間地区の谷部の水田が奈良時代に遡ることが判明したため、現水田の下に古い水田遺構が存在する可能性を検討する必要が生じたのである。ところが野間地区の谷水田とは異なり、いずれの水田も20世紀前半の開発によって初めて水田化したもので、それ以前は一部畠地として利用されていた場所があるものの、ほとんどは未開拓の自然状態で山林原野として利用されていたと考えられる。このことはかえって上野第1遺跡野間地区の谷部水田が奈良時代に遡る古さを際立たせる結果となった。

第8章 自然科学的分析

プラント・オパール分析から見た上野第1遺跡野間地区の水田開発

大分短期大学助教授

佐々木 章

はじめに

上野第1遺跡は台地上に営まれている。一帯は水田化されているが、大正時代までは畑地帯であった。西側にある石井地区は、古代の石井駅の比定地である。野間地区の南方に湧水点がありそこから北西に延びる浅い谷地形が認められる。トレンチ断面で水田土層と考えられる堆積が観察された。この場所は、「しょうやのた」と呼ばれ、古くから水田があったと伝えられている。この谷地形を挟む東西で、古代の掘立柱建物、竪穴住居、土坑が検出され、湧水点付近の水場遺構と、そこに向かう道状遺構も検出された。掘立柱建物には、総柱で倉庫と考えられるものや、周溝をもつものもある。遺物では転用硯や「豊馬豊馬」と読める刻書石製品が出土している。これらの建物は8世紀前葉にあらわれ、中葉ころまで数度建て替えられたのち姿を消している。なお、集落建設直前の土坑が検出されており、そのうち2基は炭焼坑、1基は粘土採掘坑と推定されている。

水田状土層を大きく分けると、現在の耕作土（Ⅰ層）と犁床層（Ⅱ層）の下に近世の遺物を含む暗褐色土（Ⅲ層）がある。その下の黄褐色土（Ⅳ層）は無遺物に近く、中世の遺物が含まれる。しかしⅣ層の上部には近世の遺物、最下部には古代の遺物も混じる。その下に古代の遺物の小片を含む黒褐色土（Ⅴ層）が認められる。トレンチの東部では直下に地山があらわれるが、西部には古代のやや大型の遺物を含む層（Ⅵ・Ⅶ層）がある。この層は西にやや厚く、西端近くでは円礫を含み流水があったことがうかがえる。さらに西端は、同じ時代の遺物と共に炭化物を含む斜面麓堆積層を覆っている。麓堆積層中に炭化物が含まれることは、炭焼壙の検出との関わりで興味深い。

今回、これが水田土層であることを確認するとともに、これが水田である場合は開発史を明らかにする目的で、プラント・オパール分析をおこなったので報告する。

分析方法

トレンチの西部（A地点）と中央部（B地点）では水田状堆積層の全土層を、両地点の中間部（C地点）と東部（D地点）では、古代の水田と考えられるⅤ層を採取した。試料採取位置を後の発掘調査で明らかになったⅤ層水田状遺構の平面図に重ねて示す（図1）。採集にあたっては、各層をさらに細分し、細分した層ごとに試料を採取した。明確に細分できない場合は層を上下に分けて採取

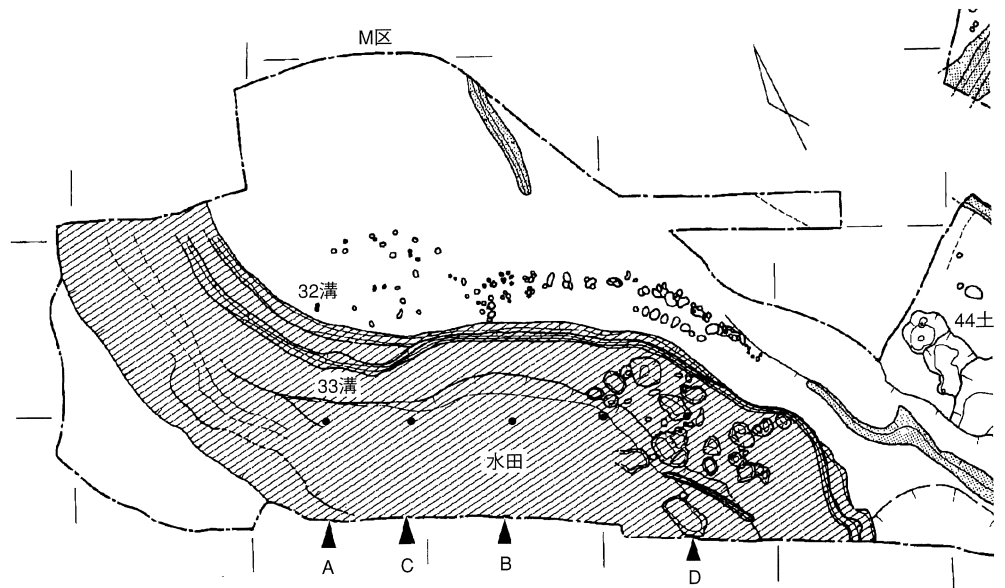


図1 試料採取位置

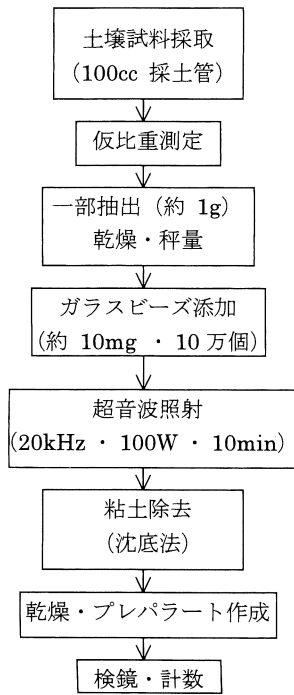


図2 プラント・オパール定量分析手順

した場合もある。プラント・オパールの大きさは50 μ mと微小なので、土壌試料採取にあたっては試料が汚染されないように細心の注意が必要である。試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰り図2に示す方法によって定量分析をおこなった。

分析結果および考察

土壌試料のプラント・オパール分析結果を給源植物中の珪化機動細胞密度(表1)によって植物体重に換算して図3～6に示す。単位は広さ10a(1,000 m^2)深さ1cmの土壌中に埋没した植物の地上部乾物量(t)である。いずれもV層以上でイネ機動細胞プラント・オパールが多量に検出さ

表1 植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール 分析分類名	代表植物	植物体中密度 (10^4 個/g)
イネ	イネ <i>Oriza sativa</i>	3.40
ヨシ属	ヨシ <i>Phragmites communis</i>	1.44
タケ亜科	ゴキダケ <i>Pleioblastus Chino</i> var. <i>virides f. pumilis</i>	20.83
ウシクサ族	ススキ <i>Miscanthus sinensis</i>	2.79

れている。B地点では、ごく少量だがVI層やVII層でも検出されている。各地で発掘されている水田遺構土壌のプラント・オパール分析結果から、イネ粉量に換算して1 t/10 a/cmを超える場合は水田遺構の可能性が高いことを経験している。B地点のVI層やVII層は量が少なく、水田化されていたとは考えにくい。それに対しA地点のV層中部には、0.7 t/10 a/cmを示す層があり水田作土層の可能性が高い。断面ではV層の表面に明らかに畦畔と思われる高まりは観察できないが、D地点以東まではほぼ水平に堆積している。このことは、水田化していないと考えられるVI層・VII層には比較的に大型の遺物が含まれるのに対して、小片になった遺物が多いことも矛盾しない。8世紀前

葉に建物が作られた後、遺物が残された谷地形の部分に水田が形成されたことが考えられる。B地点ではIV層下部に1.1 t/10 a/cmを示す層がある。A地点でも比較的の下部のイネ密度が高いことに対応する。多少の断続はあるかもしれないが、建物が放棄された後も水田が作り続けられていたのであろう。またA地点ではIV層上部からIII

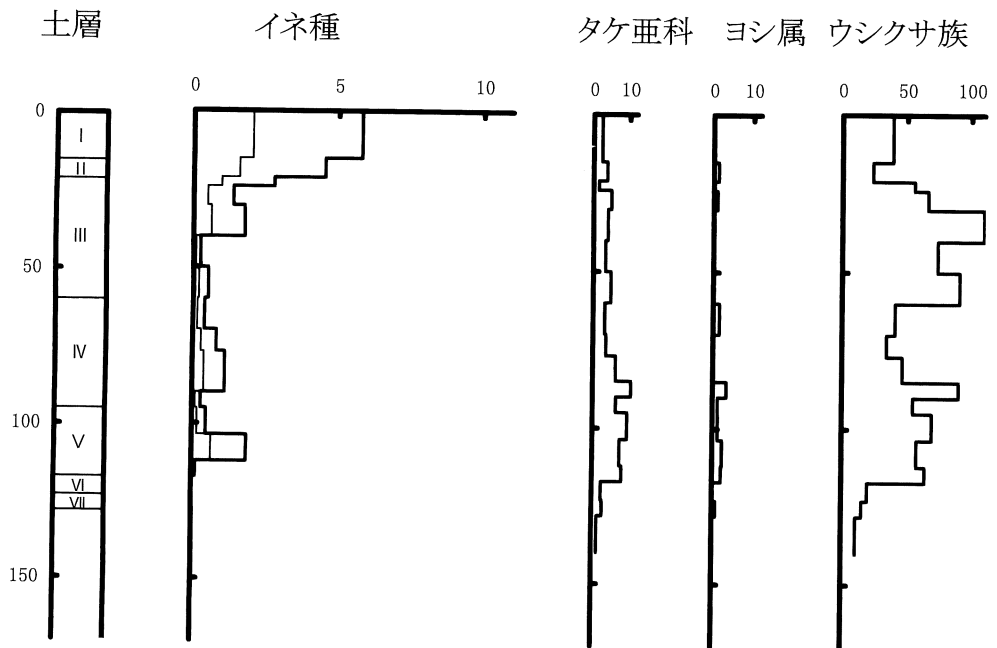


図3 A地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10 a/cm)

層下部にかけて、B地点ではIV層上部に最もイネ密度が低くなり、それ以上では、上層ほど密度が高い傾向がうかがえる。

機動細胞はイネ科植物の葉身に含まれており、珪質化したイネ機動細胞が化石として残ったものがプラント・オパールである。イネの収穫を穂刈りでおこない、葉身を含めたイナワラが圃場に残される場合は、機動細胞もそのまま残って

イネ機動細胞プラント・オパールとなる。しかし、株刈で収穫しておれば、主要な葉身はイナワラとして圃場外に持ち出すので、残される機動細胞は極端に少なくなり、分析結果も一桁小さくなる。IV層で上層の方が少ないのはこのような理由も考えられる。

埋没水田土層が使用されていた期間中の総収量について検討してみよう。

プラント・オパール分析結果を植物体重に換算して示した図2～7の横軸に土層厚を乗ざると、その層に含まれる植物体量を推定することができる。このようにして求めた推定総収量を表2に示す。各層ごとに見るとA、B両地点に食い違いが見られるが、全層にわたる合計は71 t / 10 aと等しい。これは、A、B地点とも同じような使用方法をしており、洪水による堆積の度に新しい作土層を形成しながら上層へ上層へと耕作されたため、分層ごとに使われた年代が異なるが、合計は同じになったと見るのが適当だろう。また洪水による作土の流亡があった場合は、たとえ近接

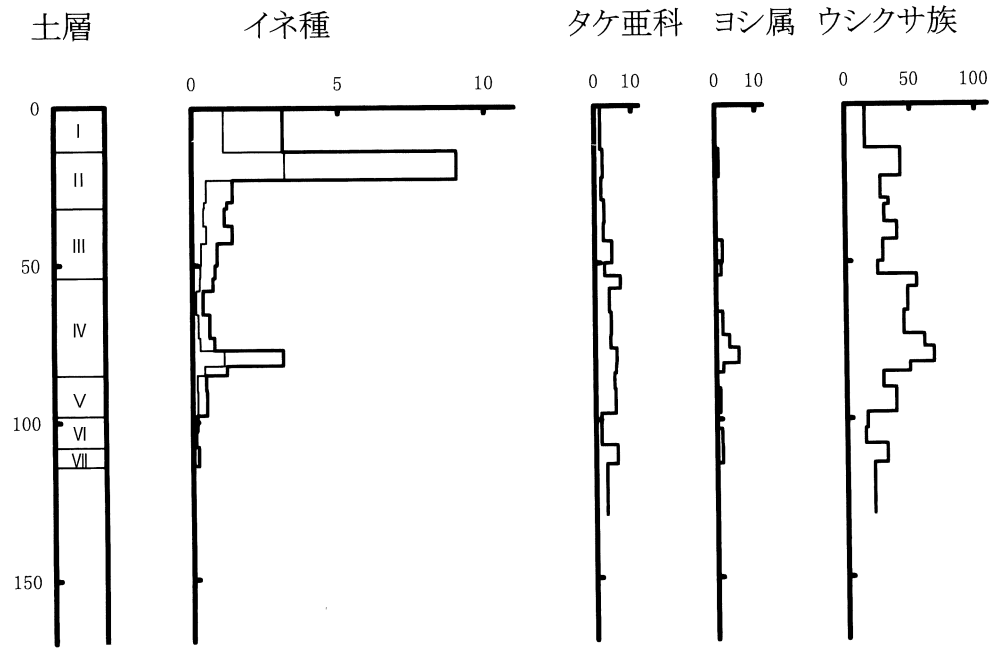


図4 B地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t / 10 a / cm)

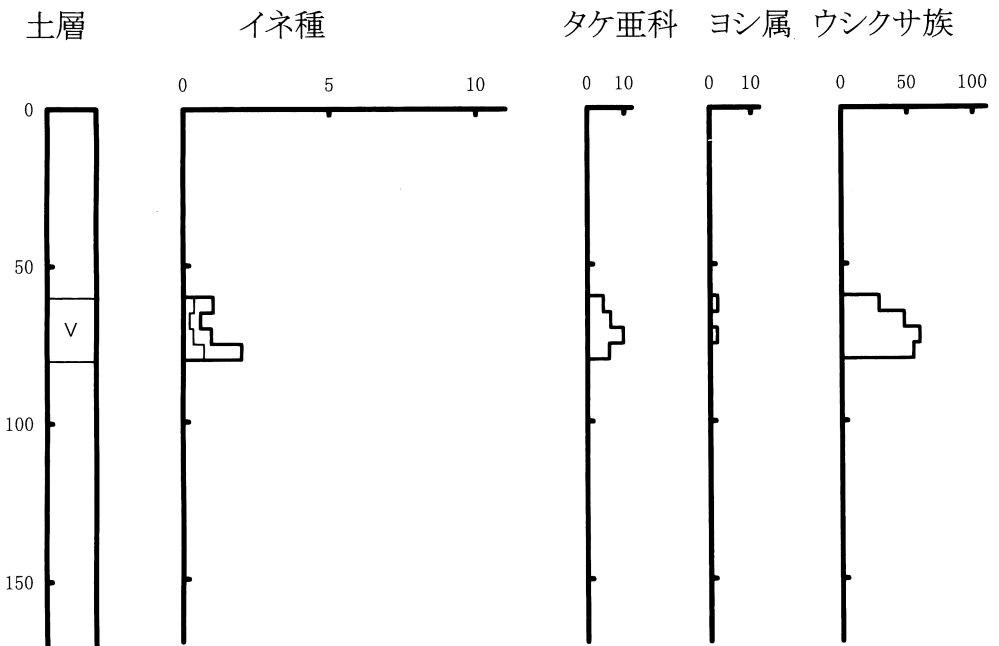


図5 C地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t / 10 a / cm)

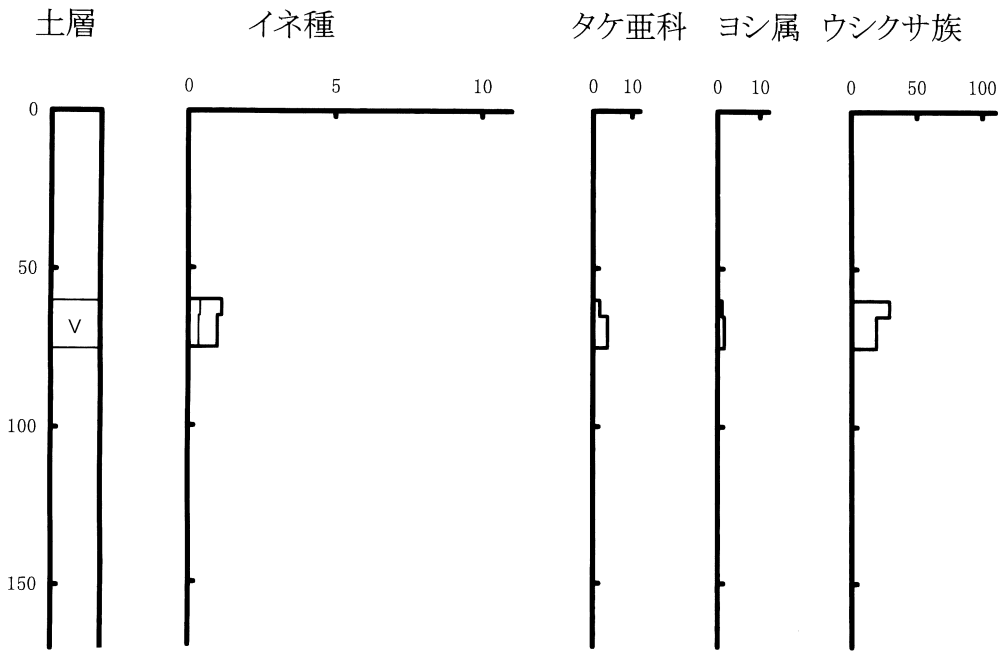


図6 D地点のプラント・オパール密度から推定した植物量 (t/10a/cm)

する水田であっても被害の差は大きいと思われるので、この範囲では作土の流亡も少なかったと考えてよからう。

先に述べたように、穂刈から株刈への移行に見られるような収穫様式の変化があると、分析結果の解釈も大きく変わらざるを得ない。先にIV層がまさにその時期に当たるのではないかと考察しておいた。ここでもう一度、層ごとの生産量から検討を加えておく。

はじめにIV層が使われていた期間を考える必要がある。IV層の遺物は少ないが上部に近世の遺物が、最下位に古代の遺物が混じっている。詳細は不明だが、仮に9世紀から16世紀に及ぶ600年間連続して使われたとすると、年間収量は17kg/10aと計算できる。断面での観察や分析結果からは、長期の休閑期間があったとは考えにくいので、この時期の途中では株刈に移行していたとしておきたい。全部が株刈であったなら年間収量はその10倍以上おそらく200~300kg/10aと計算される。やや高すぎる感があるので、一部には穂刈や高刈が残っていたことも考えられる。つぎにV層について同様に計算してみよう。IV層最下部には古代が混じるのでV層の下限を9世紀と考えたい。水田が作られたのを8世紀前葉としても、使用期間は100年余りであろう。150年とすると年間収量は40kg/10aと計算できる。ほぼ、建築物が存在した期間に相当する50年間とすると、年間収量は120kg/10aになる。粉春歩合を75%として玄米になおすと90kg/10aと計算できる。

奈良時代から場合によって中世にかけて、穂刈に関連すると思われる「束」という単位が使われており、「穎稲」が「穀稲」と区別して用いられ、「春米」の語も見える。これらから、穂刈がおこなわれていた可能性が高いと考えられている。特に、早稲や晩生などの品種を区別する必要がある種籾の出挙や、穀稲を入れる倉の下に敷くために後世まで顕納があったといわれる。この場合、収穫道具の主力は鉄製の鎌になっていたと考えるが、

小型の鉄鎌は穂首刈にも使用できる。

プラント・オパール分析結果では、いずれの層もウシクサ族が比較的に多い。ウシクサ族には、ススキ・チガヤなど路肩や堤防、草原などに普通のイネ科植物が含まれる。古代の石井駅の具体的な場所は、まだよくわかっていない。周囲に多量のウシクサ族植物が生育していた上野第1遺跡は、水場もあるので馬を飼育するにも便利であったと予想できる。駅に関連する施設であった可能性についても検討する必要がある。

表2 各層で生産されたイネ粉の推定値

層	t/10a				平均
	A地点	B地点	C地点	D地点	
I	30.4	15.3			22.9
II	9.5	32.8			21.2
III	14.7	8.0			11.4
IV	9.0	11.3			10.1
V	7.2	2.2	7.9	5.5	5.7
VI	0.0	0.5			0.2
VII	0.0	0.4			0.2
合計	70.9	70.5			71.7

第9章 調査の成果と課題

第1節 奈良時代以前

1-1 旧石器時代

調査中に各所で旧石器時代に属するとみられる石器を採集した。しかし野間地区に基盤層調査区を設定して包含層の有無を調べたが、包含層は存在せず基盤層の4・5層は中位段丘1面の基盤そのものであった。おそらく旧石器時代の生活面は、その後の侵食や耕作によって消失したものと推定される。

包含層なし

採集された石器の種類は、ナイフ形石器、角錐状石器、台形石器、剥片尖頭器、彫器と石核で、時期の異なるものが含まれ破損したものも多い。石材も腰岳産黒曜石と西九州産サヌカイト製が主で、1点ずつだが瑪瑙製と小国産黒曜石が含まれていた。全体として必ずしも多いものではない。

石 器

おそらく中位段丘2面の地形の基本はすでに旧石器時代にできあがっていたと考えられるので、この付近まで狩猟採集の対象地になっていたものと見られる。

1-2 縄文時代

東原C区、野間J区、平原E区で不明瞭な土坑が検出され、その周辺に少量の土器片と石器が発見されている。特に野間地区では遺構検出面上の旧畠地土中に、後晩期の土器片や石器が散見され、形態の明瞭な39号土坑が唯一発見されている。

遺物の分布

① 遺構と縄文土器

遺構としては東原C区11号土坑、野間J区39号土坑、平原E区211・212・213号土坑が発見された。いずれもその性格を考える手がかりを得るほどの保存状態ではなく、わずかに39号土坑が円形で比較的深く底面が平坦であるので貯蔵穴の可能性を指摘できること、213号土坑が炉施設ではないかとみられる程度である。別に基盤層調査区で包含層の探索を試みたが、なにも残されていなかった。

土 坑

包含層なし

出土した土器は上記の土坑出土遺物を除いて、すべて奈良時代以後の遺構に残留したものか、表土中より出土したものである。土器の種類としては深鉢の破片が大多数で、東原A区2号土坑残留の深鉢底部、東原C区2号堅穴残留深鉢底部片、東原B区3号溝残留の深鉢底部、東原C区ピット111出土の深鉢底部、野間J区39号土坑の深鉢など、時期の判明するものは晩期前半のものが多い。浅鉢は野間M区で同じ時期のものが採集されているにすぎない。縄文時代の晩期ごろに上野第1遺跡の野間地区を中心に、土器の使用がくりかえされたようである。おそらく湧水の存在と無関係ではないと考えられる。

晩 期 前 半

② 石器

ほとんどが採集品であるが、縄文早期と後晩期のものが多い。野間I区9号堅穴残留の縄文早期チャート製鍬形鍬は完形の大型品で、野間I区11号堅穴残留の縄文早期の腰岳産黒曜石製鍬形鍬は返りの片方を欠いている。同時代の押形文土器は1点も採集されていないので、おそらく狩猟の際に立ち寄ったものと思われる。ほかに石鍬は東原C区7号溝残留の腰岳産黒曜石製、野間G・H区採集の姫島産黒曜石製、野間G区ピット19号残留の腰岳産黒曜石製、野間I・L・J区採集西九州産サヌカイト製、野間I区30号掘立柱建物に残留した姫島産黒曜石製、野間J区45号土坑残留の金山産サヌカイト製などがあり、完形の場合もあれば返りを欠いたものもあり、石材の産地も多彩である。

早期鍬形鍬

扁平打製石斧は東原A区採集と野間G・H区採集、野間基盤層②グリッドから安山岩製のものが発見され、いずれも先端部を欠いており、実際に使われて破損したものと考えられる。ほかに地元

打製石斧

で産出しない結晶片岩製のものが2点野間M区で出土しており、ともに完形で一方は分銅形であった。金山産サヌカイト製で完形の石匙が野間M区ピット4から、安山岩製の凹石が道路状遺構の土坑21に残留し、野間地区基盤層②グリッドからは同じく凹石と叩き石が出土している。

石 材 打製石器の石材は黒曜石が多く、腰岳産・小国産・姫島産があり、それにサヌカイトが加わる。石斧と凹石や叩き石には地元で産出する安山岩製がほとんどであるが、扁平打製石斧の一部に結晶片岩が使われている。おそらく近隣では甘木朝倉など筑前地方で産出されており、外部からもたらされたものであろう。

③ まとめ

晩期の変化 縄文早期から後期にかけては、旧石器時代に引きつづき、狩猟採集の途中に立ち寄る場所として利用されていたことが、湧水の存在から考えられる。しかし縄文晩期になると、土器を持ち込み土坑を掘るなどの一定の生活のあとを見ることができる。扁平打製石斧に代表される原初的な耕作具が持ち込まれるのもこの時代と見たほうがよい。湧水の周囲がそのような生活に有利な環境を提供したものと推定される。明らかにそれ以前とは異なる生活が縄文晩期前半に上野第1遺跡でおこなわれたと考えられる。

1-3 弥生時代

近くに集落 調査された範囲のなかでは、弥生時代の遺構は発見されなかった。しかし上野台地の北辺とくに現在の野上集落周辺では、弥生時代の土器をかなりの頻度で採集でき、また耕作中に出土するほか、上野第1遺跡の西に隣接する上野第2遺跡では、弥生時代前期から中期の小児甕棺墓群が発見されており、この台地上の一角に弥生時代の集落が存在していたことは間違いない(註)。

前中期の甕 甕と磨製石斧 遺物は新しい遺構に残留したか、表面採集されたものである。土器は野間G区19土坑残留の弥生時代中期の器台片を除いて甕の破片がほとんどで、底部片が多く、その時期も弥生時代前期末から中期前半のものが多。東原A区2号溝残留の甕底部、野間I区8号竪穴建物残留の甕底部片、野間J区15号溝残留の甕底部片、野間M区上層残留の甕底部、野間M区水田下層出土の中期甕、水田上層出土の甕底部、平原D区204土坑残留の甕底部などである。いずれも被熱した実用品であるので、おそらく湧水点の水を利用するために集団の一部がこの付近を訪れたものと推定される。

磨製石斧 石器はほとんど発見されていないが、磨製石斧の破片が採集されることがある。野間E・F区で緑色結晶片岩製蛤刃石斧の先端部が、道路状遺構の土坑24に残留した結晶片岩製で先端部が破損したのなどである。また採集された石鏃の中には弥生時代のものが含まれている可能性がある。

水と森 おそらく上野台地西北部に居住区を設けた弥生集団の水汲み場のひとつであった可能性があり、そのためこの周辺を訪れる機会が多く、その際甕をたずさえてきたのではなかろうか。同時にその周辺はなお森林であった可能性が高く、石斧は木材の伐採などに使われたものと考えられる。

《註および参考文献》

註 大分県教育委員会2000年9月から12月にかけて調査。奈良時代の掘立柱建物跡等とともに、弥生時代の墓地を調査している。

1-4 古墳時代

小児墓 野間I区20号溝に残留した古墳前期初めの壺底部以外には出土遺物はまったくなく、わずかに小児土器棺墓1基が東原B区で知られたのみである。東南に頭を向ける小児墓で、まったく単独に埋葬されている。現在の野上集落付近に古墳時代初頭まで続く集落が存在した可能性があるが、それにしては居住区からは大きく離れている。集団墓地の一端とも考えがたいので、単独埋葬と考えざ

るをえない。このような埋葬例があるということを確認しておきたい。

第2節 奈良時代

奈良時代は上野第1遺跡発見の遺構の大半と遺物のほとんどを占める。ここでは遺構と遺物を個別にまとめ、それらの相互関係を遺構と遺物の両側面から明らかにした上で、奈良時代の遺構の編年を行い、最後に集落の性格にふれておきたい。

2-1 遺構各説

掘立柱建物、竪穴建物、土坑、道と水場の順で検討し、柱穴列は掘立柱建物のなかでふれる。ピットについての検討は割愛する。

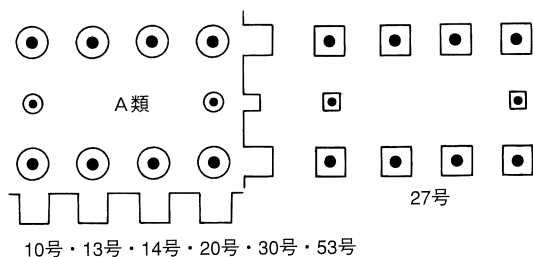
① 掘立柱建物跡 (第1表)

今回の調査で発見された33棟の掘立柱建物を対象に、いくつかの角度から分類をおこない、掘立柱建物の性格付けの材料としたい。なお柱穴掘形の平面形では、27号掘立柱建物のみが方形柱穴で構成され、13・14・53号掘立柱建物に一部方形柱穴が認められるが、そのほかはすべて円形柱穴であった。

柱穴構造 (第1図)

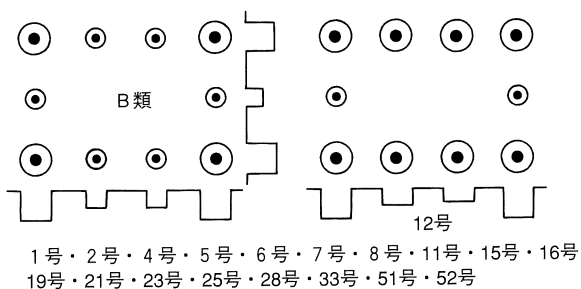
柱穴の平面形状だけでなく、規模と柱穴掘形の深さに注目して分類をおこなった(註1)。その結果次のABCの3分類が可能であった。なお掘立柱建物の四隅のコーナーにあたる柱穴を「隅柱」と表記する。

A類は柱穴掘形の平面規模が同一で、掘形底面の高さが同じに揃えられている掘立柱建物跡である。



多くの場合梁間の柱穴は規模が小さく浅めに掘られている。柱痕は明瞭で柱の太さは掘形の規模に関係なく同じ場合が多い。掘形埋土には黄色土をいれて突き固めたと考えられる水平堆積が認められる。方形柱穴をもつ例はすべてA類であった。

この構造は2×3間およびそれ以上の規模の側柱建物で観察され、床面積でいえば20㎡以上の中型・大型・特大型の掘立柱建物で採用されている(第4図)。上野第1遺跡唯一の総柱の2×3間掘立柱建物である26号掘立柱建物もA類にあたる可能性が高いが、調査が不十分で除外している。



B類は4本の隅柱の柱穴掘形の平面規模がほかの柱穴より大きく、かつ深く掘られている掘立柱建物である。平面規模は変わらないが、四隅の柱穴が深く掘られた12号掘立柱建物は、A類とB類の双方の特徴を備えているが、隅柱のみを深く掘る点を優先してB類に含める。A類と同じく柱痕は

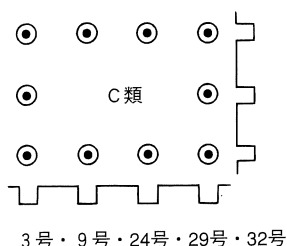


図1 柱穴構造による分類

柱穴の形

深さに注目

A 類

B 類

明瞭で、柱の太さは掘形の規模に関係なく同じ場合が多い。掘形埋土には黄色土をいれて突き固めたと考えられる水平堆積がしばしば観察される点も、A類と同様である。B類の掘立柱建物はすべて円形柱穴をもつ。なお東原C区の1号柱穴列も構造的にB類にあたる。

この構造は1×2間・2×3間および3×4間の規模の側柱建物と、2×2間の総柱の掘立柱建物で観察され、床面積でいえば10~20㎡の小型がほとんどB類で、中型・大型の掘立柱建物のなかにも存在する(第4図)。2×2間総柱の掘立柱建物はほとんどがB類である。

C 類 C類は柱穴の平面形状が小型円形で、隅柱を含めて大きさに差がなく、深さに一定の約束がない。柱痕の多くが不明瞭で、埋土にも黄色土で固めた痕跡はない。例数が少なく、全体の規模がわかるのは3・9号掘立柱建物の2例にすぎないのではっきりしないが、必ずしも床面積の狭い掘立柱建物に限られるものではないようである。

ま と め 以上から次のようなことを指摘しうる。①A類の構造は中型以上のより大型の掘立柱建物に採用され、B類は小型の掘立柱建物に採用されていることが判明する。その場合A類は柱筋がとおり、寸法も揃う傾向がある。②高床倉庫と考えられる総柱の掘立柱建物も、2×3間の26号掘立柱建物がA類になる可能性が高いのに対し、ほかの2×2間の例はB類である。③側柱建物と高床倉庫の双方にA類とB類の構造があり、それぞれ建物の規模に対応することは、掘立柱建物の建設の技術に、規模に応じた二通りの建て方が存在したことを暗示する。④C類は規模の大小ではなく、簡易的な用途の建物とみてよい。

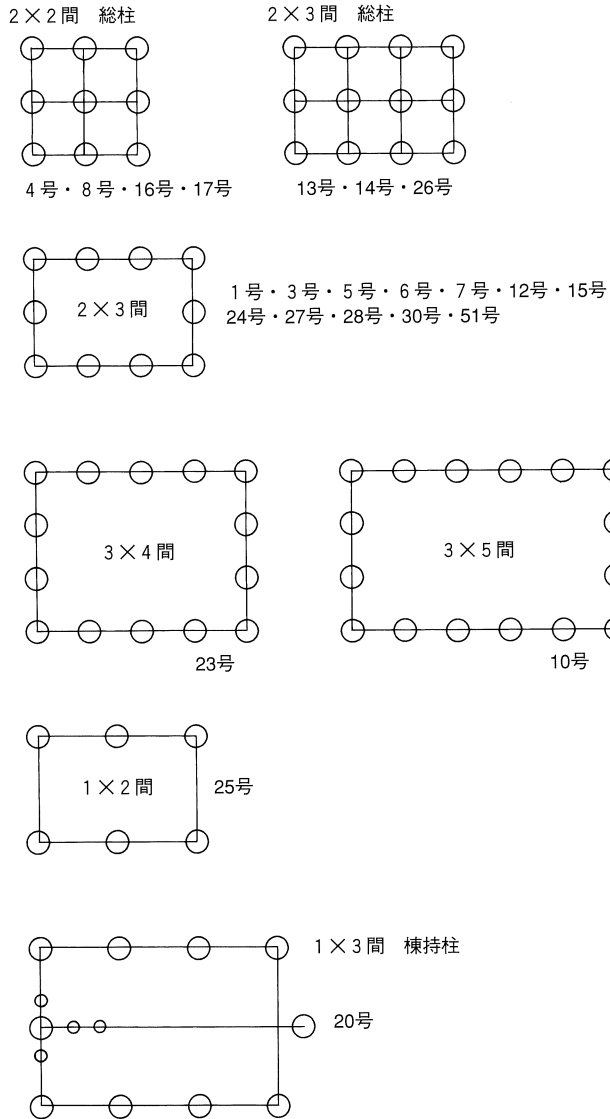
柱穴配置(第2図)

柱穴の平面配置 掘立柱建物の平面形式による分類である。まず総柱掘立柱建物には2×2間と2×3間の二種類があり、側柱建物には2×3間が大多数で、1×2間、3×4間と3×5間の例が一例ずつある。他に周溝建物の20号掘立柱建物は1×3間に棟持柱を配する特殊な建物である。以下床面積と関連させて建物の性格を検討する。

高床倉庫 2×2間総柱の掘立柱建物は床面積小型規模の高床倉庫とみてよく、柱穴の構造はB類に対応する。2×3間総柱の掘立柱建物も床面積中型規模の高床倉庫と考えられ、柱穴の構造はA類に対応する可能性が高い。

側柱建物 2×3間の側柱建物は床面積小型と中型規模の掘立柱建物の大部分を占め、のちに見るように堅穴建物の床面積の小型と中型に対応するので、通常の居住用の掘立柱建物であると考えられる。柱穴の構造は小型規模はB類がほとんどで、中型規模になるとA類が多くなる。3×4間の側柱建物は23号掘立柱建物のみで床面積は大型規模であるが、堅穴建物のなかにも同規模の床面積の例があり、居住用とは異なる建物と考える必要はない。ところが床面積が広いにも関わらず柱穴の構造はB類である。なお1×2間の唯一例である25号掘立柱建物は、床面積は最小だが小型規模の範囲に含まれ、対応する規模の堅穴建物も多いので、やはり居住用と考えられる。柱穴の構造はB類であった。

10 建物 以上、掘立柱建物のうち倉庫と居住用の建物と考えられるものを見てきたのであるが、東原C区で発見された3×5間の掘立柱建物である10号掘立柱建物のみは、床面積が飛び離れて広く特大型に分類され、柱穴の構造もA類である。もちろん郡衙などに建てられる官衙的な掘立柱建物の規模や構造に比べれば小さなものだが、その規模に対応する床面積をもつ堅穴建物の例はないので、居住用だとしても一世帯規模のものではないであろう。また桁行5間以上の掘立柱建物はそれ以下の建物と比べて構造と格の違いが歴然としているという指摘(註2)もあり、今のところ特殊な用途の建物と考えておきたい。ところで**庇付**の掘立柱建物としては21号掘立柱建物と29号掘立柱建物があるが、後者は柱穴の構造がC類であるのでやや不安が残るが、前者は柱間寸法が広くおそらく桁行3間以上で、床面積は大型の規模になると推定される。おそらく東原C区の10建物に対応する野



第2図 柱穴配置による分類

の21号掘立柱建物は、もともと居住用とは異なる性格の掘立柱建物であろう。⑤1×3間棟持柱の20号掘立柱建物は、祭祀施設である。

基本寸法 (第3図)

掘立柱建物の柱穴間の距離を測ってみると、柱間寸法の規格には基本的に二種類があることがわかる。第3図左のように4本の柱穴配置が正方形となるⅠ類と、長方形となるⅡ類である。これは当たり前だが、竪穴建物の柱穴配置がⅡ類にあたるので、竪穴建物と掘立柱建物の建築技術に共通するものがあるのではないかと考えたからである。Ⅱ類のうち桁行方向が長い場合をⅡa類としタテナガ長方形と称し、梁行方向に長い場合をⅡb類としヨコナガ長方形と称した。

Ⅰ類は3・6・28・30・33・51号掘立柱建物が相当する。側柱建物のみで、床面積が小型と中型規模の掘立柱建物に一定数存在する。2×2間の総柱建物の中にⅠ類がないことは意外であった。

Ⅱa類は1・2・4・7・8・9・10・16・17・23・27・32・52号掘立柱建物が相当する。2×2間の高床倉庫はすべて含まれる。なお2号竪穴建物の柱穴配置を、カマドの面を梁間とみなすとⅡa類となる。

Ⅱb類は5・12・20・24・25・26・53号掘立柱建物が相当する。

間Ⅰ区を中心施設のひとつと推定される。したがって居住用ではない可能性が高い。

最後に1×3間に棟持柱を配する20号掘立柱建物であるが、本文で述べたとおり、周溝がめぐり、内部の3分の2をしめる大規模な土坑をともない、入口が1カ所に限られる特殊な建物である。床面積も柱が少ないわりには大型の規模にあたり、祭祀施設と呼んでよい建物である。文献資料では「社」と表現されるものにあたる可能性もあるが、建物群の消滅と同時に廃絶したことが明らかであるので、移転した可能性が高い。

以上の検討の結果、次の点を指摘しよう。①2×2間総柱と2×3間総柱の掘立柱建物は高床倉庫であるが、規模と柱穴の構造に違いがある。②1×2間、2×3間の側柱建物は、竪穴建物同様本来そこで日常生活を送る居住用目的の建物である。規模の違いはおそらく生活する世帯の規模の違いを反映しているであろう。③3×4間の大型の規模の側柱建物についても、対応する規模の竪穴建物があるので、居住用目的と考えられる。④3×5間の側柱建物である10号掘立柱建物と東庇

棟持柱建物

「社」

ま と め

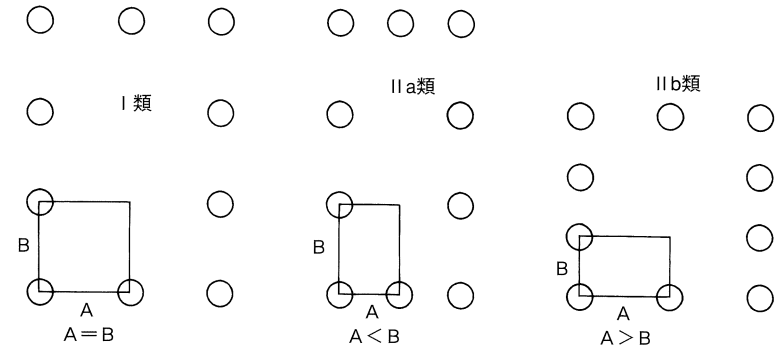
Ⅰ 類

Ⅱ a 類

Ⅱ b 類

ま と め

はじめはA類の柱穴構造または大規模な掘立柱建物とI類との対応、その逆にB類の柱穴構造または小規模な掘立柱建物とII類との対応があり得るのではないかという予断をもって臨んだが、見事に裏切られた。そうはな



第3図 基本寸法による分類

らないのである。床面積が大型や特大型になる掘立柱建物は逆にすべてII類であった。少なくとも指摘できるのは、①2×2間の小型の高床倉庫はすべてII類にあたり、柱穴の構造もすべてB類である。②小型高床倉庫の柱穴配置は、4本柱の竪穴建物の柱穴の配置と一致する可能性がある。

床面積 (第4図右)

掘立柱建物の柱穴の心心距離を計測して床面積をはじき出した。それを縦に並べると、高床倉庫が2群、側柱建物が4群に別れることが判明した。

高 床 倉 庫

総柱掘立柱建物の高床倉庫は、床面積8～9㎡に4棟が集中し、いずれも2×2間で、柱穴の構造はB類と、寸法はII類と対応する。これを倉小型の規模とする。つぎに2×3間の26号掘立柱建物1棟しか例がないが、床面積12㎡のあたりを倉中型の規模とする。

側 柱 建 物

側柱建物は、床面積14㎡を中心に11～17㎡に集中する10棟を小型の規模とする。ほとんどが2×3間の建物で、1×2間の25建物も含まれる。柱穴の構造はほとんどがB類で、C類の9建物も含まれる。次の中型の規模は21～25㎡に分布する5棟で、すべて2×3間の建物である。この規模から上では柱穴の構造はA類が多くなる。大型の規模は3×4間の23号掘立柱建物の32㎡のみである。最後に10号掘立柱建物は床面積43㎡で、この1棟を特大型とする。

なお棟持柱建物の20号掘立柱建物は床面積31㎡で、大型の規模に対応する。

ま と め

以上から以下の諸点を指摘しうる。①倉は小型も中型も床面積としては小規模なものである。②居住用の側柱建物には小型・中型・大型の3クラスがあるが、大半は小型と中型で、2×3間の形式である。③3×5間の10号掘立柱建物は群を抜いて広い。④祭祀施設である20号掘立柱建物は大型の規模に対応する。

《注および参考文献》

註1. 東原地区発掘中に現地を視察された松村恵司氏(当時文化庁)から、掘立柱建物のコーナーの柱が深くなる傾向がある旨の助言をうけ、調査中特に注意しながら掘り上げたものである。

註2. 松村恵司「大型建物の系譜と性格の変遷」『公開セミナー古代の大型建物跡記録集』かながわ考古学財団1999

② 竪穴建物跡 (第2表)

今回の調査では15棟の竪穴建物が発見されている。調査に失敗した30号土坑をいれれば16棟になる。拡張や造り直しの例が2・5号竪穴建物で知られているので、実際の検討例は18例である。その場合は新古で表現する。竪穴建物の竪穴部分の平面形はいずれも方形あるいは長方形である。特異な地床炉と考えられる1号竪穴建物を除けば、例外なくカマドを付設する。そこで炊飯をとまなう日常生活がおこなわれていたことは、床面積に大小があっても標準規模のカマドをひとつだけ造りつける点でまったく同一であることから、容易に推定しうる。以下いくつかの角度から竪穴建物を検討する。

方 形 竪 穴

柱穴配置 (第5図)

竪穴建物の柱穴配置の平面形式は大きく3群に分けることができる。4本柱穴をA類、柱穴のない無柱穴をB類、2本柱をC類とする。

A1類は方形で4本柱の竪穴建物で、2号竪穴建物1例である。柱間寸法は掘立柱建物でいうII類にあたる。

A2類は方形変則2本柱の4号竪穴建物1例である。C類としなかったのは、柱穴の位置がカマド側に偏り、本来4本柱の構造であったと考えられるからである。A類の変則例とみる。

B類は方形無柱穴の竪穴建物で、上野第1遺跡の大半の竪穴建物が該当する。1・3・5古・6・7・8・9・10・12・13・14・15号竪穴建物の12例である。床面積とは無関係で、小型の規模の竪穴建物に限られているわけではなく、最大規模の8号竪穴建物もB類である。すなわち大中小の規模にそれぞれ対応できるような建築様式として無柱穴構造の建屋が成立していたと考えてよい。

C類は長方形2本柱であるが、通常の二本柱ではない。5新・11号竪穴建物の2例が知られ、30号土坑も可能性が高い。いずれも柱間寸法が3mを超え、壁際に柱を寄せている。おそらく無柱穴構造に棟持柱が加えられた上屋構造で、入母屋造りであったと考えられる。

以上から次の点を指摘する。①柱穴の数と床面積は比例しない。②B類無柱穴の竪穴建物は、ひ

A 1 類

A 2 類

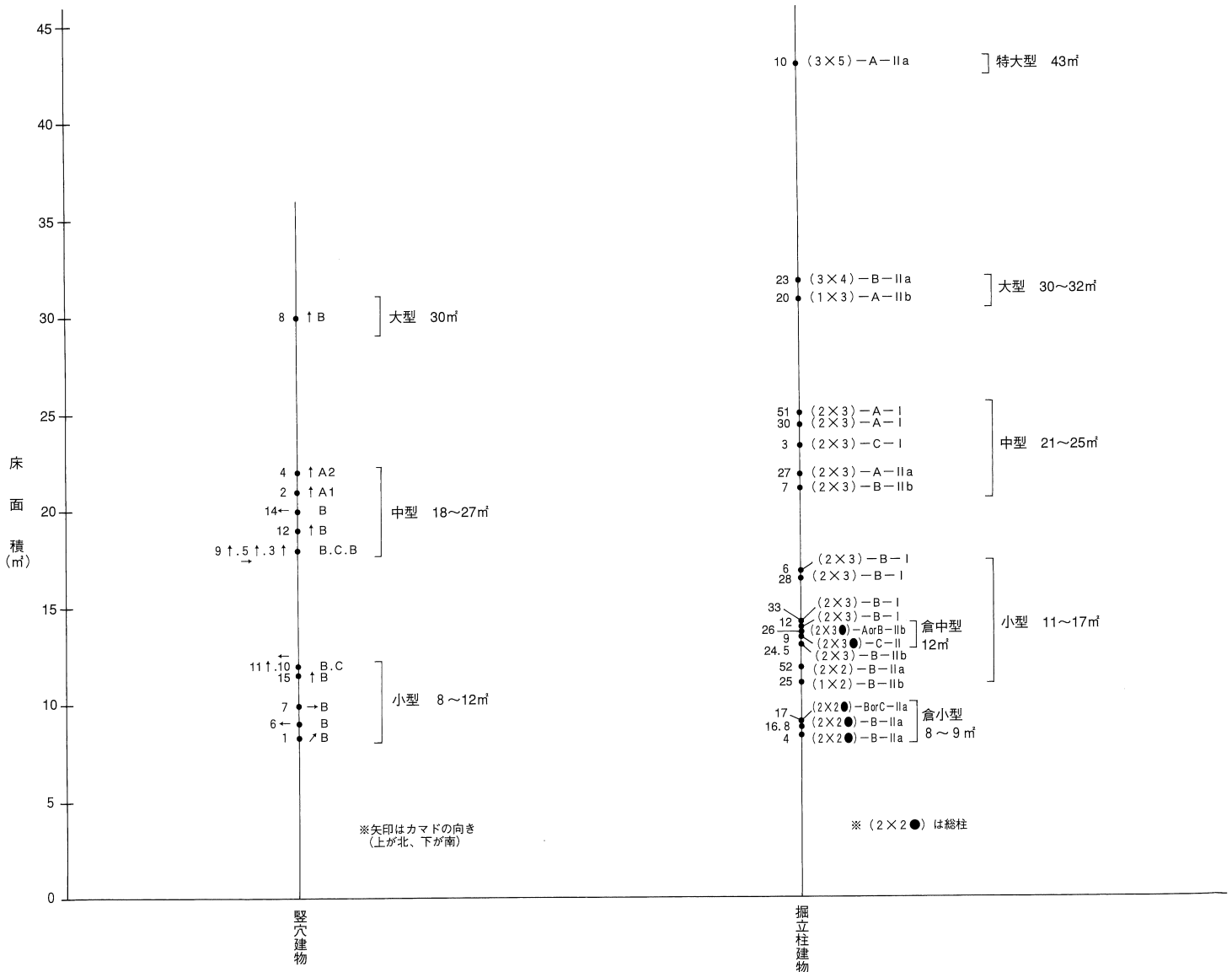
B 類

C 類

入母屋造り

ま と め

第4図 竪穴建物跡と掘立柱建物跡の床面積



とつ建築様式として成立しているの、床面積の大小に対応する。③C類二本柱は、上屋の構造が異なる。④A類・B類・C類は規模の大小とは無関係で、建築様式の異なる3種類の竪穴建物と考えられる。

カマドの位置

長方形の竪穴の場合、長辺側の中央付近にカマドを造るのが一般的である。例外は1号竪穴建物の地床炉で、竪穴のコーナーに造られている。

北カマド

カマドを竪穴の北壁に造り付ける北カマドは、2古・2新・3・4・5古・8・9・11・12・15号竪穴建物の

東カマド

10例である。竪穴の東壁に造り付ける東カマドが5新・7号竪穴建物と30号土坑の3例である。竪穴の西壁に造

西カマド

り付ける西カマドが6・10・13・14号竪穴建物の4例である。以上ですべてである。南にカマドを設ける例はなく、おそらく風向きと日当たりの関係から南カマドは避けられたと見られる。

竪穴建物の規模との関係を調べると、中型規模以上では北カマドが圧倒的なのに対し、小型の規模の竪穴建物には東西にカマドを造る例が多いので、北カマドの傾向はより大きな竪穴建物ほど貫徹することがわかる。

切り合いと方向

ところで同じ場所に重複して建てられ、切り合う場合にはカマドの方向を同じにする傾向がある。切り合いの例では、野間I区の9号→8号→15号竪穴建物の場合は北カマドを踏襲する。12号→11号竪穴建物の場合も北カマドである。切り合い関係にはないが、ごく近くに隣接して同時存在とは考えられない例では、東原C区の2号と3号竪穴建物の場合がやはり北カマド、野間E区の13号と14号竪穴建物が西カマドである。あるいは5号竪穴建物と30号土坑も東カマドでこの例にあげられるかもしれない。いっぽう切り合うことなく周囲に、接近する竪穴建物がない場合には、カマドの方向は一定しない。4号竪穴建物が北カマド、6号竪穴建物が西カマド、7号竪穴建物が東カマド、10号竪穴建物が西カマドである。

ま と め

以上をまとめると、①竪穴建物のカマドの方向は北カマドが原則で、南カマドにはしない。②東西に設ける例が小型規模の竪穴建物に多い。③時期を異にしながらも、同じ場所に竪穴建物を建設する場合には、カマドの方向を前の住居と同じにする傾向がある。その場合北カマドが踏襲されることが多い。④してみるとカマドの方向は自然条件や居住者の好みで決まるのではなく、最初のその場所に建てられた竪穴建物のカマドの方向に規制されている。⑤しかし単独で建設される場合にはカマドの方向に原則はない。

カマドの構造 (第6図)

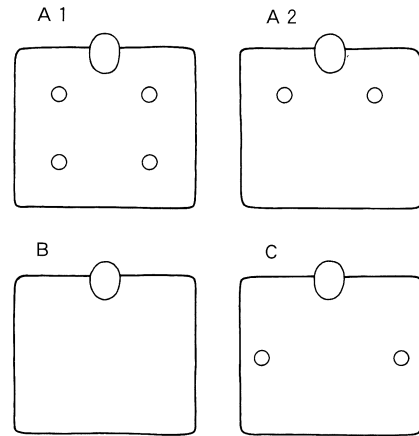
竪穴建物廃絶時にほとんどカマド祭祀がおこなわれているので、カマドの上部構造は破壊されている。さらに奈良時代の生活面自体は畝地耕作や水田化による削平を蒙っている。そのためカマドの構造を復元する手がかりは乏しい。そのなかで比較的保存状態のよい7号竪穴建物と8号竪穴建物例をもとにカマドの構造を復元してみよう。

7 竪穴例

まず壁面を半円形に削りこみ、燃焼部となる基底部分を皿状に掘り凹める。袖は竪穴掘削時にその基礎を掘り残して基礎部分とする例が8号竪穴建物と12号竪穴建物で知られているが、ほかの例はすべて袖を床から構築するようである。なお2号竪穴建物ではカマド構築以前に床下の土を入れ替えてカマドの基礎構造とする床下土坑が知られている。

煙 道

次に袖と天井および煙道を構築するわけであるが、煙道は奥壁の上部から斜め上方に向かうように構築されていたことが7号竪穴建物で観察されている。燃焼部の内部には中央に必ず1ヵ所の円

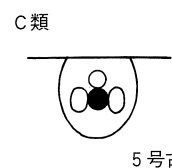
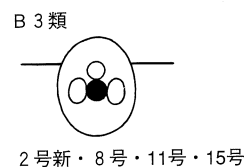
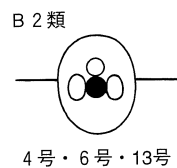
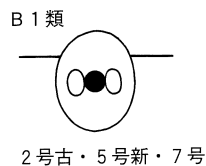
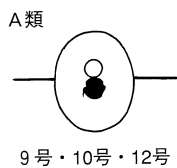


第5図 竪穴建物跡の分類

形の被熱面が残され、多くの場合その被熱面を挟むように長円形の掘形が両側に見つかる。また被熱面の奥にはやはり小さな円形の掘形が1カ所見つかる例が多い。前者はカマド側石を立てるための掘形で、後者は土器の底部を支える支石を立てるための掘形と考えるとよい。

ところでそのカマド側石の使用法であるが、興味深い事実が9号竪穴建物例で明らかになった。調査当初側石の掘形と袖部の位置関係が明らかでなく、側石掘形は袖部の中心に位置し、側石はカマドの袖の内部にぬり込む、いわば芯として使うカマドの構築材であるという思い込みがあり、そのような目で調査をすすめたが、地山掘り残しの袖部が残る9号竪穴建物のカマドの調査によって考えを改めた。すなわち側石掘形は袖の部分ではなく、被熱した燃焼部側面の内側に掘られていたのである。側石は燃焼部の側面に、石材の片面を露出するように立てられていたと考えるとよい。そうするとカマド側石の用途も構築材ではなく、カマドの火力を外に逃げないようにしたり、火を落としたあとも温度を保ったり熱効率をよくする効果をねらった保温材として利用されたと考えられる。こう考えるとカマドの特徴の多くを説明できる。被熱面と側石掘形がほとんど接するようにつかる例が多いこと。側石石材の激しい被熱による赤変と劣化。さらに石材が安山岩の粒子の粗い板状の石に限られることなどが、無理なく理解される。

さて最後に土器をかける穴の位置について考えてみる。支石掘形の位置は被熱面の中央奥に位置する例がほとんどで、側石掘形からも等距離の位置にある。火力の集中する被熱面の直上ではないことに注目すると、被熱面直上と支石直上の2カ所に土器をかける穴があり、それは炊き口からみて縦に並んでいたものと推定される。



以上でカマドの復元をおえるが、カマドに関連する施設としてカマドと同時に掘られた円形のあまり深くない小土坑が、カマドの右脇に存在する例が、4・6・8・12号竪穴建物で知られている。性格は不明であるがカマドの構築と同時に掘られ、廃絶時まで使われていたことが調査で明らかになったので、カマドに関係することは疑いない。

次にそのカマド平面形式を分類しておきたい。まず側石掘形の有無でA・B類の2種類に大きく分類される。B類は支石掘形の有無と、竪穴壁面との位置関係でさらに細分した。

A類は側石の掘形がないカマドで、支石掘形のある10号竪穴建物とそれのない9・12号竪穴建物にわかれた3例である。すべて無柱穴のB類竪穴建物である。

B類はカマドの奥壁が竪穴の壁から外に突出し、側石の掘形が左右に認められるもの。支石掘形の無い例をB1類とし、支石掘形のあるもののうち、壁面を大きく掘り込み被熱面の位置が壁面ラインに近いものをB2類、わずかに突出し被熱面が手前にくるタイプをB3類とした。

なおC類としてカマドを竪穴壁面の内部におさめ外に突出しないものを分類した。5号竪穴建物の改修以前のカマドがこれにあたるが、竪穴建物改修時に拡張された可能性があり、意味のあるものではない。このほかに1号竪穴建物では地床炉として報告した炉がある。あるいは別様式のカマドである可能性も残る。

以上のカマドの検討から以下の点が指摘し得る。①カマドの構造は、燃焼部の側面に側石を1枚ずつ両側にはめ込んで、熱効率をよくする造りである。②土器の受け口を縦に2個配置する例が推定でき、その場合手前が強火、奥の支石の上が弱火と見られる。③構築方法には地山削り

燃 焼 部

側石の使用法

保 温 材

縦 2 穴

右脇の小土坑

平 面 形

A 類

B 類

C 類

ま と め

第6図 カマドの分類

出しを袖に利用するタイプと、床面から築き上げるタイプがある。④カマドの規模はほとんど変わらない。カマドは竪穴建物の床面積や柱穴の配置とは無関係である。⑤つまり一単位の居住生活にとっての必需品として、大規模な竪穴建物にも小規模な竪穴建物にも必ずひとつ、標準的なカマドが備わっている。

カマド祭祀

竪穴建物廃絶時の移転の儀礼のひとつとして、ほとんどの竪穴建物でカマド祭祀がおこなわれた痕跡を観察している。その具体的な状況を最大公約数的に再現すると、次のようになる。

カマド破壊 まずカマドを破壊する。その際カマド側石の石材は再利用のために抜き取られ、上部構造物はきれいに取り除かれ、燃焼部の灰や炭も清掃される。次に精製胎土の土師器坏や壺と通常胎土の土師器甕や鉢を用いた煮炊きをともなう飲食儀礼がおこなわれる。その際塩が用いられたことが製塩土器の伴出から判明している。儀礼の場所はおそらく竪穴の内部ではなく、周囲の別な場所である。

飲食儀礼

塩の使用 祭祀に使用した土器を破砕して、その破片の半分ほどを破壊したカマドの内部に焼土や灰とともに埋め置く。そのときの焼土や灰炭などは飲食儀礼の時に排出したものであろう。儀礼の遺物をカマドに返す際にカマドの跡にピットを穿ったり、周囲に小土坑を掘って遺物を廃棄する例も多い。またその中に土器片だけでなく、カマド側石の石材を廃棄する例もある。最後にその上に白粘土などを混ぜた土で被覆して祭祀を終了する。

土器片埋置

白粘土

以上が調査から復元される竪穴廃絶時の儀礼である。この習俗をカマド祭祀と呼ぼう。この一連の行為の過程を復元してみると、祭祀の習俗にはやや違いがある。特に特徴的な例をまとめると、まず破壊したカマドに土器を埋置する前にピットを穿つ例が、8号竪穴建物と12号竪穴建物で知られている。この2例はそれだけでなく、袖を削りだす点と右脇に小土坑をともなう点も一致している。まったく同一のカマド祭祀がおこなわれた竪穴建物といえる。

ピット

側石埋置 次にカマドを埋めた土の中に土器だけでなくカマド側石の破片を多量に混ぜる例が5号竪穴建物と11号竪穴建物で知られている。この2例は変則二本柱穴のC類竪穴建物であるのみならず、カマド祭祀に廃棄されたカマド石材が接合して、5号竪穴建物から11号竪穴建物へとカマド石材が再利用されたことが判明している。カマド祭祀の習俗もまた伝えられたと推定される。

祭祀の継承

側石残置 最後に祭祀時に土器片と石材片だけでなくカマド側石の本体そのものを破壊したカマドに残す例が11号竪穴建物と12号竪穴建物で知られている。両者は同じ北カマドで、切り合い関係から12号竪穴建物から11号竪穴建物に推移したことが判明している。ここでも祭祀の習俗が継承されていると考えられる。ところでそうすると11号竪穴建物は、5号竪穴建物と12号竪穴建物の両者の習俗をあわせて継承したことになる。きわめて興味深い。

祭祀の土器 さてカマド祭祀に使われた土器は、埋置された土器片の器種構成から、精製胎土の土師器坏や壺と通常胎土の土師器甕や鉢さらに製塩土器に限られていたと考えられる。しかし当時の日常土器としては須恵器が多用されているのであるから、おそらくカマド祭祀に用いる土器は赤色や白色の土器でないといけないという習慣が存在したものと推定される。もちろんこの習慣が厳密に守られていたとは限らない。事実10号竪穴建物では廃絶時に壁面に立て掛けられた須恵器坏蓋が出土している。その坏は口縁部を欠いて、カマドとは離れた位置に置かれていた。おそらく儀礼には須恵器が使われることが方便として許されていたとしても、それをカマドを被覆する際に「供える」ことははばかられたと考えられる。

須恵器の排除

儀礼の場所 ところでカマド祭祀となる竪穴建物廃絶時の儀礼はどこでおこなわれたのだろうか。野間H区の周溝建物の周溝や19号土坑・30号土坑では、内部からカマド石材や土器片・炭・焼土等が多量に廃棄されており、破壊されたカマドの残骸と推定される。さらにそこに廃棄された遺物のなかには相互に接合したり、離れた竪穴建物と接合した土器やカマド石材が多かった。おそらく祭祀施設であ

る周溝建物の北側にあたる野間H区周辺で、廃絶儀礼の一過程がおこなわれた可能性を指摘できる。

以上をまとめると、①ほとんどの竪穴建物でカマド祭祀がおこなわれている。②祭祀の儀礼には土師器の坏と甕に製塩土器が使われる。③祭祀の習俗には特徴的なものがある。④その祭祀習俗は継承される。⑤祭祀の儀礼は竪穴外でおこなわれ、H区の周溝建物付近と推定される。

ま と め

竪穴の埋没状態

竪穴建物は廃絶後、竪穴跡として地表に残る。引き続きそこに生活するものにとって残された竪穴跡を、どうするかは様々な場合がある。上野第1遺跡では以下の3つのパターンが観察されている。

竪穴の凹み

ア、廃棄土坑化 一般的に観察できるのは、まず壁ぎわに斜め堆積が始まり、次第に埋没したことを示すレンズ状堆積の層序である。このような場合の竪穴埋土は総じてやわらかい。その埋没の過程にともなって周辺から様々な廃棄物が捨てられる。焼土や炭・土器片が埋まり込む。このように自然埋没の過程に便乗して人間が廃棄物の処理に竪穴跡を利用することがおこなわれる。以上をゴミ捨て穴に転用されて廃棄土坑化したと表現する。この例は1・4・7・8・9・11・15号竪穴建物で観察された。その中でも4・5号竪穴建物では大量の祭祀に用いられた遺物が廃棄されて埋没している。短期間の廃棄土坑化である。

廃棄土坑化

イ、埋め戻し 土層の観察から基盤層の土が多くブロック状に入り、ときには盛り上がるような層序が認められるもので、おそらく廃絶後周堤を掘り崩して埋め戻したと考えられる例である。しかし土層自体は堅くなく締まっていない。6号竪穴建物と10号竪穴建物で観察された。

埋め戻し

ウ、整地 埋め戻すのみならず埋土を固めたと考えられる層序で、水平堆積の状態が観察され、しかも非常に締まっている。2・3・12・14号竪穴建物で観察された。この場合2号竪穴建物のように自然崩壊の斜め堆積が一定程度進行した段階に整地した例と、3・12・14号竪穴建物のように斜め堆積がほとんどなくカマド祭祀の被覆の直後からおこなわれた例があり、後者は立ち退きがおこなわれたともいえる状態である。本文のなかでは強制廃絶と表現した。

整地

強制廃絶

ところで整地された竪穴建物の場合それなりの理由があると考えねばならない。事実2・3・12号竪穴建物の場合は、その上に掘立柱建物が建設されている。12号竪穴建物はおそらく掘立柱建物群の南に広がる広場として整備されたからであると推定される。

以上をまとめると、①廃絶後の竪穴建物は廃棄土坑化する。②その場合通常長時間使われる。③祭祀遺物など大量の一括廃棄で一気に埋まることもある。④なんらかの事情で埋め戻される場合がある。⑤掘立柱建物を立てたり、広場として整備するために、埋め戻しながら整地されることがある。⑥整地の場合、強制立ち退きがおこなわれた可能性がある。

ま と め

床面積 (第4図左)

竪穴建物底面を計測して床面積をはじき出した。カマド部分は壁を直線でむすんで計測した。その結果を縦に並べると、竪穴建物は3群にわかれることが判明した。

床面積8~12㎡に集中する6棟を小型の規模とする。ほとんどが無柱穴構造のB類竪穴建物で、カマドの方向も様々である。次の中型の規模は18~22㎡に分布する7棟で、無柱穴構造のB類竪穴建物のみならず4本柱のA類や変則二本柱のC類もある。カマドの方向はほとんど北カマドである。最後に8号竪穴建物は床面積30㎡で、この1棟を大型の規模とする。やはりB類竪穴建物で北カマドであった。

小 型

中 型

大 型

以上から以下の諸点を指摘しうる。①竪穴建物は小型・中型・大型の床面積にわかれる。②床面積の広狭に関わらず、標準的なカマドが付設されている。最小の1号竪穴建物にも炉がつき、特に床面積が小さいわけではない。③したがって、いずれの竪穴建物も特殊な用途のものではなく一世帯の居住用である。④居住用の竪穴建物の大半は小型と中型であり、柱穴の構造とは無関係である。

ま と め

③ 掘立柱建物と竪穴建物（第4図）

共通性

さてここで異なる建築様式である掘立柱建物と竪穴建物の共通性について触れておきたい。

床面積

まず第一は、床面積の分布がほぼ同一であることである。総柱掘立柱建物の高床倉庫と棟持柱建物の20号掘立柱建物という明らかに性格の異なる掘立柱建物を除くと、側柱建物は小型・中型・大型と特大型に、竪穴建物は小型・中型・大型にわかれることはすでに指摘した。特大型の10号掘立柱建物は3×5間の形式で、一世帯の日常生活の居住用とは考えにくいので別にすると、大中小の3種類である。どうして両者は三つに別れるのであろうか。居住する人数に正確に比例するならば、このような分布の集中は起こらない。おそらく掘立柱建物なり竪穴建物なりに、規模の大まかな規格が存在しているのである。それが大中小の床面積としてあらわれると考えたい。そうすると大型の竪穴建物もカマドをもつ居住用であったように、側柱建物の大型まではおそらく本来居住を目的とした掘立柱建物であったと考えられる。

三分類

居住用の規格

第二に掘立柱建物と竪穴建物の床面積を小型規模同士、中型規模同士と比較していくと、掘立柱建物の方が3～4㎡ずつ必ず広いことに気が付く。これはどうしてだろうか。竪穴建物の床面積を測る際に残された竪穴部分のみを対象にしているからであると考えられる。竪穴建物の場合、壁と屋根の間に空間を残し、棚などの収納施設を造る例が知られている。反対に掘立柱建物はそのような収納の空間をすべて建物内の床面空間で補うために、実際に使える床面はひとまわり小さいものと推定される。つまり竪穴建物の床面積は実はひとまわり広いのである。そう考えてよければ同規模の床面積を比較して掘立柱建物が必ずひとまわり大きくなるのはなぜか、という疑問は解消される。

規模の法則

そうすると、掘立柱建物と竪穴建物の小型・中型・大型という床面積規模の3種は、より正確に対応することになる。掘立柱建物と竪穴建物はまったく異なる建築様式であるが、本来一世帯の生活が営まれる場合には、同一規模の世帯であれば、ほぼ同一の床面積規模の掘立柱建物ないし竪穴建物が建設されるという、規模の法則があると考えなければならない。

もちろん規模の法則に当てはまるからといって、掘立柱建物のすべてが居住用に実際に使われたといえるわけではない。たとえば野間E区の27・28号掘立柱建物は倉庫群のなかにあり、周囲に廃棄土坑をともなっていないので、実際に一世帯の住人が居住したかどうか疑わしい。しかし掘立柱建物としては居住用の規格なのである。

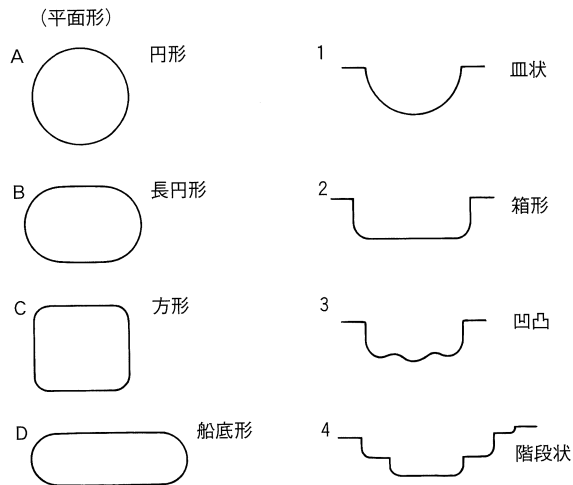
まとめ

以上をまとめると、①特殊な性格をもち用途が異なると推定される掘立柱建物を除くと、側柱建物と竪穴建物はすべて、一世帯の日常生活がおこなわれることを目的とした建物である。②掘立柱建物の小型・中型・大型の3種と竪穴建物の小型・中型・大型の3種はかなり正確に対応する。言い換えれば規模の法則を掘立柱建物と竪穴建物が共有する。③居住用建物の規格として掘立柱建物と竪穴建物に共通する広さが三種類あることを、奈良時代の上野第1遺跡の住人は意識していた。④しかし居住用に実際に使われたかは別問題である。

④ 土坑（第3表、第7図）

用途追求

土坑とは便利なことばである。性格の不明な穴はすべて土坑である。以下は上野第1遺跡で発見された土坑を分類し、その用途を少しでもわかるようにと、考えたものである。まず一般的にいて、無目的に人が穴を掘ることはないという前提から出発する。発掘調査では土坑の中から廃棄物である土器や石・焼土や骨などの廃棄物が出土する。しかしだからといってその廃棄物を捨てるためだけに掘られた穴は、実は数少ない。つまり厳密な意味での廃棄土坑はまれである。実際には別の目的で掘られた穴が用済みとなって廃棄土坑化したり、または始めから一石二鳥をねらって廃棄土坑にも使うことを視野にいれて掘られた場合もある。そこでそれらを弁別するために以下の分類をおこなった。



第7図 土坑の分類

分類基準1 平面形

- A 類円形 掘形がおおよそ円形になるもの。
- B 類長円形 掘形がおおよそ長円形になるもの。
- C 類方形 掘形がおおよそ方形になるもの。長方形も含む。
- D 類船底形 非常に長い長円形になるが、中央部が膨らむ。
- E 類不定形 分類不能のいわゆる難しい形態のもの。
- F 類 そのほか溝状など

平面形

分類基準2 底面あるいは断面形態

- 1 類皿状あるいは半円形 底面をし

底面形状

っかりと造っていない形態である。

- 2 類平坦箱形 これは底面をしっかりと造り出したものである。
- 3 類凸凹不定形 いわゆる掘りっぱなしのような形態。
- 4 類階段状 2段あるいは3段に、一部あるいは全部がなっているもの。

この基準を用いて奈良時代の土坑がどれにあたるかを検討した。なお機能と形態が明確な土坑を参考のために加え、野間M区の水田下土坑群は省略した。なお括弧内の数字は長さで、規模の目安として表示した。

A 3 類円形凸凹 野間G区23号土坑 (193)

B 1 類長円形皿状 典型的な廃棄土坑の形態であるが、掘立柱建物に付設されたものが多く、それは比較的大型である。例は東原A区1号土坑 (224)、東原B区4号土坑 (300)、東原C区9号土坑 (185)、東原D区15号土坑 (121+)、野間E区53号土坑 (145)、平原B区203号土坑 (310) である。おそらく土坑の大小は隣接する掘立柱建物の規模に関係があるとみられるが、検討はしていない。

野間G区25号土坑 (115)、野間G区60号土坑 (100)、野間G区61号土坑 (93)、野間H区26号土坑 (85) などの小型の土坑はほとんどが、野間H・G区の祭祀建物である周溝建物の北側で見つかることが多い。

B 2 類長円形箱形 断面形が箱形なのは調査時の掘りすぎの可能性が高く、B 1 類に含めてよい。野間G区19号土坑 (450)、野間E区52号土坑 (350)、野間G区20号土坑 (107)、野間G区24号土坑 (94) などである。

B 3 類長円形凸凹 廃棄土坑として掘られた可能性が高く比較的大型である。東原C区13号土坑 (144)、野間E区54号土坑 (170)。

B 4 類長円形階段状 土取りを目的にして掘られた可能性が高く、大型でかつ深いものが多い。東原C区10号土坑 (294)、野間I区102号土坑 (170)、野間J区38号土坑 (263)。

C 2 類方形箱形 明らかに用途の明確な土坑である。野間G区30号土坑 (435-竪穴建物)、野間J区40号土坑 (170-炉)

C 4 類方形階段状 土取りを目的にして掘られた可能性が高く、大型である。東原B区3号土坑 (195)。

D 1 類船底形半円形 特異な形態で、野間H・G区の祭祀施設である周溝建物の北側で見つ

A 3 類

B 1 類

B 2 類

B 3 類

B 4 類

C 2 区

C 4 類

D 1 類

ている。おそらく祭祀に関わって掘られたものと考えられる。規模はかなり大きなものである。野間G区62号土坑（200+）、野間G区28号土坑（172）、野間H区31号土坑（416）。

- E 1 類 E 1 類不定形皿状 野間L区44号土坑（236—須恵器埋納坑）。平原A区201号土坑（370）はB 1 類としてもよく廃棄土坑であろう。
- E 2 類 E 2 類不定形箱形 断面形が箱形なのは調査時の掘りすぎの可能性が高く、E 1 類に含めてよい。野間E区55号土坑（230）、野間G区22号土坑（220）。
- E 3 類 E 3 類不定形凸凹 東原C区 8号土坑（285）・14号土坑（520）、野間L区45号土坑（307—粘土採掘坑）があり、おそらく当初の目的は土取りである。

上野第1遺跡の土坑は以上のなかにすべて分類できる。本文ではA 1 類・C 4 類等と表現した。方形箱形のは当然ながら堅穴建物など明確な用途をもって計画的に掘られていることが明瞭で、4 類階段状は多くの場合建物用の壁土などの材料を採取する土取り穴と考えられる。底面が皿状になるものは多くは、おそらく凸凹なものを発掘時に綺麗に掘りすぎた可能性が高いので、実際は凸凹であろう。廃棄土坑として使われているが、掘立柱建物の周囲にひとつだけ存在する場合が多く、切り合いがないのが特徴である。廃棄土坑ならばくりかえし掘られてもおかしくないのに、その例がないので、掘立柱建物建設時の土取り穴の可能性が高い。B 1 類小型や船底形の土坑は周溝建物の北側に集中する傾向が高く、祭祀用に掘られた可能性が指摘できる。

ま と め 以上から、①土坑はかならずしも廃棄土坑として掘られたものではない。②別な目的で掘られ廃棄土坑に転用されるか、両者の目的をかねている。③4 類階段状のものは明確な土取り穴の可能性が高い。④掘立柱建物の近くに存在する底面皿状あるいは凸凹の土坑は土取り穴の可能性が高い。⑤方形箱形以外で、断面形が箱形の土坑は、調査時の間違いと疑ってみる必要がある。⑥野間H・G区には他の地区に分布しない形状の土坑が集中する。

廃棄土坑と掘立柱建物

建物まわりの土坑

掘立柱建物の周辺に廃棄土坑化した土坑が、発見されることが多い。先に指摘したようにこれらは多くの場合掘立柱建物建設時の土取り用とみられ、それが廃棄土坑に転用されたものと考えられる。そのような土坑は特に東原地区でめだつ。東原A区の3号掘立柱建物と1号土坑、東原C区の7号掘立柱建物と9・10号土坑、10号掘立柱建物と14・15号土坑などである。ところが堅穴建物の周辺にはあまりなく、高床倉庫の周辺にもほとんどない。おそらく周囲に土坑を掘る必要が堅穴建物と高床倉庫にはないからである。建物建設に必要な土は堅穴建物の場合、堅穴そのものを掘ることで満たされ、高床倉庫の場合は基本的に土を必要としないからであろう。おそらく通常の側柱建物を建設するには一定量の土を必要としたのであろう。東原C区の掘立柱建物が緩い斜面に立地することを考えれば、床を水平にするためにも必要であろうし、壁に使う土なども必要である。本来そのような土取り目的で掘られた可能性が最も高いと推定される。

土取り用

ところで以上のように東原C区の掘立柱建物群の周辺には土坑が数多く掘られているのに対し、野間I区掘立柱建物群の周辺にはほとんど掘られていない。それは掘立柱建物群の性格の違いに起因すると考えられる。一軒一軒のために土取り穴を掘る場合と、建物群すべての分を別な場所から供給した場合の違いである。

⑤ 道と水場と祭祀施設・・・および水田

三者の関係

道路状遺構と水場状遺構それに周溝建物のそれぞれの性格と内容は本文にゆずるとして、この三者が一連の施設として機能したことを確認しておきたい。道路状遺構が水場状遺構とセットであることは、道路状遺構が終わるところで水場状遺構が始まり、道路状遺構の南端を起点に水場状遺構が扇形に掘られていること、水場状遺構の手前で土坑列はやや屈折し、その東側に道路からの排水を処理すると推定される浅い溝が延びること。また土坑列の南端から水場状遺構に降りる段差は周

囲より浅く、きわめて自然に降りることができる。以上の諸点から同時に計画的に建設されたことは明らかである。

統一的配置

一方祭祀施設と推定した周溝建物は、出入口が水場状遺構を向くように建設されている。同時に出入口の前の目隠し塀が水場状遺構の側面と平行することから、水場状遺構を前提に建設されたことは明らかである。しかも本文で述べたように、水場状遺構は道路状遺構から進入できるのみならず、西側では段差が高い部分は階段状にして降りられるように工夫されており、おそらく周溝建物側にも開放されていたと考えられる。そうすると周溝建物はまさに水場に向かって建てられた湧水を信仰の対象にした祭祀施設と考えられる。

祭祀施設の位置

その場合上野第1遺跡の居住者の信仰をみつめたことは当然としても、道路自体は集落の外と連絡していると考えられるので、周溝建物が道路と水場を前提としている以上、道路を通して水場にやってくる外界の人々を特に意識した祭祀施設と考えざるをえない。

このほかに野間Ⅰ・Ⅱ区の19溝は、道路状遺構とは性格が異なり、集落内の道と評価される。すなわち、野間Ⅰ区の建物が集中する場所から、水田に最短で降りる道である。降りる手前に須恵器甕を破碎埋納した44号土坑が掘られ、しかも道の分岐が連続する。道を通過する際に容易に立ち寄れる位置である。水田を目的とする道に付属する祭祀施設とすれば、水田あるいは水を対象とした信仰に関わる祭祀施設と考えられる。それが最後に破碎されて廃棄されたのは、水田がなくなったからではなく、集落が移転するために道が不要になったからであると考えられる。

集落の道

祭祀坑

ところでその水田は、上野第1遺跡の建物群が建てられはじめた当初から存在していたものではないことは、水田下に土坑群があることから明らかである。湧水の周囲に祭祀施設などが整備されたすぐそばに水田を開くこともすぐわない。おそらく祭祀施設が移転したのちに開発されたものと考えられる。

水田

2-3 遺物各説

① 刻書石製品一権一

12号掘立柱建物の建物の柱穴掘形埋土中より出土したもので、一部が欠けておりその欠けた破片は出土しなかった。建築時に偶然混ざり込んだか、不要となって廃棄されたものである。したがって12建物を建設する際のもので、使用されていたのは12建物以前ということになる。ところで後にふれるように12建物は上野2期にあたり、そのころはこの付近は高床倉庫が建てられた倉庫地区であった。12建物はその管理施設的な位置にあたる。

12建物以前

さてこの石製品は重りとしての「権」とみるのが最も有力であり、吉村靖徳氏はこの石製品を錘＝分銅としての権をし、この上野第1遺跡例を氏の分類のⅡa-1類にあたりとされ、7世紀中葉から9世紀初頭の流行する型式のひとつとした(註)。

「権」

しかしなお問題をはらんでいる。すなわち上部の穿孔に頂上から側面に抜けるという特異な形状で、類例を知らない。この紐孔が上面から背面に穿たれている点に着目すれば、何かに着用する道具と想定することもできる。現在のところ、類品の存在する権＝重り説が最も有力と考えているが、やや疑問があり、確定できないでいる。類例の増加を待ちたい。

紐孔

字体については「豊馬豊馬」と読むのが有力だが「豊」の下半の字画が不明瞭で、解釈の余地を残している。「典二馬」のような別の読み方の可能性も残されている。

字体

《註および参考文献》

註. 吉村靖徳「権衡に関する一考察—福岡県出土権状製品の検討と課題—」『九州歴史資料館研究論集』20、1995 九州歴史資料館

② 須恵器

上野第1遺跡出土土器のなかで土師器について多い須恵器は、遺構の編年の最も有力な資料であるが、一括性の高い資料は少なくしかも破片資料がほとんどである。ここでは編年の問題は別にし、器種別の須恵器の出土傾向を中心にふれたい。

器種構成 須恵器類では蓋坏と甕の破片の数量が圧倒的に多い。

坏 坏 口縁内面に返りのつく7世紀型の坏蓋は1・2点が採集されたのみで、これをともなう遺構はなかった。坏蓋は体部の高いものがほとんどで、8世紀前葉から後葉のものがすべてである。坏身は高台付きがほとんどで、高台が底部の端につく8世紀末の形態はほとんどない。

壺 壺 短頸の壺と長頸の壺があり、長頸壺は、口縁の先端が外反し、胴部が断面くの字形になる通常の形態の長頸壺Aと、胴部が丸くその肩部に三角の突帯が一条めぐる長頸壺Bがある。長頸壺Bは1個体のみ、M区17トレンチの奈良時代水田の下層から出土している。長頸壺Aは野間H区の祭祀場付近の遺構すなわち周溝建物、4号竪穴建物、31号土坑などに多く廃棄されている。壺蓋は返りのつくものが1点のみ19号溝から出土している。

甕 甕は大型と中型があり、祭祀坑である44号土坑では1個体が破砕して埋められていた。他に大型甕の破片は数多く、遺跡全体から出土している。

鉢 鉢は3個体出土し、いずれも鉄鉢模倣の形態で、底部は尖底気味のものである。1例は東原C区の14号土坑と野間H区の5号竪穴建物一括廃棄中と19号土坑とから出土し接合している。14号土坑は3×5間の10号掘立柱建物のそばに位置する。高坏は2個体しか出土していない。奈良時代にはめずらしい横瓶が周溝建物と31号土坑から破片で出土し接合している。

高横 以上から、①蓋坏と甕は遺跡全体から出土する。②壺なかでも長頸壺Aや鉢さらに横瓶は数が少なく、出土地点は野間H区の周溝建物周辺に限られる。③坏の形態は8世紀前葉から後葉のものがほとんどで、8世紀初頭と8世紀末の形態はほとんどない。

ま **と** **め** **転用硯** 野間I区8号竪穴建物の竪穴建物廃絶時に、床面直上につまみを上にして置かれたように残されていた須恵器坏蓋である。口縁の三方向を丁寧に打ち欠き、風字硯の形態に似せて調整されている。内面中央が広い範囲で摩滅し、打ち欠き残された口縁部の方向に向かうつまみの角と、その口縁部外面がすり減っている。そこから一方の打ち欠き残した口縁部を手前にして、裏返して斜めに置いて使用されたことが判明する。内面に残る擦過痕の方向から右利きの人物が使用したことが考えられる。

廃棄の理由 ところで転用硯が残された8号竪穴建物は上野4期の建物であった。この時点では野間I区の掘立柱建物群はすでに無くなっている時期にあたる。しかもこの転用硯は破損したり摩滅がひどくなったりして使えなくなったために廃棄されたのではない。まだ使えるのに置いていったのである。転用硯が不要になった理由はなんだろうか。仮に8号竪穴建物の居住者の所有物であったとすれば、彼らが文字を書く人物ならば、転居の際にかならず持っていくであろう。それを竪穴建物廃絶時すなわち転居の時に置いていくのは、すでに竪穴建物の居住者にとっては役に立たない道具になっていたと考えられる。つまり8号竪穴建物の居住者は文字の読み書きのできない人々か、あるいは読み書きの必要のなくなった人々であると推定される。そのような居住者に転用硯が伝えられていたとみられるのである。そして廃棄の在り方をもう一度見直すと、カマド祭祀時の須恵器の廃棄方法と共通していることがわかる。つまりカマド祭祀の際の一環として転居時に廃棄していると見てよい。文字の読めない8号竪穴建物の居住者にとって、伝えられた転用硯は、すでに実用品ではなく祭祀のために供える呪物に転化しているといえまいか。

③ 土師器

3 種類 出土した奈良時代の土師器にはおおづかみに3種類に分けることができる。1、後述する精製胎

土を用いた土師器で、各形式とも須恵器や通常胎土の土師器とは異なる形態である。精製胎土AとBの2種類がある。2、通常胎土つまり在地産の煮沸用の甕を中心とした土師器。3、胎土や焼成の方法はまったく通常胎土の土師器と同じだが、器形や成形調整方法が須恵器と同じ須恵器模倣の土師器である。4、都城系の土師器は、周溝建物のピット3から一点のみ出土している。5、全体的な土師器の形式構成は、豊後国府を中心とする沿岸部ではなく、筑後の遺跡を共通する。

筑後と類似

胎土による分類を説明しておきたい。

精製胎土の土師器 精製された水こし粘土を用い、肌色に近い白色と桃色に近い橙褐色の部分が縞状になって、基本的に砂粒を含まない。精製胎土Aとする。その胎土に含まれる微砂粒をあえて示すと角閃石と長石と石英の微粒子に赤色の正体不明の微粒子をふくみ、さらに微細な雲母様の粒子を含む。精製胎土Bは以上の特徴をもつ精製胎土に混和材としてあえて砂粒を混ぜたものである。在地の胎土ではなく、ほとんどすべては筑後地方からの搬入品であろうと推定される。

精製胎土

器種構成には壺のなかでも小型壺が多く、高坏もある。坏または皿としたものが最も多く、なかには坏蓋や台付き皿がある。坏類の特徴はヘラによる暗文が認められないことと、底部外面には手持ちヘラケズリによる器面調整が施されている点にある。形式変化を追うことは難しいが、手持ちヘラケズリが明瞭なものから、ナデ消されて不明瞭なものに変化するようである。

搬入品

器種と技法

壺と坏はカマド祭祀の際に使用される必需品であったらしく、すべてのカマドで出土し破片として埋め置かれている。

ほかに鉢、甌、甕といったほとんどの品目がある。特に甌や甕など煮沸形態に精製胎土の土師器があるのは不思議である。それらは通常胎土の土師器や須恵器でまかなえるのであり、実際多数出土している。精製胎土の土師器を好む集団がいたとも考えられるが、精製胎土の土師器は華奢で、長持ちするものではなく、特に甌や甕は実用品には向かない。カマド祭祀に含まれることも多く、おそらく1回限りの儀礼用の土器と見られる。

鉢・甌・甕

通常胎土の土師器 在地産の凝灰岩に由来する角閃石が目立つ胎土で、精製胎土の土師器とは容易に区別される。

器種構成は甕と小型甕・鉢の煮沸具を中心に甌の把手がかなり出土し、高坏と碗が少量含まれる。この中で甕は頸部がすぼまる形態から、口縁部が広がる形態に変化するようであるが、破片が多く十分な検討がおこなえなかった。甌の把手は体部に張りつける製作法ではなく、体部に差し込む方法で作られており、豊後の沿岸部の甌の製作方法と異なっている。おそらくこの場合も筑後地方からの影響であろう。

器種構成

甕と鉢は煮沸具の典型で、おそらくカマドの構造に対応する。上野第1遺跡の竪穴建物のカマドは、ほとんどが縦に2穴の掛け口を並べる形態であろうことを推定した。一方が弱火一方が強火である。このカマドに普通の甕と小型甕それに甌を併用し、鉢も今日の鍋に近い利用の仕方で行われたと考えたい。以上は日常生活での使用であるが、他方カマド祭祀でも甕と鉢が使われていることが各竪穴建物のカマドの状況からうかがわれる。

甕と鉢

④ 製塩土器

いずれも胎土に大粒の砂粒を多量に含み、石英粒がめだつ。在地産の土師器の胎土とは異なっており、製塩土器は日田郡外からの搬入品である。以下の2種類がある。

焼塩用

A 逆錐形製塩土器 小型の焼塩用製塩土器である。体部がやや途中で外に屈折し内面に稜をもつことが多い断面Y次形のA1類と、直線状に開き断面がV字形のA2類に細分できる。竪穴建物のカマド祭祀のなかで発見される例がきわめて多い。それ以外では周溝建物や31号土坑など祭祀関連を推定させる遺構からの出土が多く、容器入りの塩として祭祀に使われたと考えられる。

逆錐形

B 六連式土器 内面に布目痕が残る形造り成形の砲弾形をした焼塩用土器で、外面は未調整の

六連式

まま指による成形痕をそのまま残す。わずか2個体が、野間B区の4号掘立柱建物と平原A区の201号土坑から出土しているのみである。

出土状況と
数量

いずれも焼塩用の製塩土器であり、量的には圧倒的に逆錐形が多い。しかし1ヵ所に多量に出土することはなく、小破片が少しずつ含まれるのである。どの破片にも塩を焼き固めた痕跡である変色と劣化剥離が認められる。逆錐形が量的に多いのは、六連式が圧倒的な豊後沿岸部とは異なる特徴である。これも筑前筑後の遺跡と共通する現象である。

製塩土器の意味 ところで内陸の日田盆地は海岸から遠く離れており、製塩土器は塩の運搬用具を兼ねてもたらされた事は明らかである。しかし頑丈そうな六連式なら運搬用具にも適していようが、薄くて華奢な作りで、しかも焼き塩に使われて劣化した逆錐形の製塩土器がはるばる日田まで、かなり多量に持ち込まれているのはなぜであろうか。上野第1遺跡だけでなく日田盆地内の奈良時代集落遺跡では、この土器はごく普通に出土する。そこで注目されるのが竪穴建物での出土状況である。

祭祀時の塩

逆錐形製塩土器のほとんどの破片は、カマド祭祀時に埋め置かれた土師器破片と共伴する。カマド祭祀の儀礼が炊飯飲食をともなうこと、それに使われるのは原則として土師器であることは先に指摘したが、そのなかで塩が用いられているのである。ではなぜ塩だけではいけないのか。当時すでに散状塩が登場し、固形塩も固まりのまま流通していたことが、文献資料の単位記載から明らかである。すなわち散状塩は「斗・升・合」の単位で、固形塩は「果」の単位で計られている。日常の炊事や工業用に使われる塩は、すでに奈良時代には散状塩や固形塩の形式で流通するのが一般的であったと考えられ、普通は焼塩用の製塩土器も産地で廃棄される。事実北部九州の製塩遺跡では膨大な出土が知られている。したがって土器をともなうということは、逆に土器に入れられたままの塩に意味があると考えざるをえない。そしてその「土器塩」がカマド祭祀に多用されているのであるから、祭祀においてこそその意味があったと推定される。すなわち祭祀に使う塩は清浄でなければならず、産地から祭祀の時まで、ほかで使われたことのないことを示すために土器に入れられたまま運ばれたのではなかろうか。つまり「土器塩」は清浄なる塩であることを保証し、塩の清浄さを象徴していたと考えられるのである。そう考えなければ華奢な逆錐形の製塩土器がはるばる運ばれてくることを理解できない。おそらく塩の産地であらかじめ祭祀用として作りわけられ、日常の塩とは別の扱いを受けて流通していたものと推定される。

「土器塩」

⑤ 鉄器

刀子と鉄鏃

奈良時代の遺構から出土し、この時代の鉄器と考えられるものは刀子と鉄鏃の2器種に限られる。刀子は「のかつぎ」の明確なA類とそうでないB類があり、鉄鏃は長頸鏃である。

数量としては刀子が6点で多く、鉄鏃は1点と少ないが、全体として鉄器の出土ははなはだ少ない。刀子はいずれも破損しており、消耗品として使われたのち最終的に廃棄されたものである。鉄鏃は完形品で10号竪穴建物から出土しており、出土状態が不明なのが惜まれる。というのも古墳時代前期の竪穴廃棄時の祭祀行為に、鉄鏃が使われることが多いことが日田盆地内の小迫辻原遺跡で知られているからである。この鉄鏃がどういう風に廃棄されたかは不明だが、奈良時代まで下るころにはカマド祭祀やその他もろもろの祭祀に鉄鏃が使われなくなったことは、ほかに出土がないことから明らかである。

⑥ 石製品

紡錘車

結晶片岩製の紡錘車が1点、野間H区の31号土坑から出土している。石材は日田郡では産出せず、おそらく筑後川を下った筑前南部からの搬入品と考えられる。

石錘

石錘は3号竪穴建物2層中から1点出土している。石錘の出土はこの竪穴にそれを捨てた人々が、近隣の河川で網漁をおこなっていたことを暗示している。1点のみなので偶然の可能性も否定

できないが、仮に石錘を捨てた人々が同じ上野第1遺跡の住人で、かれらが網を所有していたと考えてよければ、この台地の南端の奥まった集落である上野第1遺跡の住人が、おそらく三隈川での網漁の権利を持っていたことを物語っている。8世紀初めにこの場所に移り住むまで保有していた網漁の権利を、移住後も引き続き保持していたことを示している。したがって上野第1遺跡に移住した集団あるいは家族の一部は、三隈川に近い集落からそれまでの近隣集団との関係と権利を維持したまま生活地を遷した人々であったのではないかを考えさせられる。

2-4 遺構の編年

カマド祭祀における土器の一括資料や、一括廃棄の土器が、土器の編年と器種構成を考える最良の資料であるが、完形に復元できるものが極めて少なく、セット関係も容易につかめない。土器の型式変化と一括資料から編年をおこなうのに困難を覚えたので、以下の5点を基準に上野第1遺跡の奈良時代の遺構群の編年を試みた。最終的には5期編年が可能であった。

① 遺構の切り合い関係

まず最も切り合い関係の多い、野間I区を検討する。まず9号竪穴建物→30号掘立柱建物→8号竪穴建物→15号竪穴建物の関係は、実際には9号竪穴→廃棄土坑化→30号建物→8号竪穴→廃棄土坑化→15号竪穴→自然埋没の過程をたどっており、7時期を経過する。そのうち15号竪穴の自然埋没時には集落は無くなっていると考えられるので省略すると6時期となる。結果的には9号竪穴が使用されていた時期が上野1期、9号竪穴が廃棄土坑化し埋没していた時期が上野2期、30号建物が使用された時期が上野3期、8号竪穴が使用され廃棄土坑化して埋没するまでが上野4期、15号竪穴の使用時期が上野5期となるのであるが、まずこのように切り合い関係から小時期をわける作業をおこなった。

3 住居の切り合い

その結果、東原C・D区では2号竪穴建物→廃棄土坑化(整地)→7号掘立柱建物、3号竪穴建物(強制廃絶=整地)→7号掘立柱建物、8号掘立柱建物→10号土坑、8号掘立柱建物・12号掘立柱建物→10号掘立柱建物、13号掘立柱建物→14号掘立柱建物→15号掘立柱建物の切り合い関係から、少なくとも3時期を経過していることがわかる。

東原C・D区

野間E・F区では、重複する14号竪穴建物(強制廃絶=整地)と27号掘立柱建物→28号掘立柱建物、4号竪穴建物→廃棄土坑化などの関係から、3時期を認めた。野間H・G区では周溝建物→7号竪穴建物→廃棄土坑化の3時期を、道路状遺構も作り直しがあるので、2時期あることがわかる。

野間E・F区

野間I・J・L区では、さきほどの9号竪穴建物以下の例の他に、25号掘立柱建物→24号掘立柱建物、23号掘立柱建物→10号竪穴建物(埋め戻し)、12号竪穴建物(強制廃絶=整地)→11号竪穴建物・102号土坑、32号掘立柱建物→33号掘立柱建物、45号土坑→廃棄土坑化→19号溝、40号土坑→水場状遺構の関係を明らかにした。

野間I・J・L区

次に以上のようなそれぞれの地点で設定した時間軸の併行関係を明らかにするために、以下の点を検討した。

② 竪穴建物の整地の時期

竪穴建物の埋没状態を検討した際に明らかにしたように、竪穴建物を埋め戻して整地した例が野間C区の2・3号竪穴建物、野間E区の14号竪穴建物、野間I区の12号竪穴建物で知られている。前三者ではその上に掘立柱建物が建てられている。以上の竪穴建物は強制廃絶の状況が多く、建てられた掘立柱建物をみると方向がほとんど一致し、それは周溝建物の20号掘立柱建物と平行するか直行している。この事実から竪穴建物の整地をともなうような大規模な建物群の建て替えが一斉におこなわれた時点があったと推定される。切り合い関係の中にその時点をもとめると、東原C区では7号掘立柱建物の建設時、野間E区では28号掘立柱建物の建設時にあたり、野間I区では切り合いはないが後述する方向の一致から23・30号掘立柱建物の建てられた時点であることがわかった。

竪穴の整地

建物建設

一斉建て替え

この時点以前に2時期が経過していることが、2号竪穴建物と9号竪穴建物の埋没状況からうかがえるので、廃棄土坑化による埋没が進んでいるので古く廃絶したことが明らかな2・9竪穴を上野1期、強制廃絶がおこなわれて直前まで使われていたことが明らかな3・14・12竪穴を上野2期とし、整地後に建てられた7・28建物を上野3期とした。さらにその後の切り合い関係から8号竪穴建物の時期を上野4期、15号竪穴建物の時期を上野5期とした。

上野3期

併行関係

これで併行関係の横のラインのひとつが明らかになった。次は切り合いのない単独の遺構と、以上の関係につながらない遺構を、つなぐ方法を検討した。

③ 建物の方向 (第8

・9・10・11図)

編年に用いる前に建物群の方向の一般的傾向を述べておきたい。

方位の磁場

正方位の磁場

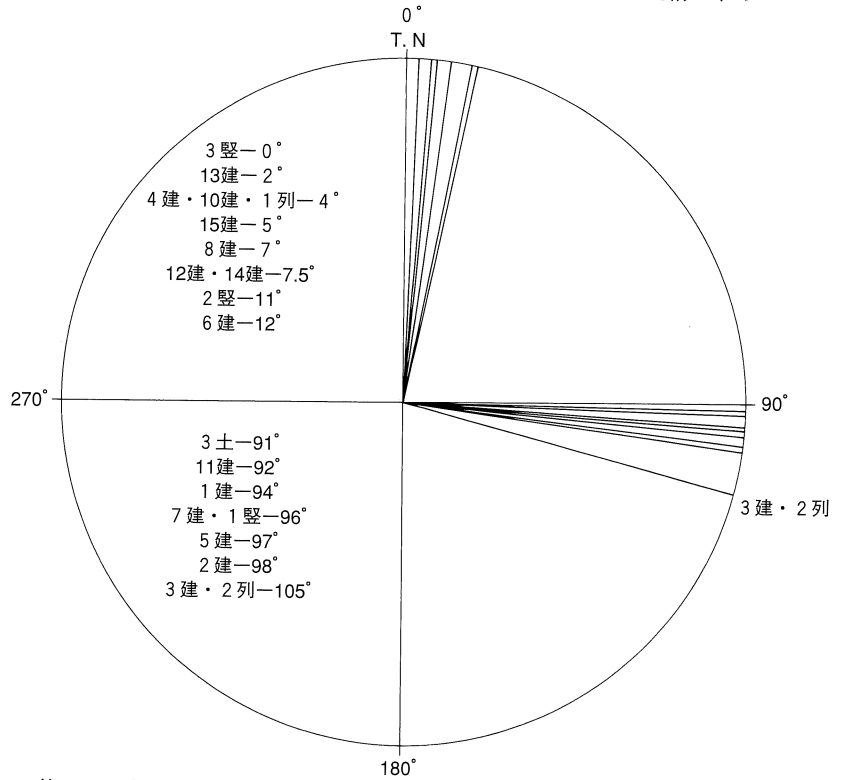
まず上野第1遺跡全体をみると東原地区と野間地区の掘立柱建物と竪穴建物には、東西南北の正方位を指向してやや東に振る傾向がある(第8・9・10図)。これに対し平原地区の掘立柱建物は、正方位をまったく指向しないことがわかる(第11図)。

正方位指向

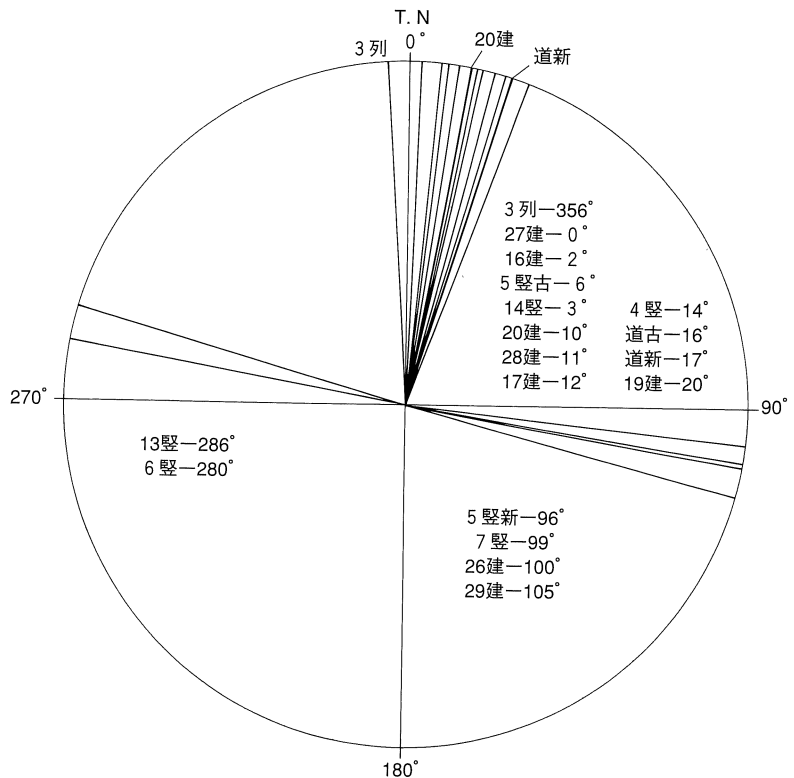
平原地区

上野1期

これは原則として上野1期から上野5期まで一貫し

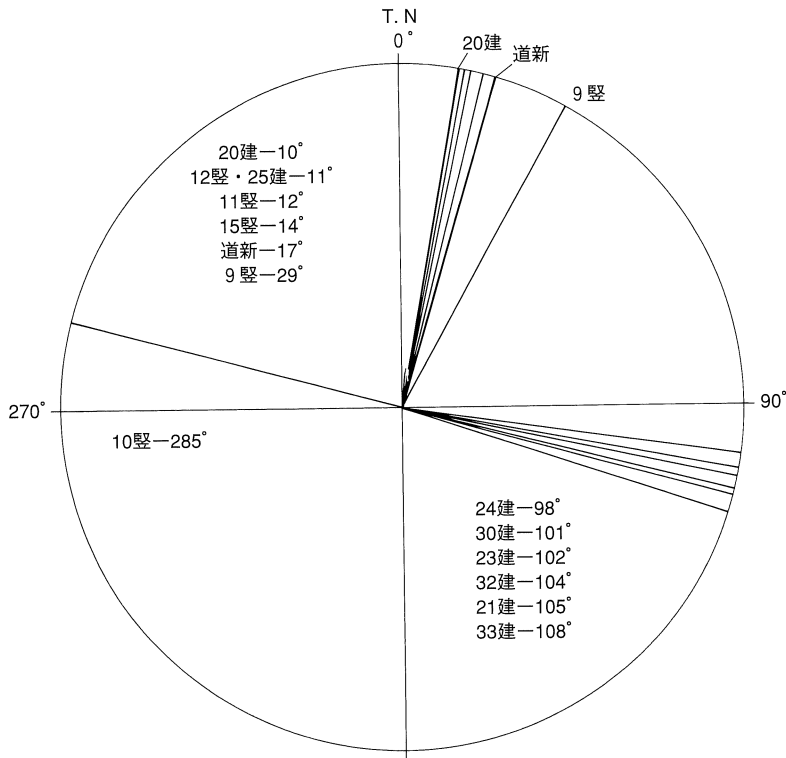


第8図 東原地区の建物の方向

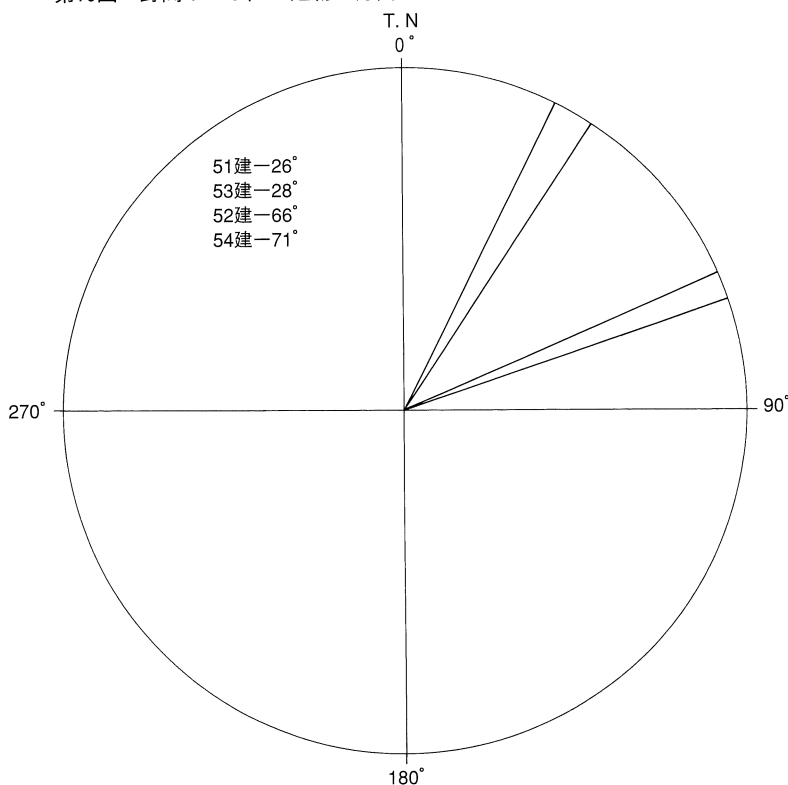


第9図 野間E・F・G・H区の建物の方向

て作用していると考えられる。その磁場の対象に平原地区は最後まで含まれなかったわけである。ただ例外として東原A区の3号掘立柱建物と野間I区の9号竪穴建物の方向が違うことがわかる(第8・10図)。9号竪穴は切り合い関係から上野1期となる最古の竪穴建物であり、しかも上野2期以後の建物はすべて正方位を指向するのであるから、おそらく上野1期に野間I区より西方では、正方位の磁場は作用していないと考えられる。また3建物は東原A区という最も東の調査区に所在する。ここにも正方位の磁場が及ばない時期があったのである。これに対して東原C・D区と



第10図 野間I・J区の建物の方位



第11図 平原地区の建物の方向

野間E・F区では上野1期以来正方位の磁場が作用する。おそらく上野1期においては東原C・D区と野間E・F区を中心に正方位の建物が建設され、東原A区や野間I区は周縁部に当たって方位を考慮しないと考えられる。それが上野2期以後は東原・野間両地区全体に正方位の磁場が作用するようになっていったと考えられる。その中心はおそらく道路状遺構であり、上野3期以後は周溝建物となると想定される。

東への振れ

なお正方位から東に振る例が多いのは、方位の観測に磁石を使用したためとも考えられる。磁北との偏差と一致するものと考えたい。

方向と柱筋の一致 次に図面に定規をあてて、正方位の建物群の細かい方向と柱筋を押さえていく。その際すでに切り合い関係と整地との関係で明らかなものを基準とする。

東原地区

東原地区では、まず東原A区の1号掘立柱建物と2号掘立柱建物は柱筋が一致し、上野2期の建

物の方向にはほぼ同じ。4号掘立柱建物と1号竪穴建物は上野3期の建物の方向に一致する。野間C・D区では上野3期の7建物と直交する10号掘立柱建物と15号掘立柱建物、さらに平行する5号掘立柱建物があり、10建物と柱筋を揃える1号柱穴列を見いだした。以上の上野3期の建物に切られた3竪穴と14建物を上野2期とし、後者と柱筋がそろった8建物と12建物および方向が一致する2号柱穴列を見いだした。さらに上野2期に建物に切られたり、古いことが明らかな2竪穴と13建物を上野1期とした。

野間E・F区 野間E・F区では同じ方法で、上野3期の28建物を出発点に方向が同じ26号掘立柱建物と17号掘立柱建物と29号掘立柱建物を検出し、さらに4号竪穴建物もほぼ同じ方向である。28建物に整地された14竪穴が上野2期で、それと重複し28建物に切られた27建物を上野1期とすると、27建物の方向の一致する16号掘立柱建物を見いだせる。

野間I区 野間I区では上野3期の30建物と同一方向で柱筋のそろった23号掘立柱建物と21号掘立柱建物さらに33号掘立柱建物があり、整地がおこなわれた上野2期の12竪穴と方向の一致する25号掘立柱建物を見いだした。

④ 遺構の位置関係

次は、時期の特定された遺構と密接な関係があると見られる位置にある遺構を検出する。

東原地区 東原A区では1号土坑が3建物と組み合わせ上野1期に、東原B区の3・4号土坑は2・3建物と近く上野2期に、東原C・D区の9・10・14・15号土坑は上野3期の建物群の周辺に分布するので上野3期に、同じく9号掘立柱建物は1号柱穴列との位置関係から上野3期に推定した。

野間E区 野間E区の13号竪穴建物は上野1～3期の竪穴や建物と近すぎるので上野4期以後の可能性もあるが、隣接地に同じカマドの向きで存在する場合は建て替えの可能性が高く、13竪穴は上野2期の14竪穴以前の上野1期と考えたほうがよい。野間H・G区では6号竪穴建物は周溝建物と近すぎ、埋め戻しが周溝建物建設の際のものと考えてよければ上野2期になる。道路状遺構は、9竪穴と8竪穴と15竪穴が存在した上野1・4・5期にそれらと共存していたとは考えられないので、上野2～3期に機能したと推定され、上野2期に改修前の古い土坑列が掘られ、上野3期に現状の道路状遺構が水場状遺構と周溝建物と同時に整備されたものと考えられる。

野間I区 野間I区では上野3期の掘立柱建物群の配置をみると、23建物と30建物の南側は水場状遺構まで広大な広場が現出することになる。切り合い関係からみて上野3期以後にあたる11竪穴と24建物が、その広場のなかに建てられるのはきわめて不自然である。おそらく再び竪穴建物が建てられる上野4期以後と考えられる。

⑤ 接合資料

これでもなお時期不明の遺構が残り、以上のように編年した遺構群も、微妙な方向や位置関係が根拠では心許ない。それで検証の意味も含めて接合資料の検討をおこなった。

土器 土器 接合資料と、同一個体とみて間違いのない例を東原地区から順次あげていこう。切り合いによって明らかに残留した資料は除いている。

接合資料① ①東原C区3土坑と4土坑出土の土師器甕（第4章第25図2）が接合。

接合資料② ②東原C区3土坑と2竪穴カマド祭祀の精製胎土Aの土師器壺（第4章第67図3）が接合。2竪穴が上野1期で3・4土坑が上野2期としたが、土器の一片がわずかに後に廃棄されても不思議ではない。

接合資料③ ③東原C区の2竪穴カマド祭祀と14土坑1層廃棄の精製胎土Aの土師器坏が接合（第4章第67図7）。上野1期の祭祀土器の破片が残留して、上野3期の土坑に廃棄されることは充分ありうる。

接合資料④ ④東原C区の3竪穴1層整地層と14土坑から出土した須恵器坏蓋が接合（第4章第70図2）。上

野2期の3堅穴が強制廃絶される時期と上野3期の掘立柱建物建設のため14土坑が掘られるのはほとんど同時であろうから、まさに同時性を示す資料である。

- ⑤東原C区3堅穴と10土坑の精製胎土Aの土師器坏が接合。小片で図示せず。 接合資料⑤
 - ⑥東原C区7建物柱穴8と10土坑上層廃棄出土の須恵器坏身が接合（第4章第47図1）。両者はともに上野3期で、関係の深さを示している。 接合資料⑥
 - ⑦東原C区8建物柱穴3と10建物柱穴6出土の須恵器壺片が接合（第4章第49図1）。上野2期の8建物は柱痕出土資料で建物廃却時のものであるから、上野3期の10建物柱穴に入ることはありえることで切り合い関係とも矛盾しない。 接合資料⑦
 - ⑧野間F区4堅穴埋土、野間G区5堅穴埋土一括廃棄、周溝建物周溝埋土、野間J区45土坑上層出土の須恵器大型甕は同一個体である（第51図20）。4堅穴と周溝建物は上野3期であるから、孤立していた5堅穴と45土坑が結びつくことになり、上野3期とする根拠のひとつを得た。 接合資料⑧
 - ⑨野間G区5堅穴埋土と野間H区31土坑一括廃棄出土の須恵器坏蓋（第5章第74図2）が接合。⑧の接合資料から5堅穴が上野3期となりうることを示したが、31土坑ともつながることになる。 接合資料⑨
 - ⑩野間G区5堅穴埋土下層と19土坑下層廃棄出土の須恵器鉢が接合（第5章第51図22）。⑨と同じく19土坑は上野3期の5堅穴と結びつく。 接合資料⑩
 - ⑪野間G区5堅穴埋土1層と周溝建物周溝埋土出土の須恵器坏蓋が接合（第5章第51図14）。この組合せは接合資料⑧でもあり、5堅穴と周溝建物の同時性の可能性を示す。 接合資料⑪
 - ⑫野間G区5堅穴カマド祭祀と周溝建物周溝埋土出土の土師器甕が接合（第5章第44図28）。この遺構同士の組合せは3例目。同時性を示すのみならず、野間G区の周溝建物と5堅穴の間の空間から土器が廃棄されることが多いことを示している。 接合資料⑫
 - ⑬野間H区7堅穴付近と31土坑一括廃棄出土の須恵器坏身が接合（第5章第74図4）。7堅穴は上野5期であるが、31土坑では接合資料⑨が上野3期とした5堅穴埋土から出土している。7堅穴が上野3期の周溝建物を切っているため、そこからの残留の可能性が高い。 接合資料⑬
 - ⑭周溝建物周溝埋土と31土坑一括廃棄出土の須恵器横甕が接合（第5章第43図11）。これで31土坑と結びつく資料は⑨⑬について3例目で、周溝建物は上野3期である。 接合資料⑭
 - ⑮周溝建物周溝埋土と野間I区30建物柱穴3出土の須恵器長頸壺が接合（第5章第43図10）。いずれも上野3期と推定したものである。同時性を示す。 接合資料⑮
 - ⑯野間G区19土坑上層一括廃棄と61土坑出土の通常胎土の土師器甕が接合しているが、小片なので図示していない。19土坑が接合資料⑩から上野3期と推定されるので、61土坑も結びつく。 接合資料⑯
 - ⑰野間G区20土坑1層と道路状遺構土坑17埋土出土の須恵器甕が接合（第5章第62図1）。 接合資料⑰
 - ⑱野間I区15堅穴埋土と野間M区水田中層下面出土の須恵器甕は同一個体（第5章第120図13）。15堅穴は上野5期である。 接合資料⑱
 - ⑲野間I区11堅穴カマド祭祀と野間L区38土坑埋土出土の土師器甕は同一個体（第5章第128図5、第133図16）。11堅穴は上野4期であり、38土坑が上野4期以後のものであることを示す。 接合資料⑲
- 以上の土器の接合例から、5号堅穴建物とその周辺の19・30・31号土坑さらに45号土坑が上野3期であることが示され、上野3期と先に推定された30号掘立柱建物と周溝建物や4号堅穴建物などは接合資料により確実なものとなった。また基本的に矛盾する例はないことも明らかになった。

カマド石材 周溝建物や堅穴建物・土坑などから、ひどく被熱して脆くなった安山岩の礫が、廃棄された状態で出土した。これらの礫はまったく同じ種類の石で、ほかの円礫や角礫と容易に区別できるものである。その多くはカマド側石として使われ、そのため被熱の著しいものである。堅穴建물에付設されたカマドの多くは、廃絶時にカマド祭祀をおこなったうえで取り崩されており、その残骸のなかから出土する場合もあるが、多くは堅穴や土坑の埋土廃棄物のなかに残されている。

カマド側石

この石材はカマド祭祀の様子を探る手がかりとなるだけでなく、破片を接合することで、遺構廃絶時期の同時性を導き、かつ各種遺構の関係をとらえる資料となりうる。

出土位置 まず出土位置を検討すると、野間G区の5 堅穴・6 堅穴・26土坑・19土坑・30土坑・周溝建物とピット9・40、それに道路状遺構土坑34、野間I区11・12堅穴から出土している。堅穴建物のカマドに残されることは、不自然ではないにしても、野間G区の土坑やピットなどに集中するのはどうしてであろうか。カマド祭祀時に取り除いた石材の多くがこの周辺に一旦持ってこられたと考えざるをえない。カマド祭祀にいたる、堅穴建物廃絶の儀礼がここで執り行われたのではないかと考える、ひとつの状況証拠である。

さて接合作業をおこなったところ、遺構をこえた接合例が3例認められた。

接合資料A **A** 野間G区5号堅穴建物のカマド祭祀時に廃棄された2片と、隣接する大型の19号土坑下層からの1片が接合した(第5章第52図39)。被熱の様子を観察すると19土坑出土破片の赤変の程度は、5 堅穴建物の破片より軽い。19土坑の破片が打ち欠かれた後も、残された2片はなおカマドに使用されたと考えられる。実際5 堅穴は北カマドから東カマドに改修されており、それに対応すると考えれば、5 堅穴の東カマドで使われていたカマド側石を、北カマドに用いる際に調整し、その破片を19土坑に廃棄したといえ、その後5 堅穴廃絶時のカマド祭祀で割られて廃棄されたという推理が成り立つ。しかし同じ19土坑下層から出土した接合資料⑩の須恵器鉢がほとんど同じ地点で出土しているので、最終のカマド祭祀時に破碎された1片が廃棄されたものと単純に考えることもできる。

5 堅穴と19 土坑 いずれにしても5 堅穴が使用されていた時点、特に東カマドの時点では19土坑が併存していたことは確実である。

接合資料B **B** 野間G区5号堅穴建物のカマド祭祀時に廃棄された破片と、周溝建物の周溝内出土の破片が接合した(第5章第44図30)。5 堅穴は剥片で周溝建物は側石本体である。5 堅穴東カマドの石材を取り外し、打ち割った剥片はカマド祭祀遺物とともに埋め置き、残部は周溝建物の周溝内に廃棄されたと考えられる。5 堅穴と周溝建物が同時期に併存していた時期があることを示している。

接合資料C **C** 野間G区5号堅穴建物のカマド祭祀時に廃棄された小剥片と、26号土坑に廃棄された2片の小剥片とが、野間I区11号堅穴建物のカマドに立てたまま残された側石本体と接合した(第5章第128図9)。5 堅穴のカマド祭祀層に含まれた剥片は意図的に埋置されたものであって、本来5 堅穴の東カマドで使われていた側石の一部とみられる。その剥片と11堅穴で使われていた側石本体が接合するので、5 堅穴東カマドの側石を11堅穴に再利用したものであると考えられる。5 堅穴と11堅穴は、変則二本柱の構造、カマド祭祀に石材を多く供える習慣など、類似する要素が多いことはすでに指摘した。おそらく5 堅穴からやや離れた11堅穴にカマド祭祀が引き継がれたのである。したがって5 堅穴が上野3期であるから11堅穴は上野4期と考えられる。

以上のカマド石材の接合例から、5号堅穴建物と19号土坑と周溝建物が同時期の上野3期、11号堅穴建物が上野4期となることが明らかとなった。

5 堅穴の石材の移動 同時に接合資料ABCはすべて5号堅穴建物に関わっており、その廃絶時のカマド祭祀の様相が石材を通して見えてくる。すなわち東カマドの石材はカマド祭祀の際、Cは剥離されて11堅穴に再利用され、AとBは破壊されてその破片の一部はカマド祭祀のため「供え」られ、残された破片は19土坑や26土坑さらに周溝建物の溝に廃棄されたことになる。石材を破壊あるいは剥離するのは土器を破碎する点と共通している。おそらくカマド祭祀の儀礼は5 堅穴の南から周溝建物の北の空間でおこなわれたものであろう。

⑥ 五期編年

以上の観点からおこなった編年案を以下にまとめるが、その前に実年代観を述べておく。

実年代観 まず集落の開始年代であるが、須恵器坏蓋の口縁内面に返りの付く破片は全資料の中で1・2点

であって、まだそれが一定量残る8世紀の初頭の段階ではない。したがってその次の8世紀前葉から建物群が建設され始めると考えられる。次に上野3期の遺構で数多く発見される須恵器長頸壺と鉢はその特徴から8世紀中葉の古い時期に、また須恵器の坏身には8世紀末葉の型式を含まない。したがっておおよそ次のように考えられる。上野1期は8世紀第1四半期後半、上野2期は8世紀第2四半期前半、上野3期は8世紀第2四半期後半、上野4期は8世紀第3四半期前半、上野5期は8世紀第3四半期後半である。わかりやすく言い換えれば上野1期は720年代、上野2期は730年代、上野3期は740年代、上野4期は750年代、上野5期は760年代の中に、各時期の時間の1点を共有すると表現できようか(註)。

720年代～
760年代

上野1期

上野1期

まず東原C・D区から野間E・F区に高床倉庫を中心に側柱建物と竪穴建物が配置される。この付近のみ建物は正方位を指向する。東原C・D区では2×3間の高床倉庫と推定される13号掘立柱建物が建設され、その南に2×3間の側柱建物である6号掘立柱建物と北カマド4本柱の2号竪穴建物が併設される。野間E・F区では、2×3間の方形柱穴の側柱建物である27号掘立柱建物を中心に、そのそばに西カマドの13号竪穴建物が、やや離れて2×2間の高床倉庫である16号掘立柱建物が建てられる。この高床倉庫と側柱建物と竪穴建物という組合せはその後一貫して見られるので、おそらく倉庫と管理棟と管理に関わる人の世帯の住居であろう。この場所は倉庫地区と評価されるが、高床倉庫と側柱建物の規模は小さなものである。

倉庫地区

一方倉庫地区の周囲にも素朴な「宅地」ともいいうる空間が、東原A区と野間I区の二カ所に存在するようで、建物が分布するようになる。東原A区では2×3間の側柱建物である3号掘立柱建物が建てられ、そばに1号土坑が掘られている。1土坑が廃棄土坑化しているので3建物は住居とみてよい。野間I区では9号竪穴建物が建設される。これも北カマドの住居である。9竪穴の周辺では40号土坑の炉などがこの時期か次の上野2期に機能したようである。以上倉庫地区を取り巻く二カ所の住居は、建物の方向が正方位とは異なり、明らかに倉庫地区と区別された「宅地」であったと推定される。

「宅地」

ところで倉庫地区の北には未調査ながら建物群の中心部分が存在すると推定される。おそらく倉庫地区はその中心施設の付属あるいは周辺施設として整備されたものと考えられる。周囲の二カ所の「宅地」に居住した人々も、上野台地で独立して生計を立てたとは考えがたいので、その中心施設に関わる人々であったに違いない。なおまだ水田は未開発で、湧水は集落全体の水汲み場として機能していたと考えられる。

上野2期

東原地区と野間地区全体の建物が正方位にあわせるようになり、東原A・B区には大型掘立柱建物群が建設され、倉庫地区と「宅地」の再編があわせておこなわれる。その結果東原地区の最も高い位置に「豪族居宅」と考えられる施設が、その下方の西に倉庫地区が配置され、さらに西の湧水点周辺の低い位置に、3カ所の「宅地」が設定されている。加えて「宅地」の間には湧水に向かう南北道路が作られたようである。

正方位の拡大

すなわち東原A・B区には3号建物の住居のかわりに、正方位を指向した大型規模の側柱建物である1号掘立柱建物と2号掘立柱建物が柱筋を揃えて建てられ、その西の東原B区には廃棄土坑である3号土坑と4号土坑が掘られる。廃棄土坑の存在から一定の住居機能をあわせ持った掘立柱建物群と考えられるので、その一端を調査したにすぎないが、「豪族居宅」と評価したい。

東原A・B区

豪族居宅

東原C・D区の倉庫地区では建て替えがおこなわれる。高床倉庫の14号掘立柱建物が、以前高床倉庫であった13建物と同じ場所に建て替えられ、管理棟はそれまでの6建物の北側に同一形式同規模の側柱建物である2×3間の12号掘立柱建物に、2竪穴は同じくその北の3号竪穴建物に建て替

東原C・D区

倉庫地区 わり、高床倉庫の14建物と12建物の間には2号柱穴列が、塀として立てられる。さらに2×2間の高床倉庫である8号掘立柱建物が、12建物と3 堅穴に軒を接して建てられる。2 堅穴の跡の凹みはおそらく廃棄土坑となっている。建物の役割は上野1期とおなじで、12建物が管理棟、3 堅穴は管理人世帯の住居であろう。おそらく2 堅穴に住んだ世帯がそのまま移動したとみてよい。なお管理棟と推定される12建物を建設する際柱穴に刻書石製品が廃棄されている。これを権つまり計りの道具とすれば、文字が書かれているところからみて、上野1期に管理棟である6 建物に備えられていた可能性があり、そこで倉庫の品物を扱うのに使われ、おそらく使った人は文字の読み書きができたのであろう。ただしその人が倉庫の管理にあたった2 堅穴の住人と同一人物であるかどうかは別問題である。そして12建物に建て替える時点で、破損していたので廃棄されたと推定される。以上のように倉庫地区が建て直される。ほとんど同じところに同じ建物を建てるという一見無駄なことがおこなわれているが、おそらく集落全体を統一的に正方位にあわせるという建物群配置の原則の拡大がおこなわれたために、それにともない倉庫地区の再編がおこなわれたものであろう。

権の廃棄 逆に野間E・F区では高床倉庫と管理棟がなくなり、以前あった13建物が14号堅穴建物に建て替えられる。同じ西カマドを踏襲し隣に建て替えられているので、同じ世帯の住居の建て替えとみてよい。ただし上野1期には倉庫の管理に関わっていたが、上野2期にはおそらく独立の「宅地」を与えられているので、別な仕事についたものと推定される。ここでは倉庫地区の一角が、周辺の「宅地」のひとつに変わっているのである。

野間E・F区 野間G区では新たに西カマドの6号堅穴建物が建設される。ほとんど最小世帯の住居である。もしカマドの方向が世帯の系譜を示すものならば、同じ西カマドの上野1期の13堅穴あるいは上野2期の14堅穴から分出した世帯が、この位置にあらたに「宅地」を与えられたのかもしれない。

「宅地」化 いっぽう野間I区では「宅地」は引き継ぐものの、正方位にあわせた再編がおこなわれている。以前の9 堅穴からはやや離れて北カマドの12号堅穴建物が建設され、そのそばには1×2間の側柱建物である25号掘立柱建物が作られる。そして9 堅穴の跡は廃棄土坑として使われるようになる。

野間G区 おそらく「宅地」の住居と、納屋にあたる平地建物であろう。9 堅穴に居住した世帯がこの「宅地」に引き続き住んだかどうかは不明であるが、この時期に湧水に向かう最初の南北直線道路が設定されたらしく土坑列が掘られているので、道路のそばに堅穴建物を建てることをはばかって、やや離れた西に「宅地」内の建物を配置したと考えて良ければ、同じ北カマドであるので9 堅穴の世帯が12堅穴に移ったと見ることも可能である。

野間I区 以上のように東原地区と野間地区全体が、「豪族居宅」とその倉庫地区の再配置を契機として、「豪族居宅」を中心にした建物規制が強まり、それにともなって「宅地」の割り替えや増設がおこなわれたものと考えられる。もともと「豪族居宅」に関係することで周囲に居住することになった「宅地」の住人は、野間E・F区の状況にみるように、上野2期の建て替えにともなって豪族から与えられる地位や役割が変化したと推定される。またこの時期から湧水は単なる水汲み場ではなくなり、集落の外から人を導き入れるような重要な役割を担うようになったと考えられる。

「宅地」の規制

上野3期

大規模建設 東原地区と野間地区の全体で正方位を踏襲しながら、「豪族居宅」を中心にした大規模な建設と再配置がおこなわれる。東原A区にあったそれまでの「豪族居宅」は東原C・D区に移転し、そこにあった倉庫地区は野間E・F区や東原B区に分散移転され、野間E・F区の「宅地」はふたたび倉庫地区になった。さらに道路の改修と水場状遺構の建設にともなって、野間G区の「宅地」は祭祀施設を中心にした祭祀場に生まれ変わり、そのうえ野間I区の「宅地」には水場状遺構から続く広場をともなう大型掘立柱建物群が建設される。この建設作業は同時におこなわれた可能性が高く、堅穴建物を埋めて整地し、正方位もより厳密に一致するようになる。

東原A区は無住空間になり、東原B区には2×2間の高床倉庫である4号掘立柱建物と1号竪穴建物がセットで建てられる。後者は管理人の住居であろうが世帯で住んだかどうかは疑わしい。上野2期の倉庫機能の一部がここに分散していることになる。

東原B区
倉庫移転

東原C・D区は倉庫がまったくなくなり、3×5間の上野第1遺跡最大の側柱建物である10号掘立柱建物を中心に、その北には側柱建物の15号掘立柱建物が、10建物の南側面には3竪穴と2竪穴の凹みを整地して、2×3間側柱建物の7号掘立柱建物が直交して建てられ、その背後には小さな2×3間側柱建物の5号掘立柱建物が建てられる。なお11号掘立柱建物も同時期の可能性が高い。一方西南側には目隠し塀の1号柱穴列があり、その背後に簡易な建物である9号掘立柱建物が隠されるように建てられていた。同時に建物の周囲には9・10・14号土坑などが掘られ廃棄土坑として使われている。竪穴建物をともなわず掘立柱建物のみからなり、しかも大型建物を中心にL字形に建物を配置している点からみて、「豪族居宅」であるといえる。周囲に廃棄土坑が数多くあり、一角に居住機能があったことは確実で、居宅と考える所以である。なおこの建物群を建設するにあたって、それまであった3竪穴は強制的に廃絶して整地されている。おそらく豪族の意志に従って移転したのであろう。以上のようにそれまでの倉庫地区を、管理人の世帯ごと移転させ、敷地を整地した上で、「豪族居宅」を建設している。

東原C・D区

豪族居宅

野間E・F区は、まず2×3間側柱建物の28号掘立柱建物を中心に、その北に2×3間の高床倉庫である26号掘立柱建物が建てられ、西には2×2間の高床倉庫である17号掘立柱建物が配置される、その北には北カマドの4号竪穴建物が建てられる。28建物が倉庫群の管理施設で、4竪穴が管理人世帯の住居であると見られる。28建物の南に、庇をもつ29号掘立柱建物があり方向が一致するので同時期と見られるが正体不明である。ところで4竪穴は北カマドで変則4本柱の竪穴建物である。カマドの方向の一致からすると強制廃絶された東原C区の3竪穴からここに移転した可能性が高い。そう考えてよければ、上野2期の倉庫地区をそのままここに移したと評価される。

野間E・F区

倉庫地区の
移 転

野間G・H区では、6竪穴が埋め戻され、それまで空閑地であった場所に、北カマドの5号竪穴建物が建てられる。さらに道路状遺構が改修されて水場状遺構が設けられ、その東脇に祭祀施設である棟持柱の20号掘立柱建物が建てられる。周囲には周溝をめぐらし、出入口を湧水に向けて目隠し塀の3号柱穴列を立てている。さらにその周溝建物から5竪穴にかけての空間には形態の異なる土坑や小土坑が集中し、カマド石材などのカマド祭祀に関わって廃棄された遺物が集中するところから、周溝建物とひとつになって祭祀場を形づくると考えられる。なお5竪穴はこの期間中に東カマドの変則二本柱の竪穴建物に改築される。道路・水場・祭祀場が一体となって整備されているのである。それまでの6竪穴の「宅地」は当然別の場所に移転したと考えられる。

野間G・H区
道路と水場

「社」建築

祭 祀 場

野間I・L区でも、大きな改変がおこなわれる。まず12竪穴が突然埋め戻されて整地され、上野2期の「宅地」は丸ごと調査区外の別な地点に移転したと推定される。かわって道路に面した東庇の21号掘立柱建物を中心に、3×4間の側柱建物である23号掘立柱建物と2×3間の側柱建物の30号掘立柱建物が柱筋を合わせて建てられる。おそらく方向の揃う33号掘立柱建物も併存した可能性が高い。そして23建物と30建物の南側から水場状遺構までは広場となる。12竪穴が整地されたのもこの広場を整備するためであろう。広場から水場状遺構にはそのまま降りることができるように階段状に工夫されており、この建物群が水場状遺構と一連のものであったことが理解される。この掘立柱建物群の特徴は周囲に廃棄土坑をまったくともなわず、その点が東原C・D区の「豪族居宅」とは対照的である。その「豪族居宅」から見下ろされる位置にあるこの建物群は、「豪族居宅」を訪ねる人々を泊めたり、もてなすための「客館」的施設で、豪族の対外的活動をおこなう公的場と推定される。こうしてそれまでの「宅地」は豪族の「客館」になったと考えられる。この時期にこの建物群の西側では粘土採取がくりかえされたらしく45号土坑が掘られ、水田化以前の野間M区で

野間I・L区

南に広場

「客館」?

粘土採取 は、この時期まで水田下土坑の掘削がつづいていたと見られる。
 以上の上野3期の状態が、奈良時代の上野第1遺跡の最盛期といえる。

上野4期
 以上の大規模に整備された掘立柱建物群の大半が姿を消し、急激に規模を縮小する、おそらく「豪族居宅」と倉庫群が上野台地から移転したらしく、野間G区の祭祀場付近と野間I・L区に「宅地」の一部が残されるが、その性格はがらりとかわり、野間M区では湧水を利用した水田が開かれ、それに降りる道と祭祀施設が設けられて、農村的景観に変化する。

農村へ 東原地区からは建物が一斉になくなり、同時に野間地区の周溝建物や道路や「客館」も一斉になくなる。道路はおそらく下部構造物まで抜き取られ、周溝建物の周溝は廃棄坑となり、4号堅穴の跡には須恵器坏を大量に廃棄する一括廃棄がおこなわれて埋没する。

野間H区 野間H区の祭祀場のあとには、東カマド変則二本柱の30号土坑（堅穴建物）が、5堅穴の隣に建て替わる。おそらくそれまで祭祀場を管理した人の住居である5堅穴の世帯は上野第1遺跡に残り、二つの世帯にわかれ一方は祭祀場の跡に30土坑（堅穴建物）を建て、分出した世帯は、そのまま隣の「宅地」に11号堅穴建物を建てて移っている。おそらくこの5堅穴から30土坑と11堅穴に住んだ人々は棟持柱をもつ変則二本柱の住居を伝え、カマド祭祀の際には石材を「供える」という習慣を身につけた人々で、祭祀場の建設とともに始めて登場したことを思えば、彼らは祭祀の執行に精通した人々であったと考えられる。

祭祀人の残置と分出 さて野間I・L区では、ふたたび堅穴建物を中心とした「宅地」が復活する。北カマドの8号堅穴建物がかつての道路のすぐそばに、5堅穴から分出した北カマドの11号堅穴建物がやや離れて、さらに32号掘立柱建物が建てられ、そばに38号土坑が掘られている。以前の「宅地」と異なるのは、規模が大きいことである。同一の「宅地」内に堅穴建物2棟と掘立柱建物が存在している。いずれも住居とみられるのである。そしてその「宅地」の西には水田に降りる道として19号溝が切り通されている。この「宅地」の規模が大きい原因は、野間M区の水田開発とその水田を耕作管理する役割を担ったからであろう。ところで再度設定された「宅地」の住人のうち11堅穴は5堅穴から分出した祭祀人の住居と考えられることは先にふれたが、水田開発にもなって掘られた44号土坑の祭祀坑に据えられた須恵器甕を祭ることが、あらたな役割として与えられたものと推定され、そのため「宅地」内の祭祀坑に一番近い場所に住居を与えられたに違いない。その際カマドの方向を東から北にかえたのは、まさに招かれた先の「宅地」の習慣に従ったのであろう。いっぽう8号堅穴建物の世帯はどうだろうか。実は8堅穴は上野2期の「宅地」に存在した12号堅穴建物とそっくりなのである。北カマド、地山削り出しの袖部、右脇の作り付けられた小土坑、カマド祭祀のピットなど、堅穴建物の作り方から、廃絶時の祭り方まで同一といっても良い。つまり上野3期に豪族の「客館」建設のため別の場所にいったん移転したその同じ世帯が、ふたたびこの「宅地」に戻ってきているのである。そして以前は豪族の居宅に関わって生活していたものが、今回は水田耕作と関わることになったわけである。おそらく「豪族居宅」が移転したのちも、この台地上の土地と湧水になお豪族の権利が残り、水田を開発したうえで、関係者の「宅地」をあてがって耕作と湧水の管理にあたらせたと考えられる。

野間I・L区 「宅地」復活

水田開発

道と祭祀坑

住人復帰

転用硯の廃棄 さて上野4期にはこのように変化するが、建物の方向は依然正方位にあわせている。おそらく「豪族居宅」が設定された際の正方位のプランがなお台地上では生きているのであろう。そして上野4期の終わる8号堅穴建物廃絶時に、その床面にまだ使える状態の転用硯が廃棄されるのである。豪族の居宅が移転した後、上野4期の「宅地」に住む人々に残された仕事は、水田耕作と湧水の管理、それにまつわる祭祀などにすぎなくなっていたと考えられることから、文字を使う必要がなくなっていると見られるのである。このような事態の変化を象徴するのが転用硯の廃棄ではあるまいか。

上野5期

野間M区の水田はやや拡大されるもののほとんど変わらず、水田に降りる道と祭祀坑は維持されている。一方集落は建て替えが進む。野間M区では東カマドを踏襲して30土坑から7号竪穴建物に変わり、野間I区では「宅地」内に15号竪穴建物が、9竪穴と同じ場所に北カマドを踏襲して、そのそばには2×3間の側柱建物である24号掘立柱建物が建てられる。祭祀人の住居はなくなり、系譜不明の西カマドをもつ10号竪穴建物が建てられる。いずれも正方位にあわせて建てられており、上野4期の状態を維持している。すなわち湧水の管理とそれを祭る祭祀人の住居が7竪穴で、水田耕作とその管理をおこなう人々の施設が野間I区の「宅地」である。

水田と道

「宅地」改修

こうして「豪族居宅」と倉庫群が移転した後も2時期にわたって同一系譜の住人が集落に居住したものと推定されるが、その集落も770年前後にこの場所から移転してしまう。おそらく残されたのは祭祀性がなくなった湧水と、それを利用した水田のみであり、建物のあった場所は原野に戻るか、畠になったと推定される。

その後

⑦ 建物の存続期間

以上の検討から明らかなことは建物の継続時間の短さである。掘立柱建物と竪穴建物は10年から10数年で頻繁に建て替わる。建て替えや引っ越しが頻繁におこなわれているのである。おそらくここに居住した人は一生のうち、上野台地への引っ越し、建物の建て替え、「宅地」の移転などをおして、数度にわたり、移転を経験しているのである。われわれが考える以上に簡単に建て替わるのである。この点は特に集落研究において頭に止めなければならない。

建物の短期性

註. 田崎博之「干潟遺跡出土土器の編年」『干潟遺跡』1980 福岡県教委

山村信榮「八世紀初頭の諸問題」『大宰府陶磁器研究』1995 森田勉遺稿集・追悼集刊行会

第3節 奈良時代以後

3-1 中世

奈良時代以後において継続的に利用されたのは、野間M区の湧水谷を利用した水田のみである。それ以外の遺構はほとんどなく、わずかに遺物の内容から憶測しうるにすぎない。

水田

遺構としては野間I区22号溝のみで中国同安窯青磁碗片が出土し、13世紀ごろの遺構と推定される。ほかに中世には野間M区の水田が継続していたと推定される。集落から離れた谷の水田として耕作されていたと考えられる。

遺物は12～13世紀の遺物として野間G・H区採集の陶器四耳壺片、野間G区13溝残留の竜泉窯産青磁碗底部再加工品、野間M区上層水田出土の竜泉窯青磁蓮弁碗片、野間M区水田上中層出土の中国玉縁口縁白磁碗と野間M区中層水田竜泉窯青磁蓮弁碗片2点などがある。

12～13世紀

16世紀の遺物も認められる。東原C区8号溝残留の中国景德鎮染付皿片、野間E・F区採集の明染付や畳付きに胎土目のある朝鮮李朝白磁碗底部などが出土している。ほかに滑石製石鍋口縁部が野間G・H区で採集されている。

16世紀

全体に12～13世紀の遺物と16世紀の遺物が多く、この二つの時期に、遺構は残していないもの水田耕作に関連して人々が頻繁に訪れる状況があったことがわかる。

3-2 近世以後

この台地上での奈良時代以来の大きな画期が訪れるのは近世である。集落が存在するわけではないが、台地全体が畠地耕作用に整備され、一部の斜面は耕作の便のために削平され、全体には境界

畠地整備

1910年代まで となる溝が掘られて、畠地の区画割りがおこなわれる。その際各所に道も整備されている。以上の区画と畠地境界溝は大きく変化することなく、1910年代の耕地整理による水田化まで用いられている。

① 畠地境界溝

18世紀 1888年頃の地籍図の地割りと基本的に一致する溝が多数発見されている。また調査によって明治中期つまり近代の耕地区画の起源が江戸時代中期に遡ることが判明した。

畠地境界溝の特徴

遺構と特徴を整理すると以下ようになる。

- 1、方形あるいは長方形の区画をつくり、周辺部は地形にあわせて矩形になっている。
- 2、溝に隣接して設けられた円形土坑は、畠用の肥溜めである場合がある。野間H地区B号土坑などである。
- 3、溝は境界であるとともに、道として機能している。谷に降りる溝には階段状に削りだす例が水場状遺構付近の12号溝で知られている。
- 4、平行して二重になる場合がある。そのあいだは道あるいは境界である。水場状遺構付近の10号溝と10号溝の間は野間L区の畠地へ向かう道になっている。
- 5、掘り直しがあり、少しずつずれていく。平原E・F区の2・4・5号溝。
- 6、断面形態にはU字形と逆台形がある。
- 7、大区画と小区画があり、次第に分割されていく状況が認められる。東原B・C区、野間I区などで認められる。
- 8、斜面においては一部削平をおこない、段落ちが形成される。野間E区24号溝付近。

掘削の時期

18世紀から 出土する遺物から推定する以外にない。基本的には18世紀後半から1910年代のものまでである。17世紀の遺物をほとんど見ないことからすると、18世紀代に畠地境界溝が掘られた可能性は高い。

底面の高低差からみると掘削の時期は2時期にわたる。地形に一致するものが古く、地形と無関係に水平なものは新しい。別に畠地の耕作が進み水平化が進んだ段階に、畠がさらに最分割されているようであるが、その時期は不明である。

第4節 まとめと課題—上野第1遺跡の奈良時代遺跡の性格—

最後に奈良時代の上野第1遺跡の全体像を検討しよう。

官衙ではない **豪族集落の規模と内部構造** 奈良時代の遺構が郡衙や駅家あるいは群倉などの官衙施設そのものでないことは、個々の掘立柱建物や高床倉庫を比べた場合、その規模の小ささから明らかである。

豪族集落内部構造 それゆえ上野第1遺跡の奈良時代の建物群全体を豪族居宅を中心とした豪族集落とみたい。すでに触れたようにそれは大型掘立柱建物から構成される居宅地区と、高床倉庫とその管理施設および住居からなる倉庫地区を中核に、時には祭祀地区と「客館」的施設を置き、道路さえ引き込んでいる。さらに周囲に豪族の家政に仕えたと推定される従者の「宅地」を点々と配置している。

正方位 全体を豪族集落と考えるのは居宅地区や倉庫地区のみならず、上野2・3期には建物の方向を一致させる正方位の磁場が「宅地」にさえ及ぶようになるからである。その規制は掘立柱建物のみならず堅穴建物にも及んでいる。その正方位の磁場の及ぶ範囲は、最大で東原地区と野間地区の東西250mにわたる。調査区外の北側にも当然遺跡は広がると推定されるので、上野台地東半には方二

方二町超 町をこえる規模の、建物の方向を統一的に規制した空間が存在していたと考えられる。しかも全面

的な建て替えがおこなわれた際には、東西両端の建物まで一斉に建て替えられている。このように遺跡全体に及ぶ統制があったと考えられる。規制を発する中心はおそらく居宅地区であり、その移動にともなって倉庫地区や周囲の「宅地」が移転させられているのである。しかも「宅地」の移転先は正方位の磁場の及ぶ範囲であることが、住居の移動例からみて明らかである。つまり周辺の「宅地」は豪族集落全体の再編計画にもとづいて、割り替えられるのである。恐らく上野2期に遺跡全体に正方位プランが設定された時に、その中に「宅地」の範囲と位置が決定されたものと推定される。このように規制された空間全体を豪族集落と考えたい。それは、全体として豪族居館と考えることもできる。しかしなお個々の施設や「宅地」を分割する明確な溝や柵列などは存在しないので、豪族の「館」とは呼べないし、「宅地」の居宅への従属性からみて単なる集落とも都市的な空間とも呼べない。古代豪族の「宅」のイメージに近いと考えられる。

「宅地」割替

豪族集落地の特異性 どうしてこのような大規模な豪族集落が、上野台地に建設されるのであろうか。旧石器時代から現代にわたる遺跡全体の変遷をみても明らかなように、上野台地のなかで集落が立地したのは弥生時代の台地北端部のみで、上野第1遺跡の立地する台地南部に、集落はいかなる時代にも存在しない。遺跡が存在するのは奈良時代のみであるといっても過言ではない。この奈良時代に遺跡についての特記すべき特徴をまず考えねばならない。

集落不適地

日田市内では、水田耕作不能の台地上に立地する奈良時代の遺跡として、小迫辻原遺跡が知られているが、そこは大形建物群がL字型に配置され、明らかに班田農民の集落とは異なった豪族の拠点である(註1)。上野第1遺跡もまったく同様な立地である。このように日田盆地でのそのような奈良時代の大規模遺跡の台地への進出は、郡司級の豪族の権力による背景が必要であったと思われる。しかしそれだけで上野台地に進出するだろうか。

小迫辻原例

駅路の存在 この遺跡が官衙施設そのものではないことは先に指摘した。「豊馬豊馬」銘の刻書石製品の出土から古代の日田郡に所在した石井駅ではないかという説も退けられる。

豪族権力

しかし上野台地上が中近世の三隈川南岸の主要交通路にあたる点と、古代の日田郡に所在した石井駅が三隈川南岸を領域とする石井郷のなかに存在する点からみて、石井駅に達する古代の駅路がこの上野台地上を通過していたことは、石井駅を三隈川北岸に想定しないかぎり、ほぼ間違いない。そう考えると上野第1遺跡の方二町をこえる範囲に広がる豪族集落は、その駅路に接して建設されていたと想定される。道路状遺構は駅路から直線的に湧水に向かって造成された可能性さえ指摘できるのである。

駅路の存在

駅家との関係 ところで豪族集落が建設された720年前後は、諸国は郷里制で編成されていた。『豊後風土記』によれば、その頃の日田郡は5郷14里1駅家であり、1郷3里の原則からして、駅家の置かれた郷は2郷からなる小郷と、独立した行政区画としての駅家からなることが指摘されている(註2)。そうすると日田郡の場合、石井郷は2里の小郷で、石井駅家がひとつの里に対応する行政単位であったことになる。その石井駅の中心施設を、最も可能性の高い場所である高瀬条里の広がる高瀬中位段丘上に考えた場合、上野第1遺跡はその1km以内の至近に存在する。おそらく郷里制の施行されていた715~740年ころの上野第1遺跡は、行政区画としての石井駅家の範囲に含まれていた可能性が高いことを指摘しておきたい。

郷里制
石井郷と
石井駅家

以上から、上野第1遺跡の豪族集落は、建設される前提として駅路の存在があり、また石井駅家と関係の深い郡司級の豪族が、石井駅家の領域の中に建設したものと考えられる。

《註および参考文献》

註1. 土居和幸・行時志郎『小迫辻原遺跡発掘調査概報』1990 日田市教育委員会

註2. 関和彦『風土記と古代社会』塙書房 1984

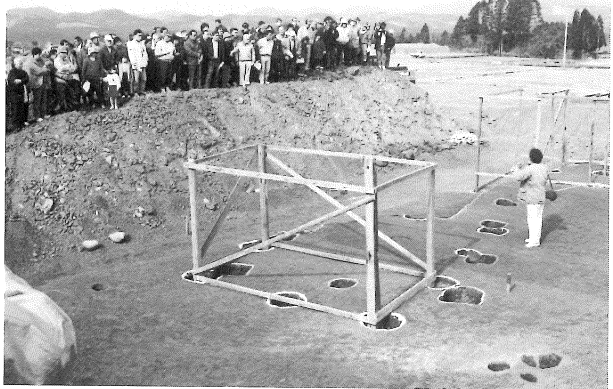
参考文献. 日野尚志「日田周辺における古代の歴史地理学的研究」『九州文化史研究所紀要』16 九州大学文学部

コラム 現地説明会

1993（平成5）年1月24日、日曜日に上野第1遺跡の現地説明会を催した。日田市教育委員会と建設省の協力のもと、埋め戻された東原地区を駐車場に、盛り上げた表土の山をならして展望台にして、野間地区の奈良時代集落の跡を見てもらった。当日は真冬にも関わらず好天にめぐまれ、参集した人は200人を超え、1988（昭和63）年1月の小迫辻原遺跡の現地説明会以来の人数と噂された。ちなみに小迫辻原遺跡の現地説明会は気温零下降雪のなかであった。

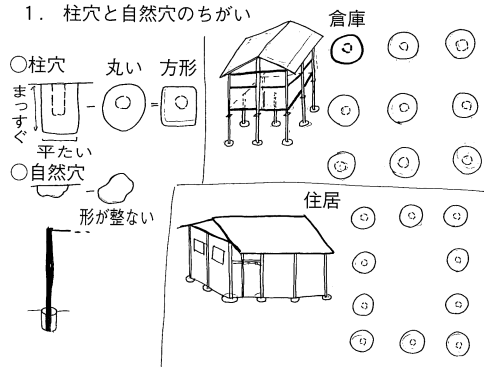
右の写真でもわかるように、掘立柱建物をイメージしてもらうために、木材を実際の柱穴に立て柱を組んでみた。この木材は冬の現場の必需である焚火のためもらってきた、廃材一軒分の一部である。説明は遺構を巡りながら、下の絵を大きくしたパネルを持っておこなった。田圃と畑以外なかった台地に、かつて奈良時代のいつとき村があり建物が連なっていたことにみんな驚いていた。

右の写真は、諸岡郁氏から提供していただいた。

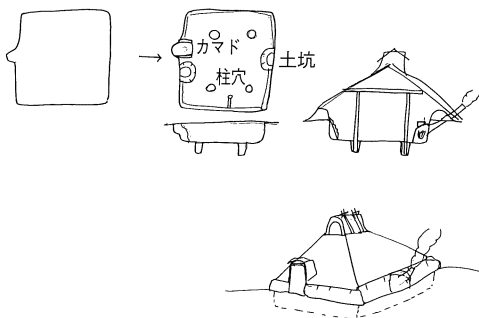


① 柱穴＝掘立柱建物

1. 柱穴と自然穴のちがい



② 竪穴住居



遺構一覽表
遺物觀察表

第1表 上野第1遺跡掘立柱建物跡および柱穴列一覧表

※梁間を2分した数値

遺構名	調査区	規模(梁間×桁行)	桁行(長軸)方向と方位角	桁行(長軸)長(cm)(中心距離)	梁間(短軸)長(cm)(中心距離)	床面積(m ²) ()は推定	規模	単位(タテ×ヨコ)	分類	時期	備考
1号掘立柱建物跡	東原A区	1以上×3	東西棟 94°	695	200以上	14.0以上	大型?	231×200	B-IIa類	奈良時代	北半調査区外。
2号掘立柱建物跡	東原A区	2?×1以上	南北棟? 352°	240以上	397	9.6以上	中型?	240×199	B-IIa類	奈良時代	北半調査区外。
3号掘立柱建物跡	東原A区	2×3	東西棟 105°	577~587(582)	395~402(399)	23.3	中型	199×199	C-I類	奈良時代	—
4号掘立柱建物跡	東原B区	2×2(総柱)	南北棟 4°	314~322(316)	256~268(262)	8.4	倉小型	159×131	B-IIa類	奈良時代	—
5号掘立柱建物跡	東原C区	2×3	東西棟 97°	418~431(425)	304~315(310)	13.1	小型	141×154	B-IIb類	奈良時代	—
6号掘立柱建物跡	東原C区	2×3	南北棟 12°	480~508(494)	322~342(332)	16.8	小型	164×166	B-I類	奈良時代	—
7号掘立柱建物跡	東原C区	2×3	東西棟 96.5°	600~602(601)	348~352(350)	21.1	中型	200×175	B-IIa類	奈良時代	2・3堅穴を埋めて建てる。
8号掘立柱建物跡	東原C区	2×2(総柱)	南北棟 7°	302~328(315)	256~310(283)	8.9	倉小型	157×142	B-IIa類	奈良時代	10土に切られる。
9号掘立柱建物跡	東原C区	2×2(総柱)	南北棟 8°	415~430(423)	293~310(301)	13.4	倉中型	211×150	C-IIa類	奈良時代	—
10号掘立柱建物跡	東原C区	3×5	南北棟 4°	950	453	(43.0)	特大型	190×151	A-IIa類	奈良時代	8建12建を切る。
11号掘立柱建物跡	東原C区	?×2以上	東西棟 92°	327以上	?	?	—	164×?	C類?	奈良時代	大半は調査区外。
12号掘立柱建物跡	東原C区	2×3	南北棟 7.5°	464	337	(14.0)	小型	154×168	B-IIb類	奈良時代	10建に切られる。柱8より刻書石製品出土。
13号掘立柱建物跡	東原C区	1以上×2以上?(総柱)	南北? 2°	378以上	171以上	8以上	倉中型	189×171	A-II?類	奈良時代	一部のみ検出。14・15建物に切られる。
14号掘立柱建物跡	東原C区	?×2以上?	南北? 7.5°	371以上	—	—	—	186×?	A類	奈良時代	13建物を切り、15建物に切られる。
15号掘立柱建物跡	東原C区	?×3	南北棟 5°	469	—	?	小型?	156×?	B類	奈良時代	13・14建物を切る。
16号掘立柱建物跡	野間F区	2×2(総柱)	南北棟 2°	330~332(331)	266~272(269)	8.9	倉小型	166×135	BまたはC-IIa類	奈良時代	—
17号掘立柱建物跡	野間F区	2×2(総柱)	南北棟 12°	326~347(337)	258~285(271)	9.1	倉小型	169×136	BまたはC-IIa類	奈良時代	—
19号掘立柱建物跡	野間F区	2×1以上	東西棟 110°	—	378	—	—	?×189	B類	奈良時代	大半を削平。
20号掘立柱建物跡	野間H区	1以上×3	南北棟 10°	640×658(649)	475~476(476)	30.9	大型	216×(238)※	A-IIb類	奈良時代	棟特柱をもつ。
21号掘立柱建物跡	野間I区	2×1以上(東ひさし付?)	南北棟 15°	411→568	—	—	大型?	206×?	B類	奈良時代?	北は大半が調査区外。
23号掘立柱建物跡	野間I区	3×4	東西棟 102°	724~756(740)	410~448(429)	31.8	大型	185×143	B-IIa類	奈良時代	西端が削平されている。10堅穴に切られる。
24号掘立柱建物跡	野間I区	2×3	東西棟 98°	401~415(408)	310~335(323)	13.1	小型	136×161	B-IIb類	奈良時代	25建物を切る。
25号掘立柱建物跡	野間I区	1×2	南北棟 11°	405~418(412)	268~272(270)	11.1	小型	206×270	B-IIb類	奈良時代	24建物に切られる。
26号掘立柱建物跡	野間E区	2×3(総柱)	東西棟 100°	416~426(421)	312~329(321)	13.7	倉中型	140×160	A or B-IIb類	奈良時代	西部を削平される。14堅穴と重複。
27号掘立柱建物跡	野間E区	2×3	南北棟 0°	600	365	(21.8)	中型	200×183	A-IIa類	奈良時代	西北部を削平。長側の柱穴は全て方形。

28号掘立柱建物跡	野間E区	2×3	南北棟	11°	481~492(487)	338	16.5	小型	162×169	B-I類	奈良時代	西北部を一部削平。 14竪穴を切る。
29号掘立柱建物跡	野間E区	3×? (北+西ひさし付?)	南北棟?	105°	435~552	—	—	大型	145×?	C類	奈良時代	南は大半が調査区外。 土55と重複。
30号掘立柱建物跡	野間I区	2×3	東西棟	100°	614~615(615)	394~402(398)	24.4	中型	205×199	A-I類	奈良時代	9竪穴を切り、8・15竪穴 に切られる。
32号掘立柱建物跡	野間I区	2×1以上	東西棟	104°	220以上	318	7以上	小型?	216×159	C-IIa類	奈良時代	西端を削平されている。 33建物と重複。
33号掘立柱建物跡	野間I区	2×3	東西棟	108°	467~469(468)	304~305(304)	14.2	小型	156×152	B-I類	奈良時代	西端を削平されている。 32建物と重複。
51号掘立柱建物跡	平原A区	2×3	南北棟	26°	648	412	(25.3)	中型	216×206	A-I類	奈良時代	—
52号掘立柱建物跡	平原A区	2×2?	東西棟?	66°	382	310~312(311)	11.9	小型	191×156	B-IIa類	奈良時代	53建物と重複。
53号掘立柱建物跡	平原A区	2×2以上	南北棟	33°	372以上	440	13以上	大型?	186×220	A-IIb類	奈良時代	北半は削平されている。 柱2・6は方形。
54号掘立柱建物跡	平原A区	1以上×3	東西棟	71°	485	—	—	小型	161×?	C類	奈良時代	北側大半は削平。 51溝に切られている。
遺構名	調査区	規模(梁間×桁行)	桁行(長軸)方向と 方位角	長さ(cm) (中心距離)	梁間(短軸)長(cm) (中心距離)	床面積(m ²) ()は推定	平均	分類	時期	備考		
1号柱穴列	東原C区	3間(4本柱穴)	南北	4°	400	—	—	B類	133	B類	奈良時代	—
2号柱穴列	東原D区	3間以上(4本柱穴)	東西	105°	288	—	—	C類	96	C類	奈良時代	—
3号柱穴列	野間H区	3間(4本柱穴)	南北	356°	365	—	—	C類	122	C類	奈良時代	周溝建物の付属施設。

第2表 上野第1遺跡竪穴建物跡一覧表

遺構名	調査区	平面形	長辺長(cm)	短辺長(cm)	長辺方向	床面積(m ²)	支柱穴数	柱間寸法(心心距離)	分類	カマド等	内部土坑	床面	カマド祭祀	時期	備考
1号竪穴建物跡	東原B区	長方形	330	280	東西 96.5°	8.3(小型)	0	—	B	地床炉(東北隈)	東北1ヶ所	ふみしめ	なし?	奈良時代	周溝あり。自然埋没。
2号竪穴建物跡	東原C区	方形	465	455	南北 11°	21.0(中型)	4	175×160	A1	カマドB1→B3(北壁中央)(つくりなおしあり)	東北2ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。床下土坑2ヶ所あり。カマド祭祀後埋立。→7建物に切られる。
3号竪穴建物跡	東原C区	方形?	480	480	南北? 0°	18以上(中型)	0	—	B	—	西南隈1ヶ所	貼り床	不明	奈良時代	一部周溝あり。人為的に埋め立てられている。→7建物に切られる。
4号竪穴建物跡	野間F区	方形	492	480	東西 104°	22.0(中型)	2	180	A2	カマドB2(北壁中央)	カマド北壁隈1ヶ所 東壁中央1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。一括廃棄により埋没。
5号竪穴建物跡	野間G区	長方形	480	410	南北 6°	18.0(中型)	0→2	380	B→C	カマドC(北壁中央)→B1(東壁)	東壁隈2ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	カマド祭祀後すぐぐに埋没。(ゴミ穴転用)
6号竪穴建物跡	野間G区	方形	340	330	南北 353°	9.0(小型)	0	—	B	カマドB2(西壁中央)	カマド北1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	周溝あり。カマド祭祀後埋立。→自然埋没。(ゴミ穴転用)
7号竪穴建物跡	野間G区	長方形	390	300	南北 9°	10.0(小型)	0	—	B	カマドB1(東壁中央)	カマド北1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	周溝建物を切る。自然埋没。(ゴミ穴転用)
8号竪穴建物跡	野間I区	方形	600	(560)	南北 —	30.0(大型)	0	—	B	カマドB3(北壁中央)	カマド東1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	9号穴と30建物とを切る。自然埋没(ゴミ穴転用)→。15号穴に切られる。
9号竪穴建物跡	野間I区	長方形	480~490	400~410	東西 119°	18.0(中型)	0	—	B	カマドA(北壁中央)	西壁隈1ヶ所 東北隈1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。自然埋没。(ゴミ穴転用)→30建物に切られる。
10号竪穴建物跡	野間I区	長方形	380	320~350	南北 15°	12.0(小型)	0	—	B	カマドA(西壁中央)	カマド南1ヶ所 東壁隈1ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	一部周溝あり。カマド祭祀後に埋め戻し。
11号竪穴建物跡	野間I区	長方形	370~390	330~350	東西 102°	12.0(小型)	2	300	C	カマドB2(北壁中央)	なし	ふみしめ	あり	奈良時代	12号穴を切る。自然埋没。(ゴミ穴転用)
12号竪穴建物跡	野間I区	長方形	500~510	380	東西 101°	19.0(中型)	0	—	B	カマドA(北壁中央)	カマド周囲3ヶ所	ふみしめ	あり	奈良時代	11号穴に切られる。カマド祭祀後埋め戻し。整地。
13号竪穴建物跡	野間E区	方形?	420	300以上	(南北) 16°	12以上	0	—	B	カマドB2(西壁中央)	西北隈1ヶ所 北壁中央1ヶ所(54土)	不明	あり	奈良時代	大半を削平されている。
14号竪穴建物跡	野間E区	長方形	480以上	(420)	東北 8°	(20.0)(小型)	0?	—	B	カマド(西壁中央)	—	ふみしめ	—	奈良時代	大半を削平される。人為的に埋立られる。→28建物に切られる。
15号竪穴建物跡	野間I区	長方形	390	(320)	東西 103°	11.7(小型)	0	—	B	カマドB3(北壁中央)	カマド東1ヶ所	貼り床	あり	奈良時代	9・8号穴と30建物とを切る。自然埋没。(ゴミ穴転用)

第3表 上野第1遺跡土坑一覧表

調査区	遺構名	形状 (平面・底面)	分類	規格(cm)		時期	用途	遺物廃棄・埋没状況	備考
				長さ	巾 深さ				
東原A区	1号土坑	長円形-皿状	B1	224	128	奈良時代	廃棄土坑	東側から、土器・焼土などを投棄。	3建物に付設。
東原A区	2号土坑	不定形-凹凸	E3	396以上	180~210	近世	不明	近世・近世の陶磁器含む。	1・2・3溝と同一時期。
東原A区	A号土坑	円形?-柱穴状	A?	100	36以上	近世	不明	焼土・炭層が互層となる。近世陶磁器含む。	—
東原B区	3号土坑	長方形-階段状	C4	195	136	奈良時代	土取り?	西側より焼土土器廃棄(2層)	遺物は、4土坑と2堅穴の出土遺物と接合する破片あり。 長軸方位角91°
東原B区	4号土坑	長円形-皿状	B1	300	180以上	奈良時代	廃棄土坑	南側から焼土・炭土器等が短期間に廃棄されている。	上半はかなり、水田造成時に削平されている。
東原B区	5号土坑	長方形-階段状	C4	145	130	近世	—	—	上半はかなり、水田造成時に削平されている。長軸方位角15°。→近世溝の方向と一致する。
東原B区	7号土坑	方形-平坦	C2	173	163	近世	—	二層にわかれ、1層は故意に埋めた土。	3溝にとりつくように掘られている。 長軸方位角105°
東原C区	8号土坑	不定形-凹凸	E3	285	100~150	奈良時代	—	—	7建物-柱穴2に切られる。
東原C区	9号土坑	長円形-皿状	B1	238(185)	120(90)	奈良時代	不明	3層にわかれ、上・中層に焼土・炭・土器小片含む。	廃棄土坑。
東原C区	10号土坑	長円形-階段状	B4	294	188	奈良時代	土取り	6層にわかれ、2層と4・5層に2回の一投廃棄がみられる。	8建物を切る。 7建物-8柱の出土遺物と接合。
東原C区	11号土坑	湾曲した船底形-皿状	D1	373	186	縄文時代	不明	単層(地山土のプロックと土器片含む)。	2堅穴に大半が破壊されている。
東原C区	12号土坑	長円形-皿状	B1	145	105	近世	—	基礎層のプロックを多く含む、無遺物。	7溝に切られる。
東原C区	13号土坑	長円形-凹凸	B3	144	118	奈良時代	土取り?	廃棄土坑化	土取り目的の穴か。 一カ所が深くなっている。
東原C区	14号土坑	不定形-凹凸	E3	520	250~300	奈良時代	廃棄土坑	2層に分かれ、下層一括廃棄のち廃棄土坑化	3堅穴1層と接合。 (建物建て替え時の片付け用か)
東原D区	15号土坑	長円形-皿状	B1	104以上	121	奈良時代	廃棄土坑	廃棄土坑化	—
東原C区	16号土坑	円形?-皿状	A1?	103	56以上	近世	—	単層	—
東原G区	19号土坑	長円形-平坦	B2	450	440	奈良時代	不明	上層と下層の2度遺物一括廃棄がある。	用途不明→ゴミ穴転用。5堅穴と接合。
東原G区	20号土坑	長円形-平坦	B2	107	83	奈良時代	不明	最下層に焼土・炭を多量に含む。→焼却廃棄物を投棄。	1層出土遺物(No.1)は道路状遺構の土17と接合
東原G区	22号土坑	不定形-平坦	E2	220	175	奈良時代	廃棄土坑	焼土・炭等が多量に廃棄。	—
東原G区	23号土坑	円形-凹凸	A3	193	171	奈良時代	自然土坑	—	底面に径5~10cmの小ピットが多数。 木の株の可能性高い。

調査区	遺構名	形状 (平面-底面)	分類	規格 (cm)			時期	用途	遺物廃棄・埋没状況	備考
				長さ	巾	深さ				
野間G区	24号土坑	長円形-平坦	B2	94	67	10	奈良時代	不明	—	—
野間G区	25号土坑	長円形-皿状	B1	115	74	23	奈良時代	不明	—	—
野間H区	26号土坑	長円形-皿状	B1	85	56	15	奈良時代	不明	焼土ブロックを多くまじる。→堅穴を片付け用?	カマド側石片か。11堅穴カマド2と接合。
野間G区	28号土坑	船底形-皿状	D1	172	58	20	奈良時代	不明	—	—
野間G区	30号土坑	長方形-平坦	C2	435	283	10	奈良時代	不明	焼土・土器片などが集中する地点が2ヶ所ありその際上から掘りこみがある。	カマド側石の破片が3点含む。堅穴建物
野間H区	31号土坑	船底形-皿状	D1	416	132	32	奈良時代	不明	中層に一括廃棄。	5堅穴と周溝建物と接合。
野間H区	34号土坑	長円形-平坦	B2	164	55以上	35	近世	不明	—	10溝の底部に掘りこまれている。
野間H区	B号土坑	長方形-平坦	C2	150	125	95	近世	肥溜め	灰色の有機物堆積。	16溝と一連の施設、野外便所とも考えられる。
野間J区	38号土坑	長方形-階段状	B4	263	195	36	奈良時代	土取り?	廃棄土坑化して埋没。	土取り穴をゴミ捨て穴に転用したものが。
野間J区	39号土坑	不定形-平坦 (くずれた円形)	A?2	140	130	25	縄文時代	貯蔵穴?	深鉢の大型破片が底部に出土。 (→廃棄土坑化)	—
野間L区	40号土坑	長方形-平坦	C2	170	130	26	奈良時代	炉	炭化材層が下部に広がり、焼土・炭片が多量にすてられている。	側面の四周が被熱している。
野間L区	44号土坑	不定形-皿状	E1	236	182	52	奈良時代	埋納坑	底面に破碎された須恵器製の破片が堆積。	祭祀土坑。
野間J区	45号土坑	不定形-凹凸	E3	307	233	135	奈良時代	粘土採取坑	青灰色粘土層で、タコ足状の横坑を四方に掘る。→廃棄土坑化	5堅穴と4堅穴と接合。
野間I区	102号土坑	長円形-階段状	B4	170	136	37	奈良時代	土取り?	自然埋没 (土器片は少ない)。	土器少く廃棄土坑化していない。
野間E区	52号土坑	長円形?-平坦	B2	350	193	37	奈良時代	不明	廃棄土坑化して埋没。	一見不定形に見えるが、3つの土坑が重なっている可能性高い。中央は廃棄土坑。
野間E区	53号土坑	長円形-皿状	B1	145	52	17	奈良時代	—	土器はないが焼土・炭・礫が含み、廃棄土坑化して埋没。	1ヶ所小ピットがある。
野間E区	54号土坑	長円形-凹凸	B3	170	99	28	奈良時代	不明	廃棄土坑化して埋没。	13堅穴の付属施設か?
野間E区	55号土坑	不定形-平坦	E2	230	160以上	15	奈良時代	不明	廃棄土坑化しているが本来の掘削目的不明。	29建物と重複。
野間F区	17号土坑	円形-平坦	A2	130	118	8	不明	不明	中央にピットがあり、その土に焼土がかかぶる。	—
野間G区	60号土坑	長円形-皿状	B1	100	63	20	奈良時代	不明	底部に焼土ブロックを多く含む。	—
野間G区	61号土坑	長円形-平坦	B2	93	80	15	奈良時代	不明	炭・焼土・土器片を一括廃棄。	19土坑と接合。

野間G区	62号土坑	船底形-皿状	D1	200以上	38	10	奈良時代	不明	—	—
野間M区	301号土坑	円形-平坦	A2	77	75	43	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	302号土坑	長円形-平坦	B2	141	96	23	奈良時代	不明	大型須恵器片集中	水田下で検出。
野間M区	303号土坑	円形-平坦	A2	83	67	45	奈良時代	不明	—	水田下で検出。 304土坑を切る。
野間M区	304号土坑	円形-皿状	A1	168	153	37	奈良時代	不明	—	水田下で検出。 303土坑に切られる。
野間M区	305号土坑	不定形-平坦	E2	210	100	18	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	306号土坑	長円形-平坦	B2	142	95	15	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	307号土坑	不定形-階段状	E4	170	121	30	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	308号土坑	長円形-階段状	B4	105	70	25	奈良時代	不明	—	水田下で検出。 318土坑を切る。
野間M区	309号土坑	不定形-平坦	E2	179以上	132	10	奈良時代	不明	—	水田下で検出。 水田D-15区出土遺物と接合。
野間M区	310号土坑	不定形-平坦	E2	234	228	25	奈良時代	不明	—	水田下で検出。 3つないし4つの土坑が重複した可能性高い。
野間M区	311号土坑	不定形-平坦	E2	287	163	10~15	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	312号土坑	溝状-皿状	F1	580	20~40	20	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	314号土坑	不定形-皿状	E1	111	102	10	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	315号土坑	長円形-皿状	B1	104	77	5	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	316号土坑	不定形-皿状	E1	121	76	10	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	317号土坑	長円形-皿状	B1	92	62	23	奈良時代	不明	—	水田下で検出。
野間M区	318号土坑	方形-平坦	C2	130	107	18	奈良時代	不明	—	水田下で検出。 水田下で検出。 308土坑に切られる。
平原A区	201号土坑	不定形-皿状	E1	370以上	210~280	30	奈良時代	不明	—	51建物に近接。
平原B区	203号土坑	長円形-皿状	B1	310	190	25	奈良時代	不明	—	廃棄土坑化していない。
平原D区	204号土坑	長方形-平坦	C2	270	200	20~25	不明	炉?	—	廃棄土坑化していない。 四周の壁は被熱し、底部に炭片が堆積。長軸方位角35°。
平原E区	211号土坑	長円形-平坦	B1	172	133	8	縄文時代	不明	—	—
平原E区	212号土坑	不定形-平坦	E2	380	200以上	5~15	縄文時代	不明	—	—
平原E区	213号土坑	不定形-皿状	E1	143	74	33	縄文時代	不明	—	底部の一部が被熱。
野間F区	1号焼土坑	長円形-皿状	B1	82	40	13	奈良時代?	不明	—	底面が被熱し、焼土が堆積する。

第4表 上野第1遺跡溝一覽表

遺構名	調査区	断面形態	長さ(m)	最大幅(m)	最小幅(m)	方向と方位角	底面勾配	時期	備考
1号溝	東原A区	U字形	21.5以上	0.6	0.5	東西 103°	東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 2溝に並行・1建物を切る。
2a号溝	東原A区	U字形	23.0以上	1.7以上	1.1	東西 103°	東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝→1910年代に埋没。 1溝に並行・1土坑を切る。
2b号溝	東原A区	U字形	6.5以上	0.5	0.4	東西 103°	東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 1溝に並行。
3号溝	東原B区	U字形	42.5以上	2.15	0.8	—	東から西へ低くなる 西半分は平坦	近世～近代	島地境界溝。 ゆるく湾曲。
4号溝	東原B区	逆台形	10.1以上	1.15	0.8	南北 14°	南から北へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 3溝と6溝に直交し、6溝から派生。 5溝を切る
5号溝	東原B区	U字形	14.8以上	0.4	0.35	東西 119°	東から西へ低くなる	近世	4溝・6溝・5土坑に切られる。
6号溝	東原B区	U字形	35.5以上	2.5以上	—	東西 103°	東から西へ低くなり、 西半分は平坦	近世～近代	島地境界溝。 3溝と並行。 5溝・4土坑を切る
7号溝	東原C区	U字形	25.0以上	2.5	1.0	東西 110°	東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 8溝と直交。 12土坑と重複。(前後不明)
8号溝	東原C区	U字形	6.5以上	1.4	0.9	南北 20°	南から北へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 7溝と直交。 多量の礫が廃棄されている。
9号溝	野間F区	U字形	30.0以上	1.8	1.1	南北 20°	ほとんど水平	近世～近代	島地境界溝。
10号溝	野間H区	U字形	南北29.0以上 東西14.0	1.5	1.0	南北 —	北から南へ低くなる 西から東へ低くなる	近世～近代	J字形の島地境界溝。 道路状遺構と水場状遺構を切る。
12号溝	野間H区	U字形	21.0以上	2.0	1.3	逆L字形 —	南から北へ湧水点に 向かって低くなる	近世～近代	島地境界溝。 水場状遺構を切る。 10溝と向かいあう。
13号溝	野間G区	U字形	22.0	1.2	0.8	東西 110°	東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 10溝と連続。→1910年代に埋没。
14号溝	野間I区	逆台形	11.0以上	1.5	1.4	南北 —	北から南へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 39土坑と15溝を切る。
15号溝	野間I区	U字形	11.8以上	2.4	1.9	南北 —	北から南へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。 溝14に切られる。
16号溝	野間H区	逆台形	8.0	0.6	0.3	逆L字形 —	湧水点に向かって低く なる	近世～近代	B土坑(肥溜め)と連続する

19号溝	野間JL区	U字形	21.0以上	4.7	0.8	南北 —		北から南へ低くなる	奈良時代	45土坑を切り、44土坑と連続。谷におりる道。
20号溝	野間L区	W字形	24.0以上	1.1と1.6	1.0と1.3	西北～東南 —		東から西へ低くなる	近世～近代	二本で一連。島地境界溝。
22号溝	野間I区	逆台形	10.8以上	2.0	1.1	逆L字形 —		水平	中世	西端は削平。10壁穴と23建物を切る。
24号溝	野間E区	U字形	31.0以上	1.0	0.7	南北 —		北から南へ低くなる (途中ほとんど水平)	近世～近代	島地境界溝。1910年代の水田化時に上部を削平。
25号溝	野間E区	U字形	9.2以上	1.0	0.5	東西 107°		東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝→1910年代に埋没。
30号溝	野間M区	U字形	7.3以上	1.1	0.6	南北 —		北から南へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。
31号溝	野間M区	U字形	33.0以上	1.8	0.5	東西 —		東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。
32号溝	野間M区	U字形	40.0以上	0.8	0.5	東西 —		東から西へ低くなる	奈良時代	水田側溝。33溝を切る。
33号溝	野間M区	U字形	40.0以上	1.0	0.5	東西 —		東から西へ低くなる	奈良時代	水田側溝。32溝に切られる。
51号溝	平原A区	U字形	3.1以上	1.5	—	南北 —		南から北へ低くなる	近世～近代	島地境界溝→1910年代に埋没 54建物を切る。
1号溝	平原E区	U字形	13.0以上	1.0	0.5	南北 —		南から北へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。3溝と連続。
2号溝	平原E.F区	U字形	25.0以上	2.0	1.0	東西 —		東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。5溝に切られる。
3号溝	平原E区	U字形	9.0以上	1.5	—	東西 —		東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。1・6溝と連続4溝に切られる。
4号溝	平原E区	U字形	21.0以上	1.2	0.7	東西から南北に曲がる		東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。1・3溝を切る。
5号溝	平原E区	U字形	19.0以上	2.5	1.5	東西から南北に曲がる		東から西へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。4溝を切る。
6号溝	平原E区	U字形	8.0以上	0.3	0.2	南北 —		南から北へ低くなる	近世～近代	島地境界溝。3溝に連続。

第5表 東原地区出土遺物観察表
東原A区一試掘1・2トレンチ

4章3図P32

NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考				
				長さ (6.6)	幅 (6.8)	厚さ 1.2		外形	調整	色調	使用痕	備考
1	1トレンチ・3.4層中	扁平打製石斧	結晶片岩	規格()つぎは復元径・単位(cm)	口径	胎土	横上 ロクロ 高台はりつけ	回転ヨコナテ (底)ヘラ切り未調整	回転ナテ→回転ヨコナテ	淡青灰色	—	高台(底部)径9.6cm 奈良時代 胎土:極小白色粒多い
2	2トレンチ・3.4層中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	—	—	—	—	—	—

東原A区一3号掘立柱建物跡

4章7図P35

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整			色調	使用痕	備考
				器高	口径	口径			外面	内面	内面			
1	1柱穴7	須恵器	甕	—	—	砂粒少ない 石英含む	タタキ成形	ヨコナテによる丁寧な仕上げ	同心円文	青灰色(断)短青灰	—	柱抜き後に混入		

東原A区一1号土坑

4章9図P36

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整			色調	使用痕	備考
				器高	口径	口径			外面	内面	内面			
1	2b層一括	須恵器	坏蓋	(2.0)	(16.0)	砂粒多い 雜入	積上げ ロクロ成形	回転ヘラケズリ・回転ヨコナテ	—	淡黒灰色・(断)淡黒灰色 部分的に自然釉	—	完形つまみ径(2.7~2.8cm)胎土に1~3mm大の石英多く含む		
2	1b層一括	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	—	(外)ヨコナテ(内)ナテ	—	茶褐色	—	—		
3	2b層一括	須恵器	甕	—	—	砂粒少ない 雜入	タタキ成形	平行タタキ	放射状あて具痕	(外)淡青灰色 (内)濃青灰色	—	胎土に1~3mm大の小石英多い		
4	2層+2a層	土師器	精製甕	—	(23.6)	精製胎土A 砂粒少ない	積上げ	指圧痕残るヨコナテ	平滑なナテ	茶褐色	—	胎土:極小長・角多い		
5	2層	土師器	精製甕	—	(13.4)	精製胎土	?	指圧ナテ・ヨコナテ	—	茶褐色	—	口縁部 胎土(赤色粒子・長石多い)		
6	2a層	土師器	精製坏	—	(19.7)	精製胎土A 砂粒少ない	?	手持ちヘラケズリ→ナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	—		
7	2層	土師器	精製坏	(3.8)	(18.5)	精製胎土A 砂粒少ない	積上げ (内傾接合)	手持ちヘラケズリ→ナテ 消す	丁寧なナテ	淡明褐色	—	—		
8	2+2a層	土師器	甕	—	(24.3)	砂粒多い 在地	積上げ	ナテ→(口)ヨコナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土1mm大の長・角多く、2~3mm大の白・赤 多		
NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考						
9	2b層	石皿片	安山岩	長さ (10.0)	幅 (7.5)	厚さ 4.0	(483.0)	破片・両面に研磨						

東原A区一2号土坑

4章11図P37

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整			色調	使用痕	備考
				器高	口径	口径			外面	内面	内面			
1	1埋土中	縄文土器	深鉢	—	—	砂粒多い 在地	—	ナテ	ナテ	茶褐色	—	底径8.2cm 胎土1mm大の長・角・白・赤多い・残留遺物		

4章13図P38

東京A区-1号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1層	弥生土器	甕底部	—	—	砂粒多い 在地	—	タテハケ	ナテ	淡褐色(内)黒色	—	残留遺物 やや上げ底・底径5.0cm 胎土1mm程度の長・角赤多い
2	1層	陶器	摺鉢	—	—	—	ロクロ成形	回転ヨコナテ・(底)回 転糸切り	密接したカキメ	赤色釉が全体に入る	—	江戸時代・底径11.6cm
NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		備考						
3	1層	砥石	頁石	長さ (10.0)	幅 5.0	厚さ 3.3	重量 (単位g) (292.8)	半折				

4章14図P38

東京A区-2号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中	肥前磁器染付	端反碗	—	—	—	—	—	—	—	—	格子文・1810~1860年代

4章17図P41

東京B区-表面採集

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	3・4層	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	—
2	表採	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 撥入	ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラケズリ	—	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い
3	3・4層	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 撥入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	底部
4	3・4層	須恵器	長頸壺	—	—	砂粒少ない 撥入	ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	黒色	—	口縁部

4章19図P41

東京B区-1号土器棺

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	土器棺下甕	土師器	壺	—	—	砂粒多い 在地	—	ナテ	平滑なナテ	茶褐色	—	底部は埋葬時に打ち欠く

4章21図P42

東京B区-4号掘立柱建物跡

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴6	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 撥入	ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土・石英粒多い
2	柱穴5-2層埋土	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 在地	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	—
3	柱穴2-2層埋土	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	横上げ ロクロ成形	ヨコナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	—
4	柱穴7	製埴土器	樽埴用筒埴形B (六連式)	—	—	砂粒少ない 撥入	型造り	指圧痕	布目痕→ナテ	淡褐色	不明瞭	—
5	柱穴5	製埴土器	埴埴用逆錐形 A	—	—	砂粒多い 撥入	手づくね	指圧痕→粗いナテ	ナテ	明瞭褐色	2次加熱による 赤変	胎土・金雲母多い

東原B区-1号竪穴建物跡

4章23図P43

NO	出土位置・遺構	種別	石材	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				長さ	幅			外面	内面			
1	床面直上	鉄器	刀子	(3.1)	0.8~0.1	0.2~0.4	—	ヨコナテ	ヨコナテ	淡青褐色	—	—
刀部残長(2.8cm)かなりつかいこまれて細く、薄くなっている。先端と基部は欠失												

東原B区-3号土坑

4章25図P44

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	2層-拵	土師器	精製坏身	—	—	精製胎土A 砂粒少ない	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡青褐色	—	—
2	2層-拵、接合資料①	土師器	甗	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナテ、一部ヨコナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	B区-4土坑・2層中出土破片と接合
3	2層-拵	土師器	小型鉢	—	17.8	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	—

東原B区-4号土坑

4章26図P44

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	拵張-北半	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 石英少し	ロクロ成形	ヨコナテ	ヨコナテ	淡青灰色	—	—
2	拵張-北半	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒多い 搬入	ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い
3	1~2層	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い
4	拵張-北半	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・(底)回転ヘラ切り	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土小石英含む
5	1~2層	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	ヨコナテ・回転ナテ	濃青灰色	—	高台剥離
6	2層	須恵器	坏身	(4.0)	(15.0)	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・(底)ヘラ切り	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	復元高台底径(9.0cm)
7	2層	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 石英多い	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・(底)ヘラ切り	ヨコナテ・回転ナテ	淡青灰色	—	高台底径(8.2cm)石英目立つが胎土は精緻である
8	2層跡土中	土師器	精製坏	—	15.4	精製胎土A 砂粒少ない	横上げ	口縁:ヨコナテ 手持ちヘラケズリ0ヘラ ナテ	ナテ	明橙褐色	—	—
9	拵張-北半	土師器	甗	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナテ・ナテ?	ヨコナテ→ヘラケズリ	茶褐色~黒褐色	—	黒半あり

東原B区-各ピット

4章29図P46

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	ピット2	土師器	甗	—	19.4	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナテ・ナテ	ヨコナテ・ヘラケズリ	茶褐色	—	—
2	ピット2	土師器	甗	—	(21.0)	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ・ヘラケズリ	茶褐色	—	—
3	ピット3	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	—

4章31図P47

東原B区一3号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1層	細文土器	深鉢底部	—	—	砂粒多い 在地	—	ナテ	—	明褐色	—	底径(9.0cm) 晩期中葉
2	埋土中	須恵器	坏身	—	—	石英多い 織入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ(底)へラ切り	回転ヨコナテ・ロクロナテ	淡青灰色	—	—
3	埋土中	寛永通宝	新寛永 (1697年初鋳)	—	径2.1	—	—	—	—	—	—	孔辺5mm
4	埋土中	肥前磁器染付	碗	4.6	(10.0)	—	—	—	—	—	—	底径(4.2cm) 梅樹文。1750~1780年代

4章36図P49

東原B区一6号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中	磁器	肥前染付碗	—	—	—	ロクロ成形	—	蛇目細はぎ (文)五弁花	—	—	18世紀後半 底径(4.8cm)
2	埋土中	陶器	碗	—	—	—	削り出し高台	鉄軸	—	胎:淡褐色 釉:濃茶色	—	内面に胎土目が3ヶ所あり 底径(4.2cm)
3	埋土中	陶器	碗(福岡産)	—	—	—	削り出し高台	鉄軸	—	濃茶色	—	底径(4.2cm)

4章38図P50

東原C・D区一表面採集

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	D区3層 表土中	細文土器	浅鉢	—	—	砂粒多い	横上げ	?	条痕	淡茶褐色 黒色	—	波状口縁 口縁部
2	D区3層 表土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転へラ ケズリ	回転ヨコナテ	濃青灰色	—	かえりがつく
3	D区3層	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	—
4	D区3層 表土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡灰色	—	—
5	D区3層 表土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転へラ切り	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	底部(8.4cm)
6	D区3層 表土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転へラ切り	回転ヨコナテ	濃青灰色	—	底部(7.2cm)
7	C区3層 表土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色 (胎)茶色	—	底部(7.6~8.0cm) 貼付高台
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ()つぎは破片・単位(cm)		重量 (単位g)		備考				
8	D区3層 表土中	キセル	材質 銅	4.1	—	高さ1.9	—	銅板の接合部がはげている				
9	D区表面採集	台形石器	腰岳産黒曜石	2.8	2.0	0.7	2.9	—				
10	D区3層	石核	腰岳産黒曜石	7.2	3.8	3.4	76.8	90%自然面残す				

東京C区—6号掘立柱建物跡

4章44図P55

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴9	須惠器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	白灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い。	
2	柱穴9	須惠器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	—	
3	柱穴1	須惠器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	ナテ	淡青灰色	—	つまみ径2.3cm	
4	柱穴1	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない	ロクロ成形	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	底径7.8cm	
5	柱穴9	土師器	甗	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナテ	明橙色	—	胎土に黒曜石含む 口縁部	
6	柱穴9	土師器	鉢	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナテ→ヨコナテ	淡褐色	—	口縁部	

東京C区—7号掘立柱建物跡

4章47図P57

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴8 接合資料⑥	須惠器	坏身	5.1	14.8	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い。 高台径9.4cm。→10土坑2層と接合	

東京C区—8号掘立柱建物跡

4章49図P58

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴3-1層 接合資料⑦	須惠器	壺	—	—	砂粒少ない 織入	タタキ成形	カキメ 格子状アテ具痕	淡青灰色 (断) 茶色	—	胎土1~2mm大の石英多い。 →建物10-柱穴Gと接合	

東京C区—9号掘立柱建物跡

4章51図P58

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴6	須惠器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	—	

東京C区—10号掘立柱建物跡

4章53図P60

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴8	須惠器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ ケズリ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い。	
2	柱穴13	須惠器	壺	—	—	砂粒少ない 石英含む	タタキ成形	平行タタキ→カキメ 同心円文	淡褐色 (断) 青灰色	—	胴部	
3	柱穴14	土師器	精製蓋	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナテ	淡褐色	—	口縁部	
4	柱穴11	土師器	精製小碗 (ミニチュア)	—	5.0~5.5	砂粒少ない 精製胎土A	手づくね	指圧痕 ヨコナテ	明橙褐色	—	口縁部 1/6片	

東京C区一2号竪穴建物跡

4章67・68区P71・72

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは径単位(cm)	胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
							外面	内面			
1	柱穴4・柱痕内	須恵器	坏	—	砂粒少ない 石英含む	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ		白色 生やけ	—	口縁部No.2と同一個体
2	埋土・床面直上	須恵器	坏身	—	砂粒少ない 石英含む	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ切り		淡青灰白色 生やけ	—	底径(12.4cm) No.1と同一個体
3	カマド祭祀 接合資料②	土師器	精製壺	—	精製胎土A 雲母片多い	横上げ	丁寧なナテ		淡褐色	—	胴部、→土坑3.2層と接合
4	カマド祭祀	土師器	精製壺	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ナテ	ヘラナテ	明褐色	—	
5	カマド祭祀	土師器	精製高坏	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	手持ちヘラケズリ	ナテ	茶褐色 淡褐色	—	—
6	カマド祭祀	土師器	精製坏	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	指圧痕・ヨコナテ→不定方 向のヘラケズリ	ヨコナテ・ナテ	淡褐色	—	口縁部 内側にヘラ記号
7	カマド祭祀 接合資料③	土師器	精製坏	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	指圧後ヨコナテ	ヨコナテ・ナテ	茶褐色 明褐色	—	口縁部 14土坑1層と接合
8	カマド祭祀	土師器	鉢	(10.0)	砂粒多い 在地	横上げ	ナテ→ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケズリ	茶褐色	赤変→二次加熱	—
9	焼土混層中・1次廃棄	土師器	甕・壺?	—	砂粒多い 在地	横上げ	丁寧なナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	—
10	床面直上1次	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ		淡青灰色	—	—
11	2次カマド・ピット・ 土坑2内	土師器	精製壺	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヘラナテ→ヨコナテ	ヨコナテ・ナテ	明橙褐色	—	口縁部
12	床面近い・1次廃棄	土師器	精製坏	—	砂粒少ない 精製胎土A	不明	ヨコナテ	不明	淡褐色	—	底部
13	土坑2・1次廃棄	土師器	精製坏	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ナテ→亀裂入る・手持ちヘ ラケズリ	指圧痕・ナテ	明褐色	—	口縁部
14	3層	須恵器	坏蓋	18.0	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	ケズリ→回転ヨコナテ→ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナテ	青灰白色	—	(完形)胎土1mm大の石英含む
15	1~3層	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	表面風化激しい
16	竪穴埋土中	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ		淡青灰色	—	胎土1~3mm大の石英多い。
17	3.2層	須恵器	坏身	3.9	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ		淡青灰色	—	貼付高台
18	竪穴埋土中	須恵器	坏身	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ 切り	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い。 底部
19	3層	須恵器	甕	—	砂粒少ない	タタキ成形	平行タタキ	同心円文	淡褐色 茶褐色	—	胴部
20	3層	土師器	精製壺	—	精製胎土A	不明	ヨコナテ		明淡褐色	—	口縁部
21	3層	土師器	精製壺	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナテ		明褐色	—	口縁部
22	1~3層(上層)	土師器	精製甕 把手	—	精製胎土A 雲母片多い	手づくね	指ナテ		淡褐色	—	把手
23	竪穴埋土中 (土坑2の上層)	土師器	精製坏	3.0	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	手持ちヘラケズリ→ナテ	丁寧なナテ・粗いナテ	淡褐色 淡橙褐色	—	(完形)
24	竪穴埋土中	土師器	精製坏	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナテ		明赤褐色	—	口縁部

25	竪穴埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 雲母片多い	横上げ	ヨコナデ	明褐色 茶褐色	—	口縁部
26	3層	土師器	精製坏	—	(12.0)	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナデ・剥離	明褐色	—	口縁部
27	3層	土師器	精製坏	—	(14.8)	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナデ・指ナデ・手持へ ラケズリ	明褐色	—	口縁部
28	3層	土師器	精製坏	—	(15.6)	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナデ	淡褐色	—	口縁部
29	3層	土師器	甌	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(4本/1cm)→ヨコ ナデ	茶褐色	—	口縁部
30	3層	土師器	小型鉢	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ・ナデ	淡褐色	—	口縁部
31	残留	縄文土器	鉢	—	—	砂粒多い	横上げ	4条沈線	淡褐色	—	口縁部
32	残留	縄文土器	深鉢底部	—	—	砂粒多い	横上げ	剥離?	淡褐色	—	底径(7.4cm)

4章70図P73

東京C区一3号竪穴建物跡

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	竪穴埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	濃青灰色	—	—	—
2	1層 接合資料④	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 摺入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ(自然軸)	濃青灰色・ 濃灰色	—	—	胎土に1mm大の石英多い。 14土坑と接合。
3	竪穴埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 摺入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→回転へラ ケズリ	白灰色	—	—	胎土1~2mm大の石英少しあり。
4	1層・コーナーの床直近	須恵器	坏蓋	—	(14.6)	砂粒少ない 摺入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→回転へラ ケズリ	淡青灰色	—	—	胎土1~2mm大の石英多い。
5	竪穴埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 摺入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	—	胎土に1mm大の石英多い。
6	竪穴埋土中	土師器	精製坏	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	手持へラケズリ・ヨコナデ	茶褐色	—	—	口縁部
7	2層 床直近	土師器	甌	—	(29.4)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ→ヨコナデ	明茶褐色	—	—	口縁部
8	1層	土師器	甌	—	(25.8)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)→ヨコ ナデ	茶褐色	—	—	口縁部
9	1層	土師器	甌	—	(24.2)	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ→ヨコナデ	明茶褐色	—	—	口縁部
10	竪穴埋土中	土師器	甌	—	(20.4)	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	明・暗茶褐色	—	—	口縁部
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	幅	厚さ	重量 (単位g)	備考				
11	2層	有溝石鏝	石	6.3	5.8	2.5	103.4	完形に近い				
12	竪穴埋土中	—	桃の身	—	—	—	—	—				
13	竪穴埋土中	石核	サヌカイト	4.1	3.2	1.6	18.4	残留遺物				

東原D区一2号柱穴列

4章73図P74

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1柱穴1	須恵器	甕	—	—	砂粒少ない 織入	タタキ成形	格子タタキ	同心円文	淡青灰色	—	胴部 胎土に石英多い。

東原C区一8号土坑

4章75図P75

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1層	須恵器	甕	—	—	砂粒少ない 織入	タタキ成形	格子タタキ→ナテ	同心円文	濃青灰色	—	胴部 胎土に石英含む。

東原C区一10号土坑

4章78図P77

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1層+4.5層 下層投棄	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。
2	4.5層 下層投棄	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	濃青灰色	—	—
3	4.5層 下層投棄	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	薄黒色 白色	—	生焼け
4	5層 下層投棄	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	—
5	5層 下層投棄	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	白色	—	生焼け
6	5層 下層投棄	須恵器	坏蓋	—	(17.6)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ 切り	回転ヨコナテ	薄黒色 白色	—	生焼け 胎土1~2mm大の石英多い。
7	4層 下層投棄	須恵器	坏蓋	—	(12.8)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ ケズリ?	回転ヨコナテ	淡青灰色 暗灰色	—	—
8	1+5層 下層投棄	須恵器	坏身	4.5	(13.8)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ 切り	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土に1~3mm大の石英多い。 底径(9.6cm)
9	5層 下層投棄	須恵器	坏身	—	(13.2)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	黒灰色 灰白色	—	胎土1~2mm大の石英含む。
10	3+4+5層 下層投棄	須恵器	坏身	5.4	(17.8)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→指ナテ	回転ヘラ切り→ 一部ヘラケズリ	淡青灰色 (断)灰白色	—	貼付高台 胎土1~4mm大の石英多い。 底径11.6cm
11	5層 下層投棄	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡灰色	—	貼付高台 底径(9.8cm)
12	4+5層 下層投棄	須恵器	坏身	6.5	(17.2)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	白色	—	底径(10.6cm) 貼付高台・生焼け胎土1~3mm大の石英多 い。
13	5層 下層投棄	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	(底)回転ヘラ切り・未調整 (外)回転ヨコナテ	ロクロナテ→回転ヨコ ナテ	淡青灰色	—	貼付高台
14	3+5層 下層投棄	土師器	精製坏	—	(13.6)	砂粒少ない 精製胎土A	積上げ	ヨコナテ→手持ちヘラケ ズリ→ナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	口縁部
15	5層 下層投棄	土師器	精製坏	—	(18.2)	砂粒少ない 精製胎土A	輪積み	ヨコナテ→ナテ?	ヨコナテ	明褐色	—	口縁部

16	5層 下層投棄	土師器	精製坏	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナデ	明褐色	—	口縁部		
17	5層 下層投棄	土師器	精製坏	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナデ	淡褐色	—	口縁部		
18	1+5層 下層投棄	土師器	甕	—	(33.7)	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ→ナデ	明橙褐色	—	口縁部		
19	4+5層 下層投棄	土師器	甕	—	(22.2)	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ→(口)ヨコナデ	淡褐色	—	口縁部		
20	3層 上層投棄	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	白灰色	—	胎土1~3mm大の石英多い。		
21	1+3層 上層投棄	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 摺入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英含む。		
22	2層 上層投棄	須恵器	坏身	—	(16.2)	砂粒少ない 摺入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	口縁部		
23	1+3層 上層投棄	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色 黒灰色	—	口縁部		
24	3層 上層投棄	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ→(口)ヨコナデ	茶褐色	—	口縁部		
25	2層 上層投棄	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ→(口)ヨコナデ	淡褐色	—	口縁部		
26	1層 上層投棄	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ→(口)ヨコナデ	淡褐色	—	口縁部		
27	3層 上層投棄	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ→(口)ヨコナデ	淡褐色	—	口縁部		
28	1層(残留遺物)	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒多い	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→ヘラケズ	黒青色 淡青灰色	—	内側にかえりがつく		
29	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→ヘラケズ	淡青灰色	—	—		
30	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	つまみ径3.0cm		
31	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	白色	—	生焼け・つまみ径2.8cm		
32	埋土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 摺入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英含む。 口縁部		
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	()つぎは破片・単位(cm)	厚さ	重量 (単位g)	備	考				
33	上層投棄	タタキ石	安山岩	22.3	8.1	5.3~5.5	1714.6	完形					
NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは径・単位(cm)	器高	口径	胎土	成形	調整	色調	使用痕	備考	
34	1~3層 上層投棄	桃の身	—	—	—	—	—	—	外 面	内 面	—	—	
NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは径・単位(cm)	器高	口径	胎土	成形	調整	色調	使用痕	備考	
1	2層	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	外 面	内 面	—	—	
									(口)ヨコナデ→ヘラケズ			茶褐色	口縁部

東京C区-13号土坑

4章60図P78

東京C区-14号土坑

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは径五径単位(cm)		胎土	成形	調整		使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面		
1	2層	須惠器	坏蓋	—	(16.4)	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ	—	濃青灰色 淡青灰色 胎土1~3mm大の石英多い。
2	2層	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	—	濃青灰色 淡青灰色 胎土1~3mm大の石英多い。 口縁部
3	2層	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	—	淡青灰色 口縁部
4	2層	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ	—	濃青灰色 淡青灰色 胎土1~2mm大の石英多い。 底径(6.2cm) 貼付高台
5	2層	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ (底)回転ヘラ切り	回転ヨコナテ	—	濃青灰色 底径(9.4cm) 貼付高台
6	2層	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	(底)回転ヘラ切り→回転 ヨコナテ 自然釉	回転ヨコナテ	—	淡青灰色 底径(9.8cm) 貼付高台
7	2層	須惠器	壺	—	—	砂粒少ない 搬入	タタキ成形	格子タタキ→カキ目	同心円文	—	淡青灰色 胎土に石英含む。
8	2層	土師器	甕	—	(21.0)	砂粒多い 在地	横上げ	ナテ→(口)ヨコナテ	ヘラケズリ	—	淡褐色 口縁部
9	2層	土師器	鉢	—	(15.8)	砂粒多い 在地	横上げ	ナテ→(口)ヨコナテ	ヘラケズリ	—	淡褐色 口縁部
10	2層	土師器	製掘土器A	—	—	砂粒多い 搬入	手づくね	指田痕	ナテ	—	明褐色 灰褐色 口縁部 二次加熱剥離
11	1層	須惠器	坏蓋	(2.0)	(15.4)	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ 切り→ヨコナテ	回転ヨコナテ	—	白灰色 胎土1~2mm大の石英多い。 1/4片
12	1層	須惠器	坏蓋	—	—	砂粒多い	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘラ ケズリ	回転ヨコナテ	—	茶褐色 —
13	1層	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	—	淡青灰色 口縁部
14	1層	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	—	淡青灰色 胎土1~2mm大の石英多い。 口縁部
15	1層	須惠器	甕	—	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	格子タタキ	同心円文	—	淡灰色 胎土5mm大の石英含む。 胴部
16	1層	土師器	坏	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	淡褐色 口縁部
17	1層	土師器	坏	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	淡褐色 口縁部
18	1層	土師器	坏	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	明褐色 口縁部
19	1層	土師器	坏	—	—	砂粒少ない 精製胎土A	横上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	—	淡褐色 口縁部
20	1層	土師器	甕	—	(15.0)	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナテ→ナテ	ヨコナテ→ヘラケズリ	—	淡褐色 口縁部
21	埋土中	須惠器	鉢	—	—	砂粒少ない 搬入	横上げ ロクロ成形	ヨコナテ	ヨコナテ	—	濃青灰色 口縁部
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ()つきは破片・単位(cm)		厚さ	重量 (単位g)	備考			
22	2層	鉄器	刀子	延長(3.2)	0.8~1.0	0.2~0.4	—	先端と茎を欠失			

東原C区一15号土坑

4章84図P81

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1層	土師器	精緻杯	—	—	砂粒多い 精製胎土A	積上げ	手持ちヘラケズリ・ナテ?	ナテ	淡青褐色	—	口縁部
2	2層	土師器	甕	—	(22.4)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ→ナテ	(口)ヨコナテ→ヘラケズリ	茶褐色 淡褐色	—	口縁部

東原C区一7号溝

4章88図P83

NO	出土位置・遺構	種別	石材	規格()つぎは復元径・単位(cm)		重量 (単位g)	備考	
				長さ	幅			
1	1埋土中	角錐状石器	腰岳産黒曜石	3.5	1.7	1.1	5.1	完形。残留遺物
2	2埋土中	削器	サヌカイト	7.0	3.3	0.65	17.3	残留遺物
3	3埋土中	石鏃	腰岳産黒曜石	(2.1)	(1.4)	0.35	(1.0)	下半欠損。残留遺物

東原C区一8号溝

4章90図P83

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1埋土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 撥入	積上げ ロクロ成形	ヨコナテ→ヘラケズリ未調整	ロクロナテ→回転ヨコナテ	淡青灰色	—	底径(10.4cm)。残留遺物
2	2埋土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	残留遺物
3	3埋土中	中国製磁器	染付皿	—	—	—	—	芭蕉文	—	—	—	景德鎮系15C後半-16C前半 コケ底・底脚(2.8cm)。残留遺物
4	4埋土中	肥前磁器	染付碗	—	—	—	—	—	—	—	—	底部(4.3cm) 1750-1780年代
5	5埋土中	肥前磁器	染付碗	—	—	—	—	—	—	—	—	18C後半

東原C区一ピット

4章91図P84

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	N2区一ピット111	縄文土器	深鉢	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナテ	ナテ	淡褐色	—	底径(6.4cm)
2	D1区一ピット18	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	ロクロ成形	ヨコナテ	ヨコナテ	濃青灰色	—	—

第6表 野間地区出土遺物観察表
野間地区一表面採集

5章2図P87

NO	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整(内)(外)	色調	使用痕	備考
			器高	口径						
1	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない・搬入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土に2mm大の含む、白色粒
NO	種別	石材	規格()つぎは破片・単位(cm)		重量 (単位g)	備考	備考	備考	備考	備考
			長さ	幅						
2	剥片尖頭器	黒曜石	5.4	2.7	1.3	20.9	二次加工あり			

野間E・F区 表面採集

5章3図P88

NO	出土位置	機種	石材	規格()つぎは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	長さ	幅							
1	F区1~3層	磨製石斧(胎刃)	緑泥片岩	—	9.5+α	6.3	—	刃先に使用痕あり					
NO	出土位置	種別	土師器	規格()つぎは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径							
2	3トレンチ1~3層	土師器	甕	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)指圧痕残る・ヨコナテ	—	茶褐色	—	口縁部片
3	F区試掘3トレンチ	中国製磁器染付	皿	—	—	—	磁器胎土	—	—	—	—	—	透明釉

野間E区-26号掘立柱建物跡

5章9図P92

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径							
1	柱穴8	須恵器	坏蓋	1.5	(13.4)	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)ヨコナテ→右回転ヘラケズリ (内)回転ナテ(口)回転ヨコナテ	—	濃青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。
2	柱穴11	須恵器	坏身	3.4	(11.4)	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外,口)回転ヨコナテ (内)指ナテ(底)回転ヘラ切り	—	濃青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。 貼付高台
3	柱穴6	土師器	精製坏	—	—	—	砂粒多い 精製胎土B	積上げ	(口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片 内外面

野間E区-27号掘立柱建物跡

5章12図P94

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径							
1	柱穴4	須恵器	坏蓋	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナテ	—	濃青灰色	—	胎土に2~3mm大の石英多い。 口縁部片
2	柱穴3	須恵器	坏身	—	—	—	砂粒少ない 搬入	ロクロ成形	回転ナテ	生焼け	白灰色	—	胎土に小石英と微細雲母多い。
3	柱穴3	土師器	精製坏	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	胎土に小石英と微細雲母多い。 口縁部片
4	柱穴3	土師器	甕	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヘラケズリ (口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片

5	柱穴6	土師器	鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡褐色	—	口縁部片
---	-----	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-----	---	------

野間E区-29号掘立柱建物跡

5章15図P97

NO	出土位置	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	柱穴6	須恵器	坏身	—	—	—	横上げ 口縁部片	(口)回転ヨコナデ	—	—	—	胎土に1mm大の石英含む。 口縁部片

野間E区-4号竪穴建物跡

5章18・19図P100・101

NO	出土位置	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	カマドB層+土坑1・A'+P層+床直	土師器	大型甕	—	(24.4)	(24.8)	横上げ	(外)タテハケ→ナデ (内)左上がり (口)ヨコナデ	黒斑	淡褐色	—	口縁部～胴部1/3片
2	A+B'層 カマド祭祀一括	土師器	小型甕	—	—	—	横上げ 内傾接合	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	赤褐色	—	口縁部
3	土坑2	土師器	鉢	—	—	—	横上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	二次加熱による赤変	口縁部片
4	最上層	須恵器	坏蓋	—	14.0	—	横上げ 口縁部片	(外)右回転ヘラケズリ・ヨコナデ (内)回転ナデ (口)回転ヨコナデ	生やけ	灰白色	—	胎土に3～4mm大の石英含む。 つまみ径2.6cm
5	埋土中	須恵器	坏蓋	—	(12.8)	—	横上げ 口縁部片	(外)回転ヘラケズリ (内)回転ナデ (口)回転ヨコナデ	—	濃青灰色	—	—
6	埋土中	須恵器	坏蓋	—	つまみ径 2.8	—	横上げ 口縁部片	(外)ヨコナデ (内)ナデ	—	淡青灰色	—	—
7	埋土中	須恵器	坏身	4.2	13.2	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ (底)回転ヘ ラ切り (内)右回転ナデ	生やけ	黒色	—	胎土に1～5mm大の石英多い。 重ね焼きの落着痕(外面)
8	床上10cm以上 埋土中	須恵器	坏身	4.2	(12.2)	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ (内)右回転ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に小石英含む。 1/5片
9	埋土中	須恵器	坏身	4.2	(12.6)	—	横上げ 口縁部片	(外・口)ヨコナデ (底)回転ヘラ切 り (内)回転ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1～2mm大の石英多い。
10	埋土中	須恵器	坏身	4.6	14.0	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ一部ヘラケズ リ (底)ヘラ切り (内)指ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1～2mm大の石英多い。 完形
11	埋土中	須恵器	坏身	—	—	—	横上げ 口縁部片	(外)回転ヨコナデ・回転ヘラ切り (内)指ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英少し含む。 底部
12	床面直上	須恵器	坏身	6.2	(12.4)	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ (底)回転ヘ ラ切り (内)回転ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。
13	埋土中	須恵器	坏身	5.7	(14.0)	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ (底)回転ヘラ 切り (内)回転ナデ・右回り指ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1～3mm大の石英多い。
14	埋土中	須恵器	坏身	4.0	(13.4)	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ (底)回転ヘ ラ切り (内)回転ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1～2mm大の石英多い。
15	埋土中	須恵器	坏身	4.3	12.6	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ (底)回転ヘ ラ切り (内)回転ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1～2mm大の石英多い。
16	埋土中	須恵器	坏身	4.6	(12.0)	—	横上げ 口縁部片	(外・口)回転ヨコナデ (底)回転ヘ ラ切り (内)回転ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1～3mm大の石英多い。

17	埋土中	須恵器	坏身	4.0	(11.8)	—	(7.6)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外・口)回転ヨコナデ ラ切り (内)回転ナデ	(底)回転へ	—	淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石英多い。
18	埋土中	須恵器	坏身	4.3	(11.6)	—	(7.2)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外・口)回転ヨコナデ ラ切り (内)回転ナデ	(底)回転へ	—	淡青灰色	—	胎土に1~3mm大の石英多い。
19	埋土中	須恵器	坏身	—	—	—	7.8	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナデ 切り (内)回転ナデ	(底)回転へラ	—	淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石英多い。
20	埋土中	須恵器	坏身	—	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナデ (内)指ナデ	回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。
21	埋土中	須恵器	長頸壺	—	(12.4)	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	—	黒灰色→ 自然釉付着	—	胎土に1mm大の石英含む。 口縁部片
22	埋土中	須恵器	長頸壺	—	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナデ (内)回転ナデ	—	—	黒褐色→ 自然釉付着	—	胎土に1~4mm大の石英多い。 頸部 二条沈線
23	埋土中	須恵器	壺	—	—	頸部径 12.2	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ナデ(内・外)	—	—	黒灰色 (内)淡褐色	—	頸部
24	埋土中	須恵器	甗	—	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ タタキ成形	(外)水平平行タタキ (内)同心円文	—	—	淡青灰色 (内)濃青灰色	—	胎土に1~2mm大の石英多い。 胴部
25	埋土中	土師器	精製壺	—	(18.8)	—	—	精製胎土A	積上げ	(外)指圧痕残す粗いナデ (内・口)ヨコナデ	—	—	淡橙褐色	—	口縁部 表面はとけている。
26	埋土中	土師器	精製壺	—	—	—	—	精製胎土A	積上げ	(外)ナデ・ヨコナデ (内)ナデ? (口)ヨコナデ	—	—	淡橙褐色	—	口縁部
27	埋土中	土師器	精製壺	—	—	—	—	精製胎土A	積上げ?	不明?	—	—	淡褐色	—	口縁部
28	埋土中	土師器	精製坏	—	(13.2)	—	—	精製胎土A	積上げ	(外)手持ちへラケズリ? (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	—	明褐色	—	口縁~胴部
29	埋土中	土師器	精製坏	—	(13.4)	—	—	精製胎土A	積上げ	ヨコナデ	—	—	淡橙褐色	—	口縁部
30	最上層	土師器	精製坏	—	(13.0)	—	—	精製胎土A	積上げ	(外・口)ヨコナデ→手持ちへラケズリ?	—	—	淡褐色	—	—
31	埋土中	土師器	精製坏	—	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナデ	—	—	淡橙褐色~ 明橙褐色	—	胎土に1mm大の石英含む。 口縁部
32	埋土中	土師器	精製坏	—	—	—	—	精製胎土A	積上げ	(外・口)ヨコナデ→手持ちへラケズリ	—	—	淡橙褐色	—	—
33	埋土中	土師器	精製鉢 or甗	—	(18.8)	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(外・内)ナデ? (口)ヨコナデ	—	—	淡橙褐色	—	胎土に1mm大の石英多い。 口縁部
34	土坑1内+床直 +3~5層	土師器	精製甗 の把手	—	—	—	—	精製胎土A	積上げ 差込み	(外)指ナデ (内)ナデ	—	—	明褐色	—	—
35	埋土中	土師器	精製甗 の把手	—	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(外)指ナデ (内)ヨコナデ	—	—	淡褐色	—	胎土に2mm大の石英含む。
36	埋土中	土師器	精製坏	—	—	—	(12.9)	精製胎土B 砂粒混入	積上げ	(外)ヨコナデ (内)回転ナデ	—	—	明褐色	—	底部
37	埋土中	土師器	坏	—	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ	剥離?	—	—	淡褐色 (内)淡褐色	—	底部
38	埋土中	土師器	精製坏	3.7	14.8	—	—	精製胎土B 砂粒混入	積上げ	(外・口)ヨコナデ・手持ちへラケズリ	—	—	明褐色	—	胎土に1mm大の石英多い。
39	埋土中	土師器	大型甗	—	22.2	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	—	明橙褐色	—	口縁部
40	埋土中	土師器	甗	—	(16.6)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	—	淡褐色 (内)淡橙褐色	—	口縁部~胴部

41	埋土中	土師器	甕	—	(15.2)	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部
42	床面直上	土師器	鉢	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(口・内)ヨコナデ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色 (内)黒褐色	二次加熱	口縁部 内面黒変
43	埋土中	土師器	小型鉢	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(口・内)ヨコナデ・ヘラケズリ	—	淡褐色	—	口縁部
44	埋土中	土師器	製塩土器A	—	—	—	—	—	砂粒多い 載入	手づくね	不明	—	明褐色 白褐色	二次加熱	胴部 製塩土器特有のオレ ンク色に変色
NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm) 幅(正方形・辺) 胴部最大径 底径	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考			
45	最上層	鉄器	鉄鍔	辺0.4 径0.25	(3.4)	莖部か									

5章23図P103

野間E区—13号竪穴建物跡

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	カマド祭祀一括	土師器	精製土器	—	—	—	積上げ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	胎土に1mm大の石英含む。

5章23図P103

野間E区—54号土坑

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	埋土中	土師器	甕	—	—	—	積上げ	(外)ナデ? (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	—

5章25図P104

野間E区—14号竪穴建物跡

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	埋土中	土師器	甕	—	—	—	積上げ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	—

5章27図P106

野間E区—52号土坑

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	上層	須恵器	坏蓋	2.9 15.0	—	—	種上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	—	淡青灰色	—	つまみ径 2.8cm
2	上層	須恵器	坏蓋	—	—	—	種上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。 口縁部片
3	上層	土師器	精製土器	(17.0)	—	—	種上げ	(外)粗いナデ (内)丁寧なナデ	—	明褐色	—	口縁部 1/4片
4	上層	土師器	精製土器	—	—	—	種上げ	(口・外)ヨコナデ・手持ちヘラナデ?	—	淡褐色	—	口縁部 5×4cm片
5	上層	土師器	台付皿	—	13.4	—	種上げ	(外)回転ヨコナデ (内)ヨコナデ	—	淡褐色	—	底部 1/4 貼付高台

6	上層	土師器	甗	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片
7	上層	土師器	鉢	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナテ (内)? (口)ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部片
NO	出土位置	種別	器種	規格() 器高	つぎは復元径・単位 刀部厚さ 刀部幅	つぎは復元径・単位 胴部最大径 胴部最大径	規格() 器高	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
8	埋土中	鉄器	刀子	0.7~ 0.9	0.25	—	—	つか金具	幅1.1cm 厚さ0.5cm 長さ0.3~0.4cm	備	—	考	—	—

5章30図P107

野間E区-55号土坑

NO	出土位置	種別	器種	規格() 器高	口径	つぎは復元径・単位 胴部最大径	規格() 器高	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	埋土中	土師器	甗	—	(16.2)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナテ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナテ	—	淡褐色	二次加熱 (内面)つす い黒変	口縁部

5章32図P107

野間E・F区-各ピット

NO	出土位置	種別	器種	規格() 器高	口径	つぎは復元径・単位 胴部最大径	規格() 器高	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	E区-ピット1	土師器	精製皿	—	—	—	—	精製胎土A 輸入	積上げ	ヨコナテ	—	淡橙色	—	口縁部片 4×4cm
2	E区-ピット9	須恵器	坏身	—	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	—
3	E区-ピット11	土師器	甗	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヘラケズリ (口)ヨコナテ	—	茶褐色	—	口縁部片 4×4cm
4	F区-ピット3	須恵器	坏蓋	—	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	ヨコナテ・ナテ	生焼け	白灰色	—	つまみ径 2.8cm

5章33図P108

野間E区-24号溝

NO	出土位置	種別	器種	規格() 器高	口径	つぎは復元径・単位 胴部最大径	規格() 器高	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	埋土中	近世陶器 (17世紀後半)	唐津(肥 前)	—	—	—	—	陶土	ロクロ成形	(外)灰釉 (内)蛇の目釉はぎ	—	淡茶色	—	底部 胎土の色(淡褐色)

5章33図P108

野間E区-25号溝

NO	出土位置	種別	器種	規格() 器高	口径	つぎは復元径・単位 胴部最大径	規格() 器高	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	埋土中	須恵器	高坏	—	—	—	—	砂粒少ない 輸入	積上げ ロクロ成形	ナテ・(内)ヘラケズリ (口)ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。 残留遺物
2	埋土中	近世陶器	鉢	—	—	—	—	砂粒少ない 陶土	ロクロ成形→ 回転系切り	(外)回転ヨコナテ (内)蛇の目釉はぎ・(鉄)黒釉	—	灰褐色	—	高取焼(17世紀後半) 底部

野間G・H区一表面採集

5章39・40図P114・115

NO	出土位置	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)			胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径							
1	D-8	縄文土器	鉢?	—	—	—	砂粒多い 攪入	積上げ	(内)ヨコナテ?	—	濃茶褐色	—	胎土に石英多い。 口縁部
2	土手1~3層	縄文土器	深鉢	—	—	(10.4)	砂粒多い 在地	積上げ	(外・内)ナテ?	—	淡褐色	—	底部 1/4片
3	6トレンチ	須恵器	坏蓋	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	—
4	6トレンチD	須恵器	坏蓋	—	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナテ	—	淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石英多い。
5	1~3層	須恵器	坏身	4.0	(11.0)	(8.4)	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	不明(←表面保存不良)	生やけ	白灰色	—	—
6	6トレンチA	須恵器	坏身	—	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	(外・口)回転ヨコナテ・ヘラ切り (内)回転ナテ	—	濃青灰色~ 淡青灰色	—	胎土に1~2mm大の石英含む。
7	6トレンチB	須恵器	坏身	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナテ	—	濃青灰色	—	口縁部
8	—	須恵器	坏身	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナテ・回転ヘラ切り (内)回転ナテ→指ナテ	—	淡青灰色	—	底部
9	—	須恵器	坏身	—	—	8.2	砂粒多い	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヘラ切り (内)回転ヨコナテ (口)回転ヨコナテ	生やけ	白灰色	—	底部
10	6トレンチC	須恵器	坏身	—	—	9.0	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナテ (底)回転ヘラ切り (内)回転ナテ	—	淡青灰色	—	底部 高台貼付
11	1~3層	須恵器	鉢	—	—	—	砂粒少ない	積上げ	(外・口)ヨコナテ (内)ヘラケズリ	—	濃青灰色~ 青灰色	—	口縁部
12	土器集中	土師器	精製壺	—	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	ナテ?	—	淡褐色	—	頸部
13	1~3層	土師器	精製壺	—	—	(30.4)	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ?	—	淡褐色	—	口縁部 1/8片
14	H区 A地点	土師器	精製坏	—	—	(14.2)	精製胎土A 攪入	積上げ	(外・口)ヨコナテ・手持ちヘラケズリ	—	淡褐色	—	口縁部
15	H区 A地点	土師器	精製坏	—	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	(外・口)ヨコナテ・ナテ	黒斑	淡褐色	—	口縁部 5×5.4cm片
16	1~3層	土師器	精製甗 把手	—	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ 差込み	指ナテ	—	淡褐色	—	—
17	1~3層	土師器	精製甗 把手	—	—	—	精製胎土A 攪入	手づくね	指ナテ	—	淡褐色	—	—
18	旧表土中	土師器	精製甗 把手	—	—	—	精製胎土A 攪入	手づくね 差込み	指圧痕	—	淡褐色	—	—
19	1~3層	土師器	精製壺	—	—	—	精製胎土B 攪入	積上げ	(外・口)指圧痕残すナテ・ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 1/8片
20	1~3層	土師器	精製坏身	—	—	高台径 (10.4)	精製胎土B 攪入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナテ (内)回転ナテ	—	淡褐色	—	底部 1/4片
21	1~3層	土師器	精製坏身	—	—	高台径 (14.2)	精製胎土B 攪入	積上げ ロクロ成形	(外)ヨコナテ (内)回転ナテ	—	明褐色	—	底部 1/8片
22	土器集中	土師器	精製坏身	—	—	—	精製胎土B 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	明褐色	—	底部 5×3cm片
23	1~3層	土師器	精製皿	—	—	(16.8)	精製胎土B 攪入	積上げ	ナテ・ヨコナテ	—	淡褐色	—	口縁部 1/6片

NO	出土位置	種別	器種	規格()つきは復元径・単位	長さ	最大幅	(23.2)	(21.8)	砂粒多い 在地	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
24	5トレンチ	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ (内)ヘラケズリ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色	スス付着→ 二次加熱	口縁部
25	土器集中	土師器	甕	—	—	(18.0)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ (内)傾接合	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色 暗茶褐色	茶色に変色→ 二次加熱	口縁部 7×6cm片
26	土手1～3層	土師器	甕	—	—	(13.6)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ (内)傾接合	(外)ナデ (内)ヘラケズリ	—	淡褐色	黒変→ 二次加熱	口縁部 1/8片
27	—	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヨココナデ (内)ヘラケズリ	—	茶褐色 淡褐色	—	口縁部 4×3cm片
28	A地点	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヨココナデ	—	淡褐色	—	口縁部 4×4cm片
29	1～3層	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	手づくね 差込み	指ナデ	—	淡褐色	—	—
30	14トレンチ	陶器	壺	—	—	—	(8.6)	—	—	ロクロ成形	回転ヨココナデ	—	灰白色	—	胴部
31	住7 付近	中国製白磁	皿?	—	—	—	—	—	—	ロクロ成形	(口)釉・連弁?	—	淡緑白色	—	口縁部
32	5トレンチ	土師質 (中世)	坏	—	—	—	—	—	砂粒多い	ロクロ成形→ 回転系切り	ナデ・(底)回転系切り	—	淡褐色	—	底部
NO	出土位置	種別	石 材	規格()つきは復元径・単位	長さ	最大幅	厚さ	重量 (単位g)	備 考						
33	試掘13トレンチ	石鍋	滑石	—	—	—	—	—	タテおよびヨコ方向の研磨痕、口縁部						
34	1～3層	ナイフ形石器	腰岳産黒曜石	(2.95)	1.4	0.6	—	(2.6)	半折れ						
35	—	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.35	0.35	—	0.80	完形・平基						
36	試掘4トレンチ	打製石斧	安山岩	(5.8) 以上	9.00	1.40	—	(98.6)	先端部の磨減が著しい						

5章43・44図P120・121

野間H区一周溝建物（H区-20号掘立柱建物跡・周溝・3号柱穴列）

NO	出土位置	種別	器種	規格()つきは復元径・単位	器高	口径	胴部最大径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	柱穴3+周溝	須恵器	坏蓋	—	—	(13.8)	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(外)右回転ヘラケズリ (内)回転ナデ (口)回転ヨココナデ	—	淡青灰色	—	—
2	柱穴3	須恵器	坏蓋	—	—	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	回転ヨココナデ	生やけ	茶褐色	—	胎土に1～2mm大の石英多い。 3×2cm片
3	柱穴3+周溝	須恵器	坏身	—	—	—	(9.2)	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨココナデ (底)回転ヘラ切り (内)回転ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。
4	柱穴3	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヘラケズリ (口)ヨココナデ	—	淡褐色	—	小型品
5	柱穴2	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒少ない 搬入	手づくね	指圧痕	—	淡褐色	二次加熱あり	逆錘形
6	ピット3	土師器	精製坏	—	—	—	—	—	精製胎土B 搬入	積上げ	(外)回転ナデ (内)ヘラミガキ (口)ヨココナデのヘラミガキ	—	淡褐色	—	口縁部 4×3cm片 都城系土師器
7	内部土坑 C層+周溝内	須恵器	坏蓋	1.3	13.6	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形 (右回転)	(外)回転ヘラケズリ (内)回転ナデ (口)回転ヨココナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1～3mm大の石英多い。
8	内部土坑C層 床上7cm	土師器	精製坏	—	—	(14.4)	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(外)一定方向ナデ (内)ナデ (口)ヨココナデ	—	淡褐色	—	—

9	内部土坑 C層	土師器	小型甕	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 5×3cm片	
10	周溝 接合資料⑮	須恵器	長頸壺	—	(18.0)	(10.7)	—	—	—	積上げ ロクロ成形	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナデ・ヘラケズリ (底)回転ヘラ切り (内)回転ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	I区-30建物 柱穴3と接合	
11	周溝 接合資料⑭	須恵器	横瓶	—	(23.4)	—	—	—	—	タタキ成形	砂粒少ない 搬入	タタキ成形	円文(外)平行タタキ (内)同心円文	—	—	—	—	—	—	—	—	H区-31土坑 3層と接合 胎土に1~3mm大の石英多い。	
12	周溝	須恵器	坏蓋	(1.5)	(14.5)	—	—	—	—	積上げ ロクロ成形	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヘラケズリ? (内)回転ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	胎土に1mm大の石英多い。	
13	周溝	須恵器	坏身	5.6	(14.4)	9.2	—	—	—	積上げ ロクロ成形	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外・口)回転ヨコナデ (底)回転ヘラ切り (内)指ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	胎土に1~2mm大の石英多い。	
14	周溝	土師器	精製小型壺	—	—	—	—	—	—	積上げ	精製胎土A 搬入	積上げ	(剥離)	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 7×5cm片	
15	周溝 南東2層	土師器	精製鉢	—	(14.4)	—	—	—	—	積上げ (内傾接合)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	(外)ナデ? (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 7×1cm片
16	周溝	土師器	精製高坏	—	—	(8.4)	—	—	—	積上げ	精製胎土B? 搬入	積上げ	剥離	—	—	—	—	—	—	—	—	胎土に1~3mm大の石英多い。 胎土に1/3片	
17	周溝	土師器	精製坏	—	—	—	—	—	—	積上げ	精製胎土A 搬入	積上げ	(外・口)手持ちヘラケズリ?・ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 6×5cm片
18	周溝	土師器	精製坏	—	—	—	—	—	—	積上げ	精製胎土A 搬入	積上げ	(外・口)?・ヨコナデ (内)ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 5×3cm片
19	周溝	土師器	精製坏	—	—	—	—	—	—	積上げ	精製胎土A 搬入	積上げ	(外・口)?・ヨコナデ (内)ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 5×3cm片
20	周溝 東	土師器	精製坏	—	—	—	—	—	—	積上げ	精製胎土A 搬入	積上げ	(外・口)?・ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 7×3.5cm片
21	周溝	土師器	精製瓶 大型把手	—	—	—	—	—	—	手づくね 差込み	精製胎土A 搬入	手づくね 差込み	(外)ナデ・指圧痕 (内)ナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	周溝	土師器	精製坏蓋	—	—	—	—	—	—	積上げ ロクロ成形	精製胎土B 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)ヘラ切り・未調整 (内)回転ナデ (口)回転ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	胎土に石英多く・須恵器環蓋 の模倣品・口縁部
23	周溝 2層上部	土師器	甕	—	(22.8)	—	—	—	—	積上げ (内傾接合)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ・くびれ部ハケ工具あ るいはヨコナデでよじれる。	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部~胴部 1/3片
24	周溝	土師器	甕	—	(24.6)	—	—	—	—	積上げ (内傾接合)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 1/8片
25	周溝	土師器	甕	—	(20.6)	—	—	—	—	積上げ (内傾接合)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	(外)タテハケ(5本/1cm)→ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 1/4片
26	周溝	土師器	甕	—	—	—	—	—	—	積上げ	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 6×5cm片
27	周溝 2層上部	土師器	甕	—	(16.0)	—	—	—	—	積上げ (内傾接合)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	(外)ナデ?剥離強く不明 (内)ケズリ? (口)ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	横転してつぶれた状態で検出 口縁部 1/2片
28	周溝 接合資料⑯	土師器	甕	—	(16.4)	—	—	—	—	積上げ (内傾接合)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	(外)タテハケ(6本/1cm) (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	G区-5堅穴内土坑2と接合 口縁部~胴部
29	周溝	土師器	小型甕	—	(13.4)	—	—	—	—	積上げ	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	口縁部 1/6片
NO	出土位置	種別	石材	規格()つきは復元径・単位 器高 器大厚さ 幅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	考
30	周溝 接合資料B	カマド側石	安山岩	29.0	4.6	18.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	軽い被熱をうける・G区-5堅穴と接合
31	周溝	カマド側石	安山岩	20.8	4.2	13.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	外面はよく焼けている。2片接合

野間G区一5号竪穴建物跡

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 口径 胴部最大径 底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	カマド埋土中	土師器	甗	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヘラケズリ (口)回転ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/8片
2	カマド埋土中	土師器	小型甗	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)タテ・ヨコハケ(6本/1cm) (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	赤変・ 二次加熱	底部平底 1/3片
3	土坑1	土師器	精製坏	(17.0)	精製胎土A	積上げ	(外)手持ちヘラケズリ (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡橙色	—	口縁部 1/3片
4	土坑1	土師器	精製坏	(12.6)	精製胎土A 搬入	積上げ	(外)手持ちヘラケズリ→ナデ (内)ナデ (口)ヨコナデ→2本指で一回ナデ	—	淡橙色	—	口縁部 1/4片
5	土坑1	土師器	精製坏	(13.6)	精製胎土B	積上げ	ナデ	—	淡橙色	—	口縁部 1/4片
6	土坑1	土師器	精製坏	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナデ	—	淡橙色	—	—
7	土坑1	土師器	小型甗	(16.0)	砂粒多い 在地	積上げ	(外)タテハケ(5本/1cm)→タテミガキ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色～ 明褐色	—	口縁部 1/5片
8	土坑1	土師器	小型甗	(16.2)	砂粒多い 在地	積上げ	(外)タテハケ? (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色 (内)黒色	赤変・ 二次加熱	胴部上半 1/5片
9	土坑2	土師器	精製小型壺	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナデ	—	淡橙色	—	—
10	土坑2	土師器	精製壺	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(外)ヨコナデ (内)粗いナデ	—	淡橙色	—	胎土に1mm大の石英多い。
11	土坑2	土師器	精製甗	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナデ	—	淡橙色	—	胎土に1mm大の石英多い。 口縁部
12	1層+土坑2	土師器	精製鉢	(20.2)	精製胎土A 搬入	積上げ	(外)手持ちヘラケズリ?→ナデ (内)丁算ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/4片
13	1層+土坑2	土師器	甗	(22.9)	砂粒多い 在地	積上げ	(外)タテヘラナデ (内)ヘラケズリ (口)回転ヨコナデ	—	淡褐色	スス付着→ 二次加熱	口縁部～胴部
14	1層 接合資料①	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)右回転ヘラケズリ (口)回転ヨコナデ	—	黒灰色	—	胎土に1～2mm大の石英多い。 口縁部 1/6片、周溝建物と接合
15	1層	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)剥離? (口)ヨコナデ	生やけ	灰白色	—	胎土に1～2mm大の石英多い。
16	1層	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	口縁部
17	1層	須恵器	坏蓋	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	茶褐色	—	口縁部
18	1層	須恵器	坏身	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ナデ (底)不明 (口)回転ヨコナデ	生やけ	灰白色	—	胎土に1～3mm大の石英多い。 底部
19	1層	須恵器	甗	(17.0)	砂粒少ない 搬入	ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	黒色	—	胎土に1mm大の石英多い。 口縁部
20	1層 接合資料②	須恵器	大型甗	—	砂粒少ない 搬入	積上げ タタキ成形	(外)平行タタキ (内)同心円文	—	淡茶色 (断)青灰色	—	胴部・20建物一周溝・4竪穴・ 45土坑・19溝出土片と接合
21	1層	須恵器	甗	—	砂粒少ない	積上げ タタキ成形	(外)平行タタキ (内)あて真贋	—	黒色 (断)青灰色	—	胴部 小片化している。
22	1層 接合資料③	須恵器	鉢	(11.0) (20.6) 23.2	砂粒少ない 搬入	積上げ	(外)ナデ (口)回転ヨコナデ (内)指ナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英含む。 19土坑、下層と接合。

23	1層	土師器	精製壺	—	(18.6)	—	—	—	精製胎土A 撮入	積上げ	(外)平行タタキ→ナデ (内)ヨコ指ナデ (口)ヨコナデ	—	明橙色	—	口縁部 1/2片 肩部 1/5片
24	1層	土師器	精製壺	—	—	—	—	—	精製胎土A 撮入	積上げ	(外)ナデ (内)ヨコナデ	—	明橙色 (内)淡橙色	—	頸部 1/8片 頸部径(14.8cm)
25	1層	土師器	精製坏	—	—	—	—	—	精製胎土A 撮入	積上げ	(外)ヨコナデ・手持ちへラケズリ	—	淡褐色	—	口縁部
26	1層	土師器	精製坏	—	(15.4)	—	—	—	精製胎土A 撮入	積上げ	(外)手持ちへラケズリ (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/5片
27	1層	土師器	精製坏	—	(13.8)	—	—	—	精製胎土A 撮入	積上げ	(外)剥離? (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/5片
28	1層	土師器	精製坏	—	(12.4)	—	—	—	精製胎土A 撮入	積上げ	(外)手持ちへラケズリ (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	—
29	1層	土師器	精製甌・把手	—	—	—	—	—	精製胎土A 撮入	積上げ 手づくね	指ナデ・指圧	—	淡褐色	—	—
30	1層	土師器	甌	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(口・内)ヨコナデ・へラケズリ	—	茶褐色	—	口縁部
31	1層	土師器	甌	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	赤変→ 二次加熱	口縁部
32	1層	土師器	甌	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	濃茶褐色	二次加熱あり	口縁部
33	1層	土師器	小型甌	—	(13.4)	(12.4)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ? (内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	赤変→ 二次加熱	口縁部 1/3片
34	1層	土師器	小型甌	—	(13.6)	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	赤変→ 二次加熱	口縁部 1/8片
35	1層	土師器	甌	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(口・内)ヨコナデ・へラケズリ	—	淡褐色	—	口縁部
36	1層	土師器	大型碗	—	(18.2)	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	胎土は比較的良質 口縁部 1/3片
NO	出土位置	種別	石材	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 器幅	—	—	—	—	—	—	備	考	—	—	—
37	1層	鉄器	刀子	(3.9)	0.25~0.3	0.5~0.6	—	—	—	先端と基部欠失	—	—	—	—	—
38	1層 カマド付近	カマド脚石	安山岩	24.4	2.4	14.4	—	—	—	明確に焼けた痕跡はないが、劣化している。	—	—	—	—	—
39	1層 カマド付 近 接合資料A	カマド脚石	安山岩	61.5	7.1	21.2	—	—	—	19号土坑と接合。被熱劣化はげしい。	—	—	—	—	—

野間G区一6号竪穴建物跡

5章55図・写真1・P131

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm) 器高 器幅	口径	胸部最大径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	カマド内3層	土師器	甌	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)たて方向のナデ (内)たて方向のへラケズリ	—	茶褐色	—	底部
2	カマド内	種実	桃の実	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	祭祀遺物か
3	最上層	土師器	甌	—	18.6	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/7片
4	埋土中	土師器	甌	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)へラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部

5	上層	土師器	甗	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	(外)ナデ (内)ヨコナデ	(内)ハラケズリ(右きき)	—	淡褐色	—	口縁部		
6	埋土中	土師器	鉢	—	(20.0)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	(外)ナデ (内)ハラケズリ	(口)ヨコナデ	—	淡褐色	赤変→ 二次加熱	口縁部 1/8片		
7	上層	土師器	鉢	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	(内)ハラケズリ	(口)ヨコナデ	—	明褐色	二次加熱あり	口縁部		
NO	出土位置	種別	石材	規格()つぎは復元径・単位(cm)		重量 (単位g)		備考										
8	埋土中	カマド側石	安山岩	長さ	30.8	最大幅	21.0	厚さ	4.3	接合面も全体に被熱している。→再利用の可能性あり。								

5章58図P133

野間H区-7号竪穴建物跡

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
1	カマド内1層中 カマド祭祀	土師器	鉢	器高 — (26.6)	砂粒多い 在地	横上げ	(外)タテハケ(5本/1cm) (内)ハラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	—	口縁部 3/4片
2	埋土中 (床下)	須恵器	坏蓋 つまみ	— (2.9)	砂粒少ない 撒入	横上げ ロクろ成形	(外)ナデ (内)ロクロナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英含む。
3	埋土中	須恵器	坏蓋	— (15.8)	砂粒少ない 撒入	横上げ ロクろ成形	(外)回転ハラケズリ (内)回転ナデ (口)回転ヨコナデ	生やけ	白灰色	—	胎土に1mm大の石英含む。 表面とちよろになつている。 20建物-柱6接合
4	埋土中	土師器	精製坏	3.3 15.4	精製胎土A 撒入	横上げ	(外)手持ちハラケズリ→ハケケ具痕 (内)ヨコナデナデ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	スス付着	底部外面にスス付着
5	埋土中	土師器	精製坏	—	精製胎土A 撒入	横上げ	(口)ヨコナデ	—	茶褐色	—	口縁部
6	埋土中	土師器	大型甗	— (26.8)	砂粒多い 在地	横上げ	(外)ナデ (内)ハラケズリ(右きき?) (口)ヨコナデ	—	茶褐色	赤変→ 二次加熱	口縁部 1/3片
7	埋土中	土師器	鉢	—	砂粒多い 在地	横上げ (内傾接合)	(外)ナデ (内)ハラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	赤変→ 二次加熱	口縁部 6×3cm片
8	埋土中	土師器	小型甗	— (16.6)	砂粒多い 在地	横上げ (内傾接合)	(外)ナデ (内)ハラケズリ(右きき) (口)ヨコナデ	—	淡褐色	赤変→ 二次加熱	口縁部 1/3片
9	7竪穴付近	須恵器	坏蓋	2.2 12.8	砂粒少ない 撒入	横上げ ロクろ成形 (右回転)	(外)回転ハラケズリ・ヨコナデ (内)回転ナデ (口)回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1~4mm大の石英多い。 つまみ径 3.2cm
10	7竪穴付近	須恵器	坏身	—	砂粒少ない	横上げ ロクろ成形	(外・口)回転ヨコナデ (内)回転ナデ	—	黒色 (内)濃灰色	—	G区ピット31と接合
11	7竪穴付近	須恵器	坏身	—	砂粒少ない 撒入	横上げ ロクろ成形	(外)回転ヨコナデ (内)回転ナデ	—	淡青灰色	—	底部
12	7竪穴付近	須恵器	坏身	—	砂粒少ない 撒入	横上げ ロクろ成形	(外)回転ハラケズリ (内)回転ナデ (口)回転ヨコナデ	—	黒色 (内)淡灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。 底部
13	7竪穴付近	土師器	甗	— (16.6)	砂粒多い 在地	横上げ (内傾接合)	(外)ナデ (内)ハラケズリ(右きき) (口)ヨコナデ	—	茶褐色	赤変+スス付 着→二次加熱	口縁部 1/7片

野間G区-19号土坑

5章60図P136

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	下層	須惠器	坏蓋	3.1	(14.6)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロク口成形 (右回転)	(外)回転ヘラケズリ・ヨコナデ (内)回転ナデ	—	濃青灰色	—	胎土に1~2mm大の石英多い。
2	下層	須惠器	壺	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ タタキ成形	(外)横方向平行タタキ (内)あて具痕・同心円文	—	黒灰色 (内)青灰色	—	胴部
3	下層	土師器	精製壺	—	(21.6)	精製胎土A	積上げ (内傾接合)	(外)あらいナデ (内)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/6片
4	下層	土師器	精製壺	—	(20.0)	精製胎土A	積上げ	(外)ナデ (内)ロヘラケズリ? (口)ヨコナデ	—	明褐色	—	口縁部 1/3片
5	下層	土師器	精製坏	—	(17.0)	精製胎土A	積上げ	(外)手持ちヘラケズリ→ナデ? (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/5片
6	下層	土師器	精製坏	—	(15.8)	精製胎土A	積上げ	(外)手持ちヘラケズリ→ナデ? (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 1/4片
7	下層	土師器	甌	—	—	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	赤変 スス付着→ 二次加熱	口縁部 7×5cm片
8	上層	須惠器	坏身	—	(8.0)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロク口成形 (右回転)	(外)回転ヨコナデ (底)回転ヘラ切り (口)回転ヨコナデ・指ナデ	—	淡青灰色 (内)濃青灰色	—	底部(外)自然釉
9	上層	須惠器	坏身	—	(8.8)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロク口成形	(外)回転ヨコナデ (底)回転ヘラ切り (口)回転ヨコナデ・回転ナデ	—	濃青灰色	—	底部
10	上層	須惠器	甌	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ タタキ成形	(外)浅い平行タタキ (内)あて具痕	—	黒色 (内)濃青灰色	—	胴部
11	上層・土坑外 2・3層	土師器	精製壺	—	—	精製胎土A	積上げ	不明	—	淡褐色	—	口縁部
12	上層	土師器	精製額 把手	—	—	精製胎土A	積上げ 手つくね 差込み	指ナデ	—	淡褐色	—	—
13	埋土中	須惠器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロク口成形	回転ヨコナデ	—	淡茶色~ 濃青灰色	—	—
14	埋土(残留遺物)	弥生土器 (中期)	器台	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	脚部 1/7片
NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		備考						
				長さ	最大厚さ	重量 (単位g)	備					
15	埋土中	サスカイト	石核	4.8	2.4	28.3	西九州産サスカイト					

野間G区-20号土坑

5章62図P137

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	1層 接合資料⑦	須惠器	甌	—	(21.6)	砂粒少ない	積上げ タタキ成形	(内)同心円文 (口)回転ヨコナデ	—	濃青灰色~ 茶褐色	—	口縁部 道路状遺構・土坑17と接合

野間G区一23号土坑

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	埋土中	須恵器	坏身	—	—	—	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	—	濃青灰色	—	—

野間G区一25号土坑

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	埋土中	土師器	焼埴用製塩土器A	—	—	—	手づくね	(外)指圧痕 (内)ナテ	—	淡橙色	二次加熱あり	剥離はびしく、橙色に変色 胸部 6×4cm片

野間G区一30号土坑

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	集中A	土師器	精製坏	3.4	14.8	—	積上げ	(外)ヘラケズリ? (内)指ナテ (口)ヨコナテ	黒斑 (外・内)	淡褐色	—	壳形に接合
2	集中A	土師器	精製坏	—	—	—	積上げ	(外)ナテ? (内)ナテ (口)ヨコナテ	—	淡橙色	—	口縁部 6×4cm片
3	集中B	土師器	甗	—	(21.8)	—	積上げ	(外)ナテ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナテ	黒斑	淡褐色	二次加熱?	胎土に5mm大の石英含む。 口縁部
4	集中B	土師器	甗	—	—	(13.0)	積上げ	(外)ヨコナテ→ナテ (内)ヘラケズリ	—	淡褐色	—	底部 1/8片
NO	出土位置	種別	石材	規格()つぎは復元径・単位(cm)		重量		備考				
5	残留	ナイフ形石器	サヌカイト	長さ	最大幅	厚さ	(3.8)	(1.2)	(2.0)	(450)	下半欠損・西九州産サヌカイト	

野間G区一31号土坑

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	埋土中	須恵器	長頸壺	—	—	18.7	9.4	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヘラ切り→回転ヨコナテ	濃青灰色 (自然釉)	—	胎土に1~3mm大の石英含む。 一条沈線
2	3層一括 接合資料⑨	須恵器	坏蓋	—	—	(15.4)	—	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヘラケズリ (内)回転ナテ (口)回転ヨコナテ	黒灰色 濃灰色	—	5窪穴埋土と接合
3	埋土中	須恵器	坏蓋	1.7	(11.6)	—	—	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヘラケズリ・未調整 (内)回転ナテ (口)回転ヨコナテ	濃青灰色	—	胎土に1~3mm大の石英多い。
4	埋土中、 接合資料⑬	須恵器	坏身	4.4	12.2	—	8.8	積上げ ロクロ成形	(外・口)回転ヘラケズリ・回転ヨコ ナテ (内)指ナテ	淡青灰色	—	7窪穴付近と接合 胎土に1~2mm大の石英多い。
5	3層一括	須恵器	坏身	3.2	12.2	—	8.8	積上げ ロクロ成形	(外・口)回転ヘラケズリ・回転ヨコ ナテ (内)回転ナテ	濃青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。
6	埋土中	土師器	精製?	—	—	—	—	積上げ	(口)ヨコナテ	明橙色	—	口縁部 6×7cm片
7	埋土中	土師器	精製壺	—	—	—	—	積上げ	(口)ヨコナテ	明褐色	—	口縁部 7×4cm片

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考		
				器高	口径								器最大径	底径
8	埋土中	土師器	精製坏	—	(14.6)	—	—	精製胎土B 搬入	積上げ	(外)手持ちヘラケズリ→ナデ (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	
9	埋土中	土師器	精製坏	—	(17.2)	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(外)手持ちヘラケズリ→ナデ? (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡橙色	口縁部 1/3片	
10	埋土中	土師器	精製甌 把手	—	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ 差込み	指ナデ	—	淡橙色	—	
11	埋土中	土師器	甌	—	(20.6)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	口縁部 1/8片	
12	埋土中	土師器	甌	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ・タテハケ(5本/1cm) (内)ナデ→ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	口縁部 6×7cm片	
13	埋土中	土師器	甌	—	(19.4)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)タテハケ→ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色 黒茶色	口縁部 1/3片	
14	埋土中	土師器	鉢	—	(22.4)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)指おさえ→ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	口縁部 1/6片	
15	埋土中	土師器	高坏	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)指圧痕→ナデ (内)ナデ	—	淡褐色	—	
16	埋土中	土師器	焼埴用製埴土器A (逆錐形)	—	—	—	—	砂粒多い 搬入	手つくね	(外)指圧痕 (内)ナデ	—	淡褐色	胴部	
17	埋土中	土師器	焼埴用製埴土器A (逆錐形)	—	—	—	—	砂粒多い 搬入	不明	(外)指圧痕 (内)ナデ	—	淡褐色	口縁部	
NO	出土位置	種別	石 材	規格()つぎは復元径・単位(cm)		重量 (単位g)		備 考						
18	埋土中	絞鉢車 (石製)	結晶片岩	長さ (底)4.3 ~4.4	—	—	—	—	全面研磨(かまりの部分は表裏とも剥離している)			—	—	
19	埋土中	砥石	片岩	9.1	3.3	1.5	(81)	半分におれ、表裏二面に研磨痕					—	—

野間G区-61号土坑

5章76図P144

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	器最大径	底径					
1	埋土中	土師器	小型甌	—	(12.6)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	二次加熱あり	内外面とも変色剥離はげしい。 口縁部 1/3片
2	埋土中	土師器	小型甌	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	外面スス?	頸部 5×3cm片

野間G.H区-各ピット

5章78図P145

NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	器最大径	底径					
1	Pit 1	縄文土器	浅鉢(晩期)	—	—	—	—	砂粒多い	積上げ	剥離が激しい	—	口縁部 5.5×4.5cm
2	Pit 2	須恵器	坏蓋	—	(14.4)	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナデ	—	胎土に1~2mm大の石英多い。
3	Pit 3	須恵器	坏蓋	—	—	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナデ	—	胎土に1mm大の石英多い。
4	Pit 4	須恵器	坏身	—	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナデ	—	口縁部

5 Pit 5	須惠器	坏身	—	(12.0)	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1~3mm大の石英多い。 口縁部
6 Pit 6	須惠器	坏身	—	—	(6.0)	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヘラ切り (内)指ナデ (口)回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英多い。 底部
7 Pit 7	須惠器	坏身	—	—	(9.7)	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(口)回転ヨコナデ (内)指ナデ	—	淡青灰色	—	底部 貼付高台
8 Pit 8	土師器	精製甕	—	(24.6)	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(外)ナデ (内)ナデ (口)ヨコナデ	—	淡橙色	—	口縁部 1/4片
9 Pit 9	土師器	精製壺	—	—	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(口)ナデ?	—	淡橙色	—	口縁部
10 Pit 10	土師器	精製壺	—	—	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(口)ヨコナデ	—	淡橙色	—	口縁部 5×4cm片
11 Pit 11	土師器	精製坏	—	—	—	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(口)ヨコナデ	—	淡橙色	—	口縁部 7×3cm片
12 Pit 12	土師器	精製甕 把手	—	—	—	—	—	精製胎土A 搬入	手づくね 差込み	(外)内)指ナデ	—	淡橙色	—	—
13 Pit 13	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地?	積上げ	(内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	胎土に石英多い。 口縁部 6×4cm片
14 Pit 14	土師器	甕	—	(15.6)	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ナデ (内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	—	口縁部 1/6片
15 Pit 15	土師器	甕	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 3×3cm片
16 Pit 16	土師器	鉢	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内)ヘラケズリ (口)ヨコナデ	—	茶褐色	—	口縁部 4×2cm片
17 Pit 17	土師器	焼埴用製塩土器 (逆錐形)A	—	—	—	—	—	砂粒多い 搬入	手づくね	(外)指圧痕 (内)ナデ	—	白灰色	—	口縁部
18 Pit 18	土師器	焼埴用製塩土器 (逆錐形)A	—	—	—	—	—	砂粒多い 搬入	手づくね	(外)指圧痕 (内)ナデ	—	淡褐色	—	5×3cm片
NO 出土位置	種別	石材	規格()つきは復元径・単位(cm)	長さ	最大幅	厚さ	重量 (単位g)	備考						
19 Pit 19	石蔵	腰岳産黒曜石	(2.0)	(1.7)	0.4	1.0	先端ほか欠損							

野間G.H区-13号溝

5章80図P146

NO	出土位置	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	埋土中	中国製青磁	碗	—	—	淡緑色	ロクロ成形	貫入、削り出し	—	深緑色	—	竜泉窯 打ち欠いている

野間H区-一道路状遺構一土坑列

5章86図P152

NO	出土位置	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径							
1	土坑7	須惠器	長頸壺	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	濃青灰色	—	—
2	土坑10	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	底部 貼付高台
3	土坑13	須惠器	長頸壺	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	二条洗線

4	土坑14	須惠器	坏身	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡青灰色	—	—	底部貼付高台
NO	出土位置	種別	石材	規格()つぎは復元径・単位	長さ	最大幅	厚さ	重量(単位g)	備考	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考	備考		
																	器高	口径	胴部最大径
5	土坑21	凹石	安山岩	14.9	8.9	2.4	408.0	(143.2)	表裏に凹あり、残留	—	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ、ヨコナテ	—	—	—	—	—	—	—
6	土坑24	磨製石斧	結晶片岩	(10.6)	3.8	1.8	—	—	先端欠損、残留	—	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ、ヨコナテ	—	—	—	—	—	—	—

野間H区一水場状遺構

5章89図P156																			
NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位	器高	口径	胴部最大径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考	備考			
																長さ	最大幅	厚さ	重量(単位g)
1	1・2層	須惠器	坏蓋	—	—	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(内・口)回転ヨコナテ、回転ヘラケズリ	—	淡青灰色	—	—	—	—	—	—
2	1・2層	須惠器	坏身	—	—	(10.0)	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(外・内)回転ヨコナテ、指ナテ	—	淡青灰色	—	—	—	—	—	底部貼付高台
3	1・2層	須惠器	坏身	—	—	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(外・内)回転ヨコナテ、指ナテ (底)回転ヘラ切り	—	淡青灰色	—	—	—	—	—	底部貼付高台
4	1・2層	須惠器	壺	—	—	—	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナテ (内)タタキあて具痕	—	淡青灰色	—	—	—	—	—	肩部
NO	出土位置	種別	石材	規格()つぎは復元径・単位	長さ	最大幅	厚さ	重量(単位g)	備考	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考	備考		
																	器高	口径	胴部最大径
5	埋土中	石核	サヌカイト	6.1	5.1	1.5	38.1	—	—	西九州産、残留	—	—	—	—	—	—	—	—	—

野間H区一10号溝

5章93図P160																			
NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位	器高	口径	胴部最大径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考	備考			
																長さ	最大幅	厚さ	重量(単位g)
1	埋土中	土師器	精製甌 把手	—	—	—	—	—	精製胎土A	手づくね 差込み	指圧痕	—	淡橙色	—	—	—	—	—	—

野間H区一12号溝

5章94図P160																			
NO	出土位置	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位	器高	口径	胴部最大径	底径	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考	備考			
																長さ	最大幅	厚さ	重量(単位g)
1	埋土中	瓦質	把手付土鍋	—	—	—	—	—	砂粒少ない	—	指ナテ、ナテ	—	灰黒色	—	—	—	—	—	—
2	埋土中	陶器	摺鉢	—	—	—	—	—	砂粒少ない	ロクロ成形	回転ヨコナテ、カキメ	—	茶褐色	—	—	—	—	—	—

野間I・J・L区一表面採集

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	I区1~3層	須恵器	坏蓋	—	(11.4)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘ ラケズリ(ロクロ右回り)	回転ナテ→回転ヨ コナテ	濃青灰色	—	胎土1~3mm大の石英、軟質黒色粒子 多い。
2	I区1~3層	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土白色粒、軟質黒色粒子多い。
3	I区1~3層	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	外濃青灰色 内淡青灰色	—	胎土白色粒、軟質黒色粒子多い。
4	試掘8トレンチ	須恵器	坏身	(5.1)	(12.8)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヘラ切り→回転ヨ コナテ	回転ヨコナテ→指	濃灰色	—	胎土1~3mm大の石英多い。 底径(8.4cm) (外)自然釉
5	試掘8トレンチ	須恵器	坏身	(4.7)	(13.8)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヘラ切り→回転ヨ コナテ	回転ナテ→回転ヨ コナテ	淡青灰色	—	1~3mm大の石英含む、白色粒多い。 底径(9.4cm)
6	試掘8トレンチ	須恵器	甕	—	—	砂粒少ない 織入	積上げ タタキ成形	回転ヨコナテ	—	(表)黒色~ (裏)灰白色	—	胎土白色粒多い。
7	I区1~3層	土師器	精製甕把手	—	—	精製胎土A 織入	手づくね 差しこみ	指おさえ	ナテ	白茶色	—	—
8	I区1~3層	土師器	精製坏	—	(12.4)	精製胎土B 織入	積上げ	ヨコナテ→ナテ	ナテ→ヨコナテ	淡褐色	—	胎土微細雲母片、赤・白色粒、1~2mm 大の石英多い。1/8片
9	試掘8トレンチ I区1~3層	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナテ→ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤・白色粒、 4~5mm大の黒曜石多い。 5×7cm片
10	I区1~3層	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナテ→ヨコナテ	ヨコナテ→?	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤・白色粒多い。 4×5cm片
11	I区1~3層	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤・白色粒多い。
12	I区1~3層	弥生土器	壺底部	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	未調整・ナテ	ナテ	灰褐色	—	胎土1~2mm大の長・角、石英多い。 底径(6.0cm)
NO	出土位置	種別	器材	規格()つきは破片・単位(cm)		胎土	成形	調整		備考		
				長さ	幅	厚さ	重量 (単位g)	外面	内面	色調	使用痕	備考
13	I区1~3層	ナイフ形石器	腰岳産黒曜石	(4.65)	1.85	0.8	(5.5)	先端欠損	—	外淡褐色 内黒色	—	20×15cm片
14	I区1~3層	ナイフ形石器	腰岳産黒曜石	(2.55)	1.6	0.75	(3.1)	半折	ナテ?	(不明)	—	4×4cm片 保存不良
15	試掘15トレンチ I区1~3層	角錐状石器	腰岳産黒曜石	(4.35)	2.25	1.0	7.0	先端欠損	(不明)	外黒灰色 内灰褐色	—	7×6cm片 保存不良
16	I区1~3層	石鏃	西九州産 サヌカイト	1.4	1.55	0.3	0.4	完形	ヨコ方向の条痕?	外灰褐色 内黒色	—	—

野間J区一39号土坑

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	下部	縄文土器	深鉢	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナテ?	(不明)	外淡褐色 内黒色	—	20×15cm片
2	埋土中	縄文土器	深鉢	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(不明)	(不明)	外黒灰色 内灰褐色	—	4×4cm片 保存不良
3	埋土中	縄文土器	深鉢	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコ方向の条痕?	(不明)	外灰褐色 内黒色	—	7×6cm片 保存不良

4	埋土中	縄文土器	深鉢底部	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(不明)	(不明)	淡褐色	—	底径8.0cm
---	-----	------	------	---	---	------------	-----	------	------	-----	---	---------

野間Ⅰ区一23号掘立柱建物跡

5章103図P168

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴4	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロク成形成	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土石英(1~3mm大)が多い
2	柱穴4	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 在地	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	赤橙色	—	胎土微細雲母片多い。
3	柱穴4	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	淡茶褐色	—	胎土に1~2mm大の長・角赤白色粒 4×5cm片
4	柱穴6	土師器	甕	—	—	砂粒少ない 在地	積上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土に1~1mm大の長・角石英赤白色 粒多い。5×3cm片

野間Ⅰ区一24号掘立柱建物跡

5章105図P169

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	柱穴6	土師器	精製坏	—	14.4	精製胎土A	積上げ	ヨコナテ (底) 手持ちヘラケズリ	ナテ	淡橙色	—	胎土微細雲母~1mm大の石英赤白色 粒多い。1/3片

野間Ⅰ区一30号掘立柱建物跡

5章107図P172

NO	出土位置・遺構	種別	石材	規格()つぎは破片・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				長さ	幅			外面	内面			
1	柱穴1	石鏃	黒曜石 (姫島産)	2.3	(1.5)	—	—	—	—	—	—	一部欠損。残留遺物

野間Ⅰ区一9号竪穴建物跡

5章114図P177

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	土坑2	土師器	精製坏	—	(15.4)	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ (底) 手持ちヘラケズリ	ヨコナテ	淡橙白色	—	胎土白・赤色粒1~2mm大の石英多い。 1/3片
2	土坑2	土師器	精製坏	—	14.0	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ・ナテ (底) 手持ちヘラケズリ	ナテ	淡橙色	—	胎土1~2mm大の石英・微小長・角多い。
3	土坑2+土坑3+ 床直	土師器	甕	—	胸部最大径 (16.2)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	ヨコナテ→ナテ	ヘラケズリ	茶褐色	二次加熱あり →赤変	胎土1~2mm大の長・角・赤・赤、白色粒多 い。1/2片
4	床面直上	須恵器	甕(大型)	—	—	砂粒少ない 在地	積上げ	平行タタキ	同心円文	淡青灰色	—	外→自然釉
5	床面直上	土師器	精製坏	—	12.6	精製胎土A 攪入	積上げ	手持ちヘラケズリ・ヨ コナテ	ヨコナテ・ナテ	淡橙色	—	胎土赤・黒色粒子多い、微細雲母片 が多い。1/3片
6	土坑1	土師器	甕	—	19.2	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ・ナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土~2mm大の長・角・赤、白色粒多い。 1/6片
7	土坑1	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤、白色粒多 い。
8	土坑1	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 在地	積上げ	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土に1mm大の石英あり。

9	床面直上	土師器	精製坏	—	—	砂粒少ない	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土極小長・角多い。赤・白色粒多い。 5×3cm片
10	床面直上	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ→ナテ	ハラケズリ	淡褐色	—	胎土に1mm大の長・角・赤・白色粒多い。
11	床面直上	土師器	鉢	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ→ナテ	ハラケズリ	茶褐色	—	胎土に1~2mm大の長・角・赤・白色粒多い。
NO	出土位置・遺構	種別	石材	重量 (単位g)		備考						
1	床下	石鏝	チャート	長さ	幅	厚さ	3.0	完形・縄文時代早期。残留遺物				

5章117図P181

野間I区一8号竪穴建物跡

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	床面直上	須恵器	坏蓋	3.1	17.0	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→ 回転ハラケズリ・回転 ヨコナテ	回転ナテ	青灰色	—	転用甕 つまみ径 3.2cm 胎土に1mm大の長・白色粒多い。
2	埋土中	須恵器	坏蓋	—	(15.0)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ナテ	暗茶褐色	—	胎土に1mm大の石英多い。
3	埋土中	須恵器	坏身	—	底径(9.2)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ハラ切り→ (口)回転ヨコナテ	回転ナテ→ 回転ヨコナテ	淡青灰色	—	高台貼付 胎土4mm大の石英含む。
4	埋土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・回転 ハラ切り	回転ナテ	淡青灰色	—	高台貼付
5	埋土中	須恵器	高坏	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・回転 ハラ切り	回転ナテ→指ナテ	淡青灰色	—	ロクロ右回転 胎土に1mm大の石英・白色粒多い。
6	埋土中	土師器	精製坏	—	(16.6)	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ・手持ちハラ ケズリ	ナテ	淡橙色	—	胎土に1mm大の石英・長石・赤白色粒・ 微細雲母片多い。 1/6片
7	埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土赤白色粒~1mm大の微細雲母片 多い。 5×4cm片
8	埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土極細長石・角・赤・白色粒多い。 4×2cm片
9	埋土中	土師器	甕	—	(24.4)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ハラケズリ	淡褐色	赤変→ 二次加熱	胎土1mm石英・長石・赤白色粒多い。 1/8片
10	埋土中	土師器	鉢	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ→ナテ	ハラケズリ	茶褐色	赤変→ 二次加熱	胎土に1mm大の長・角・白色粒多い。
11	埋土中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ハラケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤・白色粒 多い。 6×4cm片
12	カマド・そで	土師器	小型甕	—	(12.6)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ→ナテ	ハラケズリ	茶褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤・白色粒 多い。 1/6片
13	カマド内・3-4層	製塩土器A	逆錐形	—	—	胎土精良 搬入	積上げ	指圧・ナテ	ハラケズリ	明橙色	—	微細雲母片・赤色粒
14	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	ヨコナテ・ナテ	ナテ	淡青灰色	—	つまみ径 3.1cm
15	床下	弥生土器 前~中期	甕・底部	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・ナテ	—	淡褐色	赤変→ 二次加熱	~1mm白色粒 底径 6.6cm 残留遺物

野間Ⅰ区一15号竪穴建物跡

5章 120・121図P184・185

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)	胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考	
							外面	内面				
1	土坑1	土師器	精製環	—	16.4	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ→手持ちヘラ ケズリ	ナテ	明橙色	—	胎土極小長、赤・白色粒多い。 3/4片
2	土坑1	土師器	精製環	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ→手持ちヘラ ケズリ	ナテ	淡橙色	—	胎土～1mm大石英、赤・白色粒、微細 雲母片 6×6cm片
3	カマド内+床直	土師器	甗	—	(22.4)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・ ヨコナテ→ナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土1～3mm大の長・角、白赤粒多く含 む。1/2～1/3片、胴部最大径24.4cm
4	土坑1	製塩土器A	焼塩用逆錐形	—	—	胎土精良 攪入	積上げ	指圧痕	ナテ	明橙色	—	胎土～1mm大石英、微細、赤色粒多い。
5	埋土中	須恵器	坏蓋	1.5	(13.2)	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・回転ヘ ラケズリ	回転ヨコナテ	白灰色	—	ロクロ右回転 胎土白色粒多い。
6	埋土中	須恵器	坏蓋	—	(13.4)	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘ ラケズリ	回転ヨコナテ	(外)黒色 (内)濃灰色	—	胎土1～2mm大の石英多い。
7	埋土中	須恵器	坏蓋	—	(14.0)	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘ ラケズリ	回転ヨコナテ	(内)黒色	—	胎土1～1mm大の石英多い。
8	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1～2mm大の石英多い。
9	床面直上	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土1mm大の石英多い。
10	埋土中	須恵器	坏身	4.9	(12.8)	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	(外)濃青灰色 (内)淡青灰色	—	胎土白色粒多い、2mm大の石英あり。 高台付 底径(9.8cm)
11	埋土中	須恵器	坏身	—	底径(8.4)	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘ ラ切り	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	胎土白色粒多い、1～3mm大の石英含む。
12	埋土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ→回転ヘ ラ切り	回転ヨコナテ	淡青灰色	—	—
13	埋土中 接合資料⑧	須恵器	甗	—	(20.0)	砂粒少ない	積上げ タタキ成形	回転ヨコナテ	回転ヨコナテ	黒灰色	—	自然軸 M区水田中層と接合。 胎土白色粒多い
14	埋土中	土師器	精製甗	—	(21.6)	精製胎土A	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	赤褐色	—	胎土～1mm大の微細雲母片。 1/8片
15	埋土中	土師器	精製甗	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土赤・白色粒、極小長・角多い。
16	埋土中	土師器	精製甗	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土微細雲母片多い。
17	埋土中	土師器	精製甗	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土微細雲母片多い。
18	埋土中	土師器	精製甗	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	1mm大の長・角、赤・白・黒色粒多い。
19	埋土中	土師器	精製甗 把手	—	—	精製胎土 在地	手づくね?	指おさえ	—	淡褐色	—	精製胎土1mm大の石英、赤・白色粒極 細長・角多い。
20	床面直上	土師器	甗	—	(19.4)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	赤褐色	赤変→ 二次加熱あり	胎土1～2mm長・角、赤・白色粒(1cm 大含む)多い。1/8片
21	埋土中	土師器	甗	—	(20.6)	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	ヨコナテ→ナテ	ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土1～3mm大の長・角、赤・白色粒多 い。1/8片
22	埋土中	土師器	甗	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	茶褐色	赤変→ 二次加熱あり	胎土1～2mm大の長・角、白色粒多い。
23	床面直上	土師器	鉢	—	—	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	ヨコナテ・ナテ	ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土1～2mm大の長・角、赤・白色粒多い。 7×7cm片

24	埋土中	土師器	小型甕	—	(12.4)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ・ナテ	ヘラケズリ	淡茶褐色	赤変→ 二次加熱あり	胎土～1mm長・角・赤・白色粒多い。 1/6片
25	埋土中(残留遺物)	弥生土器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡褐色	—	胎土～1mm大の長・角・赤・白色粒多い。 弥生中期
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	()つきは破片・単位(cm)	厚さ	重量 (単位g)	備考				
26	埋土中(残留遺物)	ナイフ形器	腰産黒曜石	3.0	1.4	0.35	1.40	完形				
27	埋土中(残留遺物)	石核	メノウ	4.2	3.1	0.2	25.40	—				

5章124図P187

野間I区—10号竪穴建物跡

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは破片・単位(cm)	胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考	
							外面	内面				
1	土坑1	土師器	精製坏	(3.0)	16.0	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ→手持ちヘラ?	ナテ	淡橙色	胎土1～3mm大の石英・白色粒、微細 雲母片多い。1/2片	
2	床面直上	須惠器	坏蓋	1.4	(14.6)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	ヨコナテ・回転ヘラケ ズリ・回転ヨコナテ	回転ナテ	淡青灰色	ロクロ石回転 胎土1～3mm大の石英多い。	
3	床面直上	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・回転ヘ ラ切り	指ナテ	淡青灰色	胎土白色粒・～3大の石英多い。 底径(10.2cm)	
4	床面直上	須惠器	坏身	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナテ・回転ヘ ラ切り	指ナテ	(外)濃青灰色 (内)淡青灰色	外面自然釉 胎土1mm大の石英多い。 底径(6.0cm)	
5	床面直上	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ→ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	淡褐色	二次加熱あり (内面黒変・外 面赤変)	胎土～1mm長・角・赤・白色粒多い。 6×4cm片
6	埋土中	土師器	精製壺	—	(19.6)	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡藍色	—	胎土微細雲母片多い。 1/10片
7	埋土中	土師器	精製壺	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土微細雲母片多い。 3×3cm片
8	埋土中	土師器	精製壺	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	淡藍色	—	胎土微細雲母片多い。 4×3cm片
9	埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A	積上げ	ヨコナテ→手持ちヘラ ケズリ?	ナテ	淡青灰色	—	胎土～1mm大の長・角・石英、微細雲母 片多い。4×4cm片
10	埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A	積上げ	ヨコナテ→手持ちヘラ ケズリ?	ヨコナテ	淡橙色	—	胎土～1mm大の長・角・石英・赤・白色 粒多い。
11	埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナテ	ナテ	淡藍色	—	胎土1～2mm大の石英・～1mm大雲母片、 7×6cm片
12	埋土中	土師器	精製甕把手	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	指オサエ	ナテ	淡藍色	—	胎土1～2mm大の石英・赤・白色粒、微 細雲母片多い。
13	埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土B 搬入	積上げ	ヨコナテ (亀裂痕のこる)	ヨコナテ	明藍色	—	胎土～1mm石英・赤・白色粒多い。
14	埋土中	土師器	甕	—	(24.4)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ→ナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	茶褐色	—	胎土1～2mm長・角・赤・白色粒多い。 1/8片
15	埋土中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	暗茶褐色	—	胎土～1mm長・角・白色粒多い。 8×4cm片
16	埋土中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ→ナテ	ヨコナテ→ヘラケ ズリ	淡藍色	赤変→ 二次加熱あり	胎土1～2mm大の長・角・白色粒多い。

17	埋土中	土師器	小型甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ヘラケ スリ	茶褐色	二次加熱あり	胎土~1mm長・角、白色粒多い。 1/4片	
18	埋土中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ヘラケ スリ	茶褐色	—	胎土~1mm長・角、白色粒多い。	
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	()つぎは破片・単位(cm) 幅	厚さ	重量 (単位g)	備					考
19	埋土中	欵器	鉄鎌(長茎鎌)	12.5	0.8	0.35	—	刀部長2.8cm					

野間I区-11号竪穴建物跡

5章128図P190

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは破片・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考	
				高さ	口径			外面	内面				
1	カマド祭祀一括	土師器	精製環	3.9	14.0	精製胎土A 織入	積上げ	ヨコナデ→手持ちヘラ ケスリ	ヨコナデ→ナデ→ 指ナデ	淡茶褐色	—	胎土に微細雲母片多い。 ほぼ完形	
2	カマド祭祀一括	土師器	精製環	—	(16.4)	精製胎土A 織入	積上げ	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ナデ	淡茶褐色	—	胎土~1mm大の石英白色粒多い。 1/8片	
3	カマド祭祀一括	土師器	精製環	—	—	精製胎土A 織入	積上げ	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ	淡褐色	—	胎土微細雲母片多い。 3×3cm片	
4	カマド周囲	土師器	甕	—	(22.8)	砂粒少ない 在地	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	胎土1~2mm長・角、赤・白色粒多い。 1/8片	
5	カマド内、 接合資料⑩	土師器	小型甕	—	(16.4)	砂粒少ない 在地	積上げ	タテハケ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ スリ	淡褐色	スス付着二 次加熱あり	胎土1~2mm長・角、赤・白色粒多い。1/4片 口縁内面に爪跡残る。+38土坑と同一。	
6	カマド祭祀一括	土師器	小型甕	—	頸部径(11.8)	砂粒多い 在地	積上げ	(不明)	ヨコナデ→ヘラケ スリ	茶褐色	—	胎土1~2mm長・角、赤・白色粒 1/4片	
7	カマド祭祀一括	製塩土器	焼塩用・ 逆錐形A	—	—	砂粒少ない 織入	手づくね	指圧痕	ナデ	淡明褐色	二次焼成あり	胎土白色粒・小長石多い。 器壁がうすくはかれる。	
8	カマド祭祀一括	製塩土器	焼塩用・ 逆錐形A	—	—	砂粒少ない 織入	手づくね	指圧痕	ナデ	赤茶色	二次焼成あり	胎土~1mm大の長・角、微細雲母片多い。 4×3cm片	
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	()つぎは破片・単位(cm) 幅	厚さ	重量 (単位g)	備					考
9	カマド内、 接合資料C	カマド側石	安山岩	35.7	22.5	7	—	→5竪穴カマド内+26土坑と接合 3片ともが軽く被熱、とくに11竪はよく熱されている。5竪出土の接合面も軽く被熱している。					
NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは破片・単位(cm)	口径	胎土	成形	外面	内面	色調	使用痕	備考	
10	埋土中	土師器	小型甕	—	(17.8)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角、白色粒多い。 1/7片	
11	埋土中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ→ヘラケ スリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角、白色粒多い。	
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ	()つぎは破片・単位(cm) 幅	厚さ	重量 (単位g)	備					考
12	残留(埋土中)	彫器	腰岳産黒曜石	(325)	(2.05)	0.9	(4.8)	旧石器時代					
13	残留(埋土中)	石鏃	腰岳産黒曜石	(2.7)	(2.1)	0.45	(1.6)	一部欠損 鐮形鏃→縄文時代早期					

野間I区-12号堅穴建物跡

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	カマ下内+床面直上	土師器	精製鉢	—	—	精製胎土A 在地?	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色	—	胎土極小長・角・赤・白色粒多い。 4×3cm
2	床面直上+カマ下内+土坑1	土師器	精製坏	3.2	14.5~15.0	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナデ→手持ちヘラ ケズリ	ナデ→ヨコナデ	淡褐色	—	接合完形。 胎土1~1mm大の石英赤・白色粒、微細 雲母片多い。
3	カマ下内3層+埋土中	土師器	甕	—	(16.6)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラ ケズリ	茶褐色	外面スス付着 →二次加蒸あり	胎土1~2mm長・角・赤・白色粒多い。 1/5片
4	カマ下埋土中	土師器	甕	—	(20.8)	砂粒多い 在地	積上げ	タテ方向のナデ→ヨコ ナデ	ヨコナデ→ヘラ ケズリ	淡茶褐色	—	胎土1~2mm長・角・赤・白色粒多い。 さめの細かい粘土使用(在地でも産 地異なる) 1/8片
5	カマ下内+土坑1	土師器	甕	—	(18.8)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラ ケズリ	茶褐色	内面異変 外面赤変→ 二次加蒸あり	胎土~1mm大の長・角・赤・白色粒多い。 1/4片
6	土坑1	土師器	製塩土器A	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ	ナデ・指圧痕	ナデ	淡褐色	—	胎土~1mm大の赤・白色粒子、微小長 多い。
7	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 在地	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英多い。
8	埋土中	須恵器	坏身	—	(14.0)	砂粒少ない 在地	積上げ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英多い。
9	埋土中	土師器	精製甕	—	—	精製胎土A 攪入	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色	—	胎土~1mm大の長・角・1~2mm大の石 英多い。
10	埋土中	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラ ケズリ	茶褐色	—	胎土1~2mm大の赤・白色粒多い。 5×5cm片
11	床面直上	土師器	甕	—	—	砂粒少ない 在地	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラ ケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤・白色粒石 英多い。(産地の異なる在地品?)

野間J区-38号土坑

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中	須恵器	坏蓋	—	14.8	砂粒多い 在地	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→ヘラ ケズリ・ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰褐色	—	つまみ径2.6cm。接合完形。
2	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 在地	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(内)黒色	—	(外)自然釉
3	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→回転 ヘラケズリ→ヨコナデ	回転ナデ	濃青灰色	—	胎土1~2mm大の石英、白色粒多い。 ロクロ右回転
4	埋土中	須恵器	坏蓋	1.5	14.1	砂粒少ない 在地	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→回転 ヘラケズリ→ヨコナデ	回転ナデ→回転 ヨコナデ	淡青白色	—	胎土~1mm大の石英、白色粒多い。 接合完形。
5	埋土中	須恵器	坏身	4.3	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英、白色粒多い。
6	埋土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 攪入	積上げ ロクロ成形	(不明)	(不明)	白灰色	—	胎土~1mm大の石英多い。 底径(8.6cm)
7	埋土中	土師器	精製坏	—	(17.0)	精製胎土A 攪入	積上げ ロクロ成形	ヨコナデ→手持ちヘラ ケズリ	ヨコナデ	淡褐色	—	胎土赤・白色粒、微細雲母片多い。 4/5片に接合

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)	胎土	成形	調整		使用痕	備考
							外	内		
8	埋土中	土師器	精製坏	—	—	横上げ	ヨコナデ→手持ちヘラ	ヨコナデ→ナデ	—	胎土微細雲母片多い。黒斑あり。
9	埋土中	土師器	精製坏	—	—	横上げ	(不明)	(不明)	—	胎土極小長、白色粒、微細雲母片多い。 8×4cm片
10	埋土中	土師器	精製坏	—	—	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	胎土小石英多い。 4×3cm片
11	埋土中	土師器	精製坏	—	—	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	胎土～1mm大の石英含む微細雲母片多い。
12	埋土中	土師器	甗	—	—	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ナデ	—	胎土1～2mm長・角・赤・白色粒多い。 (精製胎土Bに近い)
13	埋土中	土師器	甗	—	(22.6)	横上げ	ナデ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ	—	胎土小石英多い。 1/4片
14	埋土中	土師器	甗	—	(17.8)	横上げ (内傾接合)	タテハケ(6本/1cm)→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ	—	胎土1～2mm大の長・角多い、赤・白色粒 1/8片
15	埋土中	土師器	小型甗	—	(14.4)	横上げ	ナデ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ	—	胎土1～2mm大の長・角、白色粒多い。 1/4片
16	埋土中、 接合資料⑩	土師器	小型甗	—	—	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ	—	胎土～1mm大の長・角、石英、赤・白色粒多い。 上面に爪痕あり。11整穴5と同一。

野間J区-45号土坑

5章136図P198

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)	胎土	成形	調整		使用痕	備考
							外	内		
1	上層	須恵器	坏身	—	—	横上げ ロクロ成形成	回転ヘラ切り→回転ヨコナデ	回転ヨコナデ→指ナデ	—	胎土白色粒、1mm大の石英多い。 底径(6.8cm) 1/2片 ロクロ右回転
2	2～3層	土師器	精製坏	—	(16.2)	横上げ	ヨコナデ→回転ヘラケズリ、 回転ヨコナデ→手持ちヘラケズリのあとナデか	ヨコナデ→ナデ	—	胎土～1mm大の石英あり、赤チャートあり
3	2～3層	土師器	小型甗	—	(14.8)	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ	赤変→ 二次加熱あり	胎土～1mm大の長・角・赤・白色粒石 英多い。 1/8片
4	3層	土師器	甗	—	—	横上げ	タテハケ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ	—	胎土1～2mm大の長・角・赤・白色粒石 英多い。 7×7cm片
5	3層	土師器	甗	—	—	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	胎土1～3mm大の長・角、石英、白色粒 (1～5mm大)多い。5×5cm片
NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量	備考			
6	残留	石鏃	金山産・サスカイト	長さ	幅	厚さ	完形			
				3.0	1.6	0.35	1.6			

野間J・L区-19号溝

5章137図P200

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)	胎土	成形	調整		使用痕	備考
							外	内		
1	L区埋土中	須恵器	壺蓋	—	—	横上げ ロクロ成形成	回転ヨコナデ→回転ヘラ切り	回転ヨコナデ→指ナデ	—	胎土～1mm大の石英多い。 (内)茶褐色 (外)濃青灰色
2	L区埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	横上げ ロクロ成形成	回転ヨコナデ→回転ヘラケズリ?	回転ヨコナデ	—	胎土～1mm大の石英多い。
3	埋土中	土師器	小型甗	—	—	横上げ	ナデ→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケ	—	胎土～1mm大の長・角、赤・白色粒多い。 3×3cm片

NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量 (単位g)	備考
				長さ	幅		
4	L区埋土中	鉄器	刀子	残長(4.6)	(1.1)	0.2~0.4	—

5章141図P201

野間L区-44号土坑

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考	
				器高	口径			外面	内面				
1	底面	須恵器	甗	37.0	21.6	砂粒多い 織入	積上げ タタキ成形	(口)回転ヨコナデ 行タタキ→カキメ	平	同心円文	濃青灰色	故意に破砕 されている	1~3mm大の石莚多い。1~2mm大の 白色粒多い。胴部最大径 33.8cm

5章143図P202

野間I区-22号溝

NO	出土位置・遺構	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
			器高	口径			外面	内面			
1	底面近く	中国製青磁碗	—	—	磁器胎土	ロクロ成形	透明軸・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡緑青色	—	胎土灰白色・同安窯

5章145図P203

野間I区-14号溝

NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量 (単位g)	備考
				長さ	幅		
1	埋土中	鉄器	鋤?	4.1	4.6	0.2~0.4	用途不明
2	埋土中	鉄器	鋤先・側部	(7.1)	—	0.3	—

5章146図P203

野間I区-15号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中(残留遺物)	弥生土器	甗底部	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙色	赤変→ 二次加熱あり	底径(6.4cm) 1/3片
NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量 (単位g)	備考					
			頁岩	長さ	幅							
2	埋土中	砥石	砥石	(9.5)	(4.5)	3.5	(210.3)	二面に研磨面	—	—	—	—

5章148図P204

野間L区-20号溝

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中(残留遺物)	土師器	甗底部	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ	指ナデ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角多い。黒斑あり。 底径(6.0cm) 伝統的V様式系の底部
NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量 (単位g)	備考					
			鋤先片	長さ	幅							
2	埋土中	鉄器	鋤先片	(4.7)	(1.7~1.4)	0.2	()	—	—	—	—	—

野間I・J区一各ビット

5章149図P205

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)	胎土		成形	調整		色調	使用痕	備考
					高さ	口径		外	内			
1	ビット1	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色	—	胎土微細雲母片、小石英、赤・白色粒多い。4×2cm片
2	ビット2	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色	—	微細雲母片多い。4×2cm片
3	ビット3	土師器	高坏?	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離激しい)	不明	黒灰色	—	胎土1cm大の長・角、白色粒多い。
4	ビット4	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色	—	胎土~1mm大の長・角、赤・白色粒多い。4×3cm片
NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量		備考				
5	ビット5	石鏃	西九州産 サヌカイト	長さ	幅	長さ	厚さ	重量	形状			
				1.75	1.75	0.3	0.60	0.60	完形			

野間地区一縄文調査区

5章151図P207

NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量	備考
				長さ	厚さ		
1	A7区-①グリット	角錐状石器	小国産黒曜石	(2.9)	(1.45)	(4.30)	基部欠失
2	A8区-①グリット	石鏃	金山産サヌカイト	2.4	1.5	1.30	完形
3	B7区-②グリット	扁平打製石斧	安山岩	(6.9~7.0)	7.1	(121.9)	半折
4	A8区-②グリット	凹み石	安山岩	11.4	9.9	—	完形
5	A7区-②グリット	最上層 叩き石	砂岩	10.6	8.2~8.4	546.4	被熱で(?)ヒビ割れしている。完形

野間M区一表土出土遺物ほか

5章152図P208

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整(内)(外)	色調	使用痕	備考
				器高	口径						
1	B16区IV層	縄文土器	浅鉢(晩期)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(不明)	黒褐色	—	胎土~1mm大の長・角、小石英多い。
NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)		重量		備考			
2	B16区IV層	扁平打製石斧	結晶片岩	長さ	幅	長さ	厚さ	重量	形状		
				12.1	5.8	0.8	0.8	86.7	完形		
3	B16区IV層	扁平打製石斧 (分銅形石斧)	結晶片岩	10.3	2.7~4.6	1.0	63.8	完形			

野間M区-16トレンチ

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整(内)(外)	色調	使用痕	備考
				高さ	口径						
1	3~4層	弥生土器	甕	—	底径(5.0)	砂粒多い 在地	積上げ	(内・外)ナデ	淡褐色	二次加熱あり →赤変	胎土1~2mm大の長・角・白色粒・黒曜石多い。1/4片
2	5層中	須恵器	甕	—	—	砂粒少ない 搬入	タタキ成形	(外)回転ヨコナデ→カキメ (内)円心同文→ヨコナデ	(内)黒灰色 (外)自然釉	—	胎土微小白色粒・軟質黒色粒多い。
3	5層中	土師器	精製壺	—	—	精製胎土A 搬入	積上げ	(内・外)丁寧なナデ	淡橙色	—	胎土極小長・角・赤色粒多い。
4	3~4層	土師器	精製環	—	—	精製胎土B 搬入	積上げ	(口・内)ヨコナデ (外)ナデ	淡橙色	—	胎土~1mm角・長・白色粒多い。 4×4cm片
5	3~4層	中国製青磁 (竜泉窯)	碗	—	—	磁器胎土 (淡緑色)	ロクロ成形	回転ヨコナデ・透明釉	暗緑色	—	文:錦蓮弁文

野間M区-17トレンチ

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整(内)(外)	色調	使用痕	備考
				高さ	口径						
1	7-2層(残留)	弥生前期末~ 中期初頭の土器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	淡褐色	二次加熱あり →赤変	胎土1~2mm長・角・黒曜石多い。 4×3cm
2	7-2層(残留)	弥生前期土器	甕	—	底径(4.7)	砂粒多い 在地	積上げ	(外)ヨコナデ (内)ナデ	(内)淡褐色 (外)淡橙色	二次加熱あり →赤変	胎土~1mm長・角・黒曜石多い。 4×3cm
3	7層+7-2層	須恵器	長頸壺	—	—	砂粒あり	積上げ→ ロクロ成形	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	(内)淡灰色 (外)淡茶色	—	1/3片 焼成・生焼け
4	6層	須恵器	壺底部	—	底径(10.6)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形 (右回転)	(外)回転ヨコナデ (内)指ナデ (底)回転ヘラ切り	暗茶褐色 (鮮・濃青灰色)	—	胎土1mm大の石英・長・角・微小白色粒多い。
5	7層	須恵器	坏蓋	—	つまみ径 (2.0)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形 (右回転)	(外)回転ヨコナデ→回転ヘラケズリ (内)回転ヨコナデ	灰色~青灰色	二次加熱あり →赤変	胎土微細長~1mm大の石英・長・角・容解性 黒色粒子多い。1/5片
6	西端-5層	須恵器	坏身	—	底径(6.2)	砂粒少ない 搬入	積上げ ロクロ成形	(外)回転ヨコナデ~(内)指ナデ	(内)暗茶色 (外)淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英・微細長多い。
7	上・中層(残留)	弥生後期土器	甕底部	—	底径(7.0)	砂粒多い 在地	積上げ ロクロ成形	(内・外)ナデ	淡橙色	—	胎土~1mm大の長・角・白色粒多い、 黒曜石(4mm大)含む。
8	上・中層	土師器	精製坏	—	(12.4)	精製胎土A 搬入	積上げ	ヨコナデ	淡褐色	—	微細雲母片・赤色粒多い。
9	上・中層	土師器	甕	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	(内・外)ヨコナデ~(内)ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・赤・白色粒 多い。
10	上・中層	中国製白磁	碗	—	—	磁器胎土	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ・透明釉	淡灰白色	—	露胎(外面一部)
11	上・中層	中国製青磁	碗(竜泉窯)	—	—	磁器胎土	ロクロ成形	回転ヨコナデ・透明釉	淡緑色	—	錦蓮弁文
12	上・中層	朝鮮製李朝白磁	碗	—	底径6.0	磁器胎土	ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡白青色	—	畳付に胎土目。全面に貫入。
NO	出土位置・遺構	種別	石材	長さ 幅 高さ ()つぎは破片・単位(cm)		重量 (単位g)	備考				
13	上・中層	鉄器	くさび	2.8	1.5(先端0.6)	打面0.4 (他0.1~0.3)	(4.30)	近世			
14	上・中層	鉄器 用途不明		残長(4.0)	—	中心部幅0.5 両端幅0.3	—	近世・両側を細くした角棒の両端をおりまわっている。			
15	上・中層	ナイフ形石器	腰岳産黒曜石	2.95	1.8	(0.8)	4.90	二次利用か?			
16	上・中層	石核	小国産黒曜石	8.8	6.55	(6.0)	(350.0)				

野間M区一水田層

5章160図P220

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは単位・単位(m)		胎土	成形	調整(内)(外)	色調	使用痕	備考
				高さ	口径						
1	32溝	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒多い	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	濃青灰色	—	胎土白色粒多い。
2	32溝	須恵器	坏蓋・つまみ	—	つまみ径 2.8	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形	(外)ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土微小角・長・白色粒、1~3mm大の石英多い。
3	下層+32溝	須恵器	坏蓋	—	(15.6)	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形 (右回転)	(口)回転ヨコナデ・(外)回転ヘラケズリ(内)指ナデ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英、軟質黒色粒子、白色粒多い。
4	下層	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	暗茶褐色	—	胎土1mm大の石英、白色粒多い。
5	C-16区(5層)	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形 (右回転)	回転ヨコナデ・(内)指ナデ (底)回転ヘラ切り	濃青灰色	—	胎土1mm大の石英、軟質黒色粒子多い。
6	下層	須恵器	坏または皿	—	底径8.1	砂粒少ない 織入	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	白灰色 (左焼け)	—	胎土1~2mm大の石英多い。
7	下層	須恵器	甗	—	—	砂粒少ない	横上げ タタキ成形	(外)格子タタキ (内)同心円文	濃青灰色 (内)淡青灰色	—	—
8	中層下底	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色 (外)自然釉	—	胎土1mm大の石英多い。
9	C-16区 5層上面	須恵器	坏身	—	底径(8.0)	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英、白色粒多い。
10	C-16区 4層下底	須恵器	坏身	—	底径(9.4)	砂粒少ない	横上げ ロクロ成形	(内)回転ナデ→回転ヨコナデ (外)回転ヨコナデ→回転ヘラ切り	淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英多い。
11	C-18区 中層下底	須恵器	壺	—	(19.2)	砂粒少ない 織入	—	回転ヨコナデ	濃青灰色	—	胎土1mm大の石英多い。
12	D-15区 中層下底	須恵器	壺	—	(18.4)	砂粒少ない	—	回転ヨコナデ	濃青灰色	—	胎土白色粒多い。
13	C-14区 5層直上	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 織入	横上げ	(不明)	淡橙色	—	胎土微小角、微細雲母片多い。
14	C-18区 中層下底	中国製青磁	碗(竜泉窯)	—	—	磁器胎土 (灰白色)	ロクロ成形	回転ヨコナデ・透明釉・綺連弁文 (外文)	淡緑色	—	—
15	C-15区 中層	中国製青磁	碗(竜泉窯)	—	(16.0)	磁器胎土 (灰白色)	ロクロ成形	回転ヨコナデ・透明釉・綺連弁文 (外文)	暗緑色	—	—
16	C-17区 中層	中世陶器	摺鉢底部	—	底径(9.6)	砂粒少ない	ロクロ成形	(外)回転ヨコナデ・(内)かき目 (底)回転糸切り?	淡褐色	—	1/6片
17	C-18区-1 下層・5層上面中層	管状土甕	—	—	—	精製胎土	手づくね	指ナデ	淡橙色	—	長さ2.0cm・巾1.0cm・孔径0.4cm 胎土1~2mm大の角多い。

野間M区一ピット群

5章161図P220

NO	出土位置・遺構	種別	石材	()つぎは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
1	ピット4	石匙	金山産サスカイト	4.2	4.7	0.5	8.60	完形。残留遺物

野間M区一水田下土坑群

5章180図P227

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは標準単位(cm)		胎土	成形	調整(内)(外)	色調	使用痕	備考
				器高	口径						
1	302号土坑埋土中下部	土師器	精製坏	2.9	13.8	精製胎土A 織入	横上げ	(内)指ナデ・(口)ヨコナデ (外)手持ちヘラケズリののち板状 の工具でナデている(ハケでない)	明橙色	—	ほぼ完形に接合 胎土微細は雲母片がまぶすように 入る。
2	311号土坑埋土中	土師器	鉢	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	回転ヨコナデ (内)ヘラケズリ	淡茶褐色	—	胎土1~2mm大の角、~1mm大の長・ 右葉、小赤・白色粒子多い。 5×3cm片
3	315号土坑底面	土師器	甗or鉢	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	回転ヨコナデ (内)ヘラケズリ	淡茶褐色	二次加熱あり →赤変	胎土1~2mm大の長・角、赤・白色粒 子多い。
4	309号土坑埋土中	土師器	甗	—	(19.6)	砂粒多い 在地	横上げ	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヘラケズリ	茶褐色	二次加熱あり	胎土1~2mm大の長・角、赤・白色粒 子多い。1/2片

第7表 平原地区出土遺物観察表
平原A区一表面採集

6章3図P232

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	—	須恵器	坏身	—	高台底径(11.4)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ→ 指ナデ	暗	—	胎土1~2mm大の石英多い。

平原A区一201号土坑

6章9図P235

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中	須恵器	坏蓋	1.0	15.8	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→ 回転ヘラケズリ	回転ナデ→ 回転ヨコナデ	白灰色	—	胎土、黒色粒、白色粒、小石英 含む多い、 つまみ径2.1cm
2	埋土中	須恵器	坏蓋	—	(17.3)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土1~2mm大の石英、白色 粒多い。1/8片
3	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヘラケズリ→ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英多い。 5×6cm片
4	埋土中	須恵器	坏蓋	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	(外)濃青灰色 (内)淡青灰色	—	胎土白色粒多い。
5	埋土中	須恵器	坏身	4.1	14.6	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形 高台胎付	回転ヨコナデ・回転 ヘラケズリ	回転ヨコナデ→ 指ナデ	青灰色	—	底径10.0cm 胎土1~3mm大の石英、軟質 黒色粒多い。完形(口縁1/4欠)
6	埋土中	須恵器	坏身	6.2	18.4	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形 高台胎付	回転ヨコナデ→ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	黄灰褐色~ 暗灰色	—	底径12.9cm 胎土1~3mm大の石英、微細 雲母片多い。ほぼ完形
7	埋土中	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英、軟質性 黒色粒・白色粒多い。
8	埋土中	土師器	精製坏	—	—	精製胎土A 織入	積上げ ロクロ成形	ヨコナデ→ 手持ちヘラケズリ?	ヨコナデ	淡橙色	—	胎土微細雲母片多い。
9	埋土中	土師器	甗	—	22.4	砂粒少ない 在地	積上げ (内傾接合)	ナデ→ヨコナデ	ヨコナデ→ ヘラケズリ	茶褐色	—	胎土1~2mm大の長・角、赤・白 色粒、黒曜石(4mm大)多い。1/4片
10	埋土中	土師器	甗	—	—	砂粒多い 在地	積上げ (内傾接合)	タテハケ(指圧痕残る) →ヨコナデ	ヨコナデ→ ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土~1mm大の長・角、石英、赤・ 白色粒多い、1mm大の黒曜石 含む。9×9cm片
11	埋土中	土師器	甗	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の角、~1mm大 の長、白色粒多い。
12	埋土中	土師器	小型鉢	—	14.6	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ ヘラケズリ	淡褐色	—	胎土1~2mm大の長・角、赤・ 白色粒多い。
13	埋土中	製塩土器B	焼塩用 (六連式)	—	—	砂粒多い 織入	型づくり	指圧痕	粗い布目痕	淡~茶褐色	二次加熱 あり	胎土~1mm大の長・角、白色粒 多い。
14	埋土中	製塩土器A	焼塩用 (逆錘形)	—	—	砂粒多い 織入	手づくりね	指圧痕	ナデ	淡茶褐色	—	胎土1~2mm大の長・角、赤・ 白色粒多い。

6章11図P236

平原B区-203号土坑

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	2~3層	須恵器	坏身	—	(12.6)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形 高台貼付	回転ヨコナデ→ 回転ヘラ切り	回転ナデ	淡青灰色	—	胎土~1mm大の長・石英・白色 粒多い。
2	2~3層	須恵器	坏身	—	—	砂粒少ない	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ	—	淡青灰色	—	—
3	2~3層	須恵器	甗	—	(18.6)	砂粒少ない 織入	積上げ タタキ成形	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰褐色~ 青灰色	—	胎土軟質黒色粒多い。

6章13図P237

平原B区-ピット

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	ピット4	須恵器	坏蓋	—	(15.4)	砂粒少ない 織入	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナデ→ 回転ヘラ切り	回転ヨコナデ	淡青灰色	—	胎土~1mm大の石英多い。

6章15図P239

平原D区-204号土坑

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中(残留)	弥生土器(前期)	甕底部	—	底径(5.2)	砂粒少ない 在地	積上げ	—	—	黒褐色	—	胎土1~2mm大の長・角・白色 粒多い。~1mm大の石英多い。

6章18図P242

平原E・F区-表面採集

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	F-1・2層	肥前	染付磁 器碗	—	—	—	—	雪輪文?・透明釉	—	—	—	くわらんか手・墨付露胎、反 転復元
2	E-拡張部2層	肥前	染付磁 器碗	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	18世紀代?
3	F-1・2層	肥前	染付磁 器碗	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	1820~1860?端反碗?
4	F-1・2層	肥前	染付磁 器碗(端 反碗)	—	—	—	—	幾何学文・透明釉	—	—	—	1820~1860年代
5	E-拡張部1・2層	肥前	染付磁器碗 (小型の丸形 湯呑碗?)	—	—	—	—	格子文・透明釉	—	—	—	1820~1860年代
6	F-1・2層	肥前?	染付磁 器碗	—	—	—	—	植物文・透明釉	—	—	—	明治以降 コバルト
7	F-1・2層	肥前	染付磁器 猪口?	—	—	—	—	内面:四方響文・透明釉	—	—	—	18世紀後半
8	E-拡張部1・2層	九州産?	陶器土瓶	—	—	—	—	—	—	黒褐色	—	18世紀後半以降

平原 E・F 区一試掘トレンチ

6章19図P242

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整内面		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	E-2トレンチ3層	福岡(高取系?)	陶器皿	—	—	—	—	見込みの疵の目ハギ・透明釉・鉄釉	—	—	—	17世紀後半?
2	E-3トレンチ3層	肥前	青磁碗	—	—	—	—	—	—	—	—	18世紀代
3	E-3トレンチ3層	肥前	染付磁器皿	—	—	—	—	—	—	—	—	18世紀代?
4	E-3トレンチ3層	肥前	染付磁器碗	—	—	—	—	透明釉・暈付露胎	—	—	—	18世紀後半
5	E-5トレンチ3層	肥前	白磁紅皿	—	(7.0)	—	—	—	—	—	—	18世紀後半～19世紀中頃
6	E-3トレンチ3層	肥前	染付磁器碗 (小型の丸形湯呑碗)	(6.6)	—	—	—	草花文・透明釉	—	—	—	1820～1860年代
7	E-5トレンチ3層	—	染付磁器碗	(7.0)	—	—	—	山水文・コバルト・透明釉	—	—	—	明治～
8	E-5トレンチ3層	瀬戸美濃系?	染付磁器小坏	4.2	7.2	—	—	植物文・コバルト・透明釉	—	—	—	明治以降～ 底径3.2cm
9	E-5トレンチ3層	肥前	染付磁器皿	2.4	(13.3)	—	—	銅板転写・口紅・透明釉	—	—	—	明治20年以降 底径(7.4cm)
10	E-5トレンチ3層	不明	色絵磁器碗	—	底径(3.8)	—	—	釉下彩	—	—	—	—
11	E-5トレンチ3層	不明	磁器碗	—	(6.8)	—	—	外面:鉄釉?	—	—	—	—
12	E-1トレンチ3層	肥前	磁器瓶?	—	(4.9)	—	—	暈付と内面・露胎	—	—	—	—
13	E-1トレンチ3層	肥前	染付磁器皿	—	—	—	—	外面:連続唐草文	—	—	—	—
14	E-2トレンチ3層	—	磁器皿	—	底径(4.2)	—	—	—	—	—	—	高台内一部露胎 一部に砂付着・暈付砂付着
15	E-5トレンチ3層	—	磁器製品	—	—	—	—	露胎	施釉	—	—	—
16	E-3トレンチ3層	肥前	白磁小坏?	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17	E-2トレンチ3層	—	陶器	—	—	—	—	鉄釉	—	—	—	—
18	E-2トレンチ3層	—	陶器	—	—	—	—	鉄釉	—	—	—	—
19	E-4トレンチ3層	肥前唐津産	陶器插鉢	—	—	—	—	鉄釉	—	—	—	18世紀後半以降

平原 G 区一出土遺物

6章20図P242

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整内面		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	旧表土	肥前	染付磁器碗	—	—	—	—	二重網目文・透明釉	—	—	—	18世紀後半

2	旧表土	肥前	白磁紅皿	—	(6.2)	—	—	—	—	18世紀後半～19世紀中頃
3	旧表土	肥前(志田焼?)	染付磁器碗 (細反碗)	—	(10.4)	—	素地に白化粧土?	—	—	幕末?
4	旧表土	肥前(志田焼?)	染付磁器碗 (湯呑み碗)	—	—	—	素地に白化粧土?	—	—	幕末以降
5	旧表土	肥前(志田焼?)	染付磁器碗 (湯呑み碗)	5.0	(6.5)	—	若松文・染付の上から白化粧土もしくは灰釉をかけている?	—	—	幕末以降? 量付露胎(鉄泥?)
6	旧表土	肥前(志田焼?)	陶器碗	—	底径3.9	—	見込み蛇の目細ハギ 素地に白化粧土を施しその上から灰釉? 量付露胎	—	—	幕末以降?
7	旧表土	瀬戸美濃?	磁器	—	(6.8)	—	瑠璃釉	—	—	—
8	旧表土	瀬戸美濃?	染付磁器碗	—	—	—	—	—	—	—
9	旧表土	肥前	磁器壺	—	底径(8.7)	—	鉄釉・外底露胎	—	—	—
10	旧表土	—	陶器碗	—	底径(3.7)	—	量付露胎	—	—	—

平原E区-2号溝

6章26図P247

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中	肥前	染付磁器皿	—	底径(9.5)	砂粒少ない	ロクロ成形 蛇の目凹形 高台	—	—	—	—	見込み松竹梅文、18世紀後半

平原E区-4号溝

6章28図P247

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中	土師質土器	坏	—	—	砂粒少ない 在地	積上げ ロクロ成形	回転ヨコナア・回転 糸切り?	回転ヨコナア	淡褐色	—	胎土～1mm大の長・角・赤色粒 多い。4×4cm片

平原E区-5号溝

6章30図P248

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	埋土中	肥前	白磁紅皿	1.3	6.2	—	型打成形	タコ唐草文	—	—	—	底径4.5cm、幕末～明治前半 露胎
2	埋土中	福岡系?	陶器皿	—	底径(6.8)	—	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉	—	—	—	胎土削出し高台、見込みの部 分を円形に細ハギしている。
3	埋土中	福岡系?	陶器皿	—	底径(3.8)	—	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉	—	—	—	露胎 見込み円形に細ハギしている。

第8表 米田地区、上野第2遺跡出土遺物観察表
米田地区-A区

7章4図P252

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	1～2層	肥前	染付磁器碗	—	—	—	—	—	—	—	—	18世紀後半
2	試掘4トレンチ 1～2層	肥前	染付磁器碗	—	(9.8)	—	—	植物文	—	—	—	くわらんか手 18世紀後半
3	試掘2トレンチ 1～2層	肥前	染付磁器碗	—	底径(8.2)	—	—	暁付露胎	—	—	—	18世紀後半?
4	1～2層	肥前	染付磁器碗 (輪反碗)	—	—	—	—	—	—	—	—	幕末～明治初頃
5	1～2層	肥前	染付磁器碗	—	—	—	—	菊花	輪宝繁さ	—	—	型紙摺り 明治初年～10年代
6	2トレンチ-東半 上中層	福岡産?	陶器碗	—	底径(7.2)	—	—	鉄釉・暁付露胎	—	—	—	—

上野第2遺跡-B区

7章8図P254

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面			
1	—	肥前	染付磁器皿	2.0～2.1	(10.4)	—	—	丸大 高台内一重圏線	七宝繁文・竹笹 内面見込み 丸文	—	—	口紅透明釉・暁付露胎 17世紀後半
2	—	肥前?	白磁小坏	—	—	—	—	—	—	—	—	1690～18世紀前半
3	—	肥前	染付磁器碗	—	—	—	—	矢羽文・透明釉	—	—	—	18世紀後半
4	—	肥前	染付磁器碗	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	18世紀後半
5	—	肥前	染付磁器碗	—	—	—	—	雪輪文・透明釉	—	—	—	18世紀後半
6	—	肥前	染付磁器碗	—	底径(7.2)	—	—	見込み蛇の目軸ハギ・格子文? 透明釉	—	—	—	18世紀後半
7	—	肥前	染付磁器皿	—	—	—	—	山水文?・透明釉	—	—	—	18世紀後半
8	—	肥前	染付磁器皿	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	18世紀後半
9	—	瀬戸美濃系	染付磁器小坏	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	19世紀前半～中頃
10	—	—	青磁碗	—	—	—	—	暁付露胎	—	—	—	明治前半、クロム青磁
11	—	関西系?	磁器蓋	—	(5.0)	—	—	内外鉄釉	—	—	—	—
12	—	肥前?	磁器瓶	—	(5.4)	—	—	—	—	—	—	—
13	—	瀬戸美濃系?	染付磁器小坏	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	—
14	—	—	染付磁器?	—	—	—	—	透明釉	—	—	—	—
15	—	—	陶器溜鉢	—	—	—	—	内面、カキ目	—	—	—	近世